明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可
（每月一回一日發行）

女子文壇

第四年第一號

明治四十一年壹月一日發行



新年御題

社頭松



富岡真沙子筆

愛吟



（西洋名畫）

田中寫眞製版所製

(甲の一)

女子文壇第四年

(明治四十一年戊申元旦發刊)





第壹號目次

謹賀新年

例年の通新春御餘興として

來る六日ヶ
同十五日迄

新發明に係る福引の趣向に據り大賣出し中毎日左の景品を贈呈仕候間御慰み旁
自働電機應用福引々陸續御來店被成下度偏に奉希上候

大賣出し中

毎一日の景品數

一金五拾圓（當店切手一枚）壹個
一金貳拾圓（同上）壹個
一金拾圓（同上）貳個
一金五圓（同上）五個
一金貳圓（同上）拾個
一金壹圓（ハンカチーフ廿五打 羽金巾裏地廿五反）五十個
一金五拾錢（手拭五十反 皮製紙入五十個）壹百個
一金廿五錢（絹ハンカチーフ二百五十枚 がマグチ二百五十個）五百個
一金拾五錢（タオル六百六十五枚 石鹼六百六十六個）千三百卅一個
以上合計貳千個

以上の景品は當日御買上
金額五圓以上の御買上被成下候に對し仕拂福引入（もなか）壹個進呈致し
金五圓を増す毎に壹個宛増呈可仕候◎右（もなか）在中の紙片に記しある景品は直に現品と御引替申上候◎又金額五圓に滿たざる御買上げに對しては福引法によらず手拭一筋宛進呈可仕候

四十一年一月元日

東京市日本橋

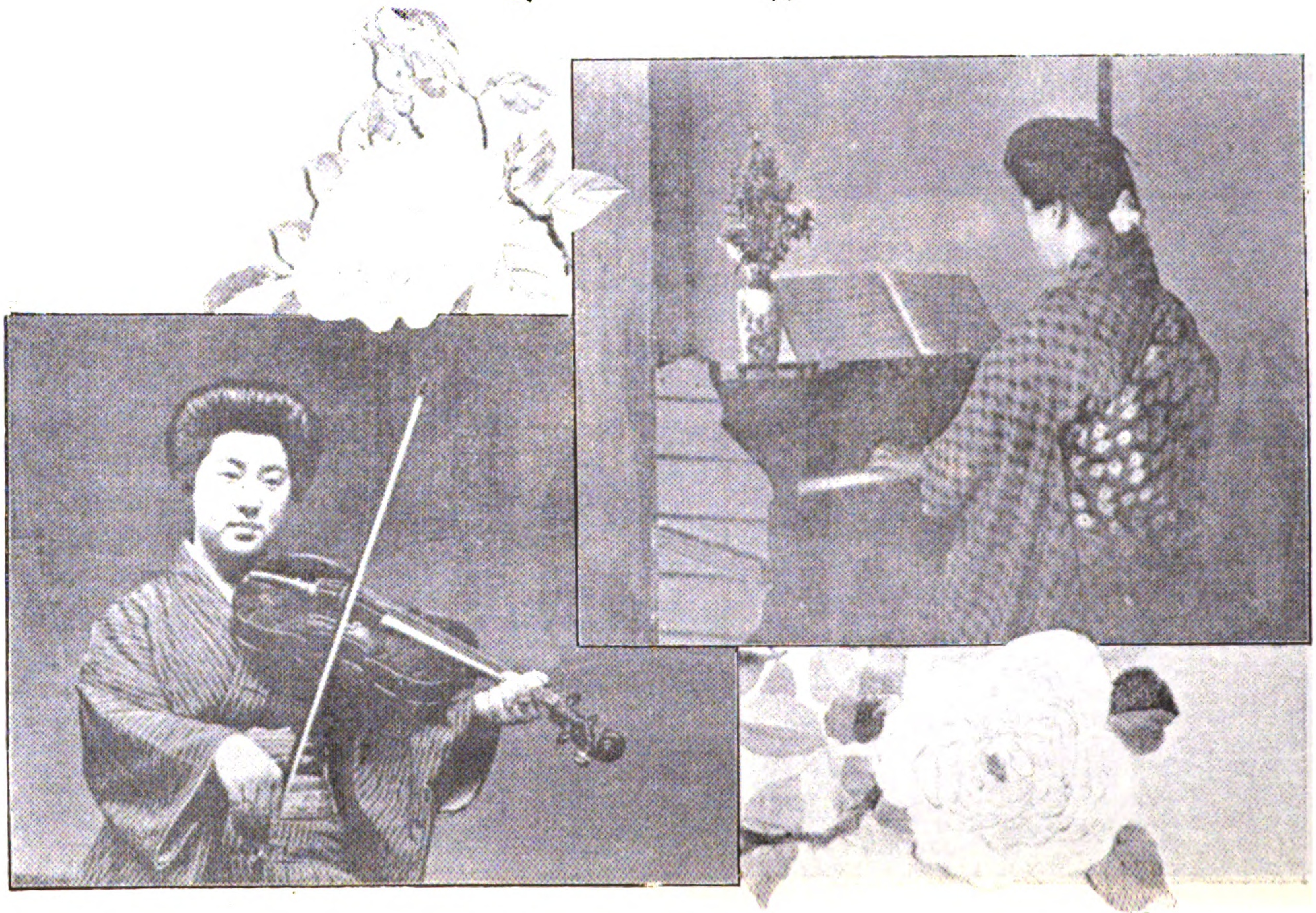
白木屋呉服洋服店

閑院宮殿下の御家庭



閑院宮殿下、同妃智恵子殿下、春仁王及び恭子女王、茂子女王、季子女王、寛子女王

合奏



（京都　川畑つや子「妹」寄贈）

（京都　川畑はな子寄贈）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



戊申文壇之急先鋒

秀才文壇

第八卷第壹號

(本號に限り紙數百六十頁)

○發兌元……東京神田區旅籠町一丁目廿三番地 文光堂 (賣捌)東京堂、東海堂、北隆館、良明堂、上田屋

【新年號内容目次】

▲表紙及題字……中村不折
▲初日の出……天然色寫眞
▲早春(石版)……中村不折
▲社頭の松○熊本の水前寺
▲春の山路○壇友肖像其他數葉入：(アート紙密刷)

◁卷頭小説▷

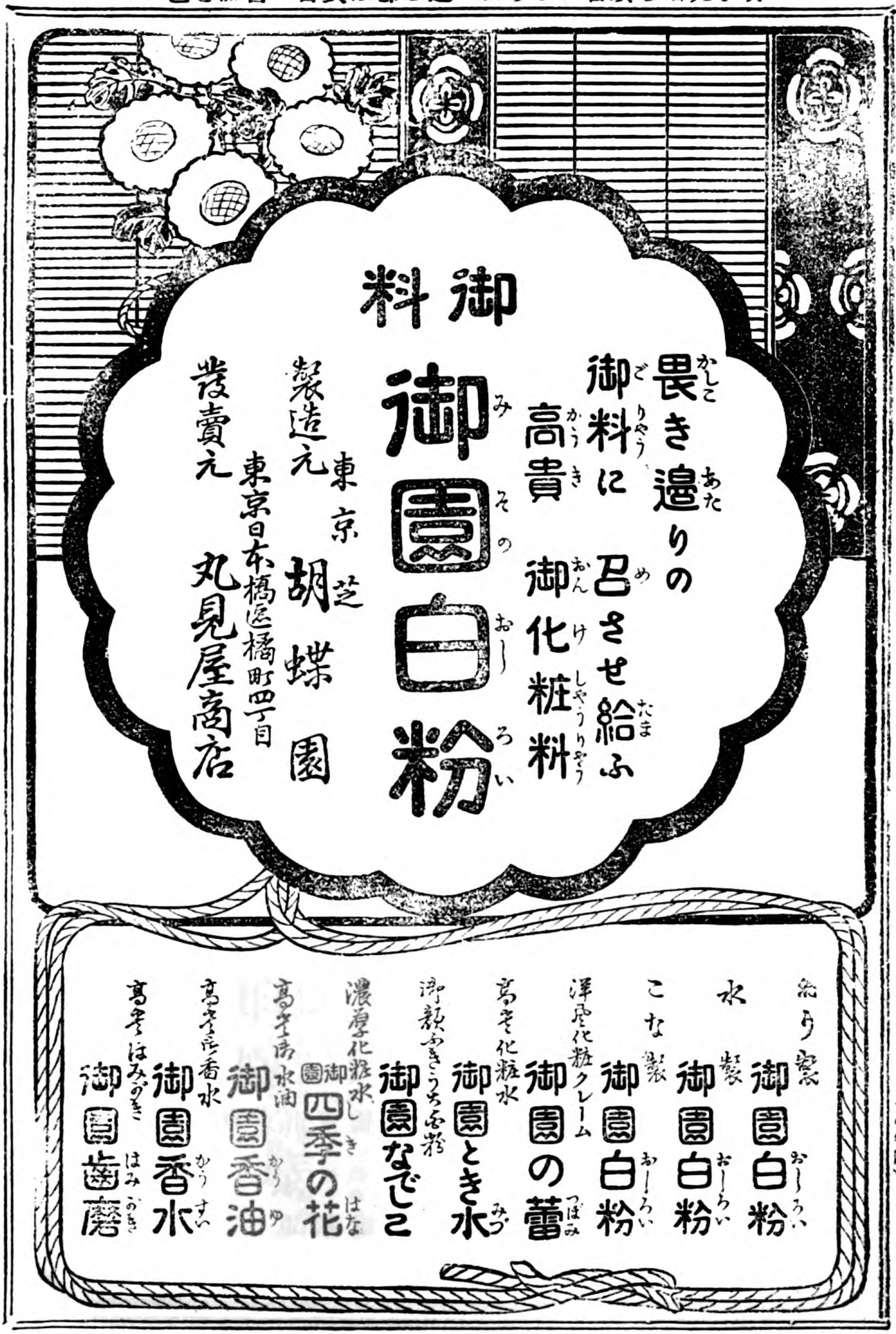
●春……德田秋聲
●裏の山……中島孤島
●友の家……岡本靈華
●三年目……鹿目野徑
●靈魂……小川未明

【各欄毎號選評分擔】

●美文……小川未明君
○和歌……尾上柴舟君 佐々木信綱君
●評論文……編輯局
○新體詩……馬場孤蝶君
●寫生文……高濱虛子君
○漢詩……小笠原盧舟君
●十行日記……小川未明君
○俳句……高濱虛子君
●五行文……矢部白雨君
○短篇小説……德田秋聲君
●六號文壇……○スケッチ

正價 一册郵稅共十一錢●六册全六十三錢●十三册全一圓廿五錢●廿六册全二圓四十四錢(增刊四月十月發行)

(乙の二)


御料
畏き邉りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
製造元 東京芝 胡蝶園
發賣元 東京日本橋區橘町四丁目 丸見屋商店
煉り製 御園白粉
水製 御園白粉
こな製 御園白粉
洋風化粧クレーム 御園の蕾
高等化粧水 御園とき水
御顔あらひ粉 御園なでしこ
濃厚化粧水 御園四季の花
高等香油 御園香油
高等香水 御園香水
高等はみがき 御園歯磨

誌友寫眞（一）



（日本橋）松田豐子

（愛知）櫻井喬尾子、石黒滿子、水谷よし子

（相摸）横山みき子

（續々御寄送を願ます掲出の上御返送致ます）

誌友寫眞（二）





（丹波）下井つる子
岸本宇能枝
足立さく子



（横須賀）升光ゆき子
（横須賀）星野まち子

（神戸）東川艶子
（静岡）杉山じゆん子





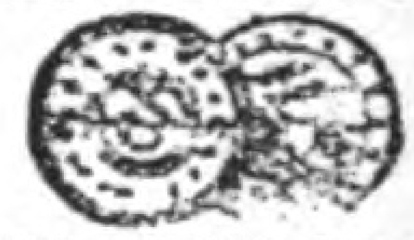
續々御寄送を願ます
掲出の上御返送致ます

第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

登録商標



五二會品評會功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
螺蓋附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい



◉壽美禮おしろい◉

ねり製 定價（大壜二十錢 小壜十二錢）

水製 定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）

壽美禮おしろい水



ヴワイオレツト水製

[illegible]乳白硝子壜入

すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績液體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨て衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◉西洋洗滌劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶番ひ別製鑵詰五拾錢

鑵詰八錢 大袋入二錢 小袋入一錢

◉弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞讚する香料及弊舖新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美くしくなす

◉常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半ゑりハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて宜し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを佳とす

登録商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE
Washing Powder

壽美禮あらひ粉



製造本舖

東京東兩國
元町兩國橋際

壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

第二十四回年度報告貸借對照表

借方　負債に屬する分

一株金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一諸積立金	二五五、一九二・二〇〇
一預金及保信金	三七、五八〇・五三六
一支拂手形及未拂金	一、三七五、四四〇・六一〇
一非常特別税金	一一四、九五八・二九〇
一前季繰越金	二九、九五八・九〇六
一當季利益金	二二六、五二一・二二〇
合計	四、〇三九、六五一・七六二

貸方　資産に屬する分

一新株未拂込金	七五〇、〇〇〇・〇〇〇
一不動産機械及什器	一、〇八六、七九一・六二三
一需用品及備品在高	四九、八〇七・五〇二
一原料仕掛物及屑物在高	一、四七五、八六一・三二〇
一製品及製品送荷在高	七八、一三三・五九〇
一約定濟製品在高	八一、九八二・八四〇
一得意先未收入金及假拂金	一九六、三五五・五二七
一職工貸金	一九、三一四・四二〇
一増設工場及拂金	二五四、〇四三・三四〇
一銀行當座預金及現金	四七、三六一・六〇〇
合計	四、〇三九、六五一・七六二

利益金處分

一金二十二萬六千五百二十一圓二十二錢也　當半季利益金

一金二萬九千九百五十八圓九十錢六厘　前季より繰越金

計金二十五萬六千四百八十圓十二錢六厘

内

金二萬五千九百八十九圓二十九錢七厘　水害費償却

金五萬圓也　建物及器械代償却

金一萬二千圓也　法定準備金

金一萬二千圓也　役員賞與金

金六萬圓也（新株一株に付金壹圓即年壹割貳分）　株主配當金

金一萬五千圓也（新株壹株に付金七十五錢即年壹割貳分）　同上

金五萬圓（新株壹株に付金貳圓五十錢即年壹割）　株主特別配當金

金一萬二千五百圓（新株壹株に付金六十二錢五厘即年壹割）　同上

金一萬八千九百九十圓八十二錢九厘　次季へ繰越金

〆如高

右之通り候也

明治四十年十二月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛
專務取締役　端善次郎
取締役　山崎作次郎

右檢査候處相違無之候也

監査役　坂本金之助
監査役　人見新助
監査役　金子良吉

追て取締役幷に監査役任期滿了に付改選候處再選重任候也

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

滿紙珍奇の寫眞版を挿入せり畫報兼備

口繪潤澤山

婦人世界

記事豐富

正月元旦發行 毎月一回三日 第壹號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊分郵稅共九十錢 十二冊一圓七十五錢

結婚は一代の運命を左右する鍵なり幸福も之に依つて生じ災禍も之に依つて來る愉快なる生活を送らんとする者は之れを讀め男女の結婚を論ずると縱横痛快淋漓

◎男女結婚論 村井弦齋

●活文字●

▲九十六歳の長壽を保てる我が祖母の養生法 星常子

▲私の見たる鍋島侯爵夫人 鳩山春子

▲私の日常生活 跡見花蹊

▲二十年日記を附て得たる利益 加藤博士夫人

▲その一夜 廣津柳浪

▲私の感心せる歷史上の婦人 三輪田眞佐子

▲野口ゆか子論 評

◎面白く誰にも出來る新年大懸賞珍附錄(千圓)

△賞品 婦人用懷中金時計△婦人用懷中銀時計△帶側△婦人用絹張洋傘△寶石入金指輪△特許蒸氣ごて△大島絣△金帶止△手風琴その他

●活教訓●

▲女學生の文章 西田敬止

▲全治實驗 ヒステリー症 土田博士

▲家庭の要する婦人 嘉悅孝子

▲小兒の人工營養法 加藤博士

▲光明ある生活 棚橋絢子

▲在學中の娘たるに與へる父の手紙

▲牡蠣のお料理 弦齋夫人

▲懸賞 名文選擇△家庭重寶文字合せ△文藝笑話

◎斯くの如き女學生は決して成業せず……白露生

女學生の缺點二十を擧げてその急所を突く鋭利なる觀察を行ふに流麗なる文章を以てす之を讀んで女學生はその缺點を改め父兄は子女の躾方に發明する所あらん

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 (郵便振替貯金口座參貳六番)(電話新橋八七四番) 賣捌全國書店

小笠原流女禮式作法（其一）

（寫眞研究會主事坪川辰雄氏寄）



直立の姿



正座の姿



下級者に向ての座禮

女子文壇社主野口氏

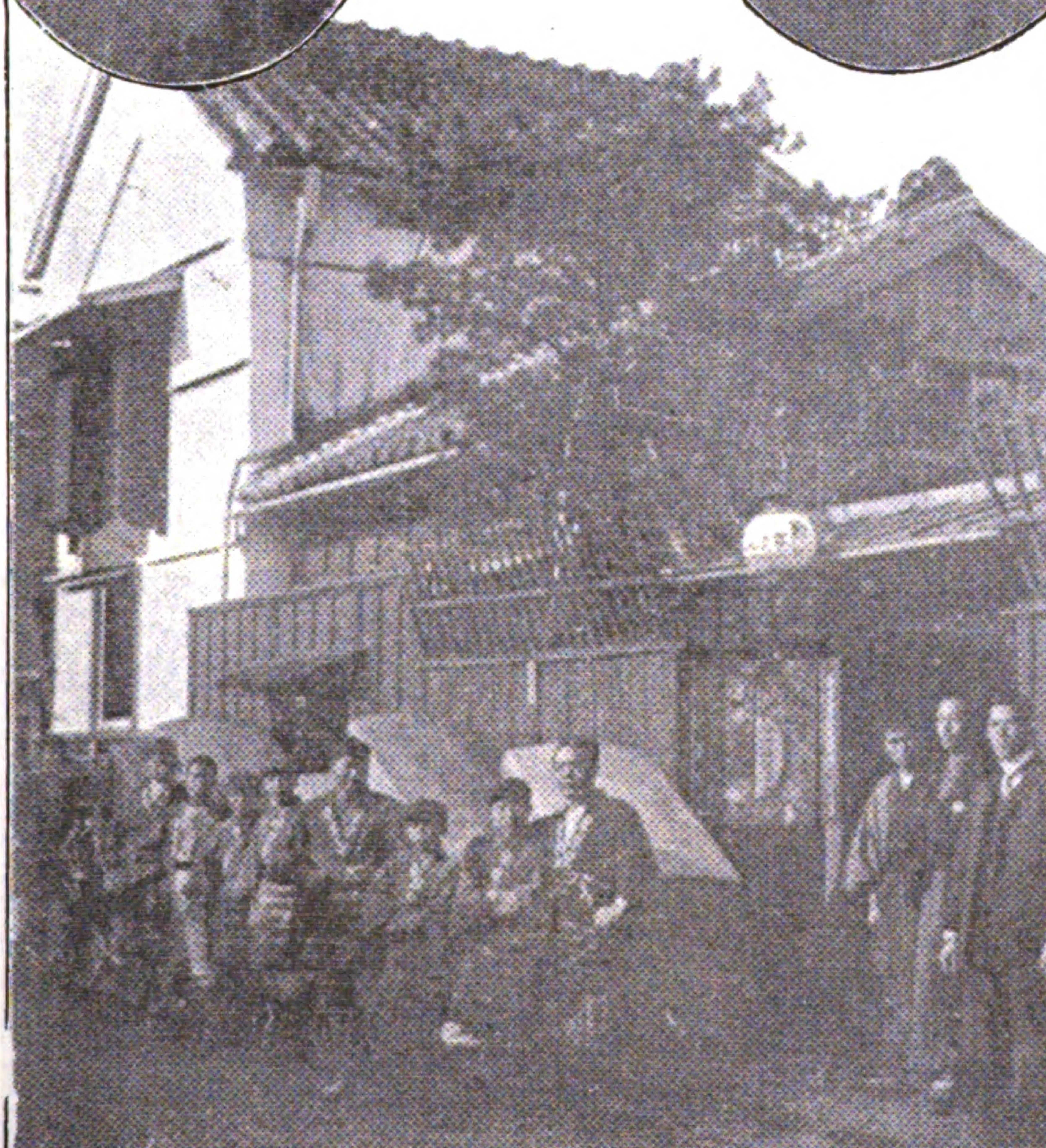


編輯主任河井醉茗氏



創業滿三年の女子文壇社

（所在地は東京市の中央京橋區大鋸町十二番地）



（四十年十一月廿六日前號發賣の際春醴生撮影す）

（下部は特約大賣捌所へ定期渡しの光景）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

恭賀新禧

謹賀新年

併て愛讀諸君の御健康を祈る

女子文壇社主 野口竹次郎

野口貫一

編輯主任 河井醉茗

鈴木野火 外局員一同

選者 巖谷小波。小栗風葉。横瀬夜雨
與謝野晶子。谷江風。内藤鳴雪
中村枯林。山中古洞。佐々木信綱

繪畫部 重松せい子 富岡まさ子

營業部 谷本安五郎 小野喜市 外一同

特約發賣所 東京堂上田屋 東海堂至誠堂 北隆館良明堂

製紙所 王子製紙株式會社 合資會社博進社

印刷所 株式會社秀英舍 泰錦堂 小島印刷工場 西川印刷所

製版及製本所 田中寫眞製版所 松井木板彫刻所 宮本製本工場 坪内製本工場 野本製本工場

廣告特約取扱所 博報堂 日本電報通信社 中外廣告會社

●月經時は如何に過すべきか

村井弦齋

月經時の衛生法は私か申上げずとも、醫師の訓戒をお守りになればそれに越した事はありません

たゞ一つ私どもの家族が用ゐて居ります「月の帶」と云ふ物があります

これは舊東京慈惠病院の産婆で有名な山田逸子が歐羅巴へ行て西洋婦人の用ゐる月經帶を調査し日本婦人に適する樣に改良を施し新に拵へたるものであります

此の「月の帶」はゴムと伊太利ネルで出來てピンで留めますので極く輕く、腰の工合も自由で大層都合が宜いさうです

右は村井弦齋先生が婦人世界に紹介されたる一節にして現に本品の効用は

月經時に使用すれば如何程强い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來、運動、起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人、令孃、敎員、事務員、女學生、看護婦、女藝人等には缺くべからざる品であります

赤白帶下の强き人、陰部に惡臭を發する人、子宮病を惱める人等には最も妙也

始めて月經になりし令孃に頗る適當す俗に冷え性と唱へる婦人常に用ひて腰を温め子宮病を豫防するの効があります

各地に取次店もありますが發賣元へ直接の御注文は特製（冬季專門用）一圓二十九錢と甲種は八十九錢乙種は五十七錢（何れも送料共）郵便爲替又は三錢切手代用一割增て御注文あれば早速送ります

發賣元は東京神田猿樂町二丁目の笠井資生堂藥局です

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

●才媛諸孃の瀏覽を仰ぐ●

河井醉茗先生 溝口白羊先生 共著

女子作文良材

裝釘優美全一冊
正價金四十五錢
郵稅六錢

我が女子作文良材は最新の工夫になつた作文の案内書です、舊式の作文書が何百種あつても既に用を爲すに足りません、作文の工夫は日に新しくなつてゆくのに、それに伴ふ手引が無いのは文學上の缺點です、我等は今代の文章を作らうと思ふ人の爲に、今代の作文書を編纂したのです、此れで少しでも女子の文章が進歩すれば著者及び發行者は滿足するのです。

藤野ゆかり子著

●夫人の自白 全一冊

今式部著

●廂髪日記

以上二種近刊

伊藤銀月君著

日本女性史

最美本
正價金五十錢
郵稅六錢

精警なる眼光を以て、日本の女性を歷史的に觀察し其容貌性格より趣味思想の時代に伴ふ特點を徹底痛切に描き出だせるものにして恰かも奔流石を轉ばすの勢に進行して、遂に今日の新時代に入りて明治式女性の眞相を叩き筆鋒其骨髓に透り一代の女性觀に反對す奇矯の極にして而も健全の至也。蓋し男と云はず、女と云はず之を讀まずんば時代の眞相を知る事能はざるなり。

獨唱名曲集

再版出來
金八十錢
送料八錢

評釋 業平全集

小出翁序、飯田季治著
價金壹圓 郵稅八錢
未曾有の大好評

東京市京橋區中橋和泉町四番地
三星書房

東京日本橋上槇町(振替六四三五)
如山堂書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



女子文壇
四年第壹號
一月一日發行

新年の辭

新年の言葉は舊くなつても、新年の意味は何時でも新しい、時間は刻々に新しくなつてゆきますが、新しくなつてゆくことを知らない人は、時勢に後れて行く人です、諸孃が學校で智識を得るのは一時間毎に新しくなつてゆくのです、お友達に交つて世情を知るのは、感情を新しく練つてゆくのです、書物を讀むのも新しくなつてゆくのです、談話を聽くのも新しくなつてゆくのです、御覽なさい幼兒が日に二つなり三つなり新しい言葉や、新しい擧動を覺へてゆくのは、誰教へるともなき新しい力の働きです。而て見ろと人間は生れながらに新しく新しくと進んで止まないものです、片時でも此新しい働きを養ふと思はないものはありますまい、殊に近頃の吾日本の國勢は、新人の力で新代を造らうとしてゐます、女は此新代の花です、諸孃も努めて此新しい花をお咲かせなさい。

壹月（大）

祭日
一日 四方拜
三日 元始祭
卅日 孝明天皇祭

日曜
五日、十二日、十九日、二十六日



死後までも

小栗風葉

「今着きました。」

「おゝ大變早く……」

「姉さんの御病氣は甚麼です。」

「有難う、此二三日はまあ可い方で。」

挨拶を取交した後、今日は何處其處へ是非行かねばならぬ用がある、話は後で緩り、まあ風呂へでも行つて來給へ。と主は病妻と義弟を殘して外出する。

「姉さん甚麼具合です？」と、得三は姉の枕元へ躪り寄る。

「最う……今度は駄目ですよ！」力無く寂しい聲。

得三は義姉の樣子を凝と見た。

西向に肱懸窓のある三疊の部屋。菊更紗の可なり汚れた掛蒲團は殆ど此部屋に一杯だ、敷布は鼠色に成つて、枕の覆などは氣持が惡い程油染みて居る。藥瓶、茶碗、水飴などを載せた盆の傍に痰壺があつて、雜誌が二冊、クロース表紙の小説は讀半しの標に紙を折つた儘開いてある。

得三の義姉芳子は、二度目の腹膜炎と肺も大分惡く

なつて、今度は最う助からぬと主治醫の宣告を受けたのだ。然し氣の勝つて居る女だから努めて元氣にして居たが、十一月に入つてからは日に〱衰が増して來て、昨日などは二度も咯血するし、一人では寢返りさへ出來なくなつた。「この二三日はまあ可い方で。」と主は言つたが、可い方なのは今日だけで、昨日も一昨日も惡かつた。

芳子は二十七だけれど、病の所爲か打見は、三十…以上にも見える。縹致はまあ美人の方だが、大きな目には舊の愛嬌は無くなつて



物凄く、驚く程窪んで了つた。可なり高い鼻は一層高く、脣の色は全て死んだ者のやう。肉は落ちたが頰は仄り赤味さして、肺病患者の特徴を現はしてる。髮毛は少ないがキチンとした櫛卷、戯に挿したのか一輪の白菊を取らうとして出した手は氣持の惡い程美くしい。

得三と芳子とは唯義理ある姉弟ばかりでなく、小説的の關係がある。芳子の妹文乃と得三と結婚しない前芳子と得三を一緒に爲やうとして親々は幾度か熟議した、それは七年前だ。當時

の得三は學生の身で、係累など作るのは、自分を滅すのだど思つたのみか、遠く離れて十年近くも會はぬ芳子の姿を寫眞で見た所、何となく卑しい面色で、お剩にデブ〱肥つた不恰好さは誰れが見ても下女か田舍の茶屋女といふ有樣なので愈よ妻にする氣などは無く話は其儘になつた。其後四年過ぎて、得三は芳子の妹文乃と偶然結婚した。所謂緣だらうが、芳子の時には色々煮切らぬ話のみ有つたとは反對に、餘り容易く文乃と結婚して了つたので、芳子は種々の思ひを胸に湧した。

自分は嫌はれて妹は好かれた！唯それだけで何とも言へぬ嫉妬が出る――芳子は寫眞に見た得三の姿、手紙に讀んだ得三の心に人知れず戀して居たのである――だから男を猶怨んだ。文乃と得三との緣談が決る前の年芳子は人の妻であつたが、其夫とは全然性が合はぬので、一層得三を怨んで居た、怨むより憎んで居た隨つて實の姉妹である文乃まで疎外した。

芳子の夫茂木正太郎は發明を業とする人で、專賣特許を受けた發明品も幾つかあるが、毎も貧乏で、芳子が嫁入當時持つて來た着物を初め其他の持物はドンドン減りこそしたが、殖えた物は殆ど無かつた。唯それだけならば芳子も那樣に苦勞はせぬ。が、正太郎は陰忍冷酷な性質で、妻としての芳子が人格などは少しも認めず、唯女は道具だと考へもし、口にもして、芳子に出來る範圍で仕事の助手も爲せる、下女は無論爲せる、腹が立てば擲る目標ともし、性慾の器械にも爲た。實際それは嘘のやうに芳子を道具視して居た。何故那樣男に連添うてるか、と不審に思ふ人があるかも知れぬ、現在兩親も正太郎を見損なつたと後悔して、内々離婚談もあつたけれど、芳子は兩親を慰め、自分を勵まして夫に事へた。芳子は夫の殘忍酷薄な態度を見て蔭では時々涙を零したが、發明などを業とするだけ人間が何處か變つて居るのだと思ひ、發明に對しては多少天才もあるらしいので、變人である夫を助けて、何うか成功させたいものだ、とそれは感心な程能く事へた。

正太郎は生來血が冷たいのでもあるが、一つは悽慘たる境遇の間に人と成つた丈、一層冷酷に成つたのだ。然し芳子の溫かい情は石のやうな正太郎の心に溫みを持せて、去年の春以來誠に平和な家庭であつたが、此春芳子が腹膜炎を病つて死にさうに成つた時、夫正太郎は石の寐床を與へ、木の葉の夜着を着せ上からザブザブ冷水を注ぐやうな事をした。

「早く死ね、早く死ね、這麽貧乏暮の中に煩はれて耐るものか、俺は貴樣より事業が貴い、事業が生命だ：：其間の消息を少しでも貴樣解してれば、暢氣に病氣なぞして居られるか。俺も病氣して寐たい事があるが事業がある、食はにやならぬ。貴樣は女房の心で無く居候根性だから病氣に罹るのだ！寧そ死ね、死んで與れ！」

と、酒の上ではあつたが、上圊さへ一人では困難な芳子の耳へ强く叫いた。

芳子は舌を食切つて死なうとした、滋養物や藥を口に爲ないで死なうともした。然し自殺は如何にも殘念て敵らなく、最う一度快くなつて夫の事業を早く成功させるか、多少でも心の溫くなるやうに事へて見やう、と夫の冷かな言を耐へて聞いては居たが、

「貴樣が最う一ト月も煩へば俺が滅びる！貴樣は自分の不心得から夫まで殺すのだ！」と言はれた時は、最うこれまでと決心して夫の爲め自分の爲め自殺しやうと思つて居る處へ得三と共に大坂へ行つて居た文乃が見舞に上京した。兩親も岐阜の大垣から上京した。

芳子は懷かしい兩親よりも、怨めしく稍怕い文乃を見てから何うしても自殺出來なかつた。

妹文乃は姉の病氣見舞に美しい扮裝て遣つて來た。姉が九死一生だといふ書面を見て驚きも、悲しみも、心配も爲たらうが、更に那樣樣子は無いらしく水々と肥へて、顏の色美しく、泣腫したやうな目は僞の如く芳子には取れた、芳子が持つてる着物は双子の綿入瓦斯の羽織、メリンスの帶だけだ、それも病氣してから質に入れて了つたのに引換へ、文乃は嫁入當時のお召、七珍の丸帶、縮緬の紋付羽織と更紗絹の下着は新

しく作つたらしく、寳石入の金の指環さへ嵌めて居る。

芳子は貧に馴れて夫に其方面の愚痴など言つた事はないが、暫く振て會つて妹の盛裝を見ると有繋に羨しくなつた、腹立しくもなつた。文乃は髮の毛も殖えたらしく、房々とハイカラな庇にして、巾廣な白リボンを飾つた樣子は全て新派劇の令孃なので、何といふ派出な厭味な姿だらう、これが自分の妹か、と髮の毛を毟つて遣りたい程口惜しくなつた。文乃がお見舞にと言つて出した紙包に玉子と書いてあつたが、中に五圓紙幣があつたので、芳子は引裂いて投げても遣りたく、凝と耐へて涙を拭いた。

それから色々にして芳子は妹の境遇を聞いて見ると自分とは全て正反對、芳子は忌々しさの爲に猶死ねなかつた。

生きやうと努めた爲か、醫藥の効か、芳子は追々肥立つて來て、二箇月ばかりの後床上をした。然し祝は爲なかつた、夫が爲て呉れなかつた、未だ何う成るか分らぬと、見舞物を呉れた人々へ返禮も爲ない内、夫の言は遇然當つて芳子は再び腹膜炎と、前にも言つた通り肺結核に成つて居た。

得三が今度上京したのは一身上の都合だが、一つは文乃を姉に會はせたいのでもある。

「文ちやんも一緒なんてせう。」と芳子が問く。

「一緒に來る意りでしたが、お母さんの都合があるものだから昨夜は大垣に泊りました、明日か遲くも明後日はお母さんと一緒に來る筈です。」

「…那麼に然う言つて遣つたのに、お母さんは又出て來るんですか。」

「お父さんもお出になりたいやうですが、裁判所の方が忙しいので、今月中は出て來られないとか云ふお話でした…色々お言傳があります。」

費用は甚麼にも都合を爲やうから、一流の醫師に診て貰ふ事、第一攝生、第二安心、第三何々と事細く得三は物語る。

聞終つた芳子は嗄れた聲で、「那樣にしたつて爲樣が無いから、今度は自分て死にますよ。」

「馬鹿な事を、姉さん。」
「……自殺ぢやありません、今度は死ぬるだらうと思ふので、此前は業が盡きなかつたけれど、今度は大抵盡きるてせう。」
「那樣亂暴な事を言はれては兄さんには固より、お父さんやお母さんにも濟まんてせう。」
「恁うして永く煩つて居る方が不貞にも不孝にもなるのてす。」
「那樣馬鹿な事を。」
得三は言ひやうが無かつた。
義弟の前て芳子は何か恁う無理難題を言つて遣りたいやうになり、「何故私は皆に誤解されるのてせう。」と言出した。
「那樣事は無いてせう。」
「いゝえ然うてす、夫なぞは私を些とも解して與れは爲ませんよ。」
「那樣事は無いてせう、姉さんが兄さんを能く爲れるといふ事は親類中の評判て、兄さんのやうな變つた頭腦の人は姉さんのやうな妻を持つてこそ成功するのてせう。又姉さんは兄さんのやうな夫を持つて、初めて姉さんの美點が出るのてせう。」
「那樣歯の浮くやうなお世辭はお捨しなさい、私は死ぬんぢやありませんか。」
得三は默る。有間して、「最う這麼話は廢しませう、姉さんは神經が興奮して居る。」と獨語のやうに言ひ、
「内は矢張姉さんと兄さんだけなんてすか。」
「えゝ。」
「ては恁うして今日のやうに兄さんがお出になつた後は？」
「唯私は寢て居るんてす、客が來やうと、何が來やうと知らん顔て！」
「誰か雇つたら可いぢやありませんか。」
「お金が有りませんもの！」
得三は又默る。
恁う云ふ具合な話を二時間も續けて居る内に、主が歸つて來た。

正太郎は三十六、頤の張つた顔、色淺黒く、眼光凄く、髭武者て、蟀谷をヒク〳〵動かせたり、目をパチパチと遣るのが癖だ。此人は世間話をした事がない、會へば屹と發明の苦心談で持切だが、今日は行成病人の事を言出した。

「僕も恁ういふ手の懸る女房を貰つて往生したよ！」

と。

得三は返辭の爲やうが無かつた。

「考へて見りや芳子も可哀相だが、病院に入れる金は無し、僕は事業のある軀だから看護ばかり爲ては居られんし、實際弱つた。」

「其事に就いては少し御相談したい事もありますから……」

「何しろ僕の事業が遲れた、今度のは大仕掛なのだから實際弱つた。」

正太郎は例の苦心談……寧ろ自慢話を遣出して瀕死の病人の事などは一向念頭に無いらしいから、得三は愈よ相手が爲惡く夕飯前に暇を告げた。

姉の家は六疊と三疊の二間だけて、蒲團も足りない樣子だから、芳子に引止められるのを幾度か辭つて、友人の某方に一泊した。

翌る日は車て走り廻つて借家を捜した。晝前に丁度頃合の家を見付けて、其友人某方に着した儘の荷物を運び、夜の八時頃には最う文乃と母親が着しても安々足を伸して寢られるやうに成つて居た。

兩人は翌る朝上京した。其日芳子の容躰は惡かつた。文乃も母親も滊車の疲勞を休める暇さへなく、眞心籠めて看護を盡したが、芳子の樣子は愈よ惡かつた。正太郎も有繋に心配して醫者を呼んで來る。吸入器を餘所から借りて來る、奇しく芳子の脊中など摩つて遣つたが、芳子の命も今宵限てあると醫師は宣告して、別に手の下しやうもないと冷かに歸つて行くのを、正太郎は無言て送り出した。

文乃は車て得三を迎ひに行つたが、晝過用足しに出た儘歸つて居ないので、置手紙して、再び姉の家に戻つた時、芳子は續けさまに咯血して、苦しさうに肩息

を吐いて居た。
「得三さんは來て呉れますの？」
留守であつた次第を文乃が語ると、
「然う！」とだけ言つて、目を据えた儘セイ〳〵息を切つて居る。妹の樣子を見て居るのだ。
何うしたか芳子はホロ〳〵と涙を零す。それを見て母親も涙を零す。文乃は面を隱して臺所の隅で泣く。正太郎は火鉢の傍で莨を吸ひながら凝と考へて居た。芳子は母親にだけ話したい事があるから、夫と文乃には暫時戸外へ出て呉れと言ふ。
毎もの正太郎には似氣無く何の文句も言はないて戸外に出る。文乃も出る。
「お母さん、貴方やお父さんは私の苦勞した事を御存知てせうね。」
「知つて居ますとも、だから正太郎さんとは別れさせて、樂にして上げやうと度々お前にも相談したのに、お前は餘り辛抱强く……」
「お母さん、」と言を遮り、「今になつて那樣事を伺ふのぢやありません、唯私の苦勞したことは御存知てせうね。」
「お母さんやお父さんは毎だつてお前の噂を爲ない事はありや爲ない……」
「私が這麼に苦勞をしたのは……悉皆得三さんの爲てすよ。」
「お前何をお言ひのだ。」
「いゝえ然うなんてす、私は……私は那の人に身を穢されたので……」
事實ありも爲ない事を散々に言つて、芳子は胸のモヤモヤを晴らさうといふのである。
「お前飛んでもない事を……氣を確りしてお呉れよ。」
「私は決して取亂しては居ません、最う死ぬんてすから悉皆お話するのてす。得三さんといふ人は那麼優しい風に見えますが、心の……心の底は恐ろしい人て、私の身を穢したばかりてなく、其後二度も三度も厭らしい手紙を寄來したのを、夫が見たもんてすから、私はそれから這麼に酷く爲れるんてす……最う疾うから

此事はお母さんやお父さんにお話しやうと思ながら私の耻ですから默つて居ましたが、何うかお母さん文乃と那の人を一緒に爲せて置かないて、文乃の爲に別れるやうに爲て下さい、那の人と文乃を一緒にして置けば、屹と今に苦勞が出來ますよ、屹と出來るに違無い！
　夫は何も悉も知りながら默つて居たんですから、私が死んだ後で此事を茂木に話すのは舍して下さい、私も夫も他には話すまいと誓つたんだから、唯文乃にだけ話をして、一日も早く別れさせて遣つて下さい、よござんすかお母さん‥‥私は苦しみ拔いて死ぬんですから、私が唯一つのお願ひですから、屹と別れさして下さいよ、お願なんですから！」
　母親は唯驚きの目を瞬つて芳子を見るばかり。
「本當に別れさせて下さい、然う爲ないと屹と‥‥屹とお父さんやお母さんが御苦勞を爲さいます、ねえお母さん別れさせて下さい。下さるてせう。」
「‥‥‥‥」
「お母さんだけてよござんすから、承知したと言つて下さい。お母さん。」
「承知したから、お前は氣を鎭めて文乃とも何か話をしてお呉れ。」
「えゝ爲ますけれど、今のお願は承知して下さつて？」
「あゝ承知したから‥‥」
「お父さんにも傳へて下さい！」
「傳へて上げるからお前は‥‥」
「屹と別れさせて下さいよ‥‥」
「あゝそれは可いから‥‥」
「屹とてすね！」
「それは屹とだから‥‥」
「屹とてすね！最う一度屹とゝ言つて下さい！」
「あゝ屹と傳へて上げる‥‥」
「屹度てすね！」
と母親の手を握つて、段々昏睡して行くやう。母親は正太郎と文乃を呼んだ。
　程無く得三も來た。
芳子は最う口が利けなかつた。

（完）

女裝

徳田秋聲

一

私の田舍の町に於ての出來事である。――

去年の夏、ある若い快活な一人の女が、暫く惡くしてゐた健康回復のために、つい近間の溫泉場へ湯治に出かけた。

女は或實業家の妻て、其實業家は町の銀行の頭取てもあり、近邊の銅山の持主てもあり、可也有福に暮してゐた。町の邸宅は東京ても些と人目を惹くくらゐの構て、四方から石や庭木を取寄せ、部屋の裝飾も金に糸目をつけず善美を盡したものてあつた。

女は奈美子といつて、東京の產てあつたから、萬事に派手好てあつた。さして地位ある人の女といふてはなく、敎育も充分といふ程てはなかつたが、縹致望みて、主がわざ〳〵東京から連れて來たのてある。それて年は十四も違つてゐた。

女は今時の世間一般の女のするやうに、其人を愛すると云ふよりは、寧ろ贅澤な生活が爲たい處から、此結婚申込に應じたので、田舍へ連れられて歸つてからも、夫婦の愛情が未だ根ざし深く、互の心に植つけられたと云ふ譯には行かなかつた。が、女は先是と云ふ不滿もなくて、唯うか〳〵と日を暮してゐた。

女は二十二、男は三十六てあつた。男も立派な紳士て、長く東京に遊學もした位てあるから、風俗は東京そつくりて、性質も優雅しく、氣象も面白く、品行は無論紳士仲間の師表として仰がれてゐた。

彼は若い自分の妻に對して、出來るだけの自由を與へやうとしてゐた。加之日々自分の事業に忙しいので妻の奈美子は、朝から晩までお化粧に憂き身をやつし芝居には入浸り、着物は着放題、指環や髮の具も絕えず東京から取寄せ、冬は溫泉場、夏は海水浴と云つた風に、都て流行を趁ふ東京の貴婦人にも眞似の出來ぬくらゐ、贅澤な生活てあつた。

今度の湯治は、一ト月ばかりの豫定てあつた。輿入

の時、一緒に東京から連れて來た、年增の侍女が一人ゐたが、今度のお供も其女で、其と花を引き、碁を打ち、小說を讀み、芝居の噂をする位が毎日々々の仕事て、終には其にも飽果てゝ、唯寢轉んだり、起きたりして、體窟な躰一つを持餘してゐた。

するうち、同じ旅館の、庭を隔てた向の座敷に來てゐた一人の若い綺麗な男と何時となく懇意になつた。

男は二十四五て、書生にしては擧動が柔弱に過ぎ、役者など云ふ側の藝人としては、質素でもあり、さつぱりし過ぎてもゐるので、女は侍女を相手に、をりをり其男の身元が何であるかを、好奇半分評定し合つてゐた。

如何かした拍子に、散步の途中で双方口を利合ふと男は直に碁や花の相手として、奈美子の部屋へ出入する事となつた。

聞いて見ると、男は洋服の職人て、つい去年の暮、町の或洋服店の高等裁縫師として傭はれ、はる〴〵東京から招かれたので、今は脚氣のために、此へ湯治に來てゐるのだと云ふ事が解つた、それて奈美子と話がシツクリ合ふ。

交際つて見ると、男の氣象の面白いことが、段々解つて來た。加之、顏と云ひ、樣子と云ひ、聲と云ひ、女に羨まれるくらゐ優しい男て、腰も低く親切てもあつた。

奈美子の心は、初めから動いてゐた。男の來る度に湯上りの匂やかな顏に、出來るだけ念入の化粧を怠らず、髮も毎日々々侍女に結ばしたり、自分に取上たり或時は丸髷、或時は碎けてグツト意氣な銀杏返、或時は目の覺めるやうな束髮のハイカラに、高等な櫛や、派手な花簪を挿して、水の滴りさうな艶やかな姿に取澄し、着物や帶や指環も、其時々に取かへ引かへして男の目を惹かうとしてゐた。男は始終奈美子の部室に入浸り、わざ〳〵取寄せた茶菓や、葡萄酒やキラツオなどを侑められ、或時は月影を浴びながら二人並んて四方を散步し、或時は、三人一緒に蚊帳のなかて、花に夜を更しなどしてゐた。

かくて此美しい男と女とは、切つても切れぬ戀中と成つて了つた。

二

涼風の立つ頃、奈美子も男も、此を引拂ふべき時期が迫つて來た。

けれど女も男も、此まゝに別れるのは、死ぬより辛かつた。といつて、女は素より此戀のために、今の自分の地位を棄てる氣にはならなかつた。戀も大事であるが、生活の自由、衣食住の華美、これも彼女に取つては、生命から二番目であつた。

つく〴〵二人額を鳩めて



智慧を絞つて見たが、是と云ふ策もなかつた。が、戀に囚はれた女の一念は所有る障碍を押退けて進まなければ止まぬのである、奈美子は到頭、世にも大膽な一つの手段を思ついた。

「貴方が、眞實に私を思つて下さるお心があるなら、私の言ふ事は何でも聽いて下さるでせう。」と女は或夜男に切出した。

「私に出來るとなら、何でも遣ります。」男は應ずる。

「それては、思切つて女になつて下さい。女に化けて下さい。」

「女にてすか。」と男は有繁

に驚く。
「え、女に……然でもしなければ、迚も毎日貴方にお目にかゝる譯に行きませんもの。毎日貴方のお顔が見られぬくらゐなら、私は迚も活きてゐる氣はしません其ほどに爲なくとも……と仰るでせうが、一番安全に貴方に逢ふには、然するより外ありませんのですから……。」
結局男は女の心任せになつた。
男は素より美男で、女に扮するには、恰當の躰つきであつた。華奢な其手足、細そりした首つき肩つき、脊も中脊で、色も白く、目元も優しく、口の利きやうまで、そつくり女性に出來てゐた。奈美子の思つきは其實餘り空想じみても、滑稽じみてもなかつたので。
相談が調つた處で、三人は漸く温泉場を引拂つた。て、男は其限此町には姿を見せなかつた。
其翌年の三月、奈美子は主の許を得て、此頃東京から來た或綺麗な一人の女學生と交際を始めた。男は如何變裝したものか、誰が目にも純然たる女としか見えなかつた。一番苦心したのは頭髮で、五六ヶ月伸した自髮の上に、束髮の附髷をしたのが、いかにも器用に出來てゐたので、眞晝間差向でゐても、奈美子と彼侍女の他、其と氣づく者があらうとも思はれなかつた。着物の着こなし、起居擧動、よくも恁う巧みに化け遂せたものと、奈美子も殆ど呆れるばかりであつた。其女は、或下級軍人の令孃で、自分とは年來の親友であると云ふ振込で、一度は主にも紹介せたが、首尾は頗る好かつた。
良人は月のうち半は、鑛山の巡視、東京大阪への出張で、宅を明けてゐたので、奈美子は誰に心もおけず思ふまゝに彼女を呼寄せてゐた。女は其間殆ど奈美子の部屋に入浸て、時とすると、夜更けて腕車で送らるゝ事もあり、又打連れて夜の劇場に入るともあつた。
男は次第に變裝に慣れて來た。或時は、晝間街を散歩するとさへ出來るやうになつた。逢ふ人毎に、己の美貌に見惚れ、殊に若い男の、迹をつけ廻しなどするのが面白さに、わざと人の往來の劇しい、此町での繁

華な街を選つて行き、其が嵩じては、盛装込んて、獨て劇場へすら出入するのてあつた。

劇場ては、有りと有ゆる男の目は自分に注がれ、偶ま隣合つて席を取つた紳士などは、特に御馳走を取つて、此女の心を素引いて見やうとする者すらあつた。

其春の暮、奈美子の邸て、園遊會の催のあつた時の事。

裁縫師の例の女も招かれたが、ごたすた紛れに、不圖三十四五の立派なフロックコートの紳士と、茶室の路次庭て直り顔を合した。紳士は素より酒に醉つてゐたが、女の顔を見るより、急に相恰を崩し、突如其手を捕えて、茶室の縁側に推据えると、妙な素振て、巫山戯はじめた、女は悦けられるだけ悦けて、體よく待つてゐたが、紳士は色々の質問を始めて、

「噂に聽けば、貴女は一生獨身生活と云ふ事だか、其は一體如何云ふ次第て？」

「別に如何云ふ次第と云ふ事もございません。父は御存の下級軍人て、迚も思ふやうな支度の出來やうもございませんし、宅には弟や妹が澤山ございまして早く母に別れましたから、其等の世話も燒いてやらなければなりませんから。」と口から出任せに喋る。

「ウム、爾云ふやうな事も聞いたが、其ならば、私が充分力になつて上げやう。」と言つたが、其にしては身の周が贅澤すぎる、此は人の圍ひものか何か、いづれ魔性のものてあらうと目星をつけたらしく、小指に穿めた指環を脱いて、與りなどする。旋て女は體よく其場を外す。

* * * * * *

こんな事があつてから、一週間も經つた或晩の事、奈美子と戀人とは、退引ならぬ部室の現狀を、主に蹈込まれた。主は素より深く妻を信じてゐたので、眞蒼になつて怒つた。何の分別もなく、信まて愛する妻に欺かれたかと思ふと、一時に赫となつて、部屋に備つけたピストルを違棚の中から取出すが早いか、先男を目がけて、理不盡に筒口を差つける。

奈美子はガタ〳〵顫出した。其まゝ床を退り出て、

良人の足下に平伏し、泣聲を出して、只管に詫入つた。
「お騷ぎなさるな。」と裁縫師は度胸の坐つたもので、急いで跳起きると、躊躇してゐる主の手の下を潜脫けて、傍に脫ぎ棄てた女裝の服裝を取上げ、手捷く躰に絡つた。頭髮は附髷を取つた長髮を振亂したまゝて、
「貴女は……。」と良人は二度喫驚の躰である。
「私は奥さまの友人でございます。唯今或方から戴きました指環を些と御覽に入れてをりましたので……」
「指環？」
「ハア指環……其指環を頂きました時の事情を悉しく申上げれば、何の事もございませんが、それは申すがものも御座いません。」
「もう聞く必要はない。」と良人は短銃を棚に置くと其まゝ急に拍子脫がして、其まゝ部屋を出た。
此男には莫大の手切をくれて、其限出入を差止めたが、妻の不亂次よりも、寧ろ良人の貞操の當にならぬ事が、奈美子にも解つて來た。「モオパツサンより」

（完）

角

岡田八千代

交番の角の柳の下で、計らずも行き逢つたきぬ子その子は、其昔同じ女學校に通つて居た頃の親友で、每日學校で顏を合せた癖に、土曜日の午後になるともう懷かしがつて手紙を出して互ひに安否を氣遣ふ位、何を話す度にも「私貴女だからこんな事迄うち開けるのよ、」
と前置をしたもので、最早學校とも今日の卒業式で別れになると言ふ日、二人は人に隱れてどんなに泣いたらう。
「もう私絕望よ、貴女に逢はれなくなるんぢや、本統に明日つから何を樂しみに生きて居るんだか分らないわ。」
此日講堂には舞臺を設けて、卒業生を送ると言ふ名の許に、種々の餘興が催され、面白さうなピアノの音さへ、今しも花々しく聞えて來る。校を洩るゝ笑聲に、

門外に主を待つ車夫さへ夫に浮かされて、延び上り延び上り中の様子を見やうと焦る。
「あゝほんとに何が嬉しくつて皆さんは笑つてるんてせうね。」
悲しげなきぬ子の聲に連れてその子も愁然と、
「之が夏休か春休てゝもあるならば、又お目に掛れるんて樂しみもあるけれど、もう之からは如何なるんだか……」
言ひさして思ひを走せたのは近頃頻りに申込まれる縁談の數々、來年の今頃は？と思ふと嫌なやうな嬉しいやうな妙な氣持。
「あゝ詰らない〳〵。」
きぬ子は涙によごれた眼を上げて空を仰ぐ。美しい空だ、櫻を模様の淺黃色、白い雲がフワリ〳〵と行く
「あゝ〳〵、雲にでもなつて飛んて行きたい。」
「そして二人て月の世界に住んだら、どんなに嬉しいてせうねえ。」
「行き度いわ。」
「行きたい、行きたい。」
二人はひしと手を取り合ふと、見合した目から涙が止度もなく落ち始める。
講堂の方には又わつと言ふ笑ひ聲、ドン〳〵と床を踏み鳴らす音さへ聞える。
「貴女方、其處て何して入らつしやるの？」
ひよつくり其處へ顔を出したのは同級の井上と言ふ級長て人望家。
「泣いて入らしたの？」
「えゝ別に……」
「……」
二人は極りの惡さうに顔を赤らめて默つてる。
「如何もなすつたのてなければ彼方へ入らつしやい、まだ〳〵餘興があるんてすよ。」
「有難う、けれ共……此處に居たいんてすから……」
「さう？、てもねこんな隱れたやうな處て泣いてなんぞ入らつしやると人が怪しみますからね？、入つしやい、夫とも御氣分でもお惡いの？」

「否さうぢやないんですけれどね、私……！」

「如何なすつて？」

「私……もう明日つから何方にもお目に掛れないと思ふと悲しくて……」

「夫やお互ひに悲しいには違ひありませんけれどもね之つきり何も皆さんが遠い國に離れ〳〵になつて終ふと言ふのぢやなし全じ日本の中に入らつしやるんですもの、忘れぬやうにさへなすつたら夫で好いぢやありませんか。」

「えゝ夫はもうきつとさう仕様とは思つてるんですけれども、もう家の事でもやるやうになつちや手紙も出せない日があるだらうと思つて……」

「何め貴女手紙なんか出しても出さなくても、お互ひに心にさへ忘れて仕舞はなけりや夫れて好い譯てせう？」

「さう御仰れば全くさうね。手紙を見なければ忘れてしまふなんて言ふのはほんとの御友達ぢやないはね。」

「さうですとも、夫だから貴女方も、もうこんな處で泣いてるのは止して彼方へ來て、賑やかに笑つてお別れなさいよ、ね？。」

「えゝ！有難う！、夫ぢやお後から行つてよ、ねえきぬ子さん。」

「えゝ！きつとお後から行きますから、まアお先へ行つて入らして頂戴な？」

「きつと入らつしやいよ。」

「えゝもう絶念めたから泣いたやうな顔しないで直きに行つてよ。」

「夫ぢや待つてゝよ。」

夫なり井上と云ふのは行つて終つた。

「ねえきぬ子さん、貴女、井上さんの御仰つた事如何思つて？」

「私随分冷淡だと思ふ？」

「私もよ、だつてね、親しい〳〵友達の間柄が、あんな事て絶念められるならば、私人間に生れた甲斐が無いと思つてよ。」

「あゝ本統に誰を見ても冷やかな人ばかりの世の中に

私貴女と離れて如何して暮さう。」
「矢張私月の世界が好いは。」
二人は又相抱いてさんざ泣いた揚句に、遂々互ひに毎日か丶さず手紙を出すこと、互ひの夢を見た時は必ず報せること、
「きつと仝じ晩に仝じ夢を見るわ。」
とさへ二人は物狂しいやうに迄別れを惜しんだのであつたが……
三月程の間こそか丶さず手紙を出しもしたれ、段々話すべき事も絶えて來れば、始めは丈にも餘したものが尺となり寸となり、遂には暑さ寒さ



を端書に問ふばかり。やがては夫も盆暮に走り書のを見るやうになつたが、五年後の今日は居處さへも定かならず、年始の例さへ事かくやうになつて終つた。
然し二人は思ひ掛けず顔を見合しても、別にそんな昔の約束を辱しいとも思はぬのか、外目には、只懐しい友達と見えた。
「まア本統に……」
きぬ子は嬉しさに聲も續かぬやうに唾を呑んで、
「隨分お目にか丶らなかつたわねえ。」
その子も目を輝やかして
「矢張盡きない御縁とかな

んてせう?、私ほんとに夢のやうよ。」
「私も……夢つて言へば私此間ね貴女の夢を見て、どうかしてお眼に掛り度いくと思つて居たんてすよ今日もね、ほんとは此樣な方へ來る筈ぢや無かつたんてすけれども、急に思ひ立つて此方の方の親類へ來た歸りなんてすよ、貴女は此頃は此邊に入らつしやるの?」
「えゝ!直き此先なのよ。」
其時目の前の停留所に電車が止る。
「お乘りになるの?」
「貴女は?」
「私も……」
二人は前後になつて車へ乘る。腰を掛けるが早いかまたき子は口を切つて、
「貴女、今の御姓名は?」
「嫌な……」
とその子は一寸顏を反けたが、
「貴女が先へ御仰れば。」
「えゝ言つてよ、私はね今井と言ふのよ。」
「さう?……」
「あら御仰らないの、隨分ね、何て御仰るの御仰いなね。」
「言ひますから笑つちや嫌よ。」
「何を笑ふもんてすか。」
「私はね金田。」
「あらお目出度う。」
「まア……だから私言はないつて言つたのよ。」
「まア好いわ怒りつこなしよ、夫よりもね、今迄は仕方が無いとして之からは改めて御交際を願つてよ。」
「私こそ。」
「夫にはお處を伺つて置かなくちやね。」
「本統にね。鉛筆が無いから。」
「私持つてゝよ。」
二人は互ひに懷紙に其住居を書きつけて取り交したが、
「おうもう直き私下りるのよ。」

「さう？惜しいわね。」
ほんとね。けれどももう之からはきつと離れつこなしよ。」
「えゝ‐きつ、きつと。」
「きつとよ。そして直ぐに御手紙頂戴。」
「貴女もよ。」
忙しき中の逢瀬、二人は染々昔も語らず別れて終つた。
明日にも飛んで逢ひに行きさうに思はれた二人は、夫から一月經つてもまだ一筆の便りもしなかつた、二月、三月、互ひに思ひ出した時の言譯は暇が無いと言ふ言葉のみ、やがて一年三年、遂には二人の娘達が同じ學校へ通ふやうになつて、座を並べても思ひ出さぬやうになつて終ふのであらうか。
（完）



非牧者

佐野天聲

上

從妹のおいよが隣村の村長の子の勘七と裏の甲申塚の蔭で密會した日の午後、八ッ山七郷から三才駒の鹿毛に米を擔けて歸つて來た羊飼少年の駿吉は、其晩、朝賣れた羊代金の算當に餘念ない祖父の庄吉をつかまへて、去年からの宿題、東京行の確答を迫つた。
「お祖父さんお金を出して呉れつてんぢやないよ、只東京へ出して呉れさへすりやいゝんだ、ね、承知して下さい、一生のお願ひだ。
思入つていふ駿吉の顏は爐火よりも熱さうだ。爺さんは算盤の手を停めて「其りや俺も呑込んでるが、先頃からいふ通りぬしに去なれると俺實際困るだよ、手は足れんし、羊は多いし、家は此通り巨大いし、な、察して呉んろ、おいよッ子に婿でもあれア又話の仕樣もあるけれど。算盤を爐椽に載せ「もう少し待つて見

さい、えゝ工夫もあらず、其んうちにや彼奴も色氣んつくぢやろ、幾ら晩熟ても、正月生れの十二ぢや、左樣長い事もあるまい、待てよ、惡いやうにやしない
「其りや待たんともないが、幾ら待つても埒があかんぢや困る、私は一生這樣山ん中に引ッ込んで羊飼ひて終る積りの父さんやお祖父さんとは違ふ。
「理屈を言や際限ないが、人情といふものは左樣した譯のもんぢやない、年とつた祖父さんが困つとるを見殺いて、榮耀の餅の皮食はう爲に東京へ出やうなんて考へて見ろ親不孝の骨髓ぢや、ぬしの爹の庄太は一生俺の膝下てぬしのお袋と一緒に羊を飼うた、其れが原因てぬし達の身も温もッとりや俺も仕合せと達者て食ふに困らぬ今日樣を送つてるだぞ、人間は誠實が一ぢや、榮耀の餅の皮は腐る、捨てッちまへ。」
「左樣一酷なと言たッて困る、父さんは父さんの氣前がある、私にや私の氣前がある、一人〳〵皆違つてるお天授だもの、お祖父さんの樣な事言はれちや全く若い者泣かせだ。」
「お説法は聞くまい、何んしろ今は駄目ぢや、おいよッ子に婿の出來るまで待つがえゝ、左樣すりや俺東京行の汽車賃位出す。」
「汽車賃なんて出して貰はずともいゝから私は一日も早く東京へ遣つて欲しい。」
「汽車賃なけりや東京へ行けまいが。」
「親讓りの足がある、歩いて行きます。」
「東京まで何里あると思ふ。」
「二百里はありませう。」
「二百里あると何日がけて東京へ着く。」
「一日十里見當て二十日はかゝる、併し私は十二里宛歩けるから十七日ありや澤山だ。」
「十七日の間呑まず食はずにも行けまい、旅舍賃は何うする。」
「牢へ打込まれても東京へさへ行けりやいゝんだから唯飲みも唯食ひも唯泊りも罷り間違へばする積り、私は唯もう羊飼ひをよしたい、無茶苦茶に山を出たい、勢の無い、のたり〳〵と愚圖〳〵してる彼奴等の面を

見ると虫唾が湧いて堪らん、全く不景氣な獸だ、鳴聲も若い者向の聲ぢやない。」
「何とても言へ、俺は金輪際おいよッ子に婿ん出來にや許さない。」
「何うしてもかね。」
「何うしてもだ。」
「おや仕方無い廢しませう。」
「廢す？。」
「廢しますよ、もうお祖父さんに賴んだつて無駄だから、私は私の考へたとを遣り遂げるより外工夫はない、おいよッ子に似合ひの婿を見付け出いて私の身軀を自由にするか闇雲逃出すか、何方かにせずばならん、ね、祖父さん、左



樣爲やうぢやないか。」
庄吉爺さんは又算盤を膝へのせ、松の枝のやうな指にぱち〳〵玉を彈いて孫の話はなかば空耳になつたらしい。
「うんよからう、俺も其うち金の工面して見やう、辛抱しろ、牢屋へ打込まれるよか、滊車賃拵えて貰つて寢ながら東京行出ける方がよッぽどえゝわ、はゝゝゝ——處へ恁うと一匹五圓づゝの利方だから二匹では十圓だな、廿圓五十錢也、三十七圓七十錢也、廿一圓六十錢也、えゝと二十圓と三十錢也十六圓五十錢也、え

ゝと十五圓五十錢也　三十圓と五錢也——ふゝん甘く行くわい、昨日の晩げの分を搗ると大概五百圓にやならう、之てまアブ、小若い舶來種十匹ばかし娍の崎い行つて買うて來られる、二俵なら田が一枚は大丈夫だ有難いぞ、今年の冬も甘い酒うんとこしよ飲めるぞ、はゝゝゝゝなア駿吉、ぬし見たいに出世々々とほざくけんど、出世よりも慿うやつて毎年々々肥つてく身上護つて、柔順な羊共と遊んでく方餘ッぽどの利德だぞ柄にねえ慾深樣の大熊手は搔くだけ損がいく、ぬしの爺は分限を知つてたけんど、おいよッ子の爺は我慾强いて到頭牛の角にかけられて死んだ、神樣の罰だ、ぬしも左樣がつ〱してゐちや幸福はあんめえ、羊の角のやさしいのを嫌つて牛の角の强いの矯めやうてえ死慾が宜しくない、自分の身じんまくも出來ぬ癖して、人の頭の蠅追はうてえな間違いだ、俺の樣に酒は呑むが博奕は嫌ひ、金は好きだが人いびりは忌やといふ格に入つた人間樣なら、又遊好きの和郎ぶッちめるとも出けるが、ぬし見たいな鼻ッたらしの分て羊の牛のと御托ならべるは潜上だ、お膝元は成程えゝとこづらよ此方の夢にも知らんとこさ、だが、左樣いふえらい處にや又其れに準じた傑出和郎あるだてなか〱以て齒も舌も立つとかい、直ぐ、がちりッと嚙ひとめきりて齒の方が缺けるも知れん、馬鹿だぞ、阿呆だぞ、えゝ笑いぐさになるばかりだぞ、よせ〱、分限といふと知らんと、果は野臥りにもならう、ぬしにや羊飼が相應ぢや、羊飼うて隣村のお源子でも嫁にして堀ッ立小屋の二ッ三ッも建增さうがえゝ器量の極粹ぢや、な駿吉、惡いとは言はん、柔順う俺の言ふときいて、ふッつりと牛狂ひの度性骨引き拔いちまへさ、左樣すりや俺も安心おいよッ子も安心、ぬしに惚れてるお源子も肩がゆるむわ、左樣せえよ、なア駿吉」

駿吉は默つて何か一心に考へてる。

爺さんはいさいかまはず「左樣せえよ、左樣すると俺此五百兩の一割ぬしに遣るわ、五百兩の一割は五十兩ぢや、五十兩ありや一角の羊飼樣ぢや、何不足なくお源子と暮される、餓鬼が出來ても、羊共の毛が麥飯

になりや困らんだけの實入はある、紙の表裏は何處まても表裏ぢや、寸は寸なり、尺は尺なり、縮むも一緒伸びるも一緒、理窟は此處ぢや、ようく考へて見ろ、間違つた事言ふ祖父さんぢやない、現に隣村の村長樣も俺の理窟にや首つん曲げてゐなさッた、牛狂ひの小若に閉口まされる柄かい、腹の底かいだるいぞ、阿呆らしい、鼴鼠の日なたぼこりア七里結界、鶴龜々々の萬歲樂ぢや。」

算盤を膝へ戴せ、其上へ紙幣束をならべながら庄吉爺さんは饒舌りつゞける。

「俺の頭の禿げちよろけを見ろ、此ん通り一本も毛はないぞ、よしか、毛はないけんど、毛のあるぬしよれア御飾りの下潜りためた德で何事も呑込みよう見越がつく、去年の暮に三文判おッぺして貯金した驛遞局の通帳のメ高を、主ア十圓たなるまいとぬかしそつたが、昨日算盤に當つて見りや廿六圓某かに溜つてるぞ、そうれ何うだ、年寄を馬鹿にすると愡うい恥辱を掻く、ぬしの算勘より十六圓餘計ぢや、喫驚すべえ何うだ。」

駿吉は欠伸しながら「喫驚するより噦する方が餘ッ程いゝ。」

「何？。」

「噦がね、出さうだから、井戸へ行つて水を呑んで來ませうよ。」

駿吉は座を立つた。

爺さんは後見送り「困つたもんぢや、まるでおいよッ子の爹其んまゝ、いづれは牛の角でさくられやう、みじめなもん、盆もねえ。」

中音に獨語つたが、「魔者に魅入られると皆あゝぢや何ても狗賓さま仕事に違ひない、牛狂ひ、犬狂ひ、馬狂ひ、どれもこれも親泣かせの果が土左衛門か木のそら往生、恐いこつちや、鶴龜々々萬歲樂。」紙幣束を風呂敷に包み、算盤を杖に立上り「四百五十一圓五十錢に、ばら錢が五錢七厘、先づ神棚へ上げて簞笥へ仕舞はう、やッどッこい。」

曲つた腰を伸し、力足を踏む樣な足取てのしり〳〵

と爐椽からはなれたが次の間へ踏込むと立止まッて
「おいよッ子〱、おいよッ子やア。」
大聲に呼んで見る。
「おいよやア、おいよッ子やア、おいよやア。」
すると羊小屋の後の納屋添ひの小者部屋の方から
「なんだよう、用かよう、お祖父さん。」
甘ッたれた若い女の憫聲が聞える。
「用あるだ直ぐ來いよう。」
「今行く、直ぐに。」
「早く來い、いゝもの遣るぞ。」
何？お祖父さん。」
「ぬしの好物な饅頭ぢや。」
「お饅頭、まア何うしたの？」
段々聲が近くなる。
庄吉爺さんは部屋越しに話しながら次の間へ入つて行く。
「先刻一里塚のお婆が持つて來て呉れたんぢや、甘いぞ、頬ッぺたが落ちる、まア食べて見ろ。」言ひ〱神棚から饅頭の折詰を取りおろし「ぬしに三つやつて俺が三つ食うて駿に三つ、なよからう。」
「あゝいゝとも、三つ食べりや澤山だよ。」
赤い手からの蝶々髷の木綿布子の筒袖着た小娘が入つて來た。
爺さんは神棚へ四百五十一圓某かの紙幣束を供へながら「ほうら甘さうな饅頭ぢやろ、手を出せよ。」
おいよは祖父さんのいふまゝに手を出したが「兄さんは何處へ去んだ。」
「駿は嗽が出るてゝ井戸ばたへ行きをつた。」
おいよの手の平へ饅頭を載せ「あれにやかまはずと食へよ、俺も爐ぶちて食はう、茶を入れて。」
おいよは嬉しさうに「大きいのね、おいしかろうね。」
「おいしい段か上餡だ。」
「お祖父さんたべたの？。」
「うん。」
「すんぢやお前は四ッだね。」

「左樣ぢや。」
「私にも四ッおくれ。」
「おゝ遣らう、皆食ふか。」
「いんえ半分は村長さまの勘七さんに上げるの。」
「勘七さんに遣る、何ての。」
「よくなにか吳れなさるて。」
「左樣か――。」
「あの人はいゝ人だよ。」
「おゝ。」
　這樣罪のない問答が茶の間と次の間の空氣を溫めてる時、駿吉は寒い夜風に吹かれながら裏の馬小屋から今朝入ッ山七郷へ乘つて行つた三才駒の鹿毛を引出し脊戸の藪蔭の瘤松の根方へ連れてッて、嘶かぬ樣に口籠を嵌め、直ぐにも乘れる樣に鞍を置き、手敏く飼葉迄かつて、軈て何くはぬ顏で母屋へ來る、と、おいよが目早く見つけて「兄さんやア」と呼ぶ、庄吉も「おゝ駿吉此處へ來い。」
「おいしいものがあるよ、お食べなさい。」
「何だ？。」
「お饅頭。」
　爐の火が盛んに燃えて庄吉の顏もおいよの顏も煤天井も破障子も皆眞紅に見える。
「一里塚のおん婆に貰つたんぢや食へよ、三つだけ主のぢや。」
「有難う。」駿吉も團欒へ入る。
　庄吉爺さんはにこ〳〵もので「何してゐた、手間んいつたぞ。」
「小屋廻りして來たんだよ。」
「左樣か寒かつたろ。」
「何左樣でもない。」
「お祖父さん食べませうよ。」
「うん食はう。」
「兄さんも。」
「よしきた。」
　七十一の老人と十六の少年と十二の少女とは三金輪になつて饅頭を食出した。

下

まだ宵ながら更けるに早い空山の孤屋裏、聞えるものは土瓶の煮立つ音、ばちりぷすり、薪の燃える響、奥の間の柱時計のちくたく。爺さんは欠伸をした。

「何うだ寢ないか。」

「寢やうかね——。」駿吉がいふ。

「寢ませう—。」おいよがいふ。

「あすまた早いだ、寢ていゝ夢でも見やう。」

「其れがいゝ。」

「私は富士山の夢を見るよ。」

「俺は羊を五百匹も買込んだ夢を見やう。」

「私は紀伊國屋文左衛門になつた夢を見る積りだ。」

「何でもえゝ、さア寢やう。」

例の通りカンテラ持つて奥へ行く老人、孫兩人はあとへ殘る。

「今夜は私此方へ寢るよ。」

「何處でもいゝ、俺アもう今夜つきり——。」

「え。」

「今夜つきり此處へは寢ない。」

「何故?。」

「なぜツても寒くツて詮がないもの。」

「左樣ねえ、寒いねえ廣いから。」

兩人は話しながら寢具を敷く。

「一——二——三——。」

駿吉がはづみをつけて蒲團へもぐると、おいよも同じ樣に一二三の懸聲で蒲團へ入る。

奥から爺さんの鼾聲が聞える。

「早いなア御祖父さんは。」

「罪がないからだよ。」

「あんまり罪がなくもなからう、慾深樣の大熊手だ。」

「兄さんは口が惡い。」

「口が惡いか何が惡いか知らんが、全く慾深爺さんだよ、お前今朝賣れた羊の代金何處にあるか知つてるか。」

「知りませんよ。」

「五百圓足らずあるさうだ。」

「まア其様にあるの?。」
「あるとも、先刻其處て勘定してゐた、あいつ引ん盗んだら魂消やうな。」
「盗まうか。」
「左様——ねえ——。」
「——。」
「盗まうかよう。」
「——。」
「ねむいの。」
「いゝ——え。」
「お前今朝何處へ行つてた。」
「え——私?。」
「うん。」
「勘七さんと遊んでたの。」
「あの子は利口だな。」
「——。」
「あの子は利口だあ。」
「——。」
「お前の御亭主にゃ大似合だ、早く一緒になるがいゝ。」
「——。」
「なアいよ公。」
「——。」
「なアいよ公。」
「眠りやアがつた。」
駿吉はそつと起出て頭の上のランプを消し其まゝ次の間へ入つて行く。
みしり〳〵床を踏む足音、がたッ、ことッ、器物を片寄せるやうな響、戸棚の戸が開く、障子が閉る、天井て鼠が荒れる、庭の大戸が音せぬ様にきしる。
駿吉は外へ出た。
少し前から強くなつた夜風が襟首を撫でると駿吉は寒さうに頸をちゞめ、眞直に馬の繋いである瘤松の根へ行き、默つて綱を解き、だまつて鼻づらを立てなほし、默つて跨がり、默つて尻を叩く、と、馬もだまつて尾髪を振り、默つて瘤松の根を離れる。

庄吉爺さんの羊飼小屋から八ッ山七郷へ出るには是非とも小山添ひのくぬぎ林を抜けねばならぬ、其處まで行く間は見渡す限り苺まじりのすゝき原ゆゑ晝でも草刈歌、馬子唄などがよく聞える。

ぱッく〳〵、ぱッく〳〵、駈足を踏ますのか石を噛む鉄蹄の音が調子を取る。

ぱッく〳〵、ぱッく〳〵。

姿は闇に呑まれたけれど、鉄蹄の音は長く聞える。

寢てゐる間に這樣變事があつたとも知らぬ庄吉爺さんは、五百匹の羊を買込だ吉夢の代りに、禿頭をいやといふ程誰かにぶんなぐられた凶夢を見て喫驚して目が覺めると、消えたとのないカンテラが消えてゐて、隔障子の小間の破れの紙暖簾がいやにぶる〳〵唸つてゐる「風が何處からか入るんだな。」恁う思つて起上つたが老人の癖て目が覺めると小用に行かねば寢てゐられぬ

爺さんは寒さうに床を離れた。

障子をあけて茶の間へ出ると此處のカンテラも消えてゐる。

「はてめいような。」

一體此庄吉爺さんは若い頃から蛞蝓と暗闇が大の嫌いで、夜一夜あかりが點いて居ねば氣色にさはるといふ變人、だから此點には用意頗る周到て、滅多に消えるカンテラを點けもせねば、滅多に消えたのを見たとも無い、然るに今夜は二つとも消えてゐる、嫌いな闇は文なくも眼前を塞いでゐる。

「はてめいような。」と呟いた爺さんは寒さと忌はしさと氣味惡さとに顫へながら、手探り足探りて爐ばたへ寄り火箸を取つて邪慳に爐の中を引ッ搔きまはすと螢火ほどの埋火がちよろりと出る。

「有難いおさづかりだな、まアづこれて安心ぢや、どれ火寸に移しませう。」

手をのばして、爐の向ふの壁際の火打函を引寄せて火寸を出す、と、爺さんの指の先と火寸と螢火程の埋火との共同作用が青い火となつて闇を劃る。

直ぐカンテラの心が行く、刹那の光明が永久性に變質する、廣い茶の間があかるくなる。

おいよの蝶々髷、駿吉の夜具の襟、障子の棧、天井の棧、疊の目、釣ランプの火屋、其樣ものが先づ目に付く。大黒柱の干割、框の節穴、靴脱石の乳、下駄、眞黒な土間、續いて目についたのは這樣ものだ。

爺さんは一々其れを點檢する。

「之でまアづ大安心!!。」

ほうッと息を吹いて肱を張つたが、此時丁度、奥の間の柱時計がちん〳〵と五ッ鳴つた。

「やア五時だ。」

生れ變つた樣に血の多い聲で言つて、彈かれた樣に爐ぶちを離れ、轉ける樣に土間へおり立ち「駿やア、起きろよう、駿やア遲いぞよう。」呼び續けながら大戸を開ける。

東が白んで烏帽子山の頂が薄紅色に色づいた、と見るほどに、鉢羅樹林の方角を茅原の磽确な小石を蹴つて馬の鐵蹄の音が近づいて來る。

「はて?。」

爺さんは耳を澄ました。

駈足を踏む鉄蹄の響、ぱッく〳〵、ぱッく〳〵。

「鹿毛ぢやないか。」と思つた時、不意に駿吉の名が口に上る。

「駿やアい、駿やアい、起きろよう、遲いぞよう。」

一段大聲でわめき立てると、おいよが喫驚して起きて來た。

「おぢいさん何出來たの?。」

「お、おいよッ子、駿は何うした。」

「寢てゐるよ。」

「起いて來う。」

おいよが心得て引つ返すと爺さんも大戸を入る。

「兄さんやア。」

「早く起せよ。」

「何?。」

「居ないによう。」

「兄さんはゐないによう。」

「どれ〳〵。」

爺さん夢心地て茶の間へ上る。

成程駿吉は寢てゐない、夜具ばかりだ。
不意の衝動に氣の上づつた爺さんは暫く何も考へずに突立ッてたが、耳元て「お祖父さん鹿毛が土間へ入つて來たよ。」
といよの聲がする。
「え。」
「這樣ものを鞍へ付けて居たよ。」
「何だ。」
「七夕さんの紅唐紙の短冊だよ。」
「字が書いてあるか。」
「あるよ。」
「讀んて見ろ。」
「私事只今東京に參り候腕二本足二本にたか一貫にて紀文になる積りに候　私はもはや忌なく羊飼ひては御ざなく候頓首。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

念の爲神棚を探つて見ると四百五十一圓五十五錢七厘の羊代金は一文も手付かずにそッくりして居た。（完）

乘合馬車

窪田空穗

中仙道を往復する時間馬車に乘らうと、冷たく降りそゝぐ雨を、洋傘てふせぎながら、鹽尻ステエション前の通りまて來た。見ると、小さな乘合馬車が一台ズックの窓掛を四方へ下ろして、屋根から雨垂れを流しながら、新しく出來たと見える、小さな饂飩屋の前に据ゑてある。御者は見えない。

饂飩屋て呼び込むのを機に、馬車の樣子を聞きながら、雨宿りをしようと、私は其店へ入つて行つた。

饂飩を注文して、見るともなし店の樣子を見ると、火鉢の前に胡坐をかいて、彼方向きになつてゐる男が第一に眼を惹いた。日にやけた眞赤な顏をして、眼尻の釣つた白眼がちな眼をして、煙草をふかしながら默つて往來を眺めてゐる樣子、——普通の者てはないらしい。腹掛の上に窄袖を着て、三尺帶を前の方て結んてゐたが、氣が附くと、小さな眞鍮の喇叭を、脫

け落ちさうにして腰に差してゐる。——此れが御者だなと思つた。
「君、馬車屋さんかい？。」と私は聲を懸けた。
「へえ、」と御者は此方へ顏をねぢ向けた。白眼が際立つて見えた。
「洗馬までやつてもらひたいんだが——」
「有り難うござんす。」と御者は型のやうに辭儀をして直ぐ彼方に向いてしまつた。
御者の後のところに、此店の女房と見える。三十ばかりの女が、小さな兒に添乳しながら、炬燵に横になつてゐる。女房は自分の子の顏を見ながら、
「お前さん家の小さいのは、幾つになるね？。」
「四つだ。」
「あぶねえ盛りだね。」
「あぶねえとも！己の方は裏はすぐ彼の川だ」
「落ちようもんなら、それつきりだてな、——其所へ行くと此方あ大丈夫だ。」
「何方行つても、畑ばかだてね。」

「子供つてものは罪のねえもんだ。」御者は不圖思ひ出したやうに云つて、微笑を洩らした、——鋭い眼には無邪氣な色が浮んで、白く細かい前歯が現はれて、見ちがへる位愛嬌のある顏となつた。「此間家の餓鬼め、腹をやんでね、四日ばかつてもの、何て云つても食物を食はねえだ、無理に食はせようとすると、餓鬼め、食べると、また腹が痛くなるてやあだつて吐かすんだ食べると腹が痛くなる、此れにや全くよわらせられちまつたつけ。」
「何てませて居るずらねえ！」と女房は感心したやうに云つて、また自分の兒の寐顏を眺めた。
御者は腹掛の丼から、銀貨を一つ出して、
「此れていゝかい、」と火鉢の猫板の上に置く。女房は急がしく眼を走らせて、禮を云ふ。
「どりや、見て來るかな——丁度三時だ！」
御者は表附きの下駄の、草履のやうに磨りへつたのを突掛けて、ひよい／＼と、泥のない所を拾ひながら歩いて行つたが、すぐ引返して來て、苦笑しながら、

今まで居た邊りを睨て捜す。
「何だね？。」と女房は起つて來る。
「商賣道具忘れちまつた。」
火鉢の側には、小さな喇叭が落ちてゐる。女房はそれを拾つて渡すと、會釋して受取つて、急がしく引返して行く。
注文した饂飩が來た。私はそれを食べながら、外の景色を眺めた。雨は何時の間にか。雪をまじへて來て大きなのがひら〱と飛んでゐる。見る〱はげしくなつて來た。
打續いた桑畑——低くさみしく、疎らに立つてゐる枯枝の上は、一面に白くぼかされて。畝には。もう白白と雪が積つてゐる。鹽尻の町は彼所とばかり、朧ろに黑い。往來には、泥のある所と。ない所と。白く黑く斑になつた。寒さも急に加はつて來たやうに覺える・・・・。
汽車は着いたらしい。喇叭の音は、寂しくきれ〱に起つて來た。やがて旅客は、忙しげに饂飩屋を通つて行く。女房は軒下まで出て、頻りに呼び立てたが、振り向いて見る者もない。最後に爺が一人、驅け込むやうにして入つて來た。頭から赤毛布を被つて、股引代りに、萬歳の穿くやうな物を穿いてゐる。毛布を脫ぐと、顏の小さい、頭の禿げた、兩方の頰のぺこんと落ちくぼんだ、何所かおどけた爺だ。眼に微笑を絕やさない。
爺は上框へ腰を掛けて、
「二合、熱燗にして、それに・・・・、あ、饂飩があるな其れを一つ。」
女房はすぐに、酒だけを持つて行く。
「や、此れは何うも。」爺は一段眼尻の皺を深うして、片手に德利、片手に猪口を持つて、注いでは飲み、注いでは飲み、息もつかずにあらまし空にした。舌打ちをしながら、女房の方へ向いて、哀願するやうな手眞似をして、「もう二合！」
御者は歸つて來た。馬車の側へ立つて、窓掛をあげて、私を案内する。私は馬車の中へ入つた。

馬車の中は薄暗い、前の窓掛の隙から、僅かに光線が入つて來るばかり、雨の音は耳近く聞える。隙の所から、外の方をすかして見ると、見える限りは眞白、雨は何時か小降りになつて、雪はます／＼烈しくなつて來た。見ると、馬の着てゐる筵の上へ、雪は積らう積らうとしてゐる、雨はそれを消さうとしてゐる。馬は鬣を振り／＼、侘びしげにしてゐる。

誰か馬車へ入つて來た者がある。見ると、先刻の爺だ。私は微笑して迎へた。爺も微笑した、歯の一本もない腭が見える。やがて御者も御者臺に乘つた。手綱を繰りながら舌を鳴らす、馬は歩み出した。

私は前の方へ居ざつて行つて、窓掛を掲げて、外の景色を窺つた。家の中で見てゐた時。「此雪の中を行くのは……」とやゝ躊躇したが、いよ／＼乘り出して、前後左右、すべて雪なのを見ると、そゞろ一種の勇氣が湧いて來た、何となく一つの敵を目懸けて、それに向つて進んで行くやうな氣がする。

「馬車屋さん、窓掛除つちやいけないかね？。」

「雪が降り込みますぜ。」

「私や關はないが——」

御者は默つて、前の方だけはづした。眼界は俄かに廣くなつて來て、夜から晝になつたやうだ。雪は膝に散り、胸を掠める。それが心持ちよく覺える。御者臺はもう眞白になつてゐる。

小石を敷きつめた新道を出はづれると、路はやはらかな土となつた。何方を見ても桑畑ばかり。俄かに人里遠い所へ來たやうに覺える。路からやゝ引込んだところに、客待ちをしてゐるらしい一臺の馬車がある。

「おい、歸らねえか、こんな日にや早く歸つた方がいい、」と大聲にど鳴つた。

彼方の馬車では、何か云ひ返す。

「へつ、あんな、網の口のやうな山ん中へ、其樣なに行く者あつて堪るもんか！」

御者は呟くと共に一鞭あてた。馬は勢ひよく走り出した。やがて私達の前へ、二臺ばかりの馬車が、相續いて行くのが薄黑く見えて「それが段々に明らかにな

つて來てとう〳〵三四間の間近まで迫つて來た。御者は聲を懸けると共に、一鞭強くあてる。馬は前足高く狂うがやうに驅け出す――前の馬車の馬丁臺に乘つてゐた若者は、慌てゝ飛び下りて、馬の口を執つて、遮二無二側へ避けさせる――、私達の馬車は、僅かの餘地を縫つて、倒れるかと思うやうに傾いて、突とすり拔けて行く。

十間ばかりも前へ立つと、御者は私達を顧みて、さも得意らしい微笑を洩らす。私も微笑して、

「……かういう職業、隨分道樂職業だね！」

「そうてすとも、まるつきり道樂てさあ！」

會話の緒は附いて來た。先刻から、對手欲しそうにしてゐた爺は、

「呆れちまうなあ、彼家の酒の安いなあ！二合徳利二本と、饂飩二つて二十錢、何うだ安いてたあ！」

爺の顏には、明らかに未練の色が讀まれる、もつと飮んて來ればよかつたと思つてゐるらしく、そして同情を求めるらしい。私は微笑するばかり、挨拶が出ない。」

「物がちがはあ、關東の方た！まるつきり物がちがつてらあ。」

爺はにて〳〵してゐるばかり、御者の云ふことは耳にも止めないらしい。

御者は振り返つて、爺をぢろりと見て、

「お爺さん、お前野州の方から來たらう？」

「うん」と爺は眼をまるくして、「よく知つとるなあ！」

御者は得意らしく微笑した。そして、

「何所まて歸るい、宮の越かい？」

「うん」と爺は首肯いた。

やがて爺は、しんみりとした顏になつて、

「實あ己あ、足尾の方行つて、杣してゐたが、今其歸りだ、……泊り〳〵て飮み過ぎちまつてな、とう〳〵荷を背負つて歩かにやならんことになつて、それて一日遲れちまつた……。」

「はゝゝ」と御者は無邪氣に笑つた。やがて、何か思ひ出したやうな、しんみりした調子て、「彼方やいゝ

あなー」
働くにや、彼方や張合へがいゝな、……尤も物が高えて、取つたなあ皆なくなつちまうが。」
私は微笑した。爺は私の顔を見て、
「そりや全く高えぜ、まあお前さん、葱が一本一錢、大根が五錢ていふだもの。——己彼所にゐて考へた、此りや國の方から野菜を持つて來ると、うんと儲かるつて。」
爺の眞面目な、熱心な調子を見ると、冗談とばかりも思へない：
「でもお爺さん、木曾から背負つてつた位ぢや。知れたもんだー」



「うゝ尤そうなりや、汽車い積み込んでいく、それから前や、運送て運ばあ、なに、幾らでも賣れる。儲かるぜ屹度！」
「それなら木曾からでなくとも、あの近間の田舍からでもいゝだらう？」
「はゝゝゝ、そう云やさうだ」と爺は笑つてしまつた。
爺は暫く默つてゐたが、急ににこ〳〵して
「酒飲むなら、東京だな……、五年ばか前だが、一ぜん飯て、一杯やらうと思つて入つたが幾ら取られるか分らねえて、此れて飲ましてくれつて三十錢出して頼んだゞ。するとお前、酒が結構だ、

肴も結構だ、私ら安いので呆れちまつた。」
「そりや東京は東京だけよ！」今まで默つてゐた御者は、爺の話で、何か思ひ出したらしく、彼方へ向いたまゝで云ふ。
「知らねえ所い行くと、正直に限るな、東京なんかだつて、明けざらして頼むと、惡くしちやくれねえ。上手氣取つて見た所で、この萬歲のやうな、へんてこな服裝ぢや始まらねえ、」爺さんは、其不思議な股引を、今更のやうに眺める。
　私は微笑した。
　外を見ると、雪はます／＼烈しくなつて、それに風が伴つて來た。天も地も唯一色の白さ。何一つ妨げるものもない。唯桑の枯枝が。降り積む雪の上へ。あはれに靡いてゐるばかりだ。鹽尻は大分の後になつたが、洗馬はまだ見えようともしない。この雪の渦卷きの中、見ると眼まぐろしく、眩しいのを分けて、私達の馬車が一臺、がたりがたりと動いて行くだけである。——輕く躍つてゐた心は、何時か重くなつて、寒さがなま煖く、心持惡く迫つて來る。
「大降りだ、今年になつて初めての雪だね。」
「此雪あ、櫻澤へ行きや止んでしまひます！」
　御者は、確信してゐるやうに云つた。——雪に濡れて、一層赤くなつた顏を、狂ひつゝ降る雪の中へ眞的に向けて、御者は何事があるとも思つてゐない樣子をしてゐる。
　遠く吹雪の中に、小さな黑い物の動くのを見懸けた近づくと其れは旅人で、黑の襟卷で頭を包んで、紺の風呂敷包みを背負つて。俯向いて心急くやうに辿つてゐるのであつた。御者は、馬を地足にさせ、臺から落ちそうな風をし、旅人の顏へ覗き込んで、
「乘つてかないかね！」と勸める。旅人は首を振つて何か小聲で云つた。御者は突と身を起して、手綱を採つて、
「へい、方角が違うもないもんだ。貴樣の足が、藪原まで行かない足か？」
「——何所まで行くつて分るのかい？」

「分りますとも、足を見りや、何所まで行くか、間違ひつこなし分りますあ！」
不圖馬車は、急な下り坂へかゝつた。馬はたぢ／＼する。御者は口笛を鳴らして調子を取る。くねりくねつて、坂を蔽ひ、馬車の屋根にさはらうとする老松の下を潜ると、眼界は俄かに改まつて、前も左右もことごとく山、雪を被つて、ところ／＼常磐木を黒く置いた峻しい山が、行手を遮ぎるやうに聳えて、路は何所に附いてゐるのか、馬車は何う行くのかと怪しまれる。風は吹き弱つては來たが、山と山との間を迷つて來るので、方向が定まらない。雪は狂ひに狂つて、落ちるのか、舞ひ上がるのかも解らない。私達は今、中仙道の本通りへ出たのだ。
御者は手綱をゆるめる。馬は地足になつて、首を垂れ、鬣を振りながら、ぼう／＼と歩む。御者はくはへ煙管をして、頻りにマッチを擦つたが、濕つてしまつたのか附かない。私は自分のマッチを出してやつて序に卷煙草を附けた。
「何うだい、一本附けないかい」
「へえ、有り難う、」と御者は卷煙草の袋を見て、ちよつと狼狽いたやうに云つたが、手は出さない。
「小僧！ふざけるねえ！」
御者は手綱を引きながらど鳴つた、馬は驚いたやうにも見えない、――手綱の引き方で主人の心を讀むのであらう。御者もそう云つたきり、强ひて急がせようともしない。
「かうして、毎日扱つてると、馬が可愛くなるだらうね？」
「そりやもう、自分の實の子よりも可愛い位です。かうしてゐても、家へ歸つたとなると。家ん中へ入らねえ中に、ちやんと、するだけの事してやりますからね。」
爺はもう話の種もなくなつたか、つまらなさうにしてゐたが、
「贄川のあの坂、今日は下れるかな。」
「下れるとも――」
「あの坂の上の家、あれ何うなつたね。」

「吉住か、とう〳〵つぶれて、東京へ行つちまつた。」

「評判のあつた勝山は？」

「ありやもう、とつくの昔だ！」

爺はぢつと眼を据えて、何か考へてゐたが、

「旅にゐると、國のこと忘れる日はねえが、歸つて來て見ると、根つからつまらねえ、——働く氣もしねえな。」

「驛場の樣子は變つたらうね？」と私は尋ねた。

「あゝ——」と云つたが、爺は其變遷を傳へる適當な言葉が見つからないらしい。御者は聞えないやうな風をしてゐる。

「旦那、東京にや自働車つてものが出來たつてますが何うなりました。」と御者は思ひ出したやうに尋く。

「さあ、何うなつたらう？何でも會社が幾つも出來て競爭中だとかいう噂だつたが……。」

「高いもんてすかい？」

「さうね、……何でも大隈さんの買つたのは四千五百圓だとかいふ噂だつた……。」

「へえ」と御者は氣の無い返事をする。

「いろ〳〵便利になつて來るには驚くね。電車が出來る、電話が出來る、自働車が出來る、此頃ぢや電信で寫眞が撮れるやうになつて來た、現に其寫眞つてのを見たがね——」

「へえ！」と御者は、驚いたやうな、怪しむやうな眼をして、私の顏を見たが、すぐ何物にか反抗するやうな、何所か自信のあるやうな樣子をして、つと振り返つて前方を見てしまつた。

今まで、稍々小降りになつてゐた雪は、此時俄かに勢ひを加へて來た。風も烈しくなつて來た。透かして見ても、少し離れた所の物は、何物とも形を捉へさせない、唯近く迫つて來た山々の、いよ〳〵眞白に輝いて來たのと、左の方、削つたやうな崖の下を、奈良井川の水が、紺碧を流したやうに、一筋細くうねつて、ところ〳〵、石に激して泡を飛ばしてゐるのが、隱れつ見えつするだけてある。馬も今は苦しげに、足をすべらしつ喘ぎつする。とう〳〵立ち留つて、軀から

汗を湯氣のやうに立てながら休む時には。私達の馬車は、此れぎり進めないのではないかと危まれた。

遠く雪の上へ、低く黒ずんだ、家らしいものが見えた。二軒となり三軒となる。私はほつとして、急に心が輕くなつたやうに覺えた。

「あれ、洗馬かね？」

「へえ」と御者は首肯く。

「私は吉本屋つて家へ行くんだが……。」

「畏りました。」と呑み込んでゐるらしい。

「代は幾ら上げたら可いだらう？」

「此樣な天氣ですから、何うか二十錢。」

私は金を出しながら、如何にも安いので、增してやらうかと思つたが、御者が淡泊な樣子をしてゐるので却つて變に思へて、云ふだけを渡した。御者は輕く挨拶をして、調べても見ずに、腹掛の丼へ入れた。

洗馬の驛へ入つた。何れも戸を下ろして、潜戸だけにしてある、ひつそりとした驛へ入つて、半町ばかり來たかと思ふと、御者は振り返つて、

「旦那、こゝです、こん畜生！」と手綱を繰つて馬を留めた。

私は御者と鄭に默禮して起つた。痺れを覺える足を臺へ懸けて、雪の中へ下り立つと、柔らかな雪は膝の下まで隱した。

御者は禮を云つて手綱を繰る。馬は鬣を振り、前脚を踏みしめ〳〵して、辛くも動き出した。狂ひに狂ふ吹雪の中、雪の崩れ落ちさうになる屋根と屋根との下の街道を、馬車は心許なく危い姿をして、傾き〳〵進んで行つた。

（完）

名流婦人の處女時代

男子に耻ぢない心掛

三輪田眞佐子

私は兩親の間に、唯一人きりの女子でありましたから、兩親が、此の子が若し男子であつたならば、何んなにかよからう、何んなにか嬉しからう、と折々話するのを、小供ながら心に留めて居りましたから、物ごゝろづくやうに成りましてからは、自分が若し男子に生れて來たならば、兩親は何んなにか喜んだであらうと思ふと、氣の毒になりまして、何うか女ながらも、男子に耻ぢぬ、立派なものに成らうと心懸けました。

性來書物は好きでありましたし、學者の家に生れましたので、少さい時から學問は致しましたが、種々の草紙など讀みまして、菅原道眞が十歲の頃、既に彼のやうに立派な詩を作つたのに感じ、自分も詩文を上手にならうと思ひました。

十四五歲の頃には、男子の仲間入りして詩文を作つても、耻かしからぬやうになりました、其頃自分より年長の男子の方に、讀書など敎へましたから、只今でも折々年老つた方が見えられて、若い頃お孃樣(其頃お孃樣と呼ばれましたから、只今でも矢張りお孃樣と申します)にお講釋をうかゞひまして、大層お世話樣にあづかりましたなどゝ、申される方があります。

其頃のことでありました、左傳などの輪講が流行まして、私も一人の侍——今て云へば書生——を供に連れて、或る先生のお宅へまゐつたことがありましたが、歸る時、供の侍が私の履物を、整然と玄關に揃へてくれましたのを、私は何の氣なしに、つか／＼と履いて歸りました、其時は何ごともありませんてしたが、其後にその先生のところへまゐりましたらば、先生から、貴女は何ごともよく出來、何ごともよく理解て居られますから、外に申分はありませんが、先達お歸りの時、見て居りますと、お供の侍の揃へた履物を、默つて履いて行かれたやうてしたが、假令如何に身分の卑いものでも、先方は男子であるから、女と云ふものは、ちやんと禮義を守つて、默禮して履かれねばなりません、と申されました、此のお言葉に、私は深く恥ぢ入り、且、深く感じまして、女子の德は何處までも謹愼、謙

讓にあるといふことを悟りました。其時の先生の一言が、私の一生を貫いた教訓となりました。昔、支那の孔子が、禮を老子に問ふた時、孔子は老子の德の高さに推服して、老子はそれ猶龍の如きか、と云つて感嘆したとありますが、孔子は只一度老子に遇つたばかりて、其德に感化されたのてあります、總て昔の人は、一人の先生に就いて、深く其先生の人格の感化を受けたものてあります、今の學生は毎日數時間多くの先生に就いて教を受けながら、平氣で居りますのは、餘り教育と云ふことを、輕く見過ぎるのてはあるまいかと思ひます、私は此のことを深く、今の學生方に注意してお貰ひ申したいのてございます。

自筆の鑑定

跡見花蹊

私の家は舊家てございましたが、人のために騙かれて、一時零落して居りました、私には一人の姉がありまして、私は次女てしたが、私が幼小の時から書畫を好みましたので、兩親が始終わが家は此の子に再興させねばならぬ、と云ふことを聞いて居りましたから、小供の頃から私は、天下に名を爲さねばならぬ、と云ふ考へを固く持つて居りました。書は四歳の頃から、父に就いて學びました、初めて畫の先生に就きましたのは、十歳の時て、角鹿東山と云ふ先生て御座いましたが、十六七歳の頃には、大分畫けるやうになりまして、先生のところへ毎日お稽古にまゐつては、諸方から依頼を受けて居る生絹や扇面に、澤山書畫を書きました。

それに就いて、丁度此頃面白い話がございました。それは、私の懇意な方で、野村素介樣と申される方が、先達飛騨の高山へお遊びに行かれましたところ、土地の素封家て、岐阜縣の上院多額議員てある、杉下太郎右衛門と云はれる方のところに、私が十七八歳の頃畫きました、極彩色の美人畫の軸ものがありまして、果して實物てあるか何うか、野村樣に鑑定をしてくれろと云はれたといふことて、野村樣から添書がついて、其軸物を態々私のところへ送り越されましたので、私は、十七八歳頃のものとすれば、何んなものが畫いてあるかと、實は少なからず心配しまして、開けて見ましたが、只今見ましても、左程見苦しいものでも御座いませんてしたので、漸く安心いたしました。紀念の爲め、箱に裏書して返さうと思つて居ります。

詩文は、大阪では、山陽門下の後藤松陰先生に就いて學びましたが、十七歳の時、京都に出ましてからは、是も同じく山陽門下の有名な、宮原節庵先生の門に入りました。

斯様に私は、最初から何處までも、家名を興さうと云ふ決心で御座いましたから、人様のやうに、他家へ縁付くことをせず、終身獨身で送り、生徒を教育することを、唯一の樂みとして居ります。

女の先生になりたい

鳩山春子

現今の女學生に比較ぶれば、私どもの頃のものは、一般に智識慾が強くありました、私どもの若い時分は、學問をして何に成らうなどゝ云ふ考へはなく、只もう學問がしたい、物ごとを人より多く知りたい而已で、言ひ換へて見れば、何うか女の先生とも呼ばれるやうに成りたいと云ふ位のもので、其他の考へは少しもありませんでした。

私の學んだ最初の學校は、英語に重きを置かれたる竹橋女學校でしたが、現今時の學校とは異つて、不規則て、成績によつて一年のうちに、幾級も飛び越されたので、各自の勉強次第でずん／＼進級されましたが、其代り或る學科は學ばずに通越しましたから、只今から思へば損もありました。

竹橋女學校が廢校になつてからは、他に適當な學校がありませんでしたから、丁度其一二年前に出來た、お茶の水の高等師範學校に入りましたが、私は前々から幾級も飛び越えて來たものですから、不得手な學科が有りました、殊に數學などは、初めから順序を逐つて學ばなければ解り惡いものだのに、私は幾度も飛び越えて居り、師範學校の數學は又、代數幾何三角術のやうな六ヶ敷いものばかりであつて、代數などは、一度に二百題宛も宿題を出されるものですから、非常に苦みまして、人の寢靜まつてから、夜具を出した後の寄宿舍の小さい戸棚に入て、薄暗い種油の硝子行燈の光て、宿題を解たことがありました、其代り漢籍や歷史、經濟學、教育學などは、何時も得意でありました。

其頃文部省から留學を命じられまして、非常に嬉しく思ひましたが、時の政府の事情の爲め、遂に沙汰止みとなりました。

學校を卒業する一二年前から、教授法と云ふことが、大層喧しくなりましたが、私は性來小供を教育する

殊に大きい活潑な男子を教育して、其智識を啓發して行くことが好きて、教授法に深い興味を持ちましたから、別に教師に成らうなど云ふ考へは有りませんてしたが、小供を教へることの好きなばかりに、學校を卒業してから、其年の十一月、鳩山（鳩山とは卒業半年前頃から學校教授の媒介にて結婚の契約はありましたが）と結婚する月まて、半年ばかり附屬の小學校て教授しました。

先頃も或る會に行きましたらば、立派な高等官の方々が、大層馴々しく私を接待して下さるので、不審に思つてよく聞いて見ますと、私が以前學校て教へた頃の生徒てあつたと云ふことて、大層可笑しく……嬉しく思ひました。

私は小供を教へることが好きてあり、且又、自身が學校て變則な進み方をして苦みました爲めに、自分の小供を教育する上に、大層參考になり、興味を持つて教育することが出來ました、私は始終多忙てすが、只今ても、自分の子供が獨立して、少しても暇が出來ましたらば、何うか幾分の時間を割いて教育に從事して見たいなど思ふこともあります。

前申したやうに、私は若い頃、たゞ〳〵少しても多く學問して、深くものごとを覺えたいと云ふ外には、更に何事も考へて居りませんてした。

閑なことが嫌ひ

佐藤靜子

幼少の時の考て今だに覺えて居ますことは、親といふものは難有いもの大切にしなくてはならぬといふ考てありまして親を悦ばせるとが何よりも自分の嬉しい事として居たのてありました。私の九才の時父が長崎へ修行に參りましたので、其の不在中家ては充分の教育が出來まいからといふので或る親類へ預けられましたが、其の間遠く離れて居る父の爲めに、今思ふと可笑しう御座いますが、之れても幼心に父の無事を祈るといつて鹽斷ちを致しました。

十二才の時に父が歸宅致しましたので暫時自家に歸つて居ましたが、やがて又寺子屋風の處へ參り、そこで寄宿生活を致し、それから十四才の時舊主堀田侯へ御奉公に上りました。御殿ては御主人始め皆樣に可愛がられて居ましたが、悲しい事には程なく御主人が御逝去遊ばしましたので、御暇を願ひましたが、尚ほ引き續き、お姫樣のお附となつて御奉公致して居りました。

て遊藝の如きはすべてお姫樣と御一緒にお稽古を致しましたが、私の方が二つ三つ齢が上でありましたので、お下稽古を致すことになつて、居りまして、隨分稽古ごとは致たので御座いました、夫れに性來勝氣で、一度手を出たら、奈何かして人に勝らう、早く成功させようと、人知れず心を碎くのでありました。

私の一番悲しかつたのは母に死別れました時で、丁度十七の春のこと、御殿から暫時の御暇を願つて看護に參りましたが、とう／＼一週間目に永い別れを致しましたので、その時の心細さと申したら今も思ひ浮べられます、御奉公中は誠に無邪氣に暮らして居ましたが母の歿後は家庭へ歸つて家事の手傳を致すことになりましたので、俄に心も老けたやう、困りましたのは金錢のことで、今迄金錢といふものを殆んど手に致しませんものが今は其の出入にまで注意しなければならなくなりましたので、それには困りました。で翌年十八の春結婚致しましたが其の年進が洋行致しましたので再び御殿へ御奉公に出ることになりました。

かやうに幼少の時は殆んど他人の中に居ましたから、割合に苦勞を致しました　氣樂な生活ではありませんでした、併し心を空にして居たり手をあげて居たりすることの嫌なのは幼少の時から性分でありました。閑があれば針を持つなり筆を持つなり、又は人の髮を結つて上げたりして居たので、何も致さずに居ることは何だか心持が惡う御座いました。

女伊達

三宅花圃

跡見女學校に居りましたのは八歳から十三の年齡までてございます、跡見先生には可愛がられました方で、塾に居りました時分、お肩やお腰を揉みながらいろ／＼仰る事を能く聞きましたが、其言葉が今でもちよいちよい記臆に殘つて居るやうでございます、學科と申しましても至極のんきなものでしたから、形式的の卒業などは致しません。小説は好きでした、能く馬琴物や、漢楚軍談三國志などの類を讀み耽りました、殊に幡隨院長兵衛とか何とか云ふ俠客ものが太好きでございまして、自分も女俠客を氣取つて見たく、學校のお友達をモデルにして五人女の繪を描き、其上へ例の五人男のつらねの文句でございますね、彼を眞似た文句などをつらねて自分で嬉んでゐたものでございます。又或る時同じ學生で、お菓子を取つたとか言ふので、階子

段の上に縛られてゐますのを見て非常に憤慨しまして、菓子の一つや二つを取つたと言て人を縛る位なら、學校の者は皆縛られなけりやならん、ぢやア私も縛つて貰ひますとか何とか言つて暴れたのでございますが、それが却つて評判になつて褒められたりいたしました。

其中にも書くことが好きでございまして、兄や母に叱られながら眞似事を書きましたが、能く三尺ばかりの押入の中へ机を持つて入つて、書いたことなどもございます、『藪の鶯』を作りましたのは十八の時でございましたお耻しい事ですが其頃私の父は豪奢を極めました結果いろ／＼家庭も不如意の事がございました上、兄の一周忌を勤めますに其費用なども思ふに任せないやうな事を小耳に挾みまして、若し何うか助けにでもなればと思つて書いたのでございます、恰當宅の書生が坪内先生を知つて、先生に御話して見せうと申しますので、私も「書生氣質」を愛讀して居りましたから、それは結構だと思ひました、先生の紹介で金港堂から出版させるやうになつたのでございます、法事も無事に勤めまして、其時の引出物に「藪の鶯」をきかした莚に鶯の模様ある染浴衣を誂へて配つたことなども覺えて居ります。

父は一時豪奢な生活をいたしましたもので（記者曰、嚴父は田邊錦鷄間祗候、一時は福地櫻痴居士が下谷の御前樣と稱せらるゝに對し、番町の御前樣と稱され、華奢を極められたることあり、本年七十八歲）俳優とか、藝人とか能く出入いたしましたが、死んだ圓朝の人情話など聞くことは私も好きでございました。以前申しました兄が海外に居ります時、（記者曰、花圃女史の令兄は夙に俊秀の氣あり、十四の時屢々父に歎願して商業を以て身を起さんと決心し、上海の學校に在ること二年、歸りて商業學校に入り十七歲に卒業、直ちに三井物產に入り、其後倫敦支店長として赴任せしは十九歲の時なりき、誠に異數と云ふべし、而かも天此の秀才に年をかさず、二十歲の時、病んで歸朝の途、船中に歿せられたり）旅情を慰める爲に私は圓朝の鹽原多助や、牡丹燈籠などを聞いた通りに對話なども細かに書いて兄の許へ送つて遣りました、兄も是を欣びますので、次から次と送つて居りました、歿くなりまして後荷物の中から其筆記が現れましたが、卷紙に書いたのを縫いてありまして、それが斯んなに大きな束になつて幾束もございました講談の筆記が書物になり

ましたのは其れから後の事でございますが、若林玵造などの筆記を對照して見ますに、私の書いたのも、對話の處までが少しも異はないのでございます、若い時は物覺えの良いものと見えまして、能くあれだけ講談を覺えて書いたものだと、今では自分ながら感心して居ります。

和歌は中島歌子先生の門に入りました、女史は水戸の勤王家の妻でございましたが、和歌では當時有名なもので、殊に名門の方々が多く女史の門に和歌を學ばれたやうです、宮樣方も居らつしやいました、四五年前に歿くなられました。中島女史の門下には樋口一葉女史も居りました、私が一葉を知つたのは女史が十五の時でした、作を私が「都の花」に紹介したのは十九位の頃でせう、一葉も小說好であつたことは申すまでもありませんが、能く半井桃水さんの處へ行て、書いたものを見て貰つて居たやうです。

箏、刺繡など習ひました、學校で習ふより、我家へ先生を招聘て能く稽古いたしました、學校は正則に段楷を踏んで參りませんでしたが、一橋女學校、明治女學校などに居りました、明治女學校では習ひながら傍ら習字を敎へました、幸田のぶ子さんなどにも習字を敎へたやうに思つて居ります、幸田さんは矢張習ひながら傍らヴアイオリンを敎へて居られたやうです、私は箏の方なら今でも少し許り彈きます、自分で曲を作り、歌を作つたのもございます。今日も新聞を見ますと新橋の演藝館で長唄紫紅會の催ふしの中に、橫笛が出し物になつて居りますが、あれも實は明治二十一年頃でしたが、團十郞が演るとか云ふので一幕物になるやうに私が作りましたものです、長唄の方ではずつと短くなつて居るやうに聞いて居ります、父が餘り藝人を愛し過ぎて出入が多うございましたので、其後門止のやうにいたしましたから、杵屋の連中などにも合ひませんから何う云ふ風に彈て居りますか存じません。

悲しい事が好き

大塚楠緒子

私は親の側で我儘にばかり育ちましたから世間のことは何も存じません、從つて憂世の苦勞と云ふ事も致したことは御座いません、けれども十九の歲お茶の水の高等女學校を出ました後每日自宅にのみ居るやうになりましたので、學校の成績とか試驗とかいふ心配が無くなりましたので、始めて敎科書の外にいろ〳〵の書

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

世界唯一

痳病消渇の根治新藥

痳滅

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治根治藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力最も峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち殺滅する處方に基き調劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず確實に根底より根治するを確證す但し彼の注射式洗滌劑の如き迂遠無効有害の粘膜劑と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者[illegible]を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵税代用貳割増しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

色白・特効

ペーアス石鹸

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も鑑識ある人の熟知する所なれば今更喋々賛辭を要せず爰に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤緻密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸特有の特効なり且つ此石鹸は香氣馥郁たる佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附著し殘るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を蠱惑する内國製の粗造品と玉石混同することなかれ(昨年輸入の五萬個は既に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり)速に御注文を望む

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓四拾錢

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

癩病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿状菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雑極まる無効蠱式賣藥に欺かるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す、藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

着金即刻小包密封送る

梅毒根治新劑

本劑(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一ばい毒根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に継發して續發する諸症(即ちばいどく・ひゑかさ・しつ毒・かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。そこひ。いれき。せがらみ。べんどく・ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓つて根治することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分壹圓六拾錢着金次第送附す郵便切手代用貳割増しの事

◎貳錢 以上

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

眞正秘密

粋珍書案内

望の人郵券四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粋士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黒門町廿番地 東雲堂書店

(戊の二)

◉どうすれば**色白**くなるか

どんなに色黒き人にても雪の如く白く美しくなる秘法あり一度ぜひ御試みなさい望の方は貳錢郵券送れ

◉◉◉東京市小石川區柳町……森義郎



今昔繪本 **枕草紙**

壹部三十錢 御買求めの方に限り**美人〇〇寫眞**四枚と珍小說一部無代進呈郵券代一割增冬の夜長に連れ〳〵に一本御求め在てうさはらしの料となさるべし

◉東京銀座鎗屋町 樂天館

三大博士發明 **神經衰弱貧血頭痛**ヒステリー（依斯的里）**陰痿**等通俗的症候解說療法攝生法根治藥詳說の雜誌をハガキて申込次第無代進呈す

肺病救濟

アドロフ博士新發見肺結核治療藥は醫界新紀元也我國に傳へ公私病院長廿七名の**不思議**の效果を確認せる全治報告根治

醫家實驗療法詳說の雜誌を救濟の爲無代進呈ハガキて申込

東京京橋越前堀 **樂天堂藥房**

器械不要 迅速鮮明 早取寫眞

日進ノ今日化學ノ進歩實ニ著シク其應用ニヨリテ得ル處ノ稗益又偉大ナルハ世人普ク知ル處ナリ本館發明ノ早取寫眞術ハ所謂破天荒ノ新發明ニシテ名ノ如ク器械ヲ用ズ二三ノ藥品ヲ混合シ日光ノ作用ヲ以テ人物又ハ風景等其他如何ナル器械ニテモ大小論ナク思フ儘ニ速寫シ得ル斬新愉快ナル大發見ナリ寫シタル者ハ器械ニテ寫シタル者ト少モ異ナラザレバ見ル人ヲシテ覺ヘズ快哉ヲ三呼セシム藥品ナキ地方ハ本館ヨリ送ル、書代及郵税トシテ爲替ニテ金**拾七錢**ヲ送レバ教授書ヲ送ル此書ヲ讀メバ誰ニテモ直ニ速復シ得ル也抑モ本法ハ本館ガ責任ヲ負フテ教授スル者ナレバ本書ヲ讀ミテ若シ器械寫ノ通リニ寫ラザレバ何時ニテモ**返金**ス安心シテ注文セヨ尚本書ニハ器械不用鮮明早取印刷法輕便電氣燈蒟蒻版用複寫いんき製法及印刷法紙石盤鍍金術のみ取粉齒磨香水石鹼白粉洗粉鼠ト蠅取藥毛生藥眼藥夏日氷ノ製造法リモナーデー蜜柑水ラムチ製法感冒治法頭痛治法肺病治法おこり落藥淸酒醬油倍增徳用法其他家庭ニ必要ナル料理法四十餘種癈物利用法數件其他奏効確實ナル諸種ノ製法百餘種記載ス◉附言珍奇ヲ好ムハ人ノ情ナリ依テ前記早取寫眞術ヲ以テ己レノ肖像ヲ名刺用紙ニ早取シ器械不用早印刷法ヲ以テ己ノ姓名ヲ好ム字體ニ印刷シ**寫眞**入リ**名刺**ヲ製セバ一層面白ク見ル者誰ニテモ羨ムナラン°本書ノ名ヲ萬物製法秘術寶典ト云フ郵便切手ニテ代金御送附ノ方ハ二錢增（十九錢）ノコト

三重縣桑名矢田磧 **弘報館**

道具不要輕便 **食パン** 幷ニ **和洋菓子製法書**

道具も熟練もいらず皆さんの家にある道具で拵へる事が出來て米より費用が少くて滋養多く出來たパンは誰の口にも適し美味で柔て一度に廿日分も拵へて置けるから毎日飯を焚く世話もない食パン和洋菓子の製法を澤山記載せる書物は郵券十七錢で送る

三重縣桑名矢田磧 弘報館

萬民必携 **和洋料理書**

本書には日本料理西洋料理支那料理和洋折衷の料理等を誰にても直に出來得る樣に澤山記載せる者にして廚房上缺くべからざる良書なり本書も十七錢で送る

三重縣桑名 弘報館

珍聞 **頓智笑話**

本書は名の如く最も面白き頓智話や笑ひ話一トロ話等を澤山集め發行したる者なれば面白き事申す迄もなく本書を讀みて笑はぬ者は馬鹿か仙人か

三重縣桑名 弘報館

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

小森松風著

美文作法

全一冊洋装大判並製　正價四拾錢

賣價金參拾五錢　郵税四錢

△中央新聞評　本書には總論に於て美文の起原名稱種類を説明して抒事文、抒情文、抒景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小説との關係を述べ更に美文飜譯法漢文の素養讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳説したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

小森松風著

言文一致文範

全一冊洋装大判並製　正價四拾錢

賣價金參拾五錢　郵税四錢

△中央新聞評　言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論説、抒事、抒景、日記等數十編を示したり、斯道研究者の歡迎を受くるものならん

● 河井醉茗君著　詩と美文 玉むし　價六十錢

● 諸大家選評　懸賞文集 第一　價廿五錢

右兩書とも發行元は賣切れに付當分増刷いたさず候

● 第二懸賞文集の特賣の社告は次頁にあり

○本社創業滿三年紀念特賣廣告

賣切れぬ内に早く求め給へ

發兌元

東京市京橋區大鋸町十、十一

振替貯金口座第一七二九番

女子文壇社

中村報知新聞記者著

實地精査 女子遊學便覽

全一冊洋装校長肖像入並製　正價二拾錢

賣價金貳拾五錢　郵税四錢

△萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正増補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば、調査は善く行届けり、尚ほ職業案内及學費の概算をも加へ、殊に無儀砲に東京遊學を鼓吹せずして、東京遊學の危險なるを説き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

鈴木秋風著

小説美文 朝ばれ

全一冊本綴彩色畫入美装　正價四拾五錢

賣價金參拾五錢　郵税四錢

「萬朝報」曰く　どれ是れも極めて温雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。

「都新聞」曰く　いづれも短篇の小説ながら、著者が所謂寂寞の歴史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小説で何れも未だ浮世の荒波にもまれない青春の女の胸懷を寫したものです。

此紀念特賣割引券を切抜き直接發兌元へ申込みに限る

各書共賣價の貳割引

但し郵送費は別に申受く

有効期限一月三十一日迄

物、と申しては何か切りに多讀致したやうに聽えますが、まづ種類の何を問はずさま〴〵の本を讀んで居ります内に、不圖どういふ譯か厭世的な思想が浮んで參りまして妙に悲しい事が好きに成つて、小說を讀んでも結末が悲しく付いたものでなければ面白くないやうな氣が致しまして、避暑などに參りましても宿やよりはお寺の暗い座敷を借りる方が好きになりました、その時分で御座いました、北村透谷氏などの書かれたものが好きで文學界を面白く讀みました、よく山の中へ引つ込みたいとか死んで仕舞ひたいとか申しては、家の者に笑はれた事が御座いました、然れどもそれは娘の時分の事で御座いまして、家を持ち子供を持つやうに成りましてからは、まるで反對の心持になりまして自分の身に重い責任を荷ふてゐるやうに考へますので、これからは若しどのやうな逆境に逢ふても出來るだけうち勝つて行かうといふ考に成りました、田舍などへは引つ込みたくなく都會の生活が好きに成つて、どちらかと言へば陽氣な方が好きに成りました、世の中の事も少しづゝ分つて來るに付けて、美しい人の情の裏には汚ない利己が隱れてゐるなんぞと思ひますと、小說を書きましても只眞心が一圖にあらはれたものより、利己的の人間を皮肉に冷笑して見たいやうな氣が折々出て成りません、惡い癖だと思ひます。

時々讀みますは紅葉山人の小說、それにハイネの詩集が好きで御座います。

技藝と申しては繪や音樂も少しは稽古いたしましたが申上られる程の事は出來ません。

歌の作り始め

與謝野晶子

私は初め歌と云ふものが嫌ひで御座いました。その頃、(十四で御座いましたでせう)唐詩選を讀みながら傍らに古今集を見ますと、どうしてもこれは東夷の片言とよりは思へないので御座いました、小說には源氏物語と云ふやうな結構なものが御座いますのに何故歌はかうかと情なう御座いましたが、猶讀むことだけはあちらこちらと見て居りました、新古今集を見まして少しは好になつたので御座いましたが、十七の年に萬葉集を初めて讀みました時の嬉びと申しては御座いませんやうでした、その時初めて私は金の音のする歌を知つたので御座います、然しそれは唯だ好になつた時のことで、自分が歌をよまうとしましたのは先日貴君のお

雜誌でお話しいたしましたやうに後撰か拾遺かの集で女の歌のあまりに拙かつたことと新中納言と申す女房の歌の餘りに惡いのに驚きまして、女はなか〳〵勉めなければ男の中に交ることが出來ないと存じまして、私が一つ力の限り勉めて見やうかと思ひましたのが、作ります初めて御座います、それで御座いますから私の國の方に御座います舊派の何々とか申す會へ加らないかと云ふ友だちが御座いましても、さう云ふことは出來ないさう云ふことをして置くと他日名を成してから羞かしいなどゝえらさうなことを何の目的もなしに申して居りました、それでもつてどれだけ出來るかと云ひますと月に二つか三つ位しか出來ないので御座います、然しながら自分は實際歌を造る天分があるかどうかとは常に考へて居りましたがある時、朝床の中で目が覺めまして源氏の一卷一卷を歌につくつて見ますとそれが無論佳い歌では御座いませんが一時間ほどに四十いくつ出來ました少しの疲れもなしに苦もなしに詠めたものですからその時から私は勉めねばならぬと自覺いたしたやうになりまして、勉めて廣く書を讀まなければと存じますものですから、毎夜十二時までは必らず書見をいたしました、それは床へ入つてからのでとて、十時に床へはいりますまで、私は店番をして居るので御座います、店番だけでは本も讀めますが、帳付けやら書出しと申すものや何やかやで少しの間も御座いません、その間にはまあ新らしい雜誌とか東京の新聞とかを取寄せて見て居りましたが私は人の處へ手紙を書きますのは多くは羊羹塲と申す大眞名板の上で御座いました、後にみだれ髮などの歌を詠みましたのも大方羊羹塲でゞ御座います、人樣のやうに机の前で本が見らるゝ身分に一日でもなりたいとその頃は毎日思ふて居りました、初めて雜誌へ歌を出して頂きましたのは、

　うき人を月にはさすが待れけむ伽羅の香のこるおばしまのあたり

と云ふので御座いました、これは醉茗樣が直ほして下さつたので御座いますが自分は其時戀の歌を客觀で詠まうとしたので御座いました。

このついでに本月から私がお雜誌の新派和歌を見せて戴くことになりましたにつきまして心づきましたことを申し上げ樣かとも存じますがそれはまたこの次にいたしませう唯あくまで眞面目にやつて戴きたいと申すことだけを願ひたいもので御座いますある人は田舎作

娘など〻云ふ名てお出しになりますが實際田吾作氏の子なれば田吾作女と書くべきてせう、こう云ふことにもどうぞ眞面目にてお願ひいたします。

聲の練習

藤井環子

少さい頃、踊を習はされました、四歳の時に島田髷をつけて、汐汲みを踊つたことを覺えて居ります、小學校へ入學た頃は、長唄を習ひましたが、大復習とか云つて、お師匠さんに連れ廻されて、兩國の中村樓などて度々唄ひましたが、皷だの三味線だの〻賑かな中て、大きな聲て唄ふのが眞に面白く、自分ては自慢て御座いました。

小學校に入學てから、初めて唱歌を學びましたが、唱歌の先生が二人ありまして、バイオリンを奏く綺麗な先生が、私に君が代を謠はせて、バイオリンに合せて下さつた時、初めて音樂は面白いものてあると云ふことをしみ〴〵感じました。其頃丁度私の學校（芝區鞆繪小學校）の校歌が出來まして、小山作之助と云ふ方の作歌てしたが「ますらをの、手に捲く鞆の…」と云ふところを「ますらをの…」と云ふところまて、最初私が唯一人て歌ひまして、後を他の生徒が同音につゞけるのてしたが、それが自分ては大自慢てあつたのて御座いました。

學校を卒業する時、先生が生徒一同に、今後の志望を聞きます時、私には音樂學校の規則書を下さつて、是非此の學校に入學せよと申されましたが、父が音樂學校に入るには、まだ早いからと申しまして、宅から一番近い虎の門の東京女學館に入學しました。

其頃東京女學館の音樂の先生は、今音樂學校に居らつしやる、杉浦先生てしたが、美いお聲て、樂器を彈いてお歌ひになるのが、面白く羨しく、何時も先生のお彈きなさるところへ、拔き足をして忍んて行つては、戸の外て立聽きしたものて御座います。其頃僅た一度先生に連れられて、神田の音樂學校分敎場の演奏會へまゐりましたことがありましたが、何のやうに下手な方のても、皆同じやうに面白く聞へて飛び立つやうに嬉しう御座いました。

東京女學館を卒業した、十七の歳、無理に父に願つて、音樂學校に入學させて貰ひましたが、道が遠いからと云ふので、其頃父は自轉車に乗りましたものてすから、お前もこれて學校に通ふがよからうと、私にも自轉車

を買つて呉れましたので、極りがわるかつたけれど、學校に行きたいばかりに、自轉車に乘りました、でも二日ばかり父に教へて貰ひましたらば、直きに乘れるやうに成りました。

音樂學校に入りましても、最初のうちはそんなに音樂が六ケ敷いとも思ひませず、丁度其頃外國からお歸りになつたばかりの、幸田先生の洋裝のお姿を見、その美しいお聲を聞いて、自分も直きに幸田先生のやうに成れるものとのみ思つて、嬉しくてなりませんでしたが、入學してから間もなく、或る時間に生徒が一人一人立上つて音階を習ひました時、何う云ふ機か、私は段々聲を上げて行く塲合に、途中で不意に聲が奇態に變つて了つて、何うしても出なくなつて、先生や皆さんに大變笑はれました、それは音樂を學ぶ方は誰方でもよく知つて居られる、誰しも一度はある聲の變り目て‥‥最初私の聲は長唄などの、眞の上調子で唄つて居たのが、西洋の音樂の聲はお腹の底から出さねばなりませんので、其變り目で御座いましたので、貴方の聲はこれ〳〵であると云ふことは、先生から御注意下さいましたが、其時初めて、アヽ音樂は六ケ敷いものであると思ひました。

それ以來今日まで、ずつと六ケ敷いばかりで、つゞいてまゐりましたが、只今になりましては、猶々六ケ敷くなつて、何處まで進めばよろしいか、果しが無いやうに思はれてまゐりました。

學問が好き

羽仁もと子

私の處女時代と申しましても格別お話するやうな事はございませんが、國許（青森縣八ノ戸）の小學校に居ります時分から、學科は大好きでございましたから、自然首席の方に居りまして、試驗の點數なども多く取りました。只習字と、圖畫と、裁縫とは何うしても好く出來ませんで、外の學科から見ると點數も少なうございました、十一の頃、町の漢學の先生に就いて漢籍を稽古いたしましたが、是は能く覺えまして、今日でも大いに文章を書く助けにはなつてゐるやうでございます、それから十五の年齡に東京へ遊學に參ることになりました、私が一番姉でございましたが、家では私の思ふやうに學問をさせるだけの餘裕もあつたものですから、何等の干渉もせず、思ふやうに好きな學問をさせてくれまして、東京へ參ります時は爺やを連れて

來ました、一年程も從いて居りましたてせう、學校は第一高等女學校てしたが、後に明治女學校に移りました、其頃の明治女學校と申しますと大した勢力のあつたものて、都下の女學校の中ては一番優勢のものてした。殊に私は其前から巖本善治氏の「女學雜誌」を愛讀して居りまして、最も外にも婦人の雜誌はあつたやうてすけれど、何だか「女學雜誌」が一番好きて愛讀したものてございます。然う云ふ因緣て巖本先生にも敬服して居りましたものてすから、先生の明治女學校へ參りましても、能く勉强いたしました、又折々は築地の女學校へ基督教の演說を聞きに參りました、其間に信仰も得たやうな譯てございます。何うも學問の方に傾きましたものてすから、手先の技藝などは不器用な方てございました、其代り讀書とか、數學とかは他さまに負けませんてした、作文も大好きて文章は早くから書きならひました、明治女學校を出ましてからは、盛岡の方へ參つて敎鞭を執りました、東京の人になるやうになりましたのは其後のことてございます。

今、然う思ひますが、お少し技藝の方もやつて置けばよかつたのてす、頭腦の方はさう〳〵幾時間も續けさまに働かせると云ふ事は困難てございますが、其間に手先の事もやれば好いのてす、此頃はお料理なども好んてやります、小學校の時分から圖畫などを學問以外に扱ひましたし、家庭ても奬勵しなかつたものてすから未だに描けませんが、技藝の一つとしてやつて置けば宜しかつたのてす、妹などは私と違ひまして技藝の方が好きて、其ばかり修業の爲に上京して參りましたが、同じ姉妹てもゆきかたが違ふものと見えます、矢張其人の性來にも由るのてございませう。

明ても暮ても繪

榊原蕉園

小供の時分、大層錦繪が好きて、何か買て貰ふ場合には、何時も錦繪を望みました、遊びごとには、新聞の挿畵を彩色したり、切拔て蓄めて見たり、又、其頃繪草紙屋に賣つて居た、周延の畵いた千代田の奧と云ふ、椎茸髱の御殿女中が澤山ついてゐる繪や、新美人など云ふ錦繪を寫し書きして遊びました。

初めて水野先生（年方）のところへ、お稽古にまゐりましたのは、十六歲の春て、女子學院に通つて居ります頃てしたが、女子學院は宗敎の學校て、毎週土曜と日曜と二日續けて休みてしたから、金曜日になると、

明日から二日ついて畫のお稽古が出來ると思ひまして、金曜日の晩が何時も待ち遠かつたのです。

お稽古は、最初美濃紙一枚へ、一杯に大きな顔を書き、次第に小さなものに遷るのでしたが、皆さんはずんずんお上達りになるのに、私ばかりは何時までも同じものを習つて居りますので、早く皆さんと同じに小さな繪を書いて見たく、又、斯んなに平手では、何時先生からお斷りされるかも知れぬと、氣が揉めるやら、心配でなりませんでした、それでもお弟子のうちで、私が一番年少でしたから、皆さんから可愛がられて、能く敎へて戴きました、繪は美濃紙を板の面に貼付けて、それに書きますので、一枚の繪が出來上がつて、板から剝がす時が、いつも樂みでした。

先生のお宅には、每月一回研究會がありまして、其時には皆さん思ひ〳〵の繪を畫いて、陳列したものでしたが、習ひ初めた年の夏頃、私も初めて疊半疊敷位の大きな紙に、何の繪でしたか畫いて、皆さんと一つに先生の前に差出した時が、一番嬉う御座いました。

其頃琴をも習ひましたので、夏などは、朝早く起きてお琴の稽古に行き、それから學校に出かけ、學校が退けると大急ぎて歸つて來て、直ぐに又繪を習ひに行きますのですが、其頃はまだ鐵道馬車でしたが、私は馬車が大の嫌ひですのに、車で行くにしては、父母は每日行かずともよいと云ふのを、無理にかくれるやうにして行くのですから、務めて歩くやうにしました、夕方も宅で心配せぬやうに、早く歸りますので、眞に短い時間しか習へませんでしたが、それでもお稽古に行きたくて〳〵成りませんでした。

只今は横着になりまして、每日怠けてばかり居りますが、其頃は明けても暮れても、唯繪のことばかり考へて居りました。

女の書生さん

鶯山彌生

十五六歲の頃でした、束髮が流行りまして、同時に女子問題が大分喧しくなり、雲井女史等いふ人の、女權擴張の演說などがあつた時分でしたから、私なども多少、時勢に動かされたのかも知れません。當時、小學校を卒業して、漢學の塾に通つて居りましたが、之からの女子は何うしても、獨立しなければならぬと云ふやうな考へを起しました。

其頃女子の學問するものは、主に高等師範などの方面

に向ひましたが、私は醫者の家に生れて、幼少の時分から、多少病者と云ふことに注意して居りましたし、殊に、婦人や小兒の病氣を診るには、何うしても婦人てなければならぬと云ふ考へを早くから持つて居りましたので、十七歳の時、自分の志望を兩親に云ひ出てました、ところが、免されるどころて無く、却て兩親からは叱られ、周圍からは非常に攻擊を受けました、ても私は元來剛愎の性質てしたから、云ひ出しましたからは、何うしても自分の主張を屈げませんて、何うにかして目的を貫かうと思ひまして、當時起つた結婚談なども斷然謝絕り、晝は家事の手傳ひを爲せられましたから、夜間家内のもの、寐靜まつてから起出て、竊に讀書しましたが、幾度も父に見附かつて、書籍を取上げられたり、燈火を消されましたりしたことが度度ありました、それても私は何處までも剛愎を張りましたので、遂に兩親も根負けがして左程までに思ふならば、兎に角學校に入つて見るがよい、さうして落第したならば、自分も得心するだらうと云ふので、十九歳の春、漸く東京に出ることを免されましたが、それ迄の二ケ年間ばかりと云ふものは隨分苦しみました。

東京に出ましてからは、兄が以前から來て居りましたから、兄のところに同居して、濟生學舍に通ひましたが、五百人餘の生徒のうち、女子は僅か十六人しか居りませんてしたから、男子からは痛く輕蔑されて、批評され、罵倒されるはまだしも、果ては、足を踏まれ、蹴られたりなどしました、而已ならず、實驗の場合などは、何時も後廻しにされると云ふ始末て、種々な障害を受けましたが、其時の私どもの組のものは、皆我の強いものばかりてしたから、何うにか遣り遂げられました。

其頃には、女學生はまだ眞に少數かつたものてすから、元富士町の下宿から、湯島の學校に通ふのに、短い衣服を着て、油氣の無い髮を束髮に結んて居りますので、女の書生さんが通ると云つて笑はれました。

東京に出ました翌年、明治二十二年……丁度二十歳の春、僥倖にも前期の試驗に及第しましたので、兩親や親戚のものも、初めて身を入れて呉れるやうになりまして、それからは萬事好都合にまゐりました。後期の試驗に及第しましたのは明治二十五年てありました。

（以上談話筆記、文責在記者）

當選繪畫



(1) 愁人（二等）
名古屋富士塚町二ノ六一
寺澤信子

(2) 人だち（三等）
牛込區富久町六
○藤澤方
佐野貞子

(3) 寫生（四等）
豐橋中八町戊六九
白井方
白井津奈子

(4) けんか（五等）
府下八王寺町停車場前
乙幡もん子

(5) はつ着（五等）
豐橋停車場前山中鎌太郎方
加藤芳子



美文

編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採録す、二十四字三十行以内、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

二等　○留守居の日

後志國古平町　池野いさみ

さながら憔悴しきッた、病女のやうに枯れ果てた、菊畑の中を、さら〳〵と薄濁ッた小流れが、微かな不斷の音を立てゝ居る。其れが遠くなッたり、近くなッたり、絶ゆるかと思ふと、又さら〳〵と微かな音をたて、夜きくと、留守居の胸にいろんな懷かしい思出と成る。大根の乾されて居るのが、浦淋びしい色彩の中に、遠くにも近くにも、際立ッて白く見へる。

まア、何といふ淋びしい日であろう。

小雨が音もなく降ッて、薬ぶきの矮屋より豆うつ音がいかにも秋らしく靜寂の氣がしんみりと身にせまり來るをおぼゆる。歌舞伎の太皷の音が、遠くより近く、やがて横町に曲ッたのであろう、又段々に微かに消へて行く。

あゝ──あの太皷の細り行く音の、いかに此雨の日にふさはしい事よ!。自分はあの音をきくと、一種言ひ知れぬ、悲しいやうな、花やかなやうな思ひに亂るゝのである。──家にも、人にも、街にも──乃至は自然にも、純粋な日本美の溢れた、あの元祿時代──雨の色も紅ならんと思はるゝ花やかな夕暮、遠くより近く響く音の、近くより遠く細り行く音の、美くしき街々に響いたなら、どんなであろう。音は次第に微かに成りつゝ響く。

私の胸には、あり〳〵と打つ人の、華奢な姿が描かかれた。あゝ──今頃は、友禪の振袖や、鳥縮緬の長襦袢が美くしく飾られてある、あの呉服屋の前を通つて居るではあるまいか、若し其邊の家にも芝居好の若い娘があッて、あの音の細り行くを耳にしたら、什んなに花やかな胸は浪立つ事であろうぞ。と若い悲しみが油のやうに染み渡ッて、懷かしい──拾里西の僻村に温泉を浴びていらッしやる母の事を思ひ出した。今私は留守居の身の上である。あゝ──秋は淋びしい──日毎私が斯様に思ひだすやうに、母も私の身の上を案じて、旅の袖を、濡しなさるてはあるまいか……。こんな、懷かしい太皷の音が、若し其寒村にも響く時があッたら、母は芝居好の私をおもひだして、什う感

じなさるであろう、私の瞳には微かながら涙がやどッた。母の慈愛がしみ〴〵染み渡ッたのである。あゝ――僅か五日や十日の間でさへ、こんなに懷かしいもの若し此まゝ未來永劫――いつまでも〳〵逢瀬の絶えた運命と成り果てたなら、いかばかり悲しい事ぞ、あゝ例ひ貧しくもあれ、賤しくもあれ、母と二人、此まゝ老いず衰へず暮して行き度いと、私は心から神にいのつた。

芝居のふれ太鼓に若い花やかな悲哀を描いたのは近來稀に見る好い感じがした、母を懷ふ情もさることながら、其寂しさを聞く若い娘の上を想像したのは好かった(評)

【三等】　○祝福

上總國市原郡鶴舞町　鹿間ひさ子

姉様が入らしたので初春の合奏をと、妾はお琴の役に當つて、短い袂に着替へるため暫し座をはづした。お離室には母様と姉様と美いちやんが火鉢をかこむで居らつしやいます。

灑やが灯を持て來て「おめし替へてございますか」と言ふのを「いゝのよ」と斷つて、簞笥を引明けて着物を出す。鏡の前に立て緋のしごきを結びながら、曇りもなく底澄む中に映つた姿を見つめた時、あゝ妾の胸は言知らず熱き血汐の湧立つのでございました。身にしむやうな袖の香、花片の如く重つた襟、これが新しい年の始めの新しい宵ですもの、衣の一重々々は悉く新しき幸と新しき喜びをもて妾を擁ふかとばかり、何とは知らぬ胸のゆらぎが、譬ふれば魂の宮居にとざし難い樂しい希望の跫音を聞くやうに思はれて、新しい清淨の喜びが心にみち、双の頬が次第に熱してくる、妾は兩手に胸を抱いたまゝ覺えずゆら〳〵として倚るとしもなく小窓へと身をよせかけた。

外は靜かな宵月夜、昨に變つたおだやかな光が限なく照渡つて、無數の金燭をつらねた星の光は宛ら新しき下界の清淨を祝福するやう。窓先きの寒紅梅の花はくつきりと鮮かに、しめやかな香を漂はす。竹の植込が飛石の上にうす墨の影を作つて、向ふに細い二筋の線は姉様が入らした時の車の跡です。山茶花の蔭にはもうさゝ鳴きの鶺鴒も見えず、落花が仄白う椽の上にみだれて居る。見る物聞く物、きのふの俤は失せて恰も類を異にする如く、清きは愈々清くて世は唯新しきよろこびに含笑むで居るかとも思はれる。あゝ祝福―凡そ悶えある人も悩みある人もこの祝福の前に喜びを言はぬ者があろうか、殊に妾、平和の愛に人となつてこの樂しい春にあふ妾は何といふ幸福でせう。父母にうけた幸福を子孫に傳へて、世に及ぼして、今斯くてある妾の喜びを末の末の世にも見られたならばどんなに嬉しい事だろう…否え然うするのが正しき人の務で

あろうに、妾はこの新しき祝福にみちた心を心として自分の業に益々いそしまうと考へました。

お離室にバイオリンの音が低く響いて『姉様々々』と美いちやんの呼ぶ聲。手早く帶止めをしてお椽に立つと、灯影華やかに水におちた池のかなた、優しい人影が障子に映つて、さゞめきのお聲が賑々しう、そこにも喜びの光がみち／＼てるのでございました。

人生の光明の方面も此處まで來るとなかなか意味があります、人世の一面には素より明るい光が射して居る、明るい光に包まれて居る人は兎角偷安になり逸樂に耽る、其處に意識を求めてこそ初めて鏡に映る姿にも新しい輝きを見出すのであらう（評）

四等

○秋海棠

群馬縣利根郡久賀村 須川町三九森下方　森下花子

一時は白ざけた日が差したが、またしつとりした秋の霧が降つて來て、中庭の松が墨繪のやうに見える、それも一樣ではなく、霧は絶えず動くので、松の影も濃くなり淡くなる、と其のぼうとした中を、光る物が時々落ちる、松の葉の雫だ、それがぽたり／＼と下の縞笹をうつ、と笹はまた搖めいて自分の露までも振りこぼす、そして飛び石が濡れてゆく。

中庭の向ふはお客間、遠山の叔父様がいらつしやる、また例のお話か、母様は元より、元氣のいゝ叔父様の聲さへ聞きとれない、冷たい／＼秋の日である。少しばかり風が來ると、中庭の霧がずん／＼家へ入る、お客間の障子は閉てあるから、霧はみんな其廊下へ落ちて、一面の露となる、暫くの間霧が晴れて、向ふの水盤の下の秋海棠が、俯向いては搖ぎ、また俯向く、重い露が落ちる度、うす紅の葩が共にこぼれる、そして水落ちの眞砂の上に、一つ散り、また二つ散りしく。とまた白い小霧が、いつともなく降つてくる。

兄さんはどうして御退學なすつたろ、もう一年て御卒業だのに……お引越するつて何處なんだか、いつするんだか、ちよつとも話しちや呉れないのだもの、あゝ別らないちやありやしない。どこかで鐵琴をうつ音がする、霧は益濃くなつてくる、と塀一重隣りで、マアしどい霧よ、といふ聲がする、



樂し遊び　長崎　山口綠子

何だね霧が入るぢやないか早くさ、奥様がかういふ、初め障子が閉つたらしく、また鐵琴で爺さんを唄ふ、初めは琴に合てゐたが、もどかしいと見えて、唄の方ばかり進んでゆく、琴の音は折々しか入らなくなる。お隣りは校長先生のお宅、この夏までかしや札が張てあつたのだが、今度は此方て、いつ札を張ることやら……霧がまた風に吹かれて、松の露がはら〳〵散る、秋海棠の花も翻れる、幼い琴の響が胸に浸み込む。

霧の降るさまが最も能く描寫されてある、能文の人らしい（評）

五等

○むき柿

徳島縣勝浦郡高鉾村大字傍示村堀田勘三郎方　絮濃子

皆が爐を圍んでお父様とお母様とは辯取り。兄様と姉様と私とがむく、弟は見る役、兄様は剃刀姉様は菜刀私は左得手なので諸刄の小刀各々數多くむき合せするのです。お二人は私等三人がむくだけ大急ぎて辯取る用意、弟が體操の口調其儘で一二三。さあゴシゴシゴシむくわ、むくわ膝の上に積つた皮のける間も惜しい私は兄様や姉様に負けまいと一生懸命。弟は側からソラ姉様が一つ、兄様もソラソラ小姉様もか。ソラ兄様二つ姉様三つ。小姉様の皮が斷れたぞ。姉様早いぞヤア兄様も早くなつたぞ小姉様負けるわソラソラ、私腹が立つたから三ちやん默つてお出やかましい。アー姉様笊からまけ出て居るぞ兄様も澤山だ小姉様も、張合つて來たぞ張合だぞ皆負けん様に。小姉様早くなつて來たぞ他の者は無言、ゴシゴシの音は丁度四眠起きた蠶が桑葉食べて居る音の様。私もう手も痛く肩も落ち想丁度母様がまあ澤山むけた事皆一度お休み聲の終らぬ中兄様はあゝ一休息、兄様も辛捧仕兼たのだらう。私はホッとしたけれど一つでもと思つて手に持つて居た一つだけはむいた。お母様は物置から昨年の釣し柿出して來る姉様はお茶入れる。皆舌鼓打つて食べる中ても弟の頂き様つたら、三松見役仲々大儀だのうとお父様がおつしやれば、あゝ三ちやんのボテは此程大きいからお柿の三十や五十は隅の方に居ると兄さんに形せられてからかわれて居る。うむうむ弟は兄様にむしやぶり附く。笊を見ると私一番少な想なので今一息むくと云つたけれどお父様はもうよい又明晩との御言葉に計へて見たら。私八十七、兄様百九、姉様百二十三、とうとう私負けたの。弟は大聲で金森のお光さん一等大勝利萬歳！、皆大笑して床につきました。

寫生文も此處まで進むと、なか〳〵面白く、讀んで居る者もむき柿の仲間になつた氣がする（評）

秀逸

○枯野の夕

遠江　武井白露

半分黄葉を雜へた、天王山の麓の雜木林を過て、落葉

燃く煙がすうと立ち登て、末は空の色とまぎれて了ふ晩秋の頃にはよく有り勝ちの、時雨もよひの何となく陰欝な夕てある。暗愁を帯びた灰色の雲が犇とみ空を罩めて、遠い平野を渡る風が、縣道に添ふた電線に吹きつけられて、ピユーウとうなるのが、何とも云はうやうもない佗しさを覺えしめるのだ。

穂のそゝけた芒やかれ〴〵な秋草が、路の両側を蔽ふて、水口の葭の一簇から、鶺鴒が啼き乍ら飛び出したが、すぐ姿がわからなくなつて、四邊はもとの靜寂にかへる。

麓の矮家から風呂燃く火がちら〴〵と見える。野仕事を終へた百姓が、向ふの土手を追分節を唄ひ乍ら歸て行くが、其の聲がいつもの暢氣なのではなく、心の淋しさを強いてまぎらす爲めに、唄ふのであろうと思ふた。

恣まゝに露霜に荒された荒涼たる田面には、朽ちた鳴子やかたむいた案山子が、佗しげに曝されて、見渡すかぎりたゞもう灰色に枯れて了た。廣い響をなして西風が吹く、寒い〳〵月の晩など、天王山の森で小狐の鳴聲を聞くのも、軈てま近になつて、あゝわが世の秋はもう末になつたのだ。

日は暮れた。仄暗い影が染潤む樣に萬象をつゝむ。風が少し靜まると、何處ともなく霧が下りたので、四五十間先の里程標の黒影も見えなくなつたが、却て遙か野末に町の燈火が點々する。弱々しい其光が風に動揺るのを見ると、いつであつたかこんな光景の夜があつたとふと考へた。勿論風も今宵の樣に寒くはなかつたけれど、妙に其夜の俤が夢の樣に連想される。

穩かな大氣は幽な動搖すらなく、月が東の山から登りかけて、暖い薄靄に包まれてゐた村。月の光を細く刻んだりあつめたりする、雨上りの田圃には蛙もたしか啼いてゐた。野の末遠く燈火が浮き出したやうにぼうとして、何だか身も心もゆるむ樣な、若々しい懷しい夜であつた。

あゝあれは春であつたと氣がついた時、自分は何となく暗い〳〵穴の中へでも、引入れられるやうな悲哀を感じた。

日はもう悉皆暮れて了たが、空には星の輝から筈もない。梟が嫌な聲で鳴き乍ら西の方へ飛び去つたらしい

あゝ秋は矢張り寥しいのだと思た。

終は振はないが枯野の叙景は實にうまいものだ、實際見たのでなければ斯うは書けまいと思ふ節もある、兎に角美文の上乘なるものであらう（評）

○冬の日

周防　熊野縫子

そつとはなれの戸を開けて見たら、薄暖かい朝日のさし込む椽がはて、三毛が日和ぼつこしてゐる可愛さ、

どうしても見きれないので近よると、くるり脊ばいになつて、兩手をかざし、目をくる〳〵させながら、私の手へ、戯れつくのです、いたいけれど、がまんして二つ三つせなかをなてゝやると、すぐ尾をふつてなつきます、つい一月ばかり前宅へきたので、未だ乳ばなれの、可愛ざかりです、私がなでる手を一寸やすめると同時に、耳を峙てゝ居たのが矢庭に、庭へ飛び出ました、何をするかと見て居ると、羽弱い、どんぼの飛ぶのをのびあがり〳〵おつかけて居たが、おつつけないのか首を地に付けて、目くばせしながらうかゞつて居るのです、本當に樂な生涯だ事と、無心で見てゐると遠くの方からときれ〳〵輪が走つてくると思ふとはつたと止んだ、「はて」とふり返る杉の影から、無邪氣な顔「おや廣ちやん大層お早い事ね」と、それには聞えないのか返事しないで、三毛の方へさし足ぬき足、やがて近よると思ふと電の樣に兩手でしつかと目をかくした廣ちやんは今年五つ、か弱いけれどいたづら盛りの、力一ぱい、三毛は驚いた、種々もがいたがはなれない、はてはきやつきやつとさけびながら後すさりするので、私は見兼ねて「廣ちやんは賢いわ三毛なかいじめませんねえ」と云つたら氣が付いたのか、すぐ手を止めて面目なそうに、ゆびを加へながら輪を握つたまゝ、私の方を見てゐます、「まあお行儀のいゝ事ね、どれ姉さんが御菓子をあげませう」と内へは入つて針箱から四つ五つ持つて出た時に廣ちやんはもう椽へ上つてにつこりして居る「姉ちやんお菓子澤山あるのね」「え、みんな廣ちやんにあげるのよ」うれしいとしきりに私の顔を見て居たが思出した樣に「あのね宅では赤ちやんが生れてよ」「おやついつ」「今！今ね父樣がそう云つて僕が輪をまはしていたらおこつたのよ」「そういゝね廣ちやんは兄ちやまになつて」「あゝ」と椽から足をぶら〳〵下げて嬉しそうに體をゆすつてゐる。

「姉樣なぜおべゝ縫はないの」おやつうつかりして居たわ「はあ、ぬいませう」と室へは入つて見たけれどさすがは冬だ何となくさむいので遂々椽へもち出した七かはりした紫陽花の花は最後のぼけ色をあらはしてゐる銀杏の葉ははら〳〵と殘菊のしほれた上へ、暖い日影をあびて居るのは椽がはの廣ちやんと私とのみ。

凡てがおとけない（評）

○初日の出

廣島縣　池田いさよ

曙の清光靜に上りて、碧玉の天露にぬれし、朝の星は消えぬ。

今、大海のひんがし、幔幕開かれて、幾千の白銀の光線を放ちて、美しき初日は、麗々と波の底より表はれ初めぬ。此時、夢路疲れし沖の島は、金色の美妙の香に醒めて、新代の春を、讃ふるに似たり。

新霽れ空に、日の女神は、黃金の帝車に乘りて、登り行く。海原遠く南に行く、沖の白帆船は、龍宮の鄕より浮びし寶船の、阿古屋珠、珊瑚、宮貝の寶を載せし寶船のそれかとも見ゆる。沖に飛び交ふ白鷗は、こゝ天苑の故園と、王者の放駒の戲れる如く、燦爛の潮花かほる、初春の海の陽光に憧れ舞ふらし。不壊の彩呼吸の靈光に、大海も笑みて、新に甦りせり。

○

見よ。白き眞砂の磯邊は、春をのせくるさゝら新潮の響は、ゆたけく優さに、春姫の歡びの脉搏つ如く、和らかに、やさしくうてり。

岸の此方の、磯馴松に、片身もたせして女の、花貝を手にして、無我の境に見守るは、風靜なる彼の美しき島影に憧るゝにや、其の眼差は、星にも似たり。

* * * * *

噫々。詩人ならぬ妾は、壯美、幽遠の美を歌ふこと難きも、此白き御靈の自由を頌へ。寫せよ。春を傲りの詩人よ。繪匠よ。幼き姿が胸にも、復活の光は、無言の清淨に宿りぬるものを。

晩歸　茨城縣　柳澤眉子



詩らしく書かうとしたもので、なか〳〵骨は折つてゐるが、文字の美に眩惑されて、却つて海邊の景色は沒却されさうだ、好い文には違ひないが至れるものではない(評)

○小野小僧　　信濃　弄花女

お正月とお端午の頃と秋のお月見の頃と、三度位、里に來て子供困らせの小野小僧、摑叺さげてのこり〳〵と家毎餅を貰ひ集める隨分氣樂な老人、身の丈は六尺に近く髮は昔風のチョンまげを頭の頂天に結つて顏がいやに長く眉が濃くて眼が大きく光り顏色は天井に三年も置いた瓢のやう、身裝はと云うと地の色も分らぬ古い茶黑の筒袖を着、ゆき袴此れは信州の一地のみて多く耕作の折用ひる一種の野袴をつけ藁緒の高足駄をはき、いかな冬のかん〳〵凍る最中でも、足袋ははかない。何せよ八十に近い人であるのに腰もこゞまずてん〳〵と歩く風采を見れば壯な者に少しも違はない。

全躰生れ里が上伊那の小野なので、其の名を取つて小野小僧と云うけれども、實名は常衞門と云つて相應な暮しをして居る家の息子であつたが、七八ッの頃から家に居る事が嫌で、何でも野や山にかけまわつて日を

暮し、蟬とか蛙とかの聲まねして見るのが、無上の樂み。常の小僧はお妖だやい、見ろあんな聲をして山にばつかり居るもの、と友達に爪はぢきされて居たのであらう、それが好な道とて上達が早く十五六のころは何の啼聲でも巧みに眞似が出來るやうになつたので、どう云ふつもりか家を飛び出し、それからこれと憧れまわつて、二十に足らぬ年頃、あの赤木山の古堂に住みこんだのだと、この話は祖父樣が昔御庄屋をしてお出のころ世話してやつたどの事て、委しく知つてござる、妾も少さい時から恐い物の一ッて、そらッ小野小僧が來たよ――と云はれると泣きの淚でせがんて貰つた大切なだいぢな南京玉取つて投げて家にとびこむのが常てあつた。

パイこれは木曾馬の、いなゝきでござい、ヒヒーンヒヒーンと陰で聞て居ればどうしても馬としか思へぬ、中でも雞が一番得手らしい、姉さんお隣の婆さんに夜になつてから小僧を賴んて來て啼かせて聞かせたら！好い啼だつて延喜を云ふてせうよね、そしてまた倉の者にも御酒など出すてせう、面白いなコケッコー一つ眞似して見やうか一同はどつとふき出す。

小僧の寢床はいつも葬禮道具の輿の中だと云ふ、或る冬の夜村のたれ彼れ丁度小僧の留守と思ふ折、よき遊び塲とて鉢伏の簑の目のと忍び〳〵に餘念なかつた時上壇にある輿、それがミシミシと動いたので憶病者がヤーこれは大變、亡魂だ〳〵と眞靑になつて逃げ歸つたと云ふこれも知らぬ人の逃出し損、先生朝になつて見ればさま〴〵の道具置ざり手に入れし金五圓、一つの寢返りが五圓とはさても大した儲かなと聞きたる人笑ひぬとか五十年前からの小野小僧、牛もうもうの物まねて氣樂至極の老先をまだいく年を過すてあらう。

能く斯ふ云ふ畸人は何處の地方にも一人や二人はあるものだ、別に面倒な書きぶりをせずに、其人を發現する、此作者亦隱れた手腕を有してゐる(評)

○朝の耕地停車場

在布哇　上土井定子

曉の夢驚かす一聲の汽笛はワイパフ製糖場の屋上より響き渡つたので勞働者は皆起き出たり水道の端には洗面天拜に大多忙を極めてゐる大コックの鈴は鳴つた食事を終りた者は早支度を整へて停車場へ集る停車場の中央には數個の電燈は電柱高く點ぜられて數百人の勞働者の頭上に赫々と輝いて居る電柱の下に二三の白人が立つて何か話して居る彼等は該耕地の役人なのである少し離れていかめしい顏してシガーをふかしつゝ此方を睨んで居る四十ばかりの白人は支配人ミスタープールてある彼は每朝來つて自ら仕事の指圖をせられるのである、四臺の機關車は頻りに警鐘を鳴らしつゝ運轉を初めり多くの空貨車（エムテーカー）は兩側の線路に並べられたる邊りをあちらこちらと見廻つて居るのは耕地巡査て

ある。

東天は次第に明るくなる電燈の光力は薄弱となり行く數多の勞働者は日本人支那人朝鮮人、土人及び獨逸人等混同してゐる彼等には掛りの人夫長が有つて其指圖を受けてナイフ、ペキ、ホー等皆それ〴〵仕事道具を持つて居る婦人の一隊は麥藁帽子の上から白のハンカチフを冠りて半面を隱し太き荒い紺絣の肌着に形付の行燈袴をうがつてホーを高くかつげるさまは芝居で見たる義士の夜討のそれかと思はる發車時刻は漸く迫りぬ混雜せる人は皆カーに乘りて話すあり笑ふあり煙草をふかせるもあり朝寢坊は辨當さげて今馳せ付けんとする一刹那第二の汽笛とゝもに汽車は東西の耕地へ馳せ去りぬ茜さす停車場には二三羽の雞が餌をあさりつゝ遊んで居る。

何となくアメリカ大陸の移民地の有樣も思はせる布哇とてもアメリカ大陸に似て居るに相違ない、文技の妙に感ずるでなく、其事柄の變つてゐるだけに此一文は讀み兔してはならぬ(評)

○門づけ夫婦

丹波　難波愛野

晩鴉　東京　服部春子



尺八に合して、何だか節は分らぬけれども喧しい歌の聲が突然門口で起つた。

今稽古縫物の準備にと、解きかけの衣を片寄せて、簞笥の引出から財布を取り出して搜ると丁度銅貨があつたのでそれを一枚握つて、行つて見た。

物見高い子供連中は犇々と、其後を取り卷いて、中には家の庭迄も這入つて居る隔ての障子の硝子入りの所から覗くと、弱々しげな、袴穿きの若い男と、あれても初めは、雪白であつたのであらうが今は、赤黑く成つた木綿脚袢を着けた並離れて脊丈の低い女とが、何れも深編笠を口の上迄被つて、頻りと惠を乞ふて謠つて居るのである。私は急いで妹に件の金を與へさせた。

男は、其金を脇へ取つたズック製の鞄に投げ入れ、女に何か囁いて共に、村道を上手の方へとたどつて行く。子供の殿軍もぞろ〳〵と、やがて、一陣の涼しい風が汚れた裾を飜ると、釣瓶落しの秋の日は、今や延命寺の山の峯に入ろうとして里は一はけ赤く彩られた。

二人の影を憫れげに、見送られた母上が再、解き物に取り掛つた、私の側へ被居た時。

「那麼恥しい事でも、共稼ぎなら仕樣も無いやね――世の中には什麼夫婦でもあるんだから――」と何げ無

く被仰た。共稼――夫婦――ふと心の中で繰り返した私の心は俄に、明るい所へでも出た樣に、ある暖い柔い氣に觸れた樣に感じた。

何故だろう！……幾度か考へ返しても譯は分らぬ。けれども之迄の私の心――藝術の犧牲!!!自立獨身!!!等の野心に驅られて、約束を見へぬ心の束縛と信じ詰め、我から絶望の闇に悶え迷ふて居た。‖‖其影は例へば朝風に拂はれた、霧のよう、餘波も止めず、胸は冴え冴えして、何か無しに、嬉れしくて樂しい。

世に云ふ‖希望の花の香に觸れた‖とは丁度今の私の此心を云ふのであろう。

私はあの門づけ夫婦を忘れぬ限り、此華やかな思も一生變らないのである。

今一いき、此動機について深い感じを書いてほしかつた（評）

○破れ繪日傘

飛騨　あやめ子

「今日はお天氣もいゝから物置のお掃除でもおし」と母樣のお言葉に、「ハイ」と、襷かひ／＼しく、いそ／＼とお掃除に取り掛た、彼處の隅、此處の天井と、掃き清めて居る中にふと、目に入たのは、痛ましくも骨は折れ、色はあせて、見る影もない繪日傘である。

手に取て、廣げて見ると、破れてこそ居るけれど、昔はさぞと思はれる、紅の地に春の野邊を描き出して、可愛い稚兒姿の少女が、摘み草をして居る、美しい、繪日傘である、オヽ思出多い繪日傘よ、今は早や十年の昔、自分の未だ七八ッの頃であつたらう、京の伯母樣のお土産に戴たので、忘れもしない、姉さんと一所にお花見に行た時であつた、紫の地に櫻模樣の友仙の對の振袖に、紅地の繪日傘が、よく似合ふと云ふて、道行く人にふり返へられた時の嬉しかつた事、自分の少さき胸は如何に、高きプライドに滿ちて居たらう、鎭守のお祭りにさして行て、お友達仲間に羨しがられて誇とした事もあつた。或る時は草摘みに行て、雨に降られ、傘をぬらさじと袖でおほふて馳せ歸つた事もあつた、……こんなにして起くるにも、寐るにも、側を放さなかつた大事の／＼繪日傘が、何時の間にかく捨てられたのであらう、自分の心は、そんなに大人びたのであらうか。過去の歴史に富める、破れた繪日傘を手にしたまゝ、それからそれへ、と思出の糸を、繰り返して居ると、突然、ゴーン、とお寺の鐘の音、ハッとわれにかへりて、立ちあがると、背戸の方で綾さん御飯ですよ、とお母樣のお聲。

破れ繪日傘は實に女の追懷であらう（評）

○人　形

下總　藤崎美奈子

書齋の掃除をするとて、外から机の前とも覺しいところの障子を開け樣としたらば、何かつかへて居るもの

と見えて、中々開かない、性急なので無理に押したのが妾の過まち、ガチャンガチャンと音がして下へ落ちた物がある、急ぎ飛び込んで見ると、こは如何に！大事の〱瀬戸燒製の人形が碎けて居るのである、然も頭も身も所を異にして居る

そればかりなら、まだ善いが頭は無數に散らばつて、先程まで笑みを作つて居た相貌は何處へやら、朱の唇も桃の頰も、あはれ夢と成つてしまつたのである、悲しいではないか、口惜しいでは無いか、此人形は妾が十一歳の春、高等小學校へ通學の爲めに、他家に食客をして居た時、獨り娘の妾の身代りに、これからこれを眺めて、お前の成人を待つて居るのだ、と父が花の都から買つて來た物である、小學も終へて女學校、恰度七年許りの間、妾が父母に玩ばされて、妾の業終つてからは、妾の書齋を飾る大王であつた。

其の思ひ出多い人形が破れたのである、而も見るも悲慘な有樣と成つたのである、たかゞ人形である、しかし妾は人形とは思はぬ、七年が間、我身代りと成つて居た人形では無いか、父母が妾の身と愛して居てくれた人形では無いか、其中には、父母の心と、妾の心とが籠つて居るのだ、それを〱自分の仕業とは云ひながら、口惜しくて、悲しくて、身は何ともなく、頭が落ちて、無數に碎けたのが、何かの前兆——自からの身の上に何かの危難が近い中にある樣に思はれ、妾は胸が込みあげて來た、だけれど、こんな事が妾が他處へ行つて居た時に、出來たのならば、父母はどんなに心配したのだろうと思つて、父母の有難さが、今更の樣に感じた、嗚呼人形！汝の身は脆い瀨戸燒であつた。

一結、千鈞とはこれか（評）

塔　芝　小幡翠波



○居酒屋

大阪　有瀨もと子

角の居酒屋からまた今晩も囂々と喚き散らす聲が聞え出した。「まあ吉やん、阿父さんを何うするんや。」とお神さんが例の頓狂聲て怒鳴るのが耳に入る。私は例の人足や土方連中の酒喧嘩かと思乍ら火鉢の傍に居たが

騷ぎが餘り烈しくなるので格子の障子を徐と薄暗い方を開けて酒屋の店を見た。ボンヤリした火影の釣ランプの下に五六人法被を着た男が入亂れて、各々何やら口喧しく云ふて居る、能く見ると、一人身丈の高い若い男が眞裸になつて割木を振廻して居るのを四五人が切りに押止めて居る、土間の内には六十位ゐの法被着た親爺さんが右の肩を左の手で押えたり揉んだりして居る。前に二三人男が立つてその爺さんを庇保ふ樣に突立て居る、年寄は何やら口の裡で絶間なくブツ〳〵云ふて居る。荒れて居る若者は軒厢の下から戸外へ引張り出された、「こらあ、此處へ出て來い、親もへちまも有つたもんけえ、出て來い、さあこゝえ出てうせろ。」と罵り乍ら留めて居る人々を突退けて土間の方へ行こうと切りに悶操て居る。「オイ、吉やんそれやあ、何んと云ふ事を云ふのや、これよう聞き、お前はんに何んな理前が有つても親を毆ると云ふ無茶が何處に有るもんか、サア其の割木を俺に越こせ」と云乍ら固く握つて居る割木を無理に引奪つた「なあ吉やん、什麼仔細が有るか知らんが對手が親やないか、打つたり撲つたりせえても口で云ふて話は分るやないか、若し疵でも着けたら詰まらん事になるやないか喃!」丈の低い年の寄つたのが云ふた。若者は少し頂垂れて凋れ氣味になつて來た「然うや〳〵龜やんの云ふ通り親や依つて、お前はんが勝つた處で矢張り負けになるのやさかひ、奈何な譯が有るか知らんがまた話があれば後に龜やんに聞いて貰えよう。」と他のが切りに宥め乍ら私の門口まで來た、若者は最う全然別の人の樣になつて「濟まんなあゝ濟まんなあゝ」と云乍ら鼻緒の切れた下駄を片一方持つて、何度も濟まんなあゝと云ふて北へ行つた。

「然うや〳〵、龜やんの言ふ通り親や依つて、おまはんが勝つた處で負けになるのやさかひ……」彌治郎兵衛、喜多八拍手喝采す(評)

○胸のいたて

神田　津久井江南

灰色の雲がせはしう西に流れて森には晩鴉が頻りに騷ぐ夕べ私は云ひしらぬ寂しさを胸につゝんでひとり岡にたゝずんだ。見渡す限り落葉しつくしてあれ寂びた甚しい自然の凋落の樣についこの間別れた友の身が思ひ出されてぼんやりと芝生の上に腰を下した。花園の花はいつしか枯れはて公孫樹の黄葉も殘りなく散つて冷たい夕風がひやりと襟をなでる。

朝宿で受取つたふる里の友の玉章をくりかへして見ると山や河二百里餘りの長の旅路は一しほ病を重らしめたとのを、かゝれたその字に先づいたいたしふ思はれるのに終りには「……奇しき運命に候……アゝ運命……妾は何事も申さず候」とかゝれてある。友がこの玉章をかゝれた時の心の中は吁どんなであつたらう。勝氣な功名心の熾んな友には病とは云へ半途歸郷と云ふとが非常に苦痛のきてあつた。停車場で輝く目に凝と私を凝視て癒り次第きつと出てきますと誓つて飯てまだ一月と立たぬ内にこんな悲慘な玉章を書かれる樣に氣弱になられたかと思ふと私は堪へられなくなつて俯伏してしまつた。想へば三年の昔共に希望の幻影に憧がれて都に出て來た時夢にもこんな悲しい結果にならうとは思はなかつた。行く秋の凋落が自然ばかりではなく人間をも含んで居るかの樣に思はれて私はシミ〴〵と人生の果敢なさを感じた。

一しきり吹きだした木枯の風に默想の夢を破られて立上つた。花園はさびれて見る影もない。花のやうなわが友ももしやこの樣に……と思ふと私はもう得堪へず岡をかけ下りて街へ出た。苦痛の胸はさらに苦痛をまして私は蕭然と宿へ歸つた。

お伽噺

巌谷小波先生選



△規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切も毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據る

二等

○小人の腕

羽前大山　松山瑞枝

或る日、文子さんは、只一人近所の山へ、茸狩に參りました、大變茸がありまするので、だん〳〵登つて、遂々、薄暗い松林の中に這入りました、一生懸命に松の根元を見て歩るく中、文子さんは妙な物を見つけました、それは、丁度、人形のより少し大きい位で、奈何見ても人間の腕らしいものであります、赤坊にした所で是よりは大きい筈だし、それかと云つて、決して人形のものではなく、尚更、兎や猿ののではありません、けれども、珍らしい物に異ひないので、其れを籠に入れて家に持つて歸りました。

文子さんには、お母さんの外に一人の兄さんがあるのです、兄さんは日露戰爭にも出征まして、大變戰功をお立てになつたのですが、左の腕を負傷てから、今になる迄全快てないのです、それて、醫者と云ふ醫者からは大概、診察て貰つたのですが、奈何も普通の樣に動かされないのです、兄さんは文子さんの姿を見ると、さも愉快げに笑を浮べて、

「オヤ、今歸つたの、大變獲つて來たチ」など、籠の中を、かき廻して居りまする中、先刻の腕を見つけまして、「文さん、此腕は何物だい」と聞きました。

「其腕？妾、山から拾つて來たの、それて兄さんから聞こうと思つて來たのよ、兄さんも知らない物なら、餘つ程、不思議な物ね、明日、學校に持つて行つて、先生に聞いて見よう」と其儘、其腕をば文庫の中に入れて、其晩は床に、這入りましたが、晝の疲勞て、ぐつすり寢込んてしまひました。

すると、文子さんの耳元て、

其腕返せ　　腕返せ、
小人魔王の　腕返せ。

と云ふ、不思議な歌が、きこへまして、文子さんの枕邊に、ひよつこり一人の小人が現れました。そして、よく見ると、此の小人は不具て、左の腕が無いのです、

先の尖った、赤色の帽子を冠って、長い白髯を生やして居ります、小人は又歌ひ出しました。

其腕返せ　腕返せ
腕を返せば　其の報ひ
三千年の　松の木の
洞の水を　一滴

とだん〳〵大きい聲と成りましたので、文子さんは目を醒しました、すると小人は益々大聲て、歌を唄ふので文子さんも不思議に思ひまして、

「あの腕は御前のゝ、まあ、其れて分ったが、一躰、御前、一度切られた手を奈何して繼げるのだい？」と聞きますと、小人は頭を幾度もさげて、

「へイ〳〵、其れは理由ありません、あの林の中にある、三千年過った松の洞の水を一滴たらすと、ちやんと引っ附きます、其他、甚麽事ても、腕の病は屹度、全快ます」と云ふのを聞いて、文子さんは、大悦てす。

「そんなら、返してあげるから、其の水を屹度だよ、して、御前、奈何して腕を落したの」

「へイ、夫れは、あの林に蟷螂が住んて居りますので、彼奴に斬られたのてす」

「さうかい、さあ腕は返すから、水をおくれよ」と文子さんは文庫の中から腕を出して渡しますと、小人は少さい壺を文子さんに渡しまして、最早、消えてしまひました、翌朝、兄さんの腕に、壺の水を一滴、たらしましと、不思議にも、全躰全快った計りか、始よりも丈夫になりましたので、文子さんの家ては、最早、皆々雀踊して悦びました、目出度し〳〵〳〵。

（評）邪氣の無い所に兄妹の情もあり、趣味も字句もよく整って居ります。

三等　○花姫

京橋區元數寄屋町太刀川方　今泉磯千鳥

上

ある國に花姫と申す、たいそう花をお好みなさるお姫樣が居られました。そのお好な事と申しましたら非常なもので世界に二人とはないてせう。ご飯の時には、お膳の上に置き、お就床になる時でも必ず枕元に置くと言ふ位です。ですから何千何百坪と言ふ大きな御園は、黄や赤や紫の花に埋められて居ります。けれどもそれだけ數多い花の中にも年中散らずに咲いて居る花は無いと見えまして、お姫樣は毎日〳〵、

「如何かして、年中咲いて居る花を手にしたい」と、許り思ひ詰めて居られました。

或る日の事。その事を國中へ「お觸」しました。すると其の翌日からは、引きもきらず四方八方から色々な花を持つて參りまして、

「此れが年中散らない花でご座います」とか、

「いや私の花は、それ許りではなくて、日々花の色が變ります」とか言つて、中には造花等を持つて來た人等も少なくはなかつたと申します。が、此れは皆お姫樣を欺むこうと思つて持つて來たもので、未だにお氣に召す樣な花は一つもありませんでした。

下

と、聞きましたのは、花賣のお菊と言ふ娘でありました。

「花商賣の私こそ、何うかしてそんな花を見付けて、お姫樣に差し上げたい！」と思つて毎日々々朝は星の出て居る内より日暮れ迄、お飯もろくに喰べずに、諸々の山々を探して見ましたが、いまだそれらしい花は一つも見當りません。

ダンス　やよ子



今日も何時もの樣に、近所の山を探し歩いて、東山から西山に行こうと思つて、山路を歩いて行きますと、水の音の琴々と、物凄い谷間へ出てしまいました。

「アラ私、こんな所へ出てしまつて」と、今更の樣に四邊を見廻して居りますと、不思議や、向うの切株の上に歌を歌いながら踊つて居る小人があります。菊子は暫く耳を澄して聞いて居りましたが、急に踊り上りました。歌は益々高く、手に取る樣に聞えます。

「此所は北山お山の上にや
年中散らない花がある
花は櫻で香ひは梅て
散らぬ姿が靑松葉
老ひて榮ゆる千年花……」

菊子は、夢ではないかしらと思つたのでせう、

「オーイ小人樣……」と、一聲呼んで見ますと、山彦と共に消えてしまいました。

「あゝ今のは、屹度夢よ！、だけど不思議だわ！小人が歌うなんて！……それとも神樣のおつげじやないかしら」と、北山の方へ登つて行きました。
すると、後の方で凄ろしい吼聲が聞えますので、ブト振向いて見ますと、一匹の大熊が後を逐駈けて來るのです。菊子は、思はず、
「キャッ！」と叫んでそこに打ち倒れました。すると又耳元で歌聲が聞えます。
「一事を成すには忍耐しろよ
北山登りにや後を見るな
見るとおそろしものを見る」、
歌聲が止んだ頃起き上つて登り初めますと、又後の方で恐ろしい音が聞えましたが、先刻の歌を聞いて居たので、後ろを見ずにドン／＼登つて行きますうちに項の方に美しい花を見出しました。菊子の嬉びは何んなでしたろう！
一ト月と經ない內に、花姫樣の、御園は植ゑかへられたそうです、そして每朝夕、二人のお姫樣が散步せらるゝそうです。二人とは何方と、何方でせうか？。
(評)優美な感のする所が佳いと思ひます。

四等　○蕎麥の噺

東京市下谷區入谷町二四二　蕉雨子

「蕎麥さん何分賴むよ」「今は昔或る處に一人の鬼子が有つたとさ其鬼子は自分のお母さんと二人きり山の中の細い道傍に家を造つて住んで居て其近傍を通行る人を殺してお金を奪たり着物をはいだり色々な惡行をして居りましたとさ」「恐ろしいお話だね」「處が或日の事旅人が澤山のお金を馬に引かせて此の山道を通り掛けましたすると今の鬼子早くも之を見付けて突然お金も馬も皆な獲つてしまつた」「氣の毒な事をしたのだね」「ですから旅人は驚いたの驚かないのと後をも見ずに一目散に逃げ出しました、すると向ふの方にチラリと燈火が見え出したものですから一生懸命に其燈火を便に走つて行きました」「夫て命が助かつたのですか」「先づ突然戶を叩いたのですると中から丁度七八十餘りのお婆さんが腰をかゞめて出て來ました、旅人はお婆さんに向つて「旅の者で御座いますがふと道に迷ふたのですが何卒今夜一ばんどんな軒下でも宜敷御座いますからお止めなすつて下さいませんかすると婆さんは「夫りや御氣の毒ですが此家にお止りなさると貴方の

命が危う御座いますから早く何處かへ御出なさいまし」旅人はお婆さんの言葉を聞いて不思議に思ひました「本當に不思議に思はれますね」からしてお婆さんに尋ねました『お婆さん全躰命が危ふいとは如何な事で御座いますか何をかくさう私今あの山道で鬼の樣なのに出逢ひまして澤山のお金と大切な馬とを獲られてしまつたのですが」と話を續けやうと致しますとお婆さんは『アヽ其鬼の樣な奴が此家の主人なのです實は其鬼子は私の子ですけれども如何した物だか惡い事ばかり致しまして親の私をさへ時々殺さうと致しますからね」旅人はお婆さんの話を聞いて膽をつぶしました、けれども仕樣がありませんから又お婆さんに向つて『夫れてはお婆さん命が無くなつたとて致方が有りません何卒お宿めなすつて下さいませんか」元來お婆さんは情深い人ですから一も二もなく『夫にても宜敷ければお遠慮なくお止り下さいまし全躰私の所の鬼子は此處にある此の釜の中へ這入て寢るんですから貴方は奥の押入にても這入なすつてお休みなさいまし」と夫れは親切に言ふて呉れるから喜んで其押入へと這入ましたとさ‥‥あゝ口がくたびれた」

「マア旅人は嬉しいものゝ恐ろしかつたてしようね」

「夫から鬼子は程なく歸つて來ましたそして幾度となく『婆さん人臭ひ婆さん人臭い」と言ましたお婆さんは『人てはない人てはない」と言ふて居りました押入の旅人は嘸膽を冷したてしやう。

けれども幸お婆さんが強く言ひ張りましたから程なくあの大きな釜の中へ這入ました後はグーグー。

お婆さんは突然旅人を搖起しました旅人は事の意外に驚いて押入から出て來ましたするとお婆さんは何事をか小聲で旅人に話しましたそして靜かに表の戸を開けて出て行き旅人も其後から出ました」「如何するのだね」「すると二人して大きな石を舁いて來ました幾度も幾度も出たり這入たりして澤山の石を運びました。

そして今度は靜かに夫れを鬼子の寢て居る釜の上へ積み上げてお婆さんは又澤山の薪を持つて來て釜の下に火を付けました。

釜の中の鬼子は段々釜が熱く成るものですから驚ろいたの驚ろかないの無二無三蓋を破つて出ようと致しましたが何しろ大きな石が澤山積んで有りますから如何する事も出來ませんてとう／＼煑られてしまひましたもうよいて有らうとお婆さんは旅人と共に石を取りのけて蓋を開けますと夫れは釜一ぱい血に成つて居り

ますから如何したらいゝかと思案して居りましたが終に畑の作り物の肥料と致しましたとさ。其時丁度其血をかけられた者が私蕎麥たちたさうてすからして今に至るまで根元が血に染みて赤くなつて居ります。やれやれ長話で御座いました。」

（評）書方の一風變つた所を採りました。

五等　○申の歳

大分縣中津町高畑　やま川

上

「ネエ申樣今年も今夜限り私の位も讓らねばならぬ、ついては直弟のお前に讓りたいのだが、兄の辰樣や巳樣が嫉みはすまいかと思ふ」。と燈火の光りに聲を密めて未が申します。明治四十年は未の年でしたので未が歳の位について居たが明日より四十一年になるので、外の人に讓らねばならぬのです。申は有難相に、「ハイ兄樣の情は實に感謝の外はありません、大兄の辰や巳が何とか申す位ゐは少とも怖はくはありませんが、初日の出を拜がむに越へる大晦日峠の神樣には何と申せばよいのですか」

申は晦日峠の神樣は此上ない惡戯ずきで初日の出を拜みに行く者を止めると言ふことを聞いたからです。

「夫はネエ實に惡戯の神樣できつと通る者に何か藝をさせなければきかぬのですが、お前樣なら何んな藝でも出來るから大丈夫だが、只辰と巳を用心なさい、殊に是から夜路を行くのですから」と未は詳しく色々なことを心注けてくれたので申は御禮を申して別れ偕愈々只一人初日の出を拜んで年の位につかうと、暗い路を淋しともせず枯草落葉を踏んで大晦日峠の方に參ります。月なき夜はシンと更けて霜や置きけん凍る樣な星の光りに路はほの白く、近くの森は眞黒に惡魔でも立つて居るやうてす。未兄樣が辰と巳を用心せよと言ふたが若や二人に出逢ふことはあるまいかと、草分けの風落葉の音にも心を注ますが秋も今は過ぎて遠いので虫の音も致しません、是では少しは安心と急いで行きます中に自分より少しさきの四叉路で爭ふ聲が聞こへます「こら巳貴樣こら弟のくせに又位に即かうなんて虫がよさ過ぎるぞ」「何だ兄と言ふて遠慮することがあるかい、外のことと異ふ年の位いぢやないか、其所はなせ遲くなる」「なに外のことと異ふ、此樣倒れ兄に先きだつと言ふことがあるか邪魔すると承知しないぞ」

どたんばたん、取組の聲がするので申は胸がドキリ

未兄様の言ふた通り二人がと、思ひましたが心をすへ暗にすかし見て少し廻り路をして二人の先きに出て一生懸命峠の方に飛び出しました、と二人は此足音に驚いて組んだ手をとき『あの物音は』『偖は申奴が我々より先きに』と二人とも爭いどころてはありません、先をこされてはと是も申の後を追ふて登つて行きました。

下

大晦日峠の中腹に山の神がありまして毎年初日の出を拜みに參る者に藝をさせ上出來の者にはお年玉をくれて通して呉れますが失敗ると又來いと追ひ歸されるのです、茲に申が參りますと後から辰巳の二人が息せききつて來ましたすると山の神樣が御覽になつて、『これ〳〵其方共はなにしに參つたか』『ハイ初日の出を拜んで年の位につきたいので』と御頭下をしますと、『フム夫は例年のとじやが、此所を通るには何か藝をせねば通せぬが其方達何かして見せよ』白い髯を捻つて嚴そ

冬休み　駿河　溪園女史



かに申されますと、性急な辰は『ハイ私が一番に致しませうが少しは拙くとも私を通して被下い是等二人は弟の癖に兄をないがしらにするのですから』巳はジロリと陰險な意地惡い眼で兄を睨みました『ないがしらでも芋がしらでもよい早くして見せよ』と申しますので暴い一まき前後の考へのない辰は、逆立をして御覽に入れようとしましたが何分短かな手故頸をつきまげ倒れました。次に巳は『私は實に不調法ですが渦巻きを致します』と舌先まで口を舐め廻しながら、兄の失敗に鑑みて木の下にて、ぐるりと身を巻きましたが、どうしたはずみか、長い尾が木の枝に巻きつき幹で頭をうちまして是も失敗しました、次は申で藝には堪能なものですから山の神も是は多分、猿梯子か綱渡をするであらうと思ふて居りますと、申は御前に出まして『私は申でムりますが、今學校で流行る芝居の一手を御覽に入れます』と立つて芽出度舞と言ふを舞ますと大層感心して、

其方のが一番よく出來た、よし〳〵通してやる、先づ褒美に是を」とお年玉の鏡餅を一重ね給りまして山の神樣は二人の兄を大そ叱つて改心させましたから、中は嬉しくてたまらず、厚く御禮を申し二人の兄をも慰めまして峠の上に登りますと東の空は白くなつて居ります。もうお日樣の上りなさるのも間はあるまいと、待つて居ると白いのが段々赤くなつて暗の色は遠くへしりぞけられると、帶の樣な雲一線棚引くあたりに金色の征矢がさつと立ち間もなく美はしきお日樣は上つて明治四十一年は參りました。めでたし〳〵。

（評）如何にも面白く讀みました。

秀逸

○黃金籠

桜涙　清水千秋子

今日は大晦日一夜明くればお正月ですから何處の家でも大そう忙がしいのです太郎の家は至つて貧づしい其上日給取の父親が病のため餅一つ搗けずに此お正月を如何して過さうかと親子三人で泣いて居ました太郎は仲々孝行の子供ですから近所へ往つて餅搗の手傳ひなどして何程か貰つて來ては父に藥を飲ませます日もだん〳〵暮れて風も寒くなつて來ます太郎は破れた提灯を持つて山へ焚木を取りに出懸けました色々の事を心配しながら行きますと如何も例の道とは違うやうですから誰にか尋ねやうと思つて四方を見ますと傍に水車小屋がありましたから内を見ますと一人のお爺さんが居ましたお爺さんに尋ねますとお爺さんは私が今餅を搗くから手傳つて吳れゝば敎へてやると云ひました太郎は遲くなるとは思ひましたが道を敎はらないと困りますから直ぐに承知して搗いてやりましたするとお爺さんは又、小僧や此餅を隣村迄持つて行け、と云ひました太郎は急いで隣村へ其餅を屆けました此度は其村のお爺さんが、小僧やこれを今の水車小屋の向ふの村へ屆けて吳れ、と云つて大きな蜜柑を美くしい籠に一ぱい入れて渡しました太郎は重たさうに其籠を持つてドン〳〵と敎はつた所迄行きますと此處は只大きな木が澤山植ゑてあつて家は一軒もありませんから誰に渡してよいのやらわからず、こんなに遲くなつては嘸父や母が心配して居らしやるだらうと太郎の胸中は一ぱいになつてはては泣き出しましたすると太郎の傍に前の水車小屋のお爺さんがヌート立つて居ますから太郎は喜んでお爺さんに蜜柑の話をしますとお爺さんは笑ひながら此山には家はないのだがお前の取り來た柴

が澤山あるから拾つてお出でお前は大そう素直な親孝行の子供故お前に餅を搗いて貰つた御禮に餅と此蜜柑をやる早く夜の明けない中に歸つて此蜜柑を賣りなさい、と云つて太郎に先程の餅を渡して山の中へ入つてしまひました太郎は幾度か御禮を云つて蜜柑と餅と柴とを持つて急いで家に歸り兩親に話ますと大そう喜んで近所へ話すと大勢見に來てこんないゝ蜜柑はないこんなよい餅はないと云つて皆んなて高く買つて與れましたから今迄まづしかつた太郎の家は急に金持になり改めて餅を搗いたりお魚を買つたりして目出度いお正月を樂しく祝ひましたとさ太郎が其時蜜柑を入れて來た籠を黄金籠と云つて今も其村の寶物となつて居るさうです又餅は太郎餅と云つて其村では餅を搗き名物として賣るさうです柴は其山を孝柴山と呼んで毎年大晦日には村の者が子供をつれて孝行をするやうにと柴を取りにやるのが此村の風習となつてるさうです。めでたし〳〵。



子守　京都　宮原みどり

○哀な蝶！

小石川　三宅恒子

美しい夏の夜のこと、半分あけはなされた窓の上にランプが置いて御座いました。

「まあ！奇麗だこと、あの光のそばで舞つたらどんなに愉快でせうね！必と、面白くつて〳〵堪らないでせう！」と申しましたのは繭から出た許の白い可愛い小蝶です。

「お蝶や！そんな事を考へてはいけませんよ！夫は、樂しいかも知れませむが決して長くは續きませんよ、もし、お前が近よれば死なねば成りませんよ、ねーいくら暗くともこゝは安全です、さ、母樣と一所におとなしくお家にゐませうね！」とやさしう母の蝶はなだめました。

「詮らないなあ」と悲しう獨言を云ひながら、理をわけた母のさとしに、小蝶は希望を捨てゝ、未、光のな

い絲萩の葉影から、銀色に、金色に、並んでるお星樣を透し見て、數へたりして居りました、默つて…。然し、夫も僅で…また、御座敷の方を見返らずに居られませんでした。

「よく光るよ！お星樣よりもつと〳〵、幾倍立派だか！目がくらみさうだ！」と云ひながら、小蝶は夢中で飛び出してしまひました。平和なお家から、優しい母樣もゐらつしやるのに！

「あれ！あぶない〳〵！行つてはいけませんよ〳〵」と母の蝶は必死に叫びました。どうして聞へるものですか！最早、灯影に打水の名殘が黄金の玉と成つてる中庭の半に進んでゐるので御座いますもの。

氣が狂つたかの樣！しどう光に近き〳〵小蝶は舞ひに舞ふので御座いました。

どの位、嬉しさに躍つたでせう！何も彼も忘れて、たつた一人の母樣の事さへ…どんなに不順な子の上を案じて居らつしやるでせうに…。

金色の灯の光が鮮かに…白い羽に榮えて、其舞振は目覺むる許、眞實に華でした。

ふと、ホヤに觸つたかと思つた時、雪の樣な羽は可哀さうに…やけて居りました。あれ中に落ちて、苦しさうな羽ばたき爲す間もなう…もうおしまひてす。

哀れな小蝶は…あゝ！やつと世界に出て來て、美しい灯に幸福を望みながら、淸らかな昔の面影もなく、見惡い死骸に成つてしまひました。炎の中で。母樣の仰に背いた罰で御座いませうよ！必と。

後に殘つた母蝶の嘆はどんなでしたらう。

燈火は今の悲劇も知らぬ顏にキラ〳〵と。美しい物の影にひそむものは恐ろしう御座います…。

星のまた丶きにつれて、夏の夜は美しう更けて行くので御座いました。

アリス、プリンセップ孃（口繪愛吟の肖像）
ストラセー、クリスロウ夫人

此の繪の作者はジョージ、フレデリック、ワッツといふ英國近代の有名な理想派の畫家て、千八百十七年に生れて千九百四年（五年前）に死んだ人てす。この人の特色は繪を以て自分の感情、觀念を表はさうとした點にあるので、繪の詩人と云つてもよろしい、だからその繪は即ち文學てす。全體を通じて人はこのワッツの後期の作よりも初期の作が佳いと云つてゐるので、ワッツのプリンセップ孃（後にストラセー、クリスロウ夫人）の肖像はその初期の作中の代表的のものです。孃の姿勢、表情は單純で而かも嚴然襟を正すといふ風のもので、その色彩が豐富で好く調和して居る事は不思議なばかり、近世の繪畫に於て、豐富な濃密な色彩を自由に完全に用ゐた點で最も有名なるもの丶一つです。尙ほワッツは英國近代の詩人テニソン、やブラウニングの肖像を畫いて居り、一方には「希望」「死の神」「愛と死」などゝ題する理想畫の傑作も數多くあります。

新派和歌

與謝野晶子先生選



△規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

二等

虹の色おの〳〵わかちかさねたる衣に香たくくろがみの人

弘前市品川町一六　佐野てる子

三等

水晶のまろき柱に秋やみてやせける人はよるべかりけれ

京橋區元數寄屋町太刀川方　今泉磯千鳥

四等

誰ぞや來てわが眼蔽へよ少女子が罪を得るなるうとまし門を

福井縣丹生郡吉野村余田區　片山千里

秀逸

○　上毛　納尾子

幼きにとられし手にて兄君のひつぎのおほひぬひたてまつる

○　相模　北島たつ子

木犀の薫滿ちたる室にして衣ぬぎかへ君をこそまて

○　神田　藤城浪子

鐘なりぬ風走りきて葉落としぬ晩秋の夜の月のぼる時

○　越後　としこ

父君の御棺もりて萩の路ゆきし日に似る夕風ぞふく

○　駿河　深尾けん子

今み神かくろひますか金色の雲おごそかに西海をてる

○　熊本　金子片枝

美しさ少女に似たり夕川を舞ひて流るゝおしろいの花

○　下總　歌多美

その人を見初めける日をのみ語り別れし秋はのたまはれども

○　上毛　關口綠笛子

うまや路や櫨の中の一もとの松ほめあひぬ乘合馬車に

○　越後　瀧澤政子

白き波黑き波立つそが中に君を見るなりくるへるこゝろ

○　長野縣　今牧伊智子

木曾の秋紅葉の谷を馬曳きてこし子わすれず秋二つへぬ

○　門司市　彌吉はるみ

白菊も君が素足も黑髮もともに匂へり月のぼる時

○　龜井戸　鵜澤星丘女

君に似し小さき影ありわが背うつ微笑むと見ぬ柱に凭れば

上總　ひさ子

○過去未來遠くひろがる天地の中に相見てわすられぬ子よ

○　遠江　松本綾子

朝の雲さくらにかゝるひんがしの方にぞ神はませりとおもふ

○　廣島縣　池田いさよ

野にけふも菜つみてかへる少女子が夜に見む人を月よ占へ

○　周防　谷天籟子

君を見し夢はぐくれて我孤りさびしき窓に村雨ぞふる

○　遠江　增田たけ子

瀧つせは青葉の奥におん禰宜の衣の白きが笛吹くごとき

○　佐賀市　田中よふ

あらし山花見がへりの人の頰はさにづらふてぞよしや小車

○　熊本縣　富丸わか子

秋の花さける裾野はたそがれて月ほのめきぬ阿蘇のかなたに

○　栃木縣　千葉奈津子

冬はきぬ庭の筧の水の音も枯れて淋しくなりにける里

○　群馬縣　新井すみ子

病む人は窓うつ風にはら〳〵と散りしく紅葉見て涙しぬ

○　信濃　依田花園守

秋の月心しあらば鏡ともなりて遠なる面影見せよ

○　下谷　燕雨子

都路に出て立つ君のうしろ見て門邊に立てば紅葉散りきぬ

○　神田　山田灼子

秋の雲見て丘に立つ人よびぬ黄なるいてふのちる家の妹

○　京都市　大井順子

雲のちぎれ〳〵の春の雲あわたゞしげにわが森にきぬ

○　鳥取市　上山千重子

心してゆけなと云ひぬ枝折戸や緋桃にふりぬ春の夜の雨

○　備中　賀森栄水子

君を見る日はうれしけれどいま花さくらしき香にみちぬ

○　美濃　長濱蘭子

わが少女二尺の袖を肩に上げ毬もてあそぶ童心よ

○　美濃　傍島みゆき子

秋の日のとげあるばらのかへり花つめたき人に一枝送りぬ

○　京橋　藤田綾子

亡き君の殘しいにける玉づさにありし昔の面影ぞ見ゆ

○　岐阜市　篠田とみ子

ある夕つれなきふみをふところに泣きし少女はけふも死なずて

○　奈良縣　中富よしみ

なつかしき君がおもかげふと見えてやがてぞ消えぬ村さめのまど

○　淺草　白梅子

江戸褄や京の十五の高島田矢の字の帶に羽子落ちにけれ

○　飛驒　千代子

み車はきしりいだしぬ男心になみだの面は見給はれども

○　長野縣　蘋波子

只一人尾花が丘にわれ立てば心淋しき神無月かな

○　小千谷　瀧澤みつ子

そのおもわ其手其姿其姿神とぞ見ゆるわがれたむ人

○　鹿兒島　犬飼たき子

うたもちてそと袖かみぬ登らせむ君はよるべのさはにあるてふ

○　四谷　八重子

まどはしの魔神を夢みをのゝきてさめし夜なれど春雨をきく

○　陸奥　佐々木愛子

夕づゝは戀する人の瞳して卯月瑞葉の間を覗きぬ

○　福井　花月女

くろ髪の少女たてりと夜の星下界見るなりすゞしき眼よ

○　上總　關芳枝子

月の夜をわが吹く笛は行く雁の羽子につゝみて君につたへむ

○　信濃　宮澤綾子

君をおもふわれ愛欲にひれ伏せば五尺の髪はみだれみだるゝ　埼玉縣　逸見なみ子

○虚言の多き男をはたたのむよわき心を少女と云ふや　岩代　根本松江

○利根の川さをさす人もなき朝に雲の大船流れゆく見ぬ　上野　桂濱浪枝子

○忘れては花の一つの獨り咲くやうにも君がうたをおもひぬ　京都市　山口愛華

○戀人の今宵嫁ぐと聞くよるの鐘つく右手のいとよわきかな　高知縣　濱　子

○わが情うすきか心涸かるか詩おもふ日は君をわすれぬ　尾道市　安保露子

○春の雨誰まつとなく小手枕うたゝねにして心たらひぬ　長門　新田ひし花

○冬の日はつゝまし人の瞳にも似てほの照りぬ白霜の上　東京　登美子

○春はきぬ都大路に若菜うる葛西男の聲のをかしき　京都市　壽士須美

○ふりかへるときに小鹿はかくれけり霞と相ゆく春の春日野　紀伊　露貴女

○神路山ほのぼのあけぬ古杉の隙間に白き山ざくら花　岩代　水上まさき

○楓葉にさにづらふ頬のうつらむかとばかり庭にたゝずめる哉　山口縣　露女史

○夕べなり濱さまよふにうつくしき雲はあれども一人はさびし　仙臺　遠山しげの



羽子のゆくへ　名古屋　きよし

○いとながく結ぶ赤帯の色淡みなつかしかりしもゝわれの髪　鳥取縣　内田靜枝

○山霧のうすむらさきにほのぼのとうしろの丘は夜あけゆくかな　本所　薫翠女

○高々と昇る初日になつかしき羽根の音すれ都の辰巳　麹町　白萩

水の里秋の夕を遠方の鐘の音すれ震ふる中に　岩代　泉りう子

○わが姉のふりのたもとの三尺の夕の霞の紫にして　日本橋　ゆかり子

○いにしへの人の植けんまつが枝に霞たな引く三保の浦かな　愛知縣　永田舞鶴子

○紅の色衣を透し舞姫のみすがぞ光る天津大殿　下総　川奈部ゑい子

○胸の埴土冷へて凍りぬあゝ今はれたみの草の根は枯れむとす　諏訪　加藤芳枝

○桑畑やはさみ手にして少女子が葉えるにふりぬ春の日の雨　京都市　宮原みどり

○凩は鬼の業ならし野も山も皆あれよとぞ金鼓うつなれ　長野縣　すみ子

○羽子板のおし繪男に紅さしてほゝ笑む人はにくしと云へと　下総　小澤綠子

戀ならぬなさけと云ひてやみにけれ別れのもだえ常ならなくに

短篇小說

小栗風葉先生選



▲規定　純潔清新なる短篇小說を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以內とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は每月十五日、懸賞品は甲種規定に據る

一等

○反抗

淺草區西鳥越町三　恩田菊野

私の夫は昨夜も家を明けて外泊した。私は安氣に出來る丈の朝寢をして、床から出たのは彼此九時頃であつた。玉のやうな好い秋日和て、うそ寒い風も今朝は吹かない。垣の山茶花が少しづゝ咲きかけて、何處かて百舌がキイ〳〵鳴いてゐる。私は寢衣の袷に羽織を引つかけたまゝ、楊枝を口に啣へながら、其處の椽側から素足を庭下駄の上に下して腰を掛けた。然う〳〵昨夜の艶書の一件！と思ひ出す。昨日の午後おなじ繪書きのお友達が見えて、サン〳〵お酒を飲んだ上、お互ひに今度の博覽會に落選したから、一つ景氣直しに何處かへ出掛けやうと云ふことになつた。お友達と云ふのは夫より多少先輩でもあるし、身裝なんぞもキリヽとしてゐるので、私も夫にひけを取らせたく無い、又お酒で汚點だらけになるがとは思つたが、仕立おろしの糸織を出して夫に着せた。後ろへ廻つて衿を直したり、前へ屈んで足袋まで穿かせてさて機嫌よく玄關から送り出した。が、後で不斷着を疊む時袂から探り出したのは一通の艶書であつた！字こそ金釘流の覺束ない書き樣であるが、其文言から見るとなか〳〵昨日今日の間柄とは思はれぬ。しかも賣色一流の空々しい呼出し狀とは自ら違ふ。殊更返書であつて見れば、夫の方から何とか言つてやつた物とは一目に察せられる。あゝ私は馬鹿であつた！餘りに夫を信じ過ぎてゐた！酒の上からこそ興にのつて惡所入もするが、まさか賣女風情に妻を見變るやうな夫でもあるまい、私も亦賣色風情に見かへられる女では無いと信じてゐた。それとも、其愚かな自信や自惚やすべてが今は破れて了つた。まだ子供と云ふものも無し、年も若いし、嫁からと思へば何處へでも嫁かれる私の躰で、然うした男に毛ほどの未練も無いが、考へて見れば見るほど今日まて欺かれてゐたのが如何にも口惜しい。といつてまだまだ離緣をいひ出すにも早い。何といふ事なしに十日

か半月實家へ歸つて、阿母さんや妹とちと氣保養でもして來やう。然うだ、さう爲やう！　恁う心を定めた時、婆やの松が金盥に手水の湯をとつて持つて來たので、私は直ぐ
「今日はね、私一寸よそへ出るんだから、お菜は何もいらないから早くお膳をこしらへておくれ。」
と命じておいて、顏を洗ひ身じまひをして何時もの長火鉢の前へキチンと坐つたが、中〲お膳を持つて來ない。
「何うしたの、お膳は。何もいらないと言ふのに。」獨りて焦れてゐると、松が入いつて來て、
「旦那さまからお使だと申して此れを持つて參りました。」
と一封の手紙をさし出す。



「おや然う。」
封を切つて讀むと、極りきつた——勘定不足、金貳拾圓此使にわたしてくれといふ文言。よくまあ斯んな事が言はれたものだ、何にも知らぬ今までこそ隨分自分の物を質入しても夫の塲合を繕ひもしたが、最う其厚意は持たぬ。ウマ〱欺かれてゐた念晴しに是から實家へ遊びに行かうといふ矢さきぢやないか。何だ、此は！　口には言はぬが私の顏色はサッと變つた。仇し女と好勝手な眞似をしながら、其尻拭ひを私の所へ持つて來る、何處まで人を馬鹿にするつもりだらうと思ふと、躰が顫へるほど腹が立つ。主思ひの松は何う察

したか、

「奥さま、何うかなすつたので御座いますか。」

私は直ぐいつもの取すました顏をして、態と事も無げに、

「何、何でも無いの。遊びが過ぎてお金が足り無くなつたんだつて……お定まりさ。」

「左樣でございますか、私もどうもお使ひの樣子から何から可怪しいと思ひましたよ。」と聲をひそめて、

「それに旦那樣は何でございますつてねえ……近ごろ御酒の上ばかりでもゐらつしやいませんさうて……奥さま、私は何にも御存じ無い貴方がお可哀さうてなりませんのでございますよ。」

私は其言草がグッと癪にさわつた——賓色に見かへられたと云ふことを他人に忖度され、同情されるのが、如何にも自分と云ふものゝ尊嚴を傷つけられるやうて。

「お默りな、そんな事はお前の知つた事ぢや無い。私と旦那とはお互ひに深く信じ合つてゐるのだから。」

言ひながら私は簞笥の引出しへ手を掛けた、さうして取出したのは小袖一重ねに帶が一筋。これを質入して了へば、もう實家へ着てゆく物も無いのである。

「これて二十圓貸すだらうか。」と獨言のやうに言つたが、松はたゞ目を圓くして默つてゐた。

(評) 反抗と云ひ自尊と云ひ、女主人公の近代的思想が面白い、而かも是だけの短い斷片の中に、女主人公の思想から感情、さては境遇までが具體的に遺憾無く現れてゐる、今の名ある自然派作家の作品中に交へても多く遜色はあるまい。

二等　〇年

岩代國須賀川　服部貞子

澄江さんが結婚してから、彼れ此れ四月にもなるが噂はまだなか〳〵納らない。澄江さんは名うての美人て、心立ちがよくて、そして仕度持ちといふ、たつた一人のお祖母さんの自慢娘、若いうちから、家が無人だから早く婿を〳〵と騷ぎ作ら、廿二の今までも選り嫌ひしてゝ、質屋の婿にまさか大臣も來やしまいしと笑はれて居たお祖母さんも、夏の初めに輕い中風にかかつたので、今度は俄に急ぎたてゝ、丁度持ち上つて居た緣談が苦もなく纒まつたのてあつた。それは町づれの塾近くに下宿してゐる、新任の英語敎師武田嶺雄と云ふ人て。

何しろ狹い町のことゝて話はパッと擴がつた。片野

の婿、塾の先生、同日々々の婚禮など、目差されて居た娘だけに、岡焼の話は尾に尾がついて傳つた。少くても六七人は集まる私等裁縫の座敷には、つひ此間迄並んでゐた澄江さんのことゝて、日に／＼此話が繰り返された。みんながいろ／＼な事を聞いて來る。生れは東京で、眼鏡をかけた、口髭のある、立派な、ハイカラな好男子といふことは、見た人も見ぬ人も話が一致した。

　或日もまた此話がはじまつた時、芳ちやんといふのがもの／＼しく聲をひそめて、「酒亂だつて！」と低語た時「オヽ厭な！」と殊更眉を顰めたのは、此間誰やらが、わざ／＼持つて來た塾生一同の寫眞を見て、「そんなに評判程の人でもないのねえ」と妙に微笑んだ牧さんであつた。

　牧さんは澄江さんとは大の大の仲善しであつた。いつも二人は針箱並べて、縫くらなどで私等妹弟子達を驚かせて居たが、澄江さんが來なくなつてからは、心の合ふ友達がない故か、いつも一人で淋しさうに針を動かしてゐる。そしては時折妙に考へ込んでしまふ。けれどもこんな時に、例の澄江さんの噂が持ち上ると、俄に活々として、其話をしまふ。一寸惡口らしいことを言はれても、躍起となつて澄江さんの辨解をし[illegible]しいした牧さんは、「どんなに大切なお婿さんやら、澄江さんもお祖母さんも、下にもおかずに持ちやげて居る」などゝ恁んなことといつて笑ふやうになつた。

「武田さん、あんまり如才がなさ過ぎて……私あんな人嫌ひだ」こんな言も云ふ此頃は、繁かつた足も遠くなつた。けれども稀に見える澄江さんに對しては、矢張親しい友達であつた。

「牧も早く何處か恰度したとこへ」とお母樣なるお師匠さまが此口癖は、澄江さんの結婚以來やう／＼繁くなつて來た。するといつも「厭なこと！」と心持顔を赤くして、「お嫁になんかなりやしない、彼樣に意久地がなくなるんなら」と、つと右の肩をあげるやうに動かすのが癖、「お嫁になると皆あゝなるのか知ら、隨分強情だつたくせに、もう何でも彼でもハイ／＼言ふこと聞えうるのだから此間言つてやつた、あんまりヘイヘイするのも善し惡しだつて……だつてあんな噂があるんだもの足許見られるわ」人は婿其人を、片野の財産目當てに……などゝ言ひふらすのだ。

「此間もひよつと怪しな話を聞いたし……私、いろいろ相談したいことがあるんだけれど、結婚なつてか

ら此方、私になんか少とも打ち解けて呉れないんだもの……」と針をかへして留めた糸をポキリと齒て切つて、「お嫁になると皆あゝなのか知ら」とくけ臺をつとひきよせて輕い溜息をつく。「けども澄江さんも不幸つて云ふんだわ、彼んな人の……」と悄然なつたかと思ふと、縫ひ縮めた針を手荒くこいて、「彼の人つ位、女らしい女はないわねえ」女と云ふ語に力を入れて向ひ合つてゐる私と顏を見合せると、つと右の肩を動かして、ホヽヽと聲高に笑つたもの。

牧さんにはもと定まる夫があつた。遠縁の者で若いうちから臺灣に渡つて製糖のことをやつて居たのだが一昨年の夏、マラリヤ熱で死んだと云ふ報知が着いてから、何處ぞへ嫁らなければ〳〵と言ひ乍らも、帶に短し襷に長して、昔氣質がお師匠さんの氣に入るやうなのがなく、つひまた仕事の手助けになるのと、氣に入らない嫁に對して牧さんが意地に可愛く、一寸退れしてゝは、取つて廿四といふ今までも、處女の生活を送つて來たのであつた。

年は、牧さんが獨り身な以上、澄江さんとの友情に邪魔をするのだらうと私は思ふ。

（評）女性の微細なる感情を巧みに描いて居る、描き方も説明に陷らず甚ぼ其躰を得て居る、女主人公が縫物をしつゝある光景の描寫してゐる點なぞ、殆ど老手と云つても可い、唯英語のルビーにいゝごとあり、聞いてを聞えてとするなぞ、地方訛のあるのが疵だ。

三等

○秋色

土佐國吾川郡弘岡上　深瀬ます子

打續く小春日和の長閑さに大路行きかふ人の足並も自然と緩かである。

二人は電車を下りて、青山御所の前を左へ眞直に、幽靈坂のとある富豪の別邸の裏門へ來て足を止めた。男は若手ながら敏腕を以て、好男子を以て、其社會に知られた人、久しく獨乙に居た身でありながら西洋臭いのが大の嫌で、何時も角帶に五つ紋といふ拵へ、それが少しも厭味つたらしく無く誰が目にも華族の若樣とよりしか見えぬが、もし、其閲歷を聞いたならば、誰も氏より育といふ事を今更の樣に思ひ合せるであらう、猶其切て廻す腕前を見たならば如何に一世に勝れた才能を持て居るのに驚くであらう。秀た眉、力ある瞳、殊更ならぬ八字髭、其口元には如何なる人に對した時でも豊かな微笑を含むで居る、其鮮な眉は心の落付を示して如何なる事があつても決して〳〵動く樣な事

はれ姿

宇都宮　木島蕗子

はない。

従ふ少女はさる侍従の弟娘で名を萩子といふ。萩ならば白萩か、萩よりも高く清らかな姿は白百合か水仙とでもいふ所であらう。目鼻だち調ひ過ぎて表情に乏しい嫌はあるけれども、それが却て氣高くも見える。衿足すつきりと通つて、多過ぎる稀見事な黒髪は靭かに結ばれて、大束なリレーの造花が後懐に挿されてある。が、浮かぬ心は色に出て、何物か胸深く蟠つて居るのがいはぬけれども見える。

門には三つ四つ俥が止つて、邊は打水清らかによく掃除が足りて居る。「さ入らう。」と男は萩子を見返つた。萩子は僅に會釋した許。押開かれた柴折戸の内には五十餘の男が羽織袴で控えて居る。見るより恭しく一禮して、「どうぞ此方へ、」と手を以て示した。其所には茅葺の庵があつて、其前に幾足かの庭草履が奇麗に並べられて、二三人の男が下足番をして居る。二人は草履に代へ飛石傳ひに二三歩左に曲ると、打開けた庭が見える。池を廻つて色よく染めた紅葉が燃えるやう。小船を浮べてたをやかに掉して居る少女等、それはさながら繪の中のものである。と思ふとあらぬ方に笑聲も聞える。茶人か俳人かお比布着て頭巾被つて木の間を縫うて行くのもあれば、海軍服着て、芝山に鬼ごつこして居る子供もある、床机に腰を下して小高い所に休んで居る奥様連もある。「おや筧様ようこそ」と癇高い聲がして後の庵から出たのは小い丸髷に小紋縮緬の二枚重を召した少し肥滿り肉の當家の奥様である。「はあ、先夜は失禮——一寸お近を通りましたから——大變紅葉がよく染りましたね、」「被入まし。」と萩子に一禮して、「丁度今日が見頃て、之で一雨參りますともう駄目で御座います——御歸りにはどうぞ宅の方へ御寄り下さいまし御待ち申して居ますから。」「有り難う。」



元此庭は區の公園となる噂も在た程であるから其廣い事はいふ迄も無い。今は一人の所有となつて居るが、出來る丈の手を籠めで造り直したの故、小石一つ苔一叢も假染に置かれてあるのでは無い。秋の色は瀧野川も海晏寺も遠く及ばない所があるとの噂は誤ではあるまい。飛石を傳ひ傳うて一村茂る老木の蔭を抜けると、細やかな棚に色を紅葉と爭ふ烏瓜が幾つかぶら下つて居る。其下を抜けて折れ曲つて上に出ると茶室がある。「どうぞお入り遊して、」と島田に結つた少女が二人居住を正してさつそく茶をたてる。筧は自分も飲み萩子にも進め一つ二つきぬかつぎをものして軈て其所を出た。

紅や黄やの枝を交した間から、鏡の樣な池の面が見下されて、彼方此方ちら／＼とうち連れて行く人の衣も、晴やかに美しからぬものは無い。「どつか靜な所で休まふかな、」と筧は獨言ちながら木深い方へ入て行く、山の中の樣な老木の中に切株が丁度よい腰掛になつて居る。筧は先腰を下して、「萩さん、先刻話度といつたのは何、此所で聞かう。」「何だか――此樣な所で人が見たら變て御座いませう。」と云には構はず、筧はじつと萩子の面を見詰めて居たが、軈て雪の樣な手をさし延べてむづと細やかな手を握り締め側に押し据えた。萩子の胸には波が立つ――あゝ暖い其手、我が命を托した其手が怨しい。これがどうして我が世の限忘られよう。清い心の操をよいおもちやにして、さんざ弄んだ上句の果、腐つた草履を塵塚に打捨てるやうに打捨つてしまつてそしらぬ顏に押し通して行く……：「萩さん、萩さん早くお云ひ、さ早く、」「筧さんあなたは……餘りお甚う御座います――よくもあれ迄に私を弄んで下さいました。」「はツは何をいふかと思つたら、」「あなたは餘りで御座います、私をよいおもちやにして下さいました、お隱し遊しても私は私は何もかも存じ上げて居ります。」「何時私が萩さんを弄んだといふの？萩さんは私に犯された覺があるの？」「はい、私の申すのは心の上の事で御座います。恐な私の心をどれ程迄に弄んで下すつたかはあなたの御胸にお聞き遊ばせ。私はどうかして、どうかして貴方の御爲に死に度とばつかり思つて居ましたのに――もうもう御心がお變り遊して……そんな方とは夢にも知りませんでした……」「何を云ふの、それは、はつはつ、、、、萩さん私と一緒になる樣なつもりだつたの、私は是迄一度も結婚の事に就ちや萩さんに云つた事は

無い意だが、萩さん一人て極めて居たのだらう、よくお聞き、戀と結婚とは別だよ、私は近い中に比野禮子と結婚する。けれども萩さんを打捨るといふのぢや無い、私の萩さんに對する愛は生涯變らない。」「そんな事を、そんな事有仰つたつて……」「まあお聞き、愛と結婚とは別問題だよ。」「そんなら何故始からあんな事を……」「萩さん一人てきめて居たのだらう、そりや間違だ。」「今更其樣な事仰有つて貴方は御不人情、全然私をお騙し遊して……私はもう一生……早く死だ方が……もう貴方とは御交際いたしますまい。聢と奥樣がお極り遊してながら奥樣に有仰る樣な御情深い御言葉頂いては第一奥樣に澄みません。もうもう私は貴方といふお人には一生御目にかゝらない方が宜しふ御座いませう。今日限御交際いたしますまい。」思ひ切た事いひ放つて見ると、あ、言ひ過したと早くも悔ゆる心が湧て出る。心から憎む事の出來ない人を憎體らしく罵つた跡の詫しさ悲しさ。一變して一途に其人がいとほしい。「餘り萩さんは氣が小いからいけない。さう向に成て怒られちや叶はない。結婚といふ事は何もさう有り難い物ぢや無い。結婚は愛の墳墓だといふては無いか、私は萩さんと結婚するのは惜しいと思つた。二人の美しい戀を永遠に命ある物として存して置き度ばつかり、之が分らないのかよ、萩さん、私の心が分らないのか、萩さんは私を捨てゝも私は生涯萩さんを忘れやしない。其意て居ておくれ。」もともと女には、愛と結婚とは一つの物とよりしか思へない。天地は廣くとも夫の他は誰を愛しよう。愛は即夫、夫は即女の命である。と、思つて居るが、今から權威を以ていはれて見れば然ても有ふかとも思ふ。我が心は淺くて男のいふ言葉の意味は分らず、理非の辨別は付かぬ。從つて強て爭ふ力も言葉も無く唯いひ知らず悲しく、いひしらず懷しい情は小川の水の淀みなく流れる樣で、あかず厭かず男の手に縋つた。かういふ時ほろりと涙して怨むのもしをらしい物だと、男は芝居を見る氣て萩子の襟の後れ毛の打顫ふのを見て居た。

覓といふのは甚く自負心に富んで居る男、何時も異性の心の我に靡いた時の得意、それを以て内心唯一の誇として居る。だから、決して下賤な女や上氣な娘に手はつけぬ。相當な女子敎育を受けた物堅い家庭の淑女や、高貴な人の妻君を、其魔力ある目と手て自由自在にする事を得るのが此の男のまたとない誇てある。道

樂である。如何に我力の大なるかを認める爲には女の涙を見る必用がある。瞋恚の焔の立ち上るのをも見る必用がある。其道に於てはまた實に事業の他の天才であらう。

「了つたらそれていゝ、」と立ち上り、萩子の手を引いて深山の樣な老木の陰を出た。秋の日は暮れるに早く、ぱつと紅葉の上に餘光を投げて居る。眉目秀麗な男の面は輝くばかりて、花の色にも見る事の出來ぬ薄紅が兩の頰に漂うて居る。

いつか御庭には人影が寂くなつて、池の小船も乘り捨てられたまゝ、四阿の下の床机も仆れたまゝになつて居る。「おや此方に居らしつて——先刻からどんなに御探し申したか知れませんのよ——どうぞ宅へ仰入つて頂戴。」と華美な飾をした十七八のお下髮の令孃が息をはづませて駈けて來た。「今日は少し急ぎますから又次に、皆樣によろしく。」と彼はすげなく言ひ捨て、華奢なステツキを曳きながら植込の中の小徑を辿る。萩子はさもおもはゆげに二尺八寸の紋縮緬の羽織の袖底を弄りながら、何か令孃に澄まぬ事でも爲たかの樣に態と男に後れて歩む。一番頂上の茶室の前を通り拔けて、竹の荒垣に添ふて下阪に左へ廻ると大玄關の前へ出た。二足の履物は塵を拂つて並べられた。令孃は手づから一足を進め乍ら、顏ふり上げて「ね、一寸御寄り遊したつておよろしいぢや有りませんか、」と恨めし相にいふ。萩子よりは年下であらう。之はふつくりとした如何にも可愛娘である。「いづれ其中伺ひますから皆樣によろしく、それては失禮」と無造作に別れる。萩子も默禮して別れ、二人靜に歩いて、一際美しい門の紅葉の蔭に陰れた。令孃は玄關側に二人の影を見送つたまゝ、何時迄も何時迄も立ち盡す。

（評）主人公のデカダン風の性格、婦人の觀察としては珍しい、ストークの諧かなのも可いし、終りに苦勞知らぬ令孃を點綴したのも妙、文章もなか〳〵黑つぽいものだが、比較的會話が拙い。

四等　○預け子

京都市上京區室町通今出川上る殿きみ方　小笠原あき子

夕飯の後仕舞を指圖し乍ら臺所の火鉢に、炭を繼いで居ると、常時の樣に、中庭の潛戸を靜かに開けて、流元の反射燈を眩し相に避けつゝ、俯目勝にトボトボと入いつて來た平助は、自分の姿を見るや否や、俄に、六尺程の間に幾度か辭儀を仕て上框まで來た、奧樣、誠に有難う御座います、お陰樣で今日も働かせて頂きまして……エ、清の餓鬼には、定めて毎日御迷惑樣

て御座いませうに……」と朴直な言葉つきの中にも先づ清一の安否を問ふた「ォ、平助さん、マア御掛け、今お歸りなんだね、ほんとに毎日御苦勞樣て……清チヤン今日も靜寂しかつたよ、先刻から良く寢だから其儘にして、まだお乳も上げないて……一寸御覽、彼所に……」と妾は道雄と一所に寢かせて有る中座敷の清坊を指した、平助は清一が今日も靜寂かつたと云ふ事と今現に良く眠つて居るのを見て、ホッと一と息、安神の樣な心入れて只、へ、ー左樣て御座いますか、ドーモ誠に……」と頭計り下げて居る「さ、夫ては、お乳を一ぱい上げて……」と云ひつゝ、清坊を抱いて來たが、おゝ良く眠つて居る事！、緩るく結んだ蕾の樣な其口に折々微かな笑をさへ湛えて……、エンゼルの琴歌に喜ばされてか、亡き母の守謠に慰められてか、ア、夢は何地に遊んて居るのかしら。

「肥立時だから良く眠るのは宅の道雄も同じ事よ、、マア其中に目が開くてしやう、併し一日振に早く抱いて



船大工　本郷　渡邊ゆかり

見たいてしやう」と云ひつゝ、清坊を渡すと、莞爾として、割物ても扱ふ樣に頑丈な手て恐る〳〵抱いて熱と清一の顏を見詰めた、暫く話が途切れて臺所の電燈が光を平助の上に浴せかけて居る、顏も手も、黑ずんだ上に憔れた頰の何となく凄味を帶びて、肘や膝や所々が破れた工場服が油や炭粉の塗みれて黑光りに光つて居るので只、モー黑い計り白く見ゆるのは眼の光り丈けの平助が清一の爲には苦心して僅かな勞銀の中から着せ付けた、小瀟洒とした、モスリンの袖丈も寬くりとした、一襲ね、二襲ね、涎掛まて純白の、レースの飾り付き！若も恐れの目て見るなれば、人喰ふ鬼がエンゼルの子を捕へる樣な有樣てある。

「ね、平助さん、お前さん仕事中にも隨分清坊が氣になるてしやう!?」と尋ねると、平助はさも感慨に堪え無いやうな面持て、ホッと肩て一と息ついて、語り出した。

「夫りや奥樣、親子の情て御座いますもの、仕事の間にも、亦餓鬼めが泣いて居りやしまいかと云ふ樣な事

も思はんては御座いませんが、否々其の様な事思ふ時ては無い、工場の方ては旦那様に御目を掛けて頂くし勿躰なや、奥様のお情て、毎日々々清めの襁褓のお世話迄仕て頂いて居まりすのに、若し其様な事に氣が引けて、蒸滊の壓力ても落さうものなら、旦那様には大の不忠義、奥様には又何として申譯が立うかと氣て氣を勵ましまして、火口開けては石炭を投げこみ、只燃え様計りに身も心も注れて居りますが、六時の滊笛が鳴りまして交代が參りますと、ヤレ嬉しや、早く餓鬼をおもらひ申してと思ひますると、急に疲れが出まして五體が綿の様に、モー、落然と致しますが、何と奥様、因果なものぢや御座いませんか、其の身體の疲れ切つたのを知る時程嬉しい時は御座いません。夫から斯う仕てお宅様へ伺ひまして、餓鬼をおもらひ申して歸りますが、疲れ切つて萎え切つた腕には、毎日毎日清めが重うなりますのが、メキ〳〵と身に徹へます、有り難い事て……皆奥様のお蔭て……定めて死んだ嬶が草葉の蔭から手を合せて拜んて居るて御座いませう、へー、モー、石炭の一塊ても持ちかねる程力の拔けた手て重う成つて行きます清を抱く時の苦しさ程嬉しい事は御座いません。

歸家ましても、燈火一つ付いて有るぢや御座いませず、漸々の事て火の一つも起しまして、清を膝に抱いて一服いたします時にはサー色々な事が胸に浮いて參りまして……、早いもので御座います、嬶が産後の病ひて死にましてから、モー八月になりますが、彼奴が居つて呉れゝば、何も知らん此の清まてが此の様にまて難儀も仕よまいに、男手の是から先を何う仕様かなぞと思ひますと生きて居る身がはかない様な氣に成りますが無邪氣な此奴の顏を見ますと、イヤ〳〵自分が働かねば……清まてが飢死せねばなるまいと、疲れの中にも元氣が出まして、又清新しい氣持の良い心になりますが、此の時ほど嬉しい事は御座いません。世間ては樂しい時に喜ぶが習ひて御座いますのに儚い私は、いつも〳〵悲に慰められて居るので御座います」と、感慨に打たれた四十男の涙が、ポタリ！と一滴清坊の顏に落ちたが、何に愕いたのか、俄に目を醒まして、泣き出した。

（評）如何にも女性の作らしく、やさしい情味が溢れて居る。思想も浮薄ならずして、多少實生活に觸れて居る點が殊にめでたい。世間は樂しい時に喜ぶのに、自分はいつも悲みに慰められるのみだと云ふ主人公の述懷も痛切だ。

五等

○暗流

京橋區南傳馬町三ノ一〇四村方　をばな

日曜日の午後、自分は少し調物があつたので、好い天氣だが、何處へも出ず、机に向つて、獨りてこつこつやつてゐた。

妻も傍で神妙に自分の羽織を縫つてゐる。

恐ろしく神妙だ、一寸顏を見ると『自分は妻ぞ』といふような風が顏に見える。——自分の方に向いて、せつせと針を運ばしてゐる姿——。

自分は聊か可笑しいような嬉しさを感じて、ほゝ笑み乍ら書いてゐると、ふと顏をあげて自分の笑顏を見付けて、

『アラ、何を笑つてゐらつしやるの？』

と、自分も何か思ひ出したか、嬉れしさうな蓮葉な調子。

『む、いや、なに、一寸・・・・可笑しいことを思ひ出したものだからね……。今日は日曜だつて言ふのに、大變勉强したからお茶菓子でも買はうかね。』

と云ひ乍ら、筆を擱くと、自分の顏を見た妻は、突然大聲て笑ひだした。

『なんだ、なんだ。』慌てると、

『鏡を御覽なさい。』

と、まだ笑ひ止まない。

鏡を見ると、成程何時つけたか、鼻の頭が墨だらけ、日曜はこんなことを言つてゐるのが、一番多愛ない。手拭を濕らして、鼻を拭いてゐると、

『今木君は、お在かい？』

といふ聲がする、同僚の村山だ。少し醉を帶びてゐるらしい。妻が出て行つて障子を明ける。自分が出て行くと案の錠村山て、挨拶をしてゐる樣子だ。

『やあ、お在てか……』と這入つて來たが、思ひ出したように格子の中から首を出して、

『まあ一寸這入らないか。』



散步　上總　池上しん子

と、大聲に言ふ。
返事をしたかしないか、足音がして、會釋をし乍ら女の姿が現はれる。友の妻だ。
束髪に結つて、紫縮緬の羽織を着て、細い柄の洋傘を持つてゐる。
「今日は……先達てはどうも……。」
頭を下げる。白い襟足だ。
「これが今木君の令閨だ。」と、友は妻を指して、それから自分の妻を見乍ら、
「これが荊妻です。」と云ふ。
「お初にお目にかゝりますついかけ違ひまして…………」兩方同じような事を言つて、叮嚀な挨拶を仕合ふ。
村山君が、今日はこれに强請られてね、上野まで散歩に行つた譯さ。」と笑ひ乍ら言ふと、妻君が、
「ほゝゝゝほ。あんな旨いことばつかり……。」
と、桃色の手布で口を抑へて笑ふ。
「まあ汚いが上り給へ。」と自分が云ふ。
妻はつと立つて奥へ這入つて行つた。
友と妻君が座つて了ふと、妻は茶を持つて、出て來た。その時は髪をなでつけて、新しい羽織を着てゐた。
自分は何だか厭な心持がした。

二言、三言、戯談を言つて、友はちら〳〵歸つて行つた。
友の妻はその間、顔を下げて、たゞ時々つゝましげに笑ふばかりであつた。
妻は、頭から襟から帶から指から衣服から、五月蠅いほど友の妻君の姿を眺めてゐた。
二人の姿が格子の外に見えなくなると、妻は、妬むような嘲けるような、冷やかな色を浮べた。さうしていつまでも空をみつめてゐた。
「良い姿をしてゐるだらう。」と自分は皮肉を言ふと、妻は心付かぬらしく、
「あの指輪についてゐるのは眞實のダイヤモンドでしようか……。」と云ふ。
自分は何だか、侮辱されたような氣がして、
「然だろうさ！」と冷やかに言ひ放つ。
それでも妻は心付かぬ。
「あの位の帶ならさう高くはないでせうね。」
と、又云ふ。自分はもうそれには答えなかつた。
それからの日曜は、自分は笑顔を見せたことはない妻も始終何か考え込むだり、不滿らしい顔ばかりしてゐる。

（評）女の嫉妬心から發する一寸とした弱點を捉へたもの、文章は迷者に過ぎて寧ろ悪趣者に近い、恐らく女性の作ではあるまい。

日記文

中村枯林先生選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以內、用紙前同斷一人一章限り、投寄締切毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

二等　○小春日和

小石川區戸崎町五　三宅紅子

十月十九日。小春日和の空美しき日なり。學校にては近く佛國より歸朝遊ばさるゝ師の君の歡迎會の準備にて忙し。

歸校の途、小學の友なる久樣に逢ふ。五つ許の妹君つれ給ふ。時々、小さき紅の洋傘ふたむけてゑくぼの面に仰ぎます可愛き方。あどけなく飛び廻りて昔語りて互に打笑ひつ。

今宵は後の月、さやかなり。くさ〳〵の物供へてうから打集ひ樂しうまどゐす。味よきまゝ、食べすぎずやと母樣氣遣ます程、おだんごいたゞきぬ。

二十二日(曇)。秋の香に笑む野菊ゆかしきに、一枝手折りてお離にゆけばよう御出だと御ばあ樣にこ〳〵。例ながら爐には松風の音高し。御許うけて釣花瓶の龍膽を手にせし花とかへしに愛らしと喜ばる。わざ〳〵薄茶を立てゝ給はる。お暇せしは、夕日纔の白山茶花に赤うらすづく頃なり。

明日は雨にや、常になく汽車の汽笛耳ちかう鳴る。あはれ、彼の響と共に幾百の思やのせ行く。すがれし蟲の音も絶えぬ。ばさと土を打ちしは桐の葉ならん。明日の下調をへて後はランプの油わく迄讀書の興にふけりぬ。

二十三日。雨細く。濡れし秋海棠艶なり。夕、姉上より御文あり。一日には丸髷にて來給ふと。逢ひまつる嬉しさに胸躍る。高島田品よく似合ひ給ふと見參らせし姉樣も……さぞや緋の手柄ふさひて、新妻の御姿美しからめとほゝ笑まれき。

祖母樣はじめお話はつい其事にばかり。くしき迄其日の待たるゝかな。時計の針のいつになう遲しと喞たるゝも心からなるべし。

(評) 文に些少のたるみなく、結末最も妙。女子としてあらまほしき德のかず〳〵さへうかゞはるゝゆかしさ。美しき筆やさしき心再誦なほ飽かず。

三等　○雨中の思出

千葉縣夷隅郡大多喜町　新井くに子

いやに陰氣、病院にても呻吟してるやうな日。朝から晩

まて、軒端は玉水の音しげく、行く人は皆傘持つ人ばかり。

前の小川のさゝやきも、平日より騒しく胸に響く。ふと障子を開けば、昨日まで川の面に、美しく微笑を湛へた岸の撫子も、朝からの憂き雨に悶えてか、僅かに川面を掠めて、なよやかな姿をうつしてゐる。さながら昨日まで、希望の色に滿ちてゐた少女子の、あはれ今日は仇波に、むくろ晒したかの樣、鉢植の牡丹も、黄味がゝりし葉の多くなりしよ。あはれ、運命の神は何處にてこのやさしの少女子を誘はんとするか。

いやに陰氣な日だ。かゝる日に罪ある人は死ぬのであらう。六時頃は燈火も、ちらほら木の間がくれに見へる、頭は愈々沈む刹那、妹の簷端につるしゝ、風鈴は鳴つた。

陰雨しきるこの日、この風鈴の怪しき音は、妾が思出の胸に强う響いて、なにとはなしにぞつと身ぶるひがした。

夕暮の雨は細う、山も杜も林も、風におのゝいてゐる。金山城趾一帶の峯々、雨けぶりて叢深き、加田の森の野狐の聲、一入耳に澄みわたる。

杜は靜かにねむつてゐるやう、山も川も靜にして雨すら音もない。

あゝかくて思出多き、この夜も、山寺より靜に撞き出す。鐘の音とともに更けてゆく。

（評）鬱陶しき雨の日の感想よくあらはれたり。

四等　○春雨日記

三重縣　長井漣月子

三月廿三日、雨。

絹糸のやうに細い雨が霏々として、時々横に降る。晝まて例の通り、奥の四疊で東京の弟に送る袷を縫ふ。午後、久々にて芳子さん來る、話中々につきず、夜玉蟲をよむ。

三月廿四日、雨。

寐床の中で目を覺すと、シト〳〵と云ふ音が聞える、又雨かと起き上つて戸をあけると、庭の梨の花が散り亂れ泥にまみれてゐる。雨の小止みの間に、兄さんが菊の根分けをする。午後弟が學校からかへつて來て、今日の作文がよく出來て先生に賞められたと自慢をする。袷がやう〳〵出來上つたので、小包で弟の許へ送る。都に居たなら嘸金が入るだろうと、母と相談して父に內證で、金三圓袷の袂に入れてやる。雨夜に入りて止まず。

三月廿五日、雨。

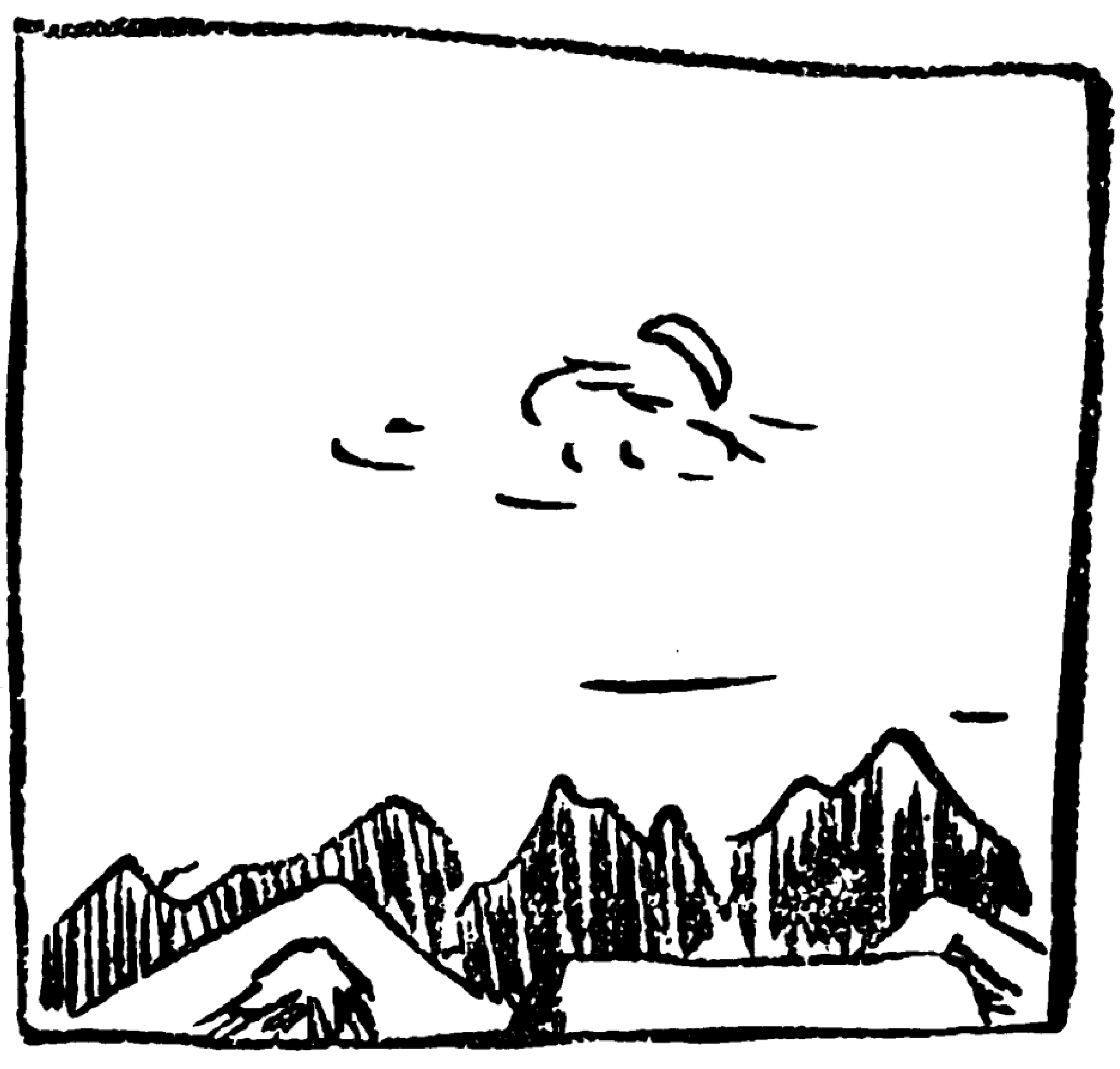
朝、なつかしい靜岡の春子さんから、和歌一首かいた繪はがき來る、すぐ返事に水彩繪はがきに俳句一つかいて出す。未だ雨はやまないかと障子をあけると、蝸牛

が一匹椽に這ひ上つてゐる。雨は中々止みさうもない。

三月廿六日、雨。籬のそばの山吹が咲きそめた、橋一つ向ふまで紙を買ひに行く。途中でシヨボ〳〵雨にぬれながら行く婆さんの乞食に會ふ。餘り可哀相なので、紙代の十錢の内五錢だけあげたら、涙をこぼして喜んで幾度か禮を云ひながら行つた。妾もなんだか心持がよかつた。かへつて原稿をかく。夕方より雨やむ、夜に入りては星の光さへ見ゆ、あすは天氣であればいゝが。

（評）特質の筆、雨も情あり、涙あり。日記文の好模範。

三ケ月　京都　壽士すみ



五等

○蝶日記

佐世保　いちじく子

一日。庭の桔梗に一羽の蝶たわむる、色の對照の面白さにつく〳〵見入るほど、父上にこやかに「里また蝶か」とほゝゑませ給ふ。

二日。朝まだきより日頃愛する菊畑へゆく。黄菊白菊打ちまじりていとうるはし。露をよすがに咲き出でたるやさしの菊、一枝手折らんとすれば、亂菊の下葉に眠れる胡蝶のあたゝかきゆめを驚かされてか、忽ちなく、舞ひ行く。よしなき事しぬ、免してよと蝶にわびにき。

三日。小雨しと〳〵降る夕つ方、淋しくて唯一人窓にもたれて庭を眺め居りしに、郵便と一聲、常は兎もあれ、かう淋しき折からは、いと〳〵嬉しうて、いそぎ取りよせ見るに、美しの繪葉書、二羽の蝶々のすみれにたはむれ居り、たれよりと見れば、日頃戀しき蝶子の君よりの音づれになむ。己が身も何故に蝶子と名づけざりしかと友の君のうらやましうて。

四日。例の事ども話して食事にかかる、ワツトマン用紙に、黄白の蝶落花など書きて、昨日の返事に送りぬ。母上、糸山より妾の帶にと羽二重友染をとらせ給ふ。矢張勝色地に蝶の摸樣を撰ぶ。父上「里は蝶でなければ夜が明けぬ」と笑ひ給ふ。

五日。夕つ方弟のすさびか、片翅もげし胡蝶のむくろ一つ見出でぬ。悼ましうあはれに思ふものから、小さ

き箱に入れて庭の片隅に葬る。愛らしき白粉の花手折りて手向やりぬ。變りやすき秋の空の、さてもにび色の雲の低さよ。今宵もし雨降らばあはれ可憐の胡蝶塚崩れやせん、流れやせん、心もとなくてともすれば、はし近う出てゝは雲のゆきゝのみ打ち眺められぬ。

（評）雨ふりて蝶の塚の流るゝを氣づかふところやさし。

秀逸

○二日記　[illegible]女

十一月二日、お天氣。

冬とは云ひながら今日はよほど暖い。昨夜縫ひ上げたもんはぶたへの羽織を、着て見る。少しちが下りすぎるものゝ、然し色は氣に入つた。あの小紋の着物にうつるかしらと、又一寸出して、振りを合して見る。オヤ豆やの鈴が聞えるもうおひるかしらん。

午後久しぶりて髮結のお常さん來る。生れて始めて島田に結ぶ。おもい、鏡を見たら、平常の私てない。立つと背の高い私は、もう少して天井につきそう。

明日は青山の姉さんの處へゆくつもり、島田に結つたゆゑじばんの白襟を取りかへる、七草模様の色衿と。明日のお天氣は、どうかしら。

三日、天長節。雨天、折角のお祭日もめちや〳〵、家てお祝する。道雄さん入らしやる、皆ておひるを一緒に戴く。魚やが來なくて何もない。相變らずお口の惡い道さんは、島田を見て新しい材料ても見つけた樣に、からかつて困つてしまう。兄さんまて加勢しそう。然し味方の「梅」も中々しつかり仕返しする。さわがしいお午飯だ。

今日はお天氣だと慶應と布哇のベースボール仕合があるのに、雨でお流れ。つまらないと道雄さんはこぼしどうし。歌ても咏んて見たくて考へてると、道雄さんが『歌が出來るとは珍無類だ』つて、兄さんまて『よしてくれ嵐になると困る』つて、憎らしい御二人だ。臺處からは、梅やが「お孃さまお敗け遊ばすな」と大きな聲をする。やつと、

「天長の佳節や雨の細うして、」と上の句だけ出來たが、下句が出ない。あとつぐ樣な風流な二人てもない。坂本さんから、坊ちやん御出生のお祝餅を戴く、紅白の美しさ。もう臺處てはしるこの催促らしい靖雄さんの聲。

夕方お歸りなさる丸て大荒しの後の樣。

明日はお味噌を造らうと思つて、懐かしいお母あさまのお遺物となつた覺帳を出す。

「大豆二升に麹三枚の割合、しほ七合前後、但し麹の多いほど味よし」

お家流に書かれてある、紙にちよい〳〵虫喰の跡が。ふとお母あさまの事を思ひ出して淋しくおもふ。雨は中々やみそうにない。兄さんのお書齋からお得意の尺入が、曲は例の「みなしご」らしい、妾の元氣もどこへやら、何んだか氣がめ入つて仕樣がない。

（評）　輕快の筆、又味ふに足る。

○わが日記　長門　新田ひし花

十一月七日。霜どけの暖かき日なり。檐に囀づる雀の聲のいとゞしく心地よしと、母上のお詞なり。末の弟風邪にかゝりてなほ癒えねば、ひねもす負ひなどして慰む。

母さま、關口までゆきし序に、友禪の半幅買ひたりとて見せらる。千惠子が襦袢の袖にどうかと、まことに恰好なるよと思ひぬ。

同、八日。朝、茶の間にありて何やかやと整理す。その時、物の器の間にポッリと鼠の糞の落ちたるに、アラと見かへれば、横着な奴かな。大の鼠一匹棚の中より馳せ出せり。後にてよく見るに、これは又、重ねおきたる半紙を、二帖までも小刻みに嚙り居れり。弟の歸りてこれを語れば、「だから、姉さんは駄目よ」と肩をそびやかして言ふ。罪なき兒よ。

夕餉了へて臺ランプの下に、母子集りて縫物せり。末の弟も、今日はいたく快よくなりて、スヤ〳〵と眠りつ、千惠子、時雄も床につきて、夜はたゞ靜かなり。

同、九日。風吹き出づ。庭の樹の葉は大方落ちつくせり。小菊らなだれて哀れなるまゝに、手折りて床に挿す。父上は頭の具合些し惡しとて學校を休まる。心配なり。午後風少し和ぎたれば、裏に出て大根引く。青き葉房々と蟲の害もなく生ひて、驚くばかりの根をもちたり。父上にお美味しく膳立してすゝめぬ。

同、十日。朝、隣所の伯母さん來らる。いろ〳〵と物語りして、午過ぎ歸られたり。風になけれど、寒さは骨を徹す許りなり。臺所に炬燵をかけて、弟妹等はじやんけんなどして面白く戯れ遊べり。末の弟も今はその仲間なり。

（評）　何の奇なしといへども、些少のいや味なきはうれし。

○菊花日記　熊本　秋月澄子

十月二十二日。朝まだきに起きて庭に出づれば、日頃父上の丹精をこめ給ひし花壇の菊白色なるが半ば綻ぶたゞ一つなれど香り高う、げに心地よき朝なりけり。

同二十三日。綻び初むる花の數いよ〳〵ましぬ。

同二十六日。淸き香は庭に滿ち、枝もたわゝに咲き出てぬ。あゝ霜におごれる風情のさても潔き事よ。秋の千草の數はあれど、色に香にさては姿態に、此の花ばかり優ぐれて麗はしく亦氣高きはあらじ。

同二十八日。近くにすみなせる友の君訪れ給ふ。かくも菊花の盛りならむとは思はざりしよとて喜ばせ給ふ。かくて共に花を愛でつゝ、幼き頃學び舍の庭なる

菊花を手折りて、かみにかざし、師の君にしかられし事など語りあひ、夕方花を持ちて歸り給ふ。

同二十九日。茸からんとて、幼き妹と二人家を出づ。絶えては續く小徑を辿りて行くに、茅舍の片ほとり、荒れ果てし籬のもと、ふとき少さき花咲き出てゝ、撓めず作らぬ自然の趣床しさは、たとふべきものもあらぬ程なり。

同三十日。外に出てし妹の、野に遊びたりとて、黃なる野菊をもち歸りぬ。花壇の花とくらぶべくもあらねど、小さき瓣の愛らしく、げに紫匂ふ幕引きまはして、野趣掬すべきの情致は空しからじ。

同三十一日。東都なる友より、菊花のゑはがきにて、御邊りの香如何ならむその千代こめたるめでたさ少しなりとももらしたまへやと云ひこさせ給ふ。さても優しき友の心よ。

返しには、白菊一輪巻きこめて參らせぬ。願くば君が御手に披かれんまで香り消えざれ。

十一月二日。白きも、黃なるも、深紅なるも、共に眞盛りなり。あゝさても淸き薫、氣高き姿態よ、菊花のほとりにたゞずめる妾は、暫時恍惚たりき。

同三日。生花の料を剪らんと庭に出づれば、露をおびたる風情の一入なり、今日天長の佳節を花の盛りと咲き匂ひて、榮えありなこの花。最も枝ぶりよきを撰びて、四本五本剪りぬ。うるほひし秋の何となうかをる心地せらるゝ思へばこの菊はわが帝國の御紋章なるを今日の秋晴れにうちなびく旭の御旗と共に、日本島根の民草が祝ひ壽く色に出てゝ、如何に麗はしく又如何に榮えある事ぞ、さらば打靡びく御旗の下蔭淸き香の薫る邊、さゞれ石の巖となるもつきせぬ御世を祝ひまつらむ。菊花よ。

（評）菊の香のゆかしさ筆にもやゝにほへり。

○集め葉

岩代　根本松江

六日。晴。門に人あり、親友より紅葉狩りの誘ひを受く。此忙はしき中を呑氣な人達よと、撥ね付けて返す。庭に下りて木の葉を掃く。木の葉は種々、黃あり、紅あり、綠あり褐あり、さあれ落ちたる葉の吾は好まず。夜、里芋に頰ふくらして、お膳叩きたる妹を、女てなきかとたしなめて、柿の皮むき手傳はせ乍ら、今二ケ月もあるお正月の遊び事、彼れやこれやに秋の夜更けぬ。

七日。曇り。甘いを先口上に、友の君より送られし豆柿、口の中縮まん斗りの澁味にて、今日のみ朝茶の味は知らざりき。

月々都へ送りたる書狀の代筆、其御禮にて候と、リボン惠ぐまる、色は濃茶、某々女史と自ら名稱りし以前は知らず、今半衿娘の銀杏返へしにリボンは用なし。

其儘妹の手箱に秘めぬ。

夜おそく迄運びたる針の手止むれば、火鉢のみ戀しうて、此月の原稿、出來相もなし。

八日。曇り。さんま〳〵と振れ行く聲、寒い々々と聞き違へぬ。殊に今朝は大霜なり。毎日同じ事のみくり返へす術なさ。日誌の手前、今日のみ畑に出てゝ大根堀りを手傳ひぬ。働くとは辛きもの、されど働きて後の休みは嬉しきもの、田園生活の趣味とやら玆に在るらむ。夜。湯上りに熟柿喰べ乍ら弟妹と、三日の月を杜の彼方に眺めぬ。此快や都人には解しえざらむ、僞りは田舎の禁物、夜更けて鷄の嘀く聲ほのかに聞きぬ。

(評)　詩趣ある筆つき。

(又曰)紅葉狩の謡を授付けては、あながち妹の御轉婆をたしなめ得ざるべし。矛盾は世の常と云ひ抜け給ふやいかゞ。

餅じまひ　岐阜縣　咲く花子



○日記の内より

芝　吉田あい

十一月九日。晴。河崎様から御手紙が來た。(病みては、たゞ、お健かなる皆様が羨しう候)つて、マア何と云ふお可哀さうなんてせう。いつも〳〵河崎さんの御手紙には泣かされる。早速、御返事を上げたが、私の拙ない文ではお慰め申すことが出來ないから殘念だ。私はかげながら一日も速く全快なさるやうにと祈つてゐる。夜、母様は正雄と竹をつれて不動の緣日へ行く。私は代數の復習をする。

十一月十日。晴。今日は日曜。ポカポカと暖い日。朝から筆をとつて何を書くともなく机に向つてゐた。午後、短文「雪空」を作る。投書したいのだが、きまりが惡い。日暮里の靜枝さんから、ご自筆の水彩畫の繪ハガキが來る。『稻刈』の圖、表面に(今はこれで忙しいのよ)と書いてある。羨しい。日比谷に音樂があるとかて、竹は。正雄をつれて行つた。夜、西洋史を暗記する。

十一月十一日。晴。作文の時間に、木曜日に出した作文を、大林先生から返していたゞく。「甲」てあつた。市川の叔母さんが神戸へ立つたので、新橋までお見送りする。今日は母様ご手製のおすもじの御馳走。母様には云はれないが。アマリお上手ではない。夜、文學史の復習をすましてから、昨日作つた短文を淸書する。やつぱり投書する氣——。

(評)　母上の陰口、おそろし。

新體詩

清瀨夜雨先生選



▲規定　詩形詩語何れも自由なり、成るべく振假名を多くし、句數は二十句以內とす、用紙も締切日も前同斷、一人一篇を限り明瞭に認むべし、懸賞は甲種の規定に據る。

二等

○寂寥

信濃　ウヲリー

神無月――空合寒き夕なり――
戀の十字架を失ひし、
鈍の破衣に世がくれて、
木立氣深き山寺の、
きざはしくづれし鐘堂の、
永劫の光を掩はれて、
法音は我世に埋れたり。
唐彫刻古りし御扉を、
淋しの魂は唯一人
足どりたゆげにとぼ〱と
荒れにし庭をさまよひつ
鐘は疑惑の銹深う
佛の御座に導きの
ものなき氣はひ本堂の
ほそ目に開けてうかゞへば
（蓮花の香消えうせて、惠の佛の聖龕もなう）
つゝ胸を射す寂寥や――
愛に餓たる魂には、
灰色深き「悲み」の
佛の御座も遠くして
双翼のかげによろ〱と
よろぼひ入し我魂よ。

（評）技巧と內容と相俟つて嶄然頭角を露はしてゐる、この君の他に優りて或る深き物を有するは天分かも知れませぬ。

三等

○土塊

土佐　山の女

きさらぎの寒き夕よ、
霜凍る石を運びつ、
怖し礫道に、
鐵錠の音とまじりて、
四人は今日も來りて、
力なき息をつゞくる。
ひき苦む轍のひゞき、
大なるさとしを見せぬ。
あたひなき命ひとつを、
（げに人はかくて日々、
昨日より今日より明日へ、運び去る――重き土塊）。

（評）人の生活を一塊の土に比したる、柔かなるべき女性の作としては意外なり。

四等

○秋愁

上總　ひさ子

夕なり、あはれ黑髮の、
日は白薔薇うなだれて、
しめりを亂す夕暗に、
萎むさびしき靜寂や。

斜めに垂るゝ雲の羽に、
水の面は低く皺みつゝ、
胸の亂れの末遠く、
しゞまを乗せて流るらむ。
汀の蘆の片ゆらぎ——

風はおちぬれ、鶏めるゝ、
思ひ出さむき忍び音に、
魂かや、おつる乾反葉の、

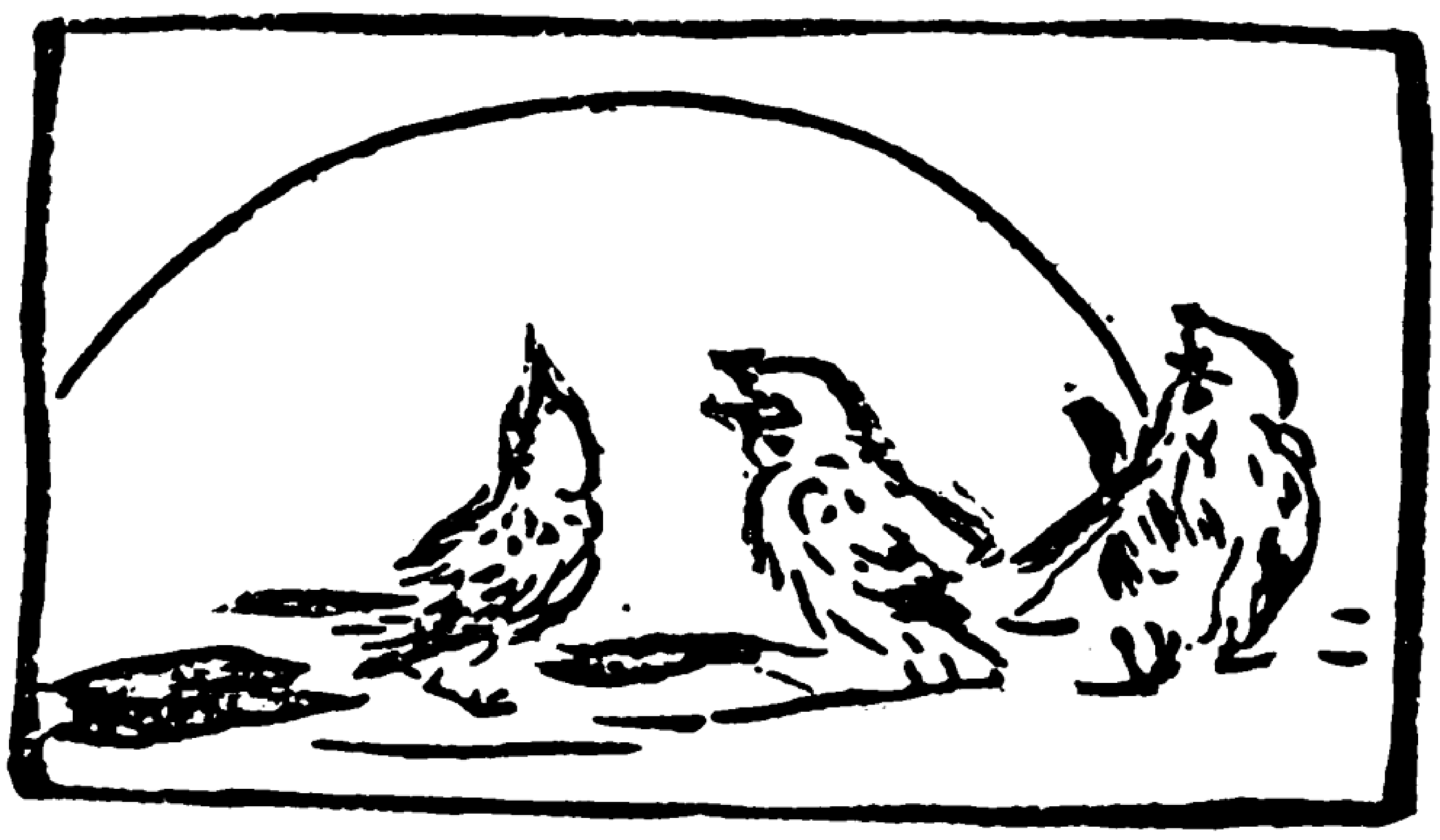
夢の中なる宵々の、
春は昔の花かげに、
雛をかざりしふる郷の、
荒れし軒端や吹きて來し。

寒き袂をかい抱けば、
胸の小鳥よ亡せにしか、
生命の聲も消えがてに、
空洞に似たる冷やかさ。

星は水の面に泣きぬれつ、鐘も許せぬさびしらを、
あゝうらぶれの袖たれて、泣くにも堪へぬ思ひかな。

（評）龍頭蛇尾。よく考へてごらんなさい末の方が投げやりになつてるぢやありませんか。

朝日のひかり　牛込　瑤子



秀逸

○鶏鳴く夜　牛込　秦よる子

白膠木の赤き實を飾り、狐が化ける山の峽
家裏の水澤の草、かげに、
鶏啼く夜の寒けさを、
光もうすき流れ星、
墜ちて生れしわれなるか。
煙さびしき野のゆふべ、
小さき花をかぞへつゝ、
枯れて丈なす草に寝て、
見しはみぬ世の母が夢、
銀杏みだるゝ岡のへに、
聖が袖にくるまれて
薄ら月夜のおぼろ／＼
見しはみぬ世の母が夢。
あゝ七堂伽藍紺色の、

み佛ひかる奈良にして、三笠の山の森陰に、
鹿なく宵を生れけむ。すゝき戰く小笹波の、
山をめぐれる野火の火の。うすら消えゆく曉を、
一人や人にひろはれし。鳥が落せし實ならねば、

寂しく生くるたましひは、
必ず故郷のあらんもの、
天の何處へかへるべき。

（評）この詩をよみて泣く者がかならず多からうと思ひます。

○塵捨場　　若代　根本松江

埋づ高う捨られし塵の襟々
騒然しき市の端れ、
ふと見返へれば金色の蠅は、單調の羽音殘して、
からたちの中に失れぬ。碎かれし玉子の殼の、
恨みある潔白き面よ、南瓜の肉の黄色と、
紫の茄子の皮と、風にさゆらぎ——、
（饐え腐りたる塵土の、臭氣ぞみつるその中に。）
曇りたる鏡の破片、朦朧かに——、
もつれ合ふ假髪や撚したる、何人の虚飾の最後ぞ、
（あゝ虚榮の世の爭ひに、汚れ果てたる罪の子の、
悔の犠牲のみ集めたる、市の端れの塵捨場、
見かへりて行き過ぎぬ。）

（評）もつと深いところを見つけて下さい。

○偶吟　　濱田　三明千鳥

罪の子等みな燒かばとて、日の大神み息荒く
今萬物を震はしむ

忘れるもの一様に、驚異の眼みひらきて
わとこそ叫べ世の嘆き　叫ひは來る——秋のこゑ
詩人よたてよ命運の、
今萬物はめさめたり

（評）秋風來。

○ぬりごめ　　埼玉　淺見なみ子

蛩の名殘をとめがてに、ほのかに光りし沼の水。
爭まけて野の物は、なべて無明の一色に
包まれはてゝ蘊めきぬ。
中にひとつの土竈は、螢束なげに暗黒の
强き力と戰ひて、うすら明りぬ—野つかさは
山ふところはやみは落つれど

（評）土竈の白壁では深い意味を籠めるとは六かしい。

○彩虹　　靜岡縣　藤本靜江

諧集輝り合ふ彩の瑞、杜の御神が集ひよる、
榮華や宴樂や驕樂や。
岩間を走る眞淸水の、愛の水泡消ゆるとき、
うつゝに侍る瑠璃羽蝶。
金鈴高鳴る御空より、空華散るしきり彩羽ぶり、

宴樂の舞踏は虹の曲。
諧ひつ舞ひつ天昇る、　玉の御橋の七彩を、
御天法に秘めて虹といふ。

(評)「虹の曲」よりは劣つてゐる。

○そよ風

本郷　中村ふじ子

麗人あまた髮なびけ、　舞ふとし思ふ木がくれに、
微風過ぎぬ。　玉はしる余韻のひゞき、
幽かにも、箏樂の音のほのきこゆ。
あゝやごとなき山樹の、　湖水を統ぶる古宮に、
いまだともりぬ。
微風は猶もゆるかに羽ばたきて、
小草の道をしのび行く。

(評) 秋の夕でせう。

○星

中込　谷　歌子

御空に煖めく小さき星よ　そも御身は何處に在す
高く高く空に散らしし　ダイヤモンドに似たるかな
日の御光の消え失せて　此の世を暗にかふるとき
小さき姿をあらはして　夜の下界をてらすなり
夜の旅人がなやむ時　御身が暗にかゞやかす
ちさき火花のなかりせば　如何で行手をたどるべき
破れし窓のすき間もる　御身はなぞやうるはしき
日の御光りのてらす迄　御身が光りを保てかし
御身が小さき火花もて　夜の暗路をてらす時
たとひ何處にいますとも　きらめきてらせ小さき星よ

(評) 西洋の童謡を聞くような氣がする、わざと圏點をつけない。

○畫きたる繪

越後　山田紫雲

戀ひにふるゝ筆の跡は　こゝろのかざす花なれや
冷めたき胸の白壁に　わが戀つひに繪となりぬ。
繪にのみのこす人なれば　壁なる影は消えざらむ
よしや百年命ありて　わが胸紅う老うるとも。

(評) 繪となりたる戀は幸なるかな。

○古井

土佐　大和田節子

街なかに古井あり、
闇の底黒々と。

試みに灯をともし、　うかゞへど光の弱さ。
大なる闇にけされて、　たゞみるは石の涯。
うかゞへどふる井の、　底遠く灯はほそし。
足のもとぐら／＼と、　ふと動きて
火を持てる、　鄒のはを手のゝく。
驚きてとざす目に、　古井戸ははなれざり、
見ぬ前にいやまして、　怖こそ魂にしめ。
（評）それだけですか。

○文使　麹町　野村光子

緑り濃く　背に流したる黒髪に
白衣の衣の配合よう　忍びてまゐる文使
音立てじと　右手に燭そと取りて
忍びつゝ長廊下　衣摺れをも注意して
緊きの　打ひもいと固く
結ばれし文函捧げて　秘密にとの御仰せに
いまし人　御室の方へくる刹那
宿直の間よりの呟きに　灯こそおぼへれあやの袖
（評）詩の形では面白くなかった。

○葬儀　東京　里子

雨ふれる都大路や　局の葬儀まゐるとて
両側に皆立ちならぶ　吹奏のおごそかに
兵隊は前に歩める　馬車の中美し姫も
うなだれていとも悲しき　面もちに眼をつぶる
ゆるやかに柩ちかづく　雨の中傘をつぼめぬ
人のなげき吾が悲しうて　知らずして涙ぐまるゝ
（評）あなたにはもつと善いのが有るはづだ。切角一位の局のお柩を見たのに惜いことだつた。

○葡萄酒　四谷　河野槙子

澄みゆる
日光に
見るが如
鮮やかに
我むれの
手ぞ戦ふ。
ふるふ手を
たまゆらを
盞は
くしき紅ぞ
足元に
一片を
ゆめのごと
去にし日の
盞は
相かざし
戀の血の
唇ふれぬ。
浮きに
つとすべり
悲し音に
くだけたれ。
たち迷ふ。
きらめける
手にとりて
あゝわれは
影を撫ふ。

○秋のひかり　麹町　浅井ゆき子

秋の好き光はうた窓の、　玻璃の扉に反射へて、
かたくも詠殺し詩書の、　金字は浮きぬきらゝかに。

枝にかけし白布に
光に映えていら〳〵と、

嫁ぎし姉がみ園より、
出窓邊なる花さしに、
だりやの瓣の緋は燃えぬ。

見まい聞くまい話すまい、
波の舞踏の銀は、
七色に映えて美しく、
せまき寄宿にひかる哉。

闇くにじみし菫色は、
つよく我面を照す哉。
手折りし花よわがめづる、

黒潮はたゞ〳〵と
花白き藻がくれに
憧れに心醉ひ

春の夜を通き巡り
白鳥は昔を締めぬ。

龍神はわだつみの
海宮の扉を押し開き
紫の浜の舟
かゞやかの裝ひして
美き身振舞ひ出でぬ

あな今宵吾が背子の
龍神の來ます夜と
月姫は化粧して
只白き眞綿敷
しづ〳〵と眠らせて
ほゝゑみつ待ち在す。

天と海とことはの
文はしきこひのぶ
奏でつゝ黒潮は
漲き返り湧き返る
かゝる夜は磯に海松に
紅の花咲かむ。

名古屋　小木曾女

○嘆き

豐後　佐藤みす子

父は南の波の外はるけき國ときゝしのみ
はゝその蔭の下蔭に吾は蕾とふふみけり

思は赤き髪の毛の亂れて長き恨みかな。
近よる人の影見れば物うち捨てて走る身の。

秋は色づく紅葉ばの一人思に燃ゆるとき
さゝやく人の聲ききて木暗もとめてかけ入りぬ。

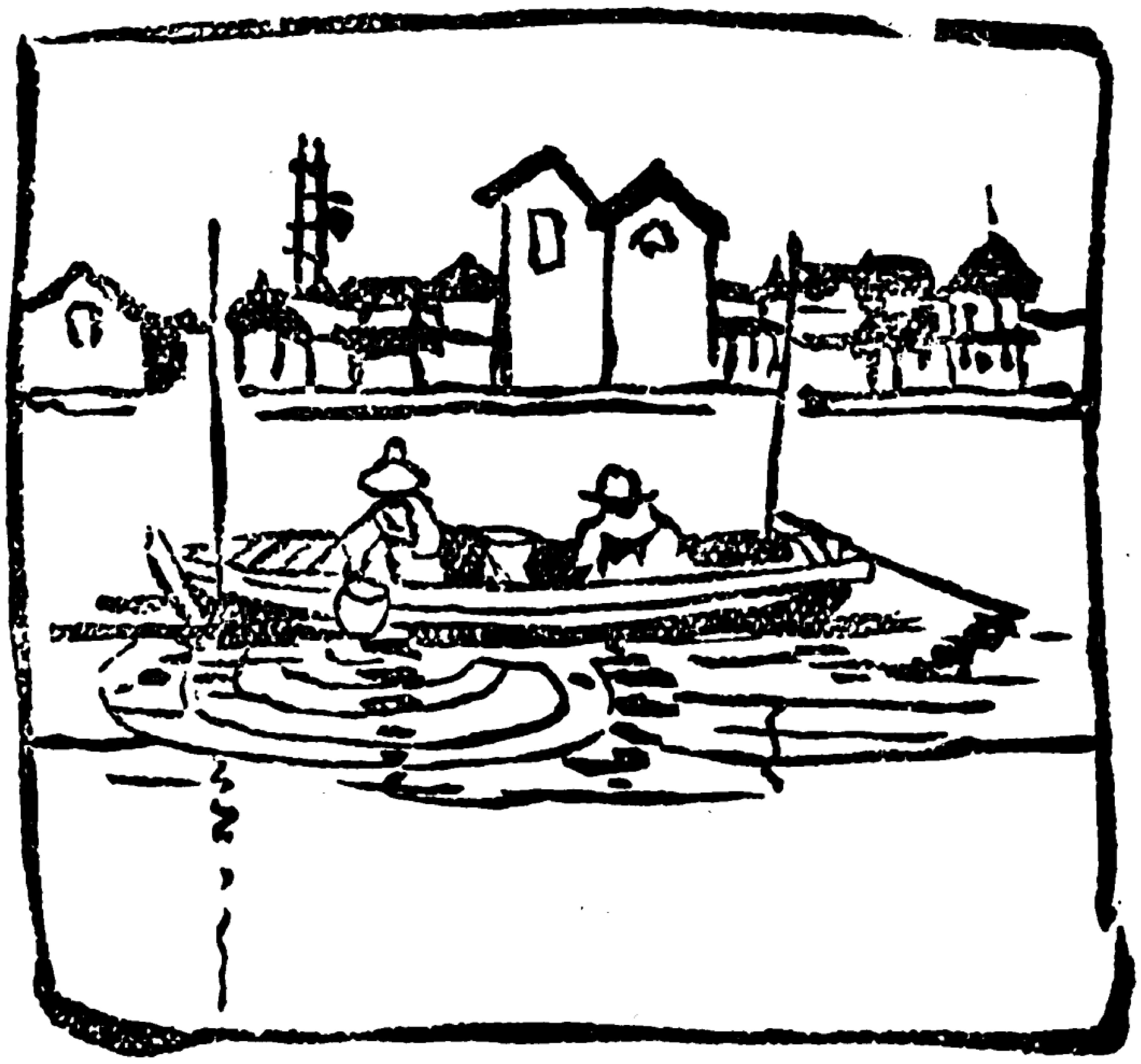
○天秘

大津　今村野百合

人なきなりなたゞ獨り里川堤にさまよひて
うつす姿の水鏡あゝ吾が影になく身かな

海松のかげに熟睡する
紅鯛の夢を生む

みゝづとり　峯子



○上棟式

七村人の寄進にて
見よ新木照る初日影
仰ぐみ空の晃紙旗。

築きあげたる神樂殿
潮香たゞよう風ゆらに

祭壇まつる樒、斜に
照りの亂れをもろ肩に
棟梁役はむら彩の
一の相圖の柏子木に、
かゝるは白き虹の橋
命幣さツとひらめかし
烏帽子、直垂、禰宜衣。
金采ふるは露はらひ。

水戸　島田小桃子

○木枯の賦

枯に運退く怯の子は
老寛虛空に血を吐くや
丹汁絞ると市人が
ひゝとうめきて一山は
其病葉を征矢として
寛草堅々西の方
果地模様に鎖したる
我賦を見よと此夕
流るゝ雲に風架りて
裂きし漆樹の葉吹けば
病葉ほろゝ瘠せにける
神秘の庫を奪はむと
天なる五彩の彈を射れば
畢の銀紙あら戰くよ

三河　藤野ふさ子

○紅ばら

少女の肌は白かりき、
白鳩の、
彈丸に傷負ひしそれの如——されど戀はれにし
美まし男は、
煩悶を抱きて十七歳を、
亡きにけり。
血潮は永久に滅亡せずして、
紅薔薇と、
たとへば脚紅き
羽を地に下ぐるまで
其煩悶を知らざりき
少女は終に
されども胸にあふれたる
怨哀を含む
今年も此園に咲き出てぬ。

秦夏　中富よしみ

○除夜の鐘

かゝる野寺にうらぶれて、
たゞ鐘に年齡は老い
齎しき運命を恨みつゝ、
かくて今年も暮れんとす。
今ぞ撞くべき除夜の鐘、
我身引かるゝ心地して、
撞木一度動かさば、
希望の島を望みては、
亂れし心おし靜め、
つくや鐘の音いと高く、
撞木の綱は手にあれど、
つく手は暫しためらひぬ。
我が齡は又も行く、
たへぬ想ひになやみつゝ。
戰く小手をはげまして、
送り迎へぬ年と年。

相模　北島たつ子

○影法師

秋の夜のながうして、
文机にそと倚れば、
影法師ゐがきけり。
われ笑めば彼も笑む、
彼れもまたたちて舞ふ、
更け渡る鐘の聲
影法師これもまた、
我れのごとかずをよむ。
只ひとりさびしうも、
かたはらの繪ぶすまに、
つれづれを興もやと、
我れ立ちて舞すれば、
おもしろや影法師。
七つまでかぞふれば、
手をあげて指まげて

麻布　稲谷以智子

○洗禮

我罪の爲に我主エス君は血のあせながし、
胸さくるなやみもいとはて祈り給ふゲツセマネの園に、
我罪ゆるさん爲に照る日もかくるゝカルバリの岳の、
十字架の上に忍びて死に給ひし主よ
我をば更生さんが爲に甦りし主よ
我今罪くゐて聖き聖徒の群にいる
其みしるしのバプテスマ。

かゞやきの天國にすゝまゝし天國の幸に進ゞまなん
今より後は只君の御聲のまに〳〵にすゝみゆき
ゆるさる一身の幸は世に比ふべきものぞなき

〇雲

鳥取 きし子

朝見はてぬ夢のあと、
殘月のせて白蝶の、
魂は愁の身をぬけて
舌炎なす鈍色の、
大蛇の如き雲を見き
うつゝの庭に辿る時
骸の如き雲を見き
胸の扉寒き夕まぐれ

花よめ

常陸 酒葉貞子

雲と夜空の五千里
浮橋の戀のかよひ路
時の輪の軋りのはずみ、
み園生のそゞろ歩きに
光ある愛の睦言
稍しばし岩の扉がくれ
隔たれば見えん日をなみ
徒らに雲を閉ぢしか
天の原星の花咲く
廻り遊び笑みのゆたけさ
秘めばやの大御心に
下つ界を闇に誘ひぬ

〇雲と波

富山縣 瀧本秀子

波より湧くか天つ雲、
雲よりするか沖つ波、
み空を高く雲はゆき、
汀に滑く波をどる、
朝いづこの波をいて、
夕いづこの波に入る
或は夕の霧に包まれ、
或は曙光の空を踏み、
出てはかはる七彩の色
汝が寄るべも外の海、
またあふ時をたのみつゝ。
荒れては修まる闇波の紋、
あゝ汝の行末は外の空
行け行け二人別々に、

〇日蝕

越後 早津黒子

日の王が黄金の冠
燄燒の崇高き姿
月姫が瑠璃の彩衣
栢莫ひかたみに趁へど



〇朝ごゝろ

岩代 根本松江

離れともなきなが枕、
そと起き出て丸窓に、
寄れば冷たき片頬哉。
梳みだれ髮を掻かぐとて、
櫛の行衛を妹に、
問へど小枕うつゝなく。
萬象の吐く息仄白う、
身に迫り來る寂寞や、
理想の船の水夫となり、
川の流れに船浮けて
君越えまほしよるだむの、
吾れも越ゆらむ心地して

〇みどり子

姫路 柳田白百合子

産湯つかひて衣まとふ
うつゝ心にそとだけば
おのゝく手ぶりおかしとて
肉塑かなるそがほゝに
はるゝともなき愛着の
天使に似たる姉の子を
まだだきなれぬわがうでの
姉君若うゐまひます
そとくちつくる恥らひや
情け身にしむ思ひかな

新論文　編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以內半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は每月十五日、懸賞は甲種に據る。

三等

○圖畫について

大阪東區松屋町石町西南角今西竹田堂內　今西こゆき

私は、少々圖畫のことについて申述べたいとおもひます

まづ前號（三卷十四號）の圖畫の批評から初めます、四等常選京都濱部郭公女さんのお買物、この畫は、右から光線がきてゐますのに右へ反影がさしてゐます、モシこれが左から光線がきてゐるとすれば、人物の顏の線及び着物の線がなくならう筈がありません、これは強き／＼光線にあたつた折に起る現象で、わかりやすき例をひけば、同號の誌友おもかげ（十七）にある黑川吉野さんのお寫眞を御覽なさい、これは右の方から強き光りがきてゐますから、その方の着物の模樣、線などはほとんどあるかなきかわからない位でせう。其次の、奈良南園堂、これも光線が右からきてゐますのに右の方へ影がさしてゐます、總體皆樣方は、光線などのお考えはなく畫をお書きなさるやうですがこれはお改めなさるやうおすゝめ致します。次の麻布松崎みどりさんのお化粧、これはハガキ文學第三卷第三號の六十七ページにある矢名氏のスケッチ畫稿をちひさくなさつたのでせう、私はこのやうな作物を見る每に、なさけなう／＼思はれます、今更私のいふまでもありませんが、たとひ其畫が上手にできてゐましても剽竊んだものは汚れてゐます、同號一一三ページにある投書家といふ畫はどうです、首の細い手の細い机のゆがんだ妙な畫ですが、これでも潔き手に成つたものですから、よしやその畫がまづくとも、花のやうに美しく雪のやうに潔いのであります。

とんだところから文は橫道に逸れましたが、さて、その次の、書齋、これはマア本箱の上にある時計とくらべて、バイオリンのちひさいこと、これらも注意すべきことでせう、その次の草刈、これは片手で籠を持つてゐるやうに見えます、そのくせ左い肩にもヒモがかゝつてゐます、これらも注意すべきことでせう、その次の人力車、これは遠近法が間違つてゐはしますまいか、向ふの方の田舍家の家根の高いこと、この畫の遠方の家は、三九ページにある秋の野路の遠方の家を持つてくれればよろしいでせう、そして車夫が橫の方に

ゐるのはどうてす、そのやうなことて車がひけるてせうか、その次の秋の空も光線のとりやうが間違つてゐます、次のお友達、これはなぐり書いた跡がありありと見えてゐます、これはかりてはありません、誌上にある半分以上の畫は、みなこのなぐりがきの跡が見えます、前に申しました、草刈の籠のゆがんてゐることや、車夫が車の横にゐるのなど、みなこのなぐりがきから出たきずてす、このやうな方に限つて一寸散歩に出るさえも、美しい着物を着て、白粉なんかぬつて、たいそうめかして行きながら歸つてくると、其まゝ、着物ゎろく／＼たゝまず、簞笥の底え押し込んておくんてせう。太田三郎先生は……板下を描くに、専門家は普通の一寸したコマ繪などは、初めからぶつゝけに筆を下したり、または、鉛筆てごく輕く大體のあたりをつけておいて描いたりしてゐますが、傍業家の諸君は、まづ最初畫川紙か何かに鉛筆てその草稿をつけ、形などの誤謬を充分正してからその上へ紙を載せ、下圖に從つて描くやうにした方がよろしい……とおつしやつてはおりませんか。自慢てありませんが私はこの方法を守つて仕上げた畫を毎號投ずるものてすから、未だ一度も落選したことがありません、どうか皆さま方もこの後はこのやうにして仕上げた畫をお投じなさい、さすれば今後、女子文壇誌上に、四つか五つ位の子供の畫いたやうな畫（まさか）は後を絶つことてせう。

まだ／＼申し述べたきこともございますが、あまり長くなりましたから、これて筆をおくことゝ致します。

終りに臨（のぞ）んて私は、くれ／＼も申します。

『皆さまがたは、モウ少し畫を叮嚀にお畫きあそばせ』と。

これは又感心に能く本誌の圖畫を見て居られます、此の如く仔細に觀察してこそ興味もあるてせう、苦言、忠言、一々肯綮に當つて大いに參考になるてせう、論文としては此種の書き方が最もよろしい、むつかしい字や、しかつめらしい事を言はないても。實際に接近した事柄を捉えて、遠慮なく言へば宜しいのてす（評）

四等

○「夢の華」

周防徳山町山田小太郎様方　内山村雨

靜かに頭をもたげる、障子に南天が瞭然と寫つて居る、ちゝと小鳥が鳴くかと思ふと、さら／＼と南天の葉がゆれて小鳥が南天の實をつゝいて居るのが寫る、實の赤い色や、葉の緣りやが其儘寫るものなら宜いと思ふ間に襖がする／＼と開いた、乖子が藥と本を持て來てくれる、藥を含んだ、苦い、水て口を調えて本を開いて見る、（思はるゝ吾とはなしに故もなう睦まじかりし日もありし哉）、と云ふのが目に入る、平凡の樣で非凡、平板のやうて曲折があると思ふ女の眞情が流露して居ると思ふ、一體晶子の歌風には一種の嫌ふ可き點がある

るにも拘らず遂に我が短詩界の一明星となつた、落想は必ず清新、措辭は必ず巧致を極めてゐる、短い形式に複雜な思想を現さんとするので往々不熟の句があるが、苦心慘憺の痕跡が自から見えて才氣の横溢するを多とすべしだと思ふ、やゝもすると、歌の意味を知るに苦しむことがあるが、進歩の途上にあるものに取りては免がれないことだと考へる、(判官と許され難き罪人は圓寢ぞしけるわびねぞしける)、かゝる俗事をこれ程までに詩化する技術は短詩界に晶子をおいて他にあるまい、判官と云ひ罪人と云ふことは單に譬喩に過ぎないだらう、ゆるされ難き、まろ寢、詫ね、の語を玩味すると自づから分明つてくる(地の上の北か南か矮人の國は日を見ず九日あまり)(天地のいみじき大事一人の私事とかけて思はず)、前の歌は喩言が頗る新しく後の分は誇張が極端て面白いと思ふ、本をばたりと伏せる、隣子には依然として南天が寫つてゐる、鳥はもう居ない、今見た中て(時鳥東雲時のだみごゑに)や(北嵯峨は花柑子垣低うして)または(戸を引けばにこやかにして君ゐます)などは面白い句だと思ふ、だが此の本全體を通讀して默想すると才氣餘りありてヒステリー的幽僻に沈んだ二十四五歲前後の女を見るやうだ、情を露すに高く深く、景を述ぶるに大にして壯ならんと努むるにも拘らず遂に婦人の見地、女人の情に過ぎないと思ふ、ちゝと鳥がなく、またさつきのがきたのかと思つて首を上げて見る、寫つて居ない、また考へつゞける、かの女は想に尤も苦心して居るしかし餘り單調だ、そして語は大ならずと云ふことは出來んが而も首尾を通じて雄大豪壯の氣を窺ふことは出來んと思ふ、夕森を靜かな森に立つて寂しい風の音を聞く樣てあると思ふ。

美を寫してそれが眞に迫つて居るけれど、遂に幽寂の美を出てゝ居ないと考へる。

けれど兎に角夢の華一冊は我が落莫の短詩界の一部を飾る作てあると思ふ、女てこれ程の作家が出たのは如何にも嬉しいことだと考へる。

裏所の方て「いや一寸風冒をひいたのです」と云ふ夫の聲がきこえる鳥はなかぬ、南天は依然として、うとうとゝねむりにつきはじめた。

晶子の詩風は實に一代の栄を縱にするもの、此論者は冷かに見すぎると思ふ位てあるが、中央文壇にかけはなれた僻遠の地にありて、これだけても分つたことを言ふのは、又、新代の人たるに愧ぢぬてあらう(評)

【五等】

○文學の過渡期

信濃北安曇郡七貴村二四四　下里實女

これを狹く日本の文壇に見るも、創作は舊式より漸に新式に移らんとする過渡期にあり。自然主義が其要求として現はれしは一般のゆるす所なるが、この傾向、寧ろ變遷は我が文壇の事情が自ら然らしめしと共に海外の傾向に導かれて到達せし現象なるを否むべから

ず。今日に於ては我は我の狹き範圍のみに限りて考ふるを得ず、廣く海外の文壇と關涉せしめて觀察するを要す。

槪してこれを云へば文學は海外に於ても今や其過渡期にあり。こは素より今日に始まれる事にあらず、現に溝渠を劃きつゝあるものにして、多少この潮流に觸れざる國は歐洲になしと云ふも不可なし。英國の如きは文學の保守健全を以て知らるゝ國なるも、漸く大陸的傾向に感染しつゝある兆候を認むといふ。英國が如何にして過渡期に入りつゝあるか、まづ其次第を一考すべし。

海外文壇の事情を報ずる新刊の消息に依れば、英國の小說は最早往日の如く米國に華客を有せず。其理由は、英國の小說が漸く有害なる分子を加へつゝあるに由る。米國は英國よりも遙かに文學に關しては神經過敏なり。最早今日に於ては健全なる文學の國は米國を措いて他にこれを求むべからず。米國は唯一の健全なる文學國なり。或ひはこれ米國の文學が淺薄なる所以なりと謂ふ者あれど、米國の文學殊に創作は一般の讀者の爲にす。婦女童幼未成年者、及び凡ての階級の爲にす。これ等の一般なる讀者に健全なる文學を供給し、兼て進步せる讀書社會の趣味に適合するは、米國文學の長所なりと。長所即ち短所なるなり。

點燈夫　豐橋　藤城のぶへ



英國文學も曾ては健全を以て知られ、其誇りとせしも、今は文學に關しては神經過敏なるは僅かに讀書社會の一部分に過ぎず。是米國の社會が殆んど全體に神經過敏なると大いなる差異ある所なり。英國の小說は最早家族の爲にせずして、趣味の進步せる社會を標準とし、英國的純潔を保有せる健全なる中等社會より次第に離れ去らんとする傾向あり。

蓋し英國の文學は、スコットの時代に於て文學の一般的需用普及を見るに到り、夫れより、サッカレー、ヂッケンス、エリオットの時代に於て全盛時代を作り、健全と彩華と共に大いに見るべきものありしも、黃金時代は既に過ぎぬ。時は十九世紀より二十世紀に移りて、其間好尙の上に大いなる進步ありしことも亦否むべからず。文學の一般的需用もまた既に落ちたる今日に於ては、舊式の文學は最早これを恢復する能はず、種々の新しき方面に文藝の發展を試みるは自然の傾向と見るべし。英國の文學が

其保守健全の衣帯を脫して新式の輕快なる風に浴せんとするは理由あることとなり。

英國の文學すら、斯く搖り動かされたる變動の其根底には、啻に文藝のみと云はず、思想上の大動搖あり。科學も哲學も更に深く、更に淸新なる生命に接せんと焦りつゝあり。この最近思想上の變動を象徵傾向といふ。この傾向は現に歐洲の文藝及び思想界を支配しつつあり。文藝の象徵主義は其一現象なるのみ。文藝の象徵主義とは物を具體的に描かずして、其物に就て瞑想せる情緒的結果を音樂が波動に依つて傳へらるゝ如くするを謂ふ。象徵主義の旨とする所は直覺なり。直覺またはこれを云ひ換れば、內觀的作用に依つて起る幻像を活現するにあり。科學も哲學も今やこの象徵的傾向を帶び、在來の態度を一變して新生命に入らんとしつゝあり。科學は理論的研究に甘んずる能はずして、實動の生命に觸れ、哲學は、智識は智識のみに依つて立つ能はず、情緒と相待つて融和完全すとなせり。即ち科學も哲學も抒情的傾向を帶び來れるなり。兩者が內觀的に向へる當然の結果として從來賤しめられたる神、或ひは宗敎は其地位を高められ、象徵主義なる名稱は今や精心活動の凡てを意味す。象徵主義は文藝の一時的反動にあらずして、宗敎、科學、哲學等に亘る凡ての思想上の大變動に名づけられたる名稱なり。文藝が傳奇的空想を描き、又は彩色的技巧を凝らしたる時代は過ぎて、今や精神の內象を描き、直覺、若くは瞑想の情緒的結果なる幻像を寫すべき時代は來れり。象徵主義は決して近代思想の要求に反かざるのみならず、其要求に應ずる唯一の表現法なり。今日新奇として退けらるゝ象徵主義が他日既に知らるゝ古典派、傳奇派と共に親炙するには至るは疑ふべからざることなりと。歐洲の思想界が果して上記の如き變動を呈しつゝあるや否や、斯る變動あるものと假定して、文藝の象徵主義がこの變動に伴へる過渡期の產物なるを記すれば足る。

以上英國の如き保守の國に於ても、晩近漸く文藝の變動を釀し、その變動は其文壇の事情の外、根底には思想上の大變動あり。其變動に伴へる產物として象徵主義が、科學、宗敎、文藝、哲學等の凡てを支配しつつあるを見る。而して我國に於ける自然主義がこれ等の傾向と直接の關係あるは見易きことにして、自然主義其ものゝ發現は少くとも文藝の進步に資する新式の寫法として講究に値すべし。唯朝に自然主義を唱へ、夕に象徵主義を主張して、見るべき發展もなくして、忽ちまた推移するが如きことのあらざらんを望む。

所謂評論家の筆法、筆路堂々として間然する處はない、現代思潮を此れだけ知悉してゐる人は地方に於ては珍とせればならぬ（評）

和歌

佐々木信綱先生選



△規程　今更に舊派と言はず、從來の如く清新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること、締切は毎月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る、

二等

陸前國登米郡米山村　鵜木春子

新潮は日の大神の御車の先を警め樂奏し來ぬ

三等

磐城國双葉郡久之濱町東町　遠藤華子

初鷄や十戸に滿たね開墾の小村靜けきあけぼのゝ空

四等

土佐　一葦女

野の中の青磁のかめに秘めおける煙のたつか秋の霧する

秀逸

○下總　秋山花馨子

世は夢か現か知らず小雨して萩散る夕君に別れぬ

○備前　はじめ女

春の野に霞に醉へる花に醉へる若き二人がもの言はずけり

○磐城　村岡布貴子

大和路や順禮かざす菅笠に落花亂るゝゆく春の暮

○本郷　朝井千とせ

一枝は家づとにせむ山姫の手染のにしき見ぬ母の爲め

○大坂　眞田芳子

水車ゆるくめぐる音して川に沿ふ十戸の小村皆桃の花

○下谷　蕉雨子

江を渡る雁のひとつら鳴き過ぎてよねの灯くらう秋の雨ふる

○伊豆　香風女史

松かさのこぼれて寒き夕山にさまよひ居れば月さし登る

○宮城縣　菊地葉子

祭り日や御輿かへりて磯村の灯ともし頃を秋雨のふる

○羽後　三浦紅羞

筑波嶺の雲ほぐれつゝ遠行きぬ羊むれゆく國のけしきに

○佐渡　土屋きせ子

枯すゝき折れて沈める江のあたり入日にさむし旅の子が影

○備中　菅森紫水子

丘に見る西の遠かた山いくつ越えて雲わく野のまひるかな

○船穗村　平川澄江子

母こひし竹の花咲く山の日はうづら追ひたるふるさとの家

○　相模　北島たつ子

山寺や鐘の音寒し讀經に白き椿の花はこぼれぬ

○　長野縣　古澤あき子

風すごく雪ちる夜寒子ぞ道におのゝき泣ける

○　大坂市　眞田芳子

氷宮に迷ひ行くらし我が胸の炎さますと輪を畫きつゝ

○　尾張　渡邊露石子

黃昏や石山の鐘夕呼び滋賀の宵街いま灯ともりぬ

○　大分縣　工藤たまき

夏姫の絹染紅のこぼれか地に罌粟さく

○　熊本縣　桑原露子

春の雨今宵をとつぐ美き人に絹傘めせのけはひ降る

○　新潟縣　とし子

夕月夜夢に入りたるおん姿明けぬ白百合の花

○　安房　沼の舎

朝の香のゆらぐ小草の香やしみし眉にや

沼の舎など匿名にて出さず實名にて出したまへ。

○　栃木縣　金數芳枝

雲ひらきはろかにみゆる故里の峰のふもとの父母なつかしき

○　千葉縣　富澤桂子

ふみ讀めば虫も來てよむ柴の戸の窓に反めく笛の音さみし

髯しろきあるじ氣高く秀てたり眞垣はあれて菊かなる宿

○　青森縣　加藤美枝

山里の人は知らじな芭蕉葉に蟲の音もきく秋の哀れを

○　長野縣　すみれ子

白河の秋をさびしみ順禮と語れば同じ故鄕の人

○　岡山縣　廣江壽子

風やみぬ夕日のさしぬ木の間より紅にそまりぬ白壁の家

○　南多摩　下野房枝

變りなき常盤の色の松が枝に御代の榮えを祝ふ鶴かな

○　千葉縣　はつ子

月の夜や紅葉散り來る欄干に倚ればきこゆる小牡鹿の聲

○　下野　梅澤哲子

足音に驚きたるか村雀羽音はげしくかなたに行きぬ

○　三河　天野清子

鄰のひなをまゐろと御室より文使ひきたり春の日の雨

○　靜岡縣　加藤だい

もみぢ葉をはらひつくして松が枝にさむくも殘る木枯の風

○　上總　渡邊わか子

竹尻籠に征矢にあら馬のたてがみに花散りかゝる狩くらの道

○　山口縣　內山美子

故鄕をはなれてこゝにはや五年あだになる身のはづかしき哉

○　秋田縣　高橋芳子

波あれて人影たえしこの磯に夕日をうけて鷗むれとぶ

○　千葉縣　今井しげ子

呉竹や世にぬけ出てし節もなくまたもむかへぬ新玉の年

○　豐づ　藤の家瑞穂子

すて小舟君がたすけのなかりせば風のまに〳〵いづち行きけん

○　山形市　大江悦子

うまひする子猫の夢に遊ぶらむ胡蝶やさしき日當の椽

○　伊勢　森岡みどり子

てろ月の影にむかひて思ふかな我つま居ます巴里の都を　遠江　白薔薇

○秋の田に立てるそぼつの姿さへ霜いただける冬の山里　周防　正子

○雨や風すぎてみのりし稲穂かと思へば恥ずるわが月日かな　静岡縣　加茂致子

○幾千年繰り返しても嬉しきは年立ちかへる今朝の初風　岡山縣　宇佐美文子

○なつかしき人とかたらふ心地してそゞろにうれし春の雲かな　豊後　菅原よし子

○さらぬだにわびしき秋を破窓に文よむ夕べ野狐のなく　備中　秀甫子

○秋の日のはやくも暮れて野の寺の鐘の音淋しう入日月しぬ　長崎市　平田すみれ

○山小屋に火を焚き圍む人五人膝抱く人のわが父に似し　尾張　渡邊慶子

○柳かげ渡し守よぶ落武者の籠手にきらめく秋の夜の月　京都　茂樹子

○六つどきに起き出て見ればをくしもの白さも白し雪と見ろまで　岡山縣　中村とみ子

○朝づとめ終へたる寺の庭白く霜おきそえて山茶花の散る　姫路　柳田信子

○人ぞなき深山の奥の山寺に誰に見よとて花のさくらむ　山城　村田まさ子

○古へのひぢりの道を習はずば鳥獸物に劣るなりけり　丹波　岸本宇能惠



歸校　大津菊子

○夜更けて月もさやけき秋の野に唯だなく蟲の聲ぞ淋しき　和歌山　貴志信子

○さ霧して朧々の野の末に雁なく聲すこゝろ淋しき　長崎市　一瀬みどり子

○しら雪の光りを借りていざくまん朝風にほふあらたまの水　稗貫みつ子

○紅葉散る峯の嵐の音絶えて幽に聞ゆ妻乞ひの鹿　羽前　巻坂信子

○我が庭の紅葉の秋こそ夢なれや夕の枯葉に風渡るなる　下總　菊子

○大御代を壽く神のみ歌斂年たつ磯の松風の聲　群馬縣　五十貝基子

○行く秋や傍なき戀と筆そめて月に歌かく此手つめたき　讃岐　十河菊水子

○新玉の年のはじめに降る雪はゆたかなる世のしるしとや見む　南總　石井まさ子

○手鞠つく京の童女が振り袖にやさしうそそぐ初吹雪哉　和歌山　りう子

○秋深み櫻のくち葉風にあれて夕べさむしき庭の面かな　神田美子

○ときめきの香しばしたゞよふわたどのに雪洞さゝぐ搯箔の人　信濃　喜志子

○みとせぶり親しき友と語りけり松風涼しき猪のはなの山　千葉町　宇佐見ひで子

○尾上通ふ箏の音絶へて御代祝ふたづがれ高し峰の松が枝　うばら子

○
長崎市　山口柴子
母上のをしへのまゝに切張りて老の身さすらふ冬籠かな
○
宇都宮　木島喜子
亡き兄が墓前に添えし菊の花風なきこよひ一輪散りぬ
○
下野　梅月
山里の賤が伏屋に愛しのまがきに咲ける白菊の花
○
埼玉　關口ふみ子
我が庵の窓に日のさす夕榮えや鐘のひゞきに秋は行きけり
○
仙臺　鈴木榮子
月に花眺むる毎に思ふかないとなつかしき君や何所と
○
福岡縣　三好榮子
うつゝとも夢ともわかず夜もすがら君がおもかげ見るぞうたてき
○
土佐　五百蔵桃子
淋しさの身に迫り來る夕ぐれを亡兄が片身の笛吹きて見ぬ
○
本郷　朝井松子
明石潟夕なみ千鳥もろ聲に鳴くや淋しき片われの影
○
羽後　菊池陸子
湖半ば峯の半ばを霧こめて樹の邊り鷄啼くなり
○
千葉縣　北田信子
朝日影さしそう時は秋霧の立ちも及ばぬ峯の紅葉
○
京都　田島曲亭
君去りてひとりぬる夜の蟋蟀の音に虫のしげきを始めて知りぬ
○
佐世保　森口操子
うちつれてさまよふあゆの數々も流るゝみづはにごさゞりけり
○
京都　大井順子
谷川の流にのぞむ杣が家のいてふの紅葉雨とみだるゝ
○
遠江　林衛子
霜みへて野末淋しき朝なより歌は聞へて初空の影
○
米澤　樋口夏月
江を西へ笛ふきたどる人淡し葵の花かをる朧夜にして

○
鹿兒島　さくら子
白妙の衣ふりはへ笛ふきて興じ行くなり蟲なく枯野
○
下總　小澤てふ
五里の峠あしたは君の越ゆらんに此の夕暮を雪ふりしきる
○
久慈河　草司朝江
亡き妹が水かへなせしこの黄菊いざ奥津城に手向なむかな
○
遠江　鈴木三樂
わが涙君を思ひの寂し夜半物縫ふ針のたどらぬものを
○
攝津　梶すゑ
一本の梅のにほひに春は來ぬ庭のしゞまも今朝破れなむ
○
大阪市　大村花子
線香の烟りは緩々と立ちのぼる水の面流る施餓鬼の札や
○
芝區　廣川よし子
松の根の岩根としろき萬代も榮え行くべき君がよはひか
○
靜岡縣　早苗女
湯の町を一と足先きに出て立ちし友にはぐれぬ秋の山路
○
下野　三浦花香
白菊におく露しげき三更の月明らかに遠砧きく
○
大阪市　大西幸枝子
こときれし君がみむれにあたゝかき我が手はふれぬ魂よかへれと
○
埼玉縣　中村勝子
せこは歸ず琴の音しめる秋雨やきゞすのなきてさびしらの夜よ
○
丹波　難波あいの
咲きつゞく紅むらさきの萩の野に友見て立ちぬ空見て立ちぬ
○
大和　花萬瀧
夢さめて思ひもしげき中空に聲ぞみだるゝ山ほとゝぎす
○
いく代子
草がくれなきてうつろふ松虫のおなじ涙に降るや村雨
○
下谷　佳子
瀟物の帳わづかにそよぎけり女三の君が覗づかひに

大阪市　辻　[illegible]子

○巻紙に梅か香こめて東なるきみにかへしの文かくあした
對馬　春子

○賤が家の畝道の畑きれ〴〵て折々見ゆる夕顔の花
栃木縣　千葉夏子

○おばしまに遠路はるかに見渡せば三つ四つ二ついさり火の影
神戸市　[illegible]女

○大寺の松葉こぼるゝ廣庭に武裝のうなゐ軍遊す
沼津　渡邊とよを

○都路もあんまの笛に夜は更て窓洩る月のものすごきかな
長崎市　子鶴

○母病むと夢みし夜半にいねころの親をしたふか聲憐なり
遠江　原木喜美子

○月冴へて閉じゝ板戸のひまもりて病む姉君の面を照らしぬ
美濃　佐野富美子

○秋風のいとゞ更け行く月影をいづくの里に君や眺めん
福岡縣　みだれ萩

○羊よぶ笛をとゞめて野の末に思ひ出多き秋の雲見る
豐後　脇眞喜子

○少女らが脱ぎ忘れけむやは衣に花より照らす春の夜の月
千葉縣　井内津加子

○久方の雲居よりこそきこへけり空なき渡る初雁のこゑ
羽前　松雅女

○故郷の友を戀しく思ふらむ一人旅寢の夜は更けぬれば
大阪　生田さくら

○霜おすむ嵯松の中の瓦葺うす露こむる白萩の家
越後　金子たま

○五年の思ひを君にかたる夕べ雨靜かなり夜は更けにける
西ノ宮　森井せい子

○姉君と乳母がり訪ひて踊るさに箕面の山のもみぢ葉を見る
京都　垂柳女

○桐一葉落ちて音なき夕暮につく〴〵思ふ戀の行末
土佐　大和田しづ子

○天の神地にもたらせるいましめの精かや雪の水仙の花
本郷　池澤光子

○むさし野をわきて流るゝ大刀根は枯野見まはるみちにぞありける
若狹　津田紗江

○露消き蘚苔を被りて白百合の花に抱かれ眠る石かな
しらもゝ

○學きけば卯の花月夜その時の白き所はの御人思ふ
波島　鷗島女

○秋の夜は蟲啼く聲にさそはれて思ひ出だしぬ逝きし姉君
上毛　新井秋月女

○折々に鹿の聲聞く峠茶屋紅葉狩して月仰ぐ哉
和歌山　綠子

○故郷に病ひしらする筆おきてそと窓をせば桃の花散る
肥前　白菊

○よべの風いつかおやみて初冬の朝日かゞやく野路の一つ家
備後　阪本白菊

○野の寬神詩めしますか秋の聲萩女郎花地にひれふす
千葉縣　内藤とし子

○立ならぶかゞしのさまもおもしろやをかぼみのれる畑の遠近
尾張　津金糸子

○壁據にしばしぬるまものゝふはとりておとしゝ夢や見るらむ
上總　久我ちか子

○末遠く霞む廣野の天地を緑になして若草もえぬ
遠江　平野すみれ

○肌寒き枯野の奥のうす紅葉小風に散るを惜みけるかな
甲斐　矢[illegible]子

○霧こめし露の細道たどりゆけば幽に襲ふ夕暮の鐘
西多摩　入[illegible]有子

○賤が家の赤き柿の葉散りにけりしも置く庭に月白うして

○　門司　眞吉露枝
金扉の牡丹ぬけてゝふところに入ると夢みぬ春のおぼろ夜
○　福井縣　池田豐子
君がひく玉琴の音に暮秋の長き今宵も短かゝりけり
○　千葉　孤董子
石の朽ち海の畑とならん世を待つるに似たる我望哉
○　大連市　榛本ちゑ子
たらちねの西の國ゆく夢をみし旅寢の枕ふとそばだてぬ
○　紀伊　田中文子
うすもやの靉く東あかれ色に天の岩戸や今あけぬらし
○　水戸　島田小桃
千代の秋かけてきかばや籬の中にかひならしたる籠の松虫
○　澁谷　よし子
荒れはてしまがきのもとの菊の花めでぬる主のなきぞ悲しき
○　神戸　藤本てつ子
山寺の入相告ぐる鐘の音もあはれ身にしむ秋の夕暮
○　長崎　菜の花
鈴の音かしわ手の音たえまなく木の間をもるゝ諏訪の御社
○　高知縣　鏡野月子
こゝもまた浮き世といはむ峠路に妻呼ぶ鹿をわれは聞くかな
○　薩摩　木志摩たも子
紅の露十字に袂どりて牧草かるなり少女子二人
○　大阪　小川登記子
大御代の惠の露に色添へて學びの林いよゝしげれる
○　芝　おみなへし
白妙の雪を頂く富士の嶺巓よりおろすこがらしの音
○　水戸　重子
朝毎にま白に霜おく野の道をふむ足元を秋風ぞふく
○　德島縣　笠原蕗枝
春風のなこの海原長閑にてかすみに浮ぶ海士の釣船

○　大阪市　永島豐子
我がなやみ誰かは知らむ白萩の露に濡れにし袖重きかな
○　青森市　村林矢須子
門毎にひらめく旗に日のぼりて籬の小菊咲き揃ひけり
○　近江　伊藤たま子
詩集手に暇なく夕母こひてこひて今年の秋くれんとす
○　京都　山水女史
大君の御生を祝ふけふの日は何所の菊も盛りなるらん
○　筑前　田中登代
この夕一人の姉は嫁きましぬ我がみだれ髮明日は誰とく
○　埼玉縣　長野よし子
入り殘る月も霞みて山寺にむなしくかをる白梅の花
○　八王子　小池つれ子
咲きにけり此の春まちの櫻の花さかして今日の佳節祝はん
○　臼杵　安部富士子
風かをる里川堤たそがれて足なみいそぐ渡場の道
○　長崎市　北尾露子
秋の夕べ降るとも見えぬ霧雨に柳の枝にしづくしたゝる
○　下野　野中とみ子
曇りなく澄み渡りける秋の月人の心もかくてこそあれ
○　本郷　こひ枝
新しき年を迎へて音絶し友のふみ見るけさの嬉しき
○　千葉縣　松枝子
たらちねのこよとの賜の玉章に心ならずも歸る故郷
○　大分　山上月子
君が代はながかれかしと里人も御旗かゝげて祝ふ今日かな
○　橫濱　秋葉
君が代を祝ふか野邊の菊の花今をさかりに匂ふうれしさ
○　勢濃　よし子
石山や古りたる塔のほの見へて十日の月の影あはきかな

○　豊後　西野袖子

今宵しも君は何處に歎きますこの月にこそ思ひそめしが

○　丹波　齋藤笑子

しめはえて君が八千代も我が千代もことほぎ交す初日の影や

○　阿波　西野ひさし

若き尼と二人經誦す亡き父のおくつき寒う山茶花の散る

○　熊本縣　富野かず夫

礒山の松には今日もつれなくて沖より沖にわたる夕立

○　相樂郡　有野良子

一しきり靜かに聞こゆ虫の聲ひとりぬる夜の秋は淋しき

○　臺北　峡よし子

夜を惜む月のなみだやかゝりけんあさ露深かし庭の秋ぐさ

○　青森縣　西谷きし

きてみればわれらをまねく糸すゝき秋の野こそはうれしかりけり

○　本所　三森ゆき

姉一人妹一人が手向けずる母がみ墓に秋の日うすう

○　芝　ひさし

ひまを行く駒の足なみ早くしてまたも重ぬる我がよはひかな

○　和歌山　妹背美代子

雨だれの打つ音聞くたびふるさとを戀しくと思ふ秋雨のまど

○　三河　土屋良枝

日は暮れて江の南の春寒く鐘の響に山茶花散りぬ

○　陸前　松井岩女

寢覺むれば燈火細く落葉する音にまぎれず雁の鳴く聲



電車の中　三河　近藤道江

○　福島縣　秀蘭女史

白菊のはなを捧げて君を訪ふ野の道三里人にも遇はなく

○　備前　堀内香蘭

うき事の忘れまほしく外にたてばなほ思へとか澄みまさる月

○　下總　岩井白子

霜の中に草萌え初むる小松原春と知らるゝ處なりけり

○　小石川　山口まさ

晩秋や暗夜に犬の遠吠えてふる里戀ふる夢の淋しさ

○　岡山縣　小川婦美恵

明月やみちのくの國さす人の笛の紐解く松の下影

○　越後　瀧澤とし子

萩しろき寺の夕べは村雨と讀經の聲に秋くれてゆく

○　横濱　磯野まつ子

しがらみにかけし糸よりたそがれて川ぞひ堤蘆の花散る

○　下總　川奈部ゑい子

君戀し冬さりぬれば猶更に獨り焚くには寂びし榾の火

○　群馬縣　堀べん

鳴りひゞく五十鈴の宮の大前にかけていのらん年のみてぐら

○　陸奥　星靈子

かなしみのなみだしぼらむ失戀兒猶夜泣きなば恨盡きなむ

○　三河　今井菜津枝

化粧して赤き衣に帶しめて追羽根つけり初春の日に

○　幸子

山住の庵のともしびほの見へて薄野の道こほろぎのなく

○今はとて樂しき春を待ちもせて雲あるまとにかへるかりがね　福井縣　山本久子

○萬千代もかはらぬ宮の玉松を野にわたる伊勢の神風　大阪府　祝綾子

○春よりのふかき情は庭に咲く白菊今日ぞ色に見せにき　下總　入重子

○子をおもふ心の糸につながれてみ空の雲雀野邊をはなれず　京都市　宮原みどり

○最愛の妹は逝きぬ行春の花散る寂き朧月夜に　米澤市　白菊

○旅空やさやけく照し秋の月故郷の母も思ひださるゝ　岩手縣　伊藤宗枝子

○朝ぼらけ霧立ちこめて彼方なる上野の森も見えわかぬかな　下谷　洲崎佐喜子

○川添や尾花眠むれる宵にして月美しく草笛すみぬ　越後　山田榮雲

○京ぶり花衣よきこわらべに桃の宵戸はふりにけらしな　秋田縣　原田利子

○上﨟の黒髪すべる金簪に梅の香ゆるゝ夜の廻廊　靜岡縣　植田さなへ

○秋の風まづ君とみし花草の繁みゆ吹きぬ胸ぞさみしき　京都府　伊藤とめ子

○もゝ千草うゑつゝめづるつくり山たわむばかりの露の白玉　備中　和崎久子

○里がへりそのかみ君と胡蝶逐ひ草摘みし岡偲びて過ぎぬ　伊勢　岡本菊子

○捨てし世のなほ頼母しく思ふかな朝日かげろふ初春の窓　岐阜縣　平田かな枝

○眠る月に此の世のにごりうちよせてもろき涙を添ふる今宵を　神戸市　須　以子

○ゆゝりなく野に首垂れぬふり袖のすき間淋しき秋の夕べを　周防　熊野縫子

○思ひかれ夢にだに見ぬ亡き母を今更忍ぶ山鳥の聲　紀伊　宗たつみ子

○なつかしき君が御姿しのばるゝ夕暮さびしおぼしまの月　石川縣　すゝき

○我やどの梅さきにほふ春ごとにまてばやさしく來なく鶯　靜岡縣　靜山慶女

○母うせし幼子を背にそが父が畦道かへる小田の夕暮　土佐　弘光芳子

○くれなゐの初日浮べて潮鳴りも千代萬代と君が大御代　門司市　須吉はるみ

○ときはなる松の木の間に色ふかくそめるははじの紅葉なりけり　麹町　岡部てつ子

○寒き夜に出て遊ぶは三日月の道行く人の足もとゞめず　韓國　小はお

○やちまたに羽子つきかはす少女子の袂なびかす年の初風　秩父郡　近藤とく子

○寛の神の呪になやむ身にはあれど希望を棄てん弱き子ならず　豊後　楓の家　多江子

○冬の朝あやしげになく雀群枯れたる木々にしら雪の花　青森縣　松尾俊子

○すゞの音劍の光色白く坂東の枯野畑みなぎる　小石川　山崎元子

○花の春紅葉の秋とうかるめど今は軒もる露に袖ぬる　丹波　佃川貞子

○み社の御堂ましろく霜ふりて杉の木立に弦月さむし　呉市　桑原清子

○逢ひし友と又もわかるゝ悲しさはあはぬむかしにまさりける哉　神田　元子

○　愛知縣　永田舞鶴子
秋老いて吹く風寒し木曾山路月は西へと走りけるかな

○　札幌　村田はる子
はら／＼と紅葉を散らし吹く風に背子が手植し菊の花かなる

○　神田　渡邊清子
咲にほふ千花八千花つゆ見えて野邊こそ秋のにしきなりけれ

○　麹町　白萩
晩秋や武藏の野邊は黄にかへり枯葉悉地に咒ひけり

○　秋田縣　佐々木貞子
我もこの住むにくるしき世を捨てゝ君ゐます島に行かんとぞ思ふ

○　伊賀　伏見菊枝
くれて行く秋のかたみかいりあひの鐘の音冴へぬいと悲しげに

○　伯耆　盤指菊子
深草をわけつゝ深山に入りぬれば嬉しや萩の咲きそむるかな

○　静岡縣　豆子女
一羽づゝ雲と消へゆくかりがねの曉聲さびし入相のかれ

○　津市岡　しず子
この年の行方問はむと窓をせば星のまたゝき淡うなりゆく

○　名古屋　ひさえ
月つゝみ花をもつゝむこゝき霧の我が夢いだきいづちいぬらむ

○　長野縣　津金壽枝子
千代までもさかへ行くらん松島の松はみどりの色まさりつゝ

○　岩代　泉りう子
紅の扇持たせし白拍子に立たせて見たき萩の廣原

○　加賀　小島滋女
山の端に利鎌の如き月出る秋の夕ぐれや蝙蝠の群れ



○　柏崎町　町田竹野
なつかしき君がおとづれし夢さめてそゞろに淋し紅葉散る音

○　常陸　酒葉貞子
くれなゐの絹のやつくちそよ風にばらの香のする人に逢ひけり

○　千葉縣　池田清子
あたゝかにれたるなごりの枕べにあさ戸開けよと鶯のなく

○　山口縣　蔦女
ふと虫の鳴く音たゆれば川上に伶人笛ふく仄に幽かに

豐　年　静　田　海　王　屋　女

○　北多摩　小黒しゆん
見渡せば向の山の花紅葉錦とみへて夕日さすなり

○　天豐　小林清乃子
星一つみ空に高くきらめきてむなしく谷に木枯の吹く

○　弘前市　佐野てる子
きのふかも君とわかれしをちかたの山べかなしき夕ぐれの星

○　土佐　高橋白ばら
折鶴を丹にくまどりつおとどひが小松に結ぶ年の朝かな

○　下毛　くに子
うら若き妹の病める夕窓や吹く風寒み小雨そぼふる

○　天豐　白百合子
初雪の小窓によりて少女子は春の櫻や胸に浮びし

○　三河　藤野ふさ子
平和の初日讃ずと磯に佇てば睡にもつるゝ新潮の花

○　三重縣　長井漣月子
山茶花の花に餌あさる蜜蜂の羽音静かに日はたけにけり

○　廣島縣　池田いさよ
静寂びし山中村の宵はあけて初日をあふぐ野づら山づら

短文

編輯局選



△規程　文章の種類は凡て自由なるべし、簡潔なる文字を採錄す、二十四字詰五行以内にして總て振假名附、半紙又は罫紙に認め一人一文を限りとする事、締切前同斷、懸賞乙種

二等

○雪拂ひ

千葉縣印旛郡成田町　小倉秋風子

一昨夕から降しきる雪の今朝になつてもやみません、さあ大變竹山持は大騷ぎです、妾は風呂の番て、母は飯じたく、父や若者は弓の樣に曲つた四丁歩もある竹山に雪拂ひ。しばらくたつと各々ぬれ鼠の樣に簔を通して凍えて來ます、湯に入つてほつと呼吸をつくまもなく、彼方此方に雪折の音が手に取る樣。

雪の力も偉大なる哉

三等

○海龜

和歌山市附近岡崎村字寺内岡崎楠太郎方　さき子

毎年蕎麥の花の咲く時分になると七島の砂濱へ海龜が何匹も玉子を產みに上ります、老人の漁夫の話によると龜の玉子の孵化るのは大方未明で其日は親龜は水際まて迎ひに來て居て岩の樣な甲に青錢程な子龜を幾つも幾つも載せて嬉しそうに沖へ沖へと泳いて行くそうです。

龍宮城へ宮參り

四等

○松迎へ

秩父　近藤登久子

師走の月末になりますと、みんな吉日を撰んて各々の山から枝振の好い松を切つて來て飾るのです、それをお松迎へと申しますの。こうして新らしい年をむかへるのです私の村ては。

天然のアーチ

五等

○少女心

大阪市北區本庄東權現町三百十番　大西幸枝子

田舍へ行けば田舍て住みたく、都會へくれば都會て暮したく、音樂を聞けば音樂家に、歌や文を讀めば文學家に、富者を見れば富者になりたく、少しても樂しい事があれば無上に嬉しくそれて一寸ても心に染まぬ事があればすぐ死たくなるこれが少女心てせうかしら。

能くおわかりてす

秀逸

○一週間　佐賀　紅梅女

私は一週間の中月曜が一番勢が良くて火曜は忙はしく水曜が心配な日て木曜日が最も勢がない。金曜日には活潑になつて土曜は最も樂しい日。日曜は一週間のうさはらして最も愉快て面白くて勇氣が出て來ます。それて妾は一週間の間勢よく勉めようと思ふ時は何日曜に遊び升。

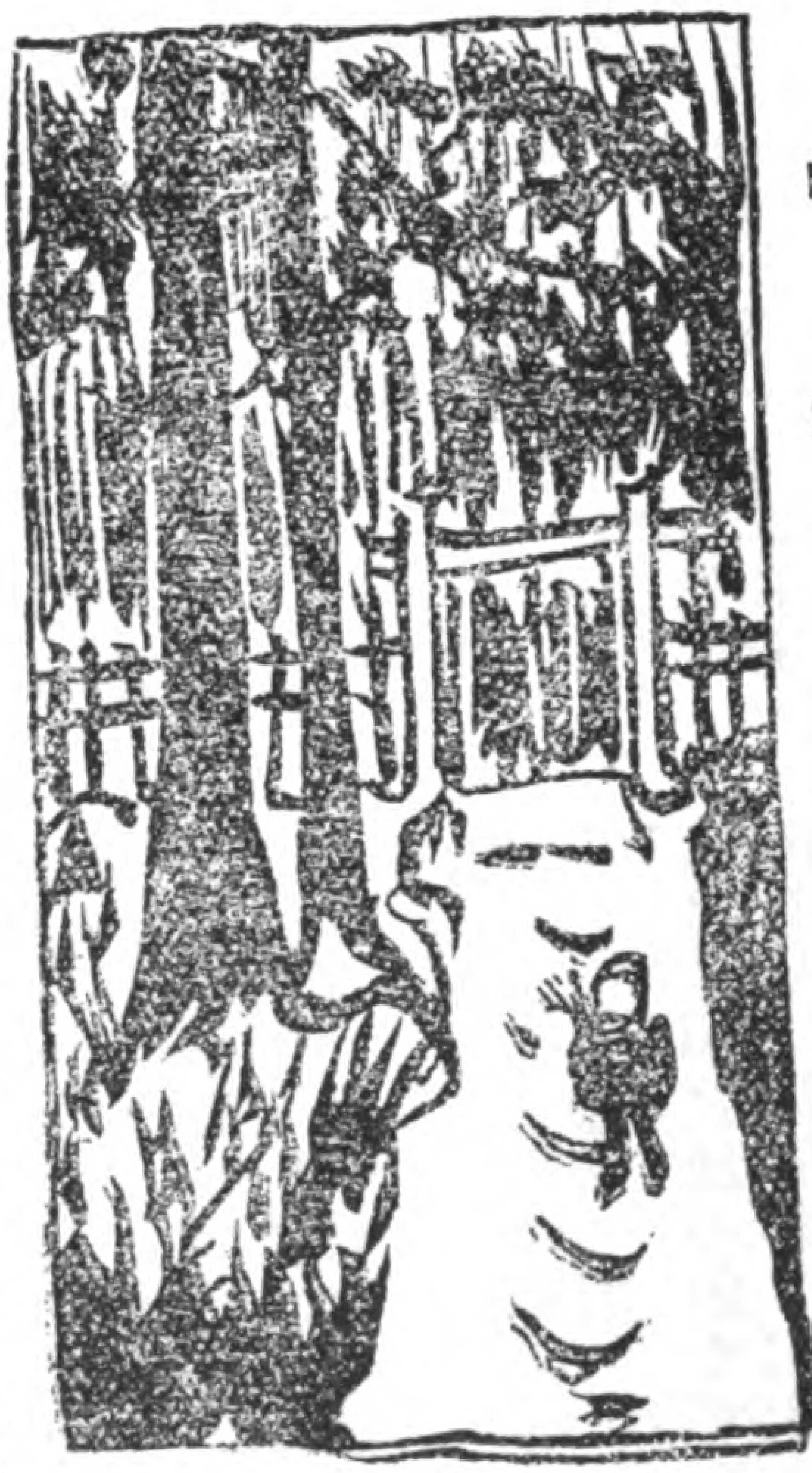
日曜は誰しも同感

○標本　横濱市　長谷川花子

妾は昆蟲の標本を大分持つて居ります。大概は大きい箱に入れてありますが、蜘蛛の巣にかゝつて居た栗の花色の小さな蝶と、芳子様を送つた時、リボンに止つた鎌倉蝶とは、手箱のひき出しへ特に入れて居ります。

奇抜なる嫁入道具

○男子　下總　三橋浪子



山家　埼玉　中村勝子

妾の御母様は妾をうんだきり十七年兒が出來ないて今度始めて十一月の三日の御目出度い日に其は其は可愛い男の子を出産しました妾はもううれしくてたまりません御父様も御祖父様も御嬉て御座いましたが御祖母様一人は男の子より女の子がいゝと小聲て云ひました。

儲けもの

○山のかなた　熊本縣　池邊しづ子

何となく故郷戀しき此の夕窓の戸押せば夜目に黒ずんだ帽子の峯がすぐ目の前に見える、思へば彼の峯の彼方は戀しい我が家、今宵の様な冷たい晩にはあの臺所の大きな爐て、山て拾つた紅葉の枯枝を焚いて一家三人たのしく暖を取つて被入るだらう。

なびけ此山

○ある夜　京橋　高橋ゆき子

先夜十一時頃歸る人を門て待て居ますと、十才位の兒を負ひ三才位のをだいた貧相な男が品川へ行く道を尋

ねましたから「電車ですか」と聞けば否との事に、實に可愛そうなので、丁度歸りの切符がありましたからやりましたら、側で電車を待て居た書生さんも金をめぐんでやりました。

此道具、本なしに綴る

○野菜賣　本郷　朝井松子

雪の降るのも厭はずに近在から野菜賣に來た老爺に母樣がお茶を出して「嘸寒からうね」と仰有ると「イエ寒い處じやあムいません家の者は出るなと云ひ升が若い時からの馴で一日も家に這入つて居られませんハイ今年九十一に成り升が未だ藥一服飲んだ事は有りません、ヘイ倅は漸く六十五で孫が四十でムい升。

「一日も家に這入つて居られません」九十一歳の長壽法此一言に盡く

○雪待つ　越前　永宮こよね

妾の地方では、百舌が蛙を殺したのを、高い木に掛けて置けば、雪が澤山降るので、來年はきつと豐年だと云ふて、大層悦ぶのですが、今年も高いところに掛けてありますので、皆がにこ〳〵して居ります。

北國は雪支度

○花園の此頃　尼崎　華子

紅黃紫白シネラリヤが咲き亂れてたのも早や半歲の昔昨日今日は同じ花壇に黃菊白菊が蕾を破らうとして居る淡紅の單辨ダリヤも數輪開いて居る。コスモスの背景と相映じ來ん天長節の美觀はどんなでせう？どれも皆菊科植物です。

ハイカラ花壇

○朝　淺草　白梅女

私は此の頃の曉方、庭へ出て深呼吸をしながら、歩く度にザク〳〵と音がする霜柱をふむのが好きです。それは隨分寒いのですけれど、何ですか身體がキュッと締るやうで、其日は夜迄氣持よく自分の務が出來ますもの。

明治式

○短刀　岩代　根本松江

父は、田宮流の劍士でありましたが、歿くなる時、私にのみ、其秘藏の名刀、菊一文字の短いのを呉れました。私は、父の魂を讓られたと思て、大切に所持して居ますが、役に立つ時季が、在るでせうか。

役に立つては大變です

○夜の海べに立ちて　長野　山田空居子

かき曇つては一寸さきも見えない、今宵此岸に佇んで

くる夜の潮の悲しい叫びよあゝこんな時うち上られた蜷貝雄貝が、失戀の魂を其中に封じて、地の底に長く埋まつてしまうのだろう。

詩の言葉

○ある日　麹町 淺井ゆき子

ある日私が電車に乗りましたら、隣りに居た美術學校の正帽を被つた學生が寫生帖を出しました、一寸見ると扉の人、お鬚の人、お酌のやうな桃割の人、島田の人等まだ澤山に書いてありました、私は學生の手先を見ながら大急ぎで下車してしまひましたの。

學生の失策、想ひやらる

○有難き事　京都 千代子

宮内省に出勤仕て居ます宅の親族から申も畏こき邊りの御召しの御蠟燭の御下りを送つて呉れました妾は毎夜此を机上に讀書致します元は畏こき邊りて光りし此御蠟燭今賤しき埴生の小屋て同じ樣に燈りますが誠に有難く一層謹んで勉强致します。

事觸の日まて

○菊の日　上總 ひさ子

十一月三日。此日を菊の日と名けて兄樣は黄の大輪姉樣は純白妾は淡紅妹は眞紅と毎年斯う競爭で培つた菊を一つの花瓶に挿して畏き御影の御前に捧げます。樂しうお茶菓子など頂いてると忽ち海をこえて遙な祝砲の響、思はず其方を向ひて一同敬禮を致しました。

好個菊の日の賦

○勝栗　西多摩 森田なか子

眩しいやうな夕日のさす細い山道を樂しそうに語り來る五六人の乙女子、銘々粒栗四五升づゝ入れた籠を輕々とさげて居りますが、此山家名物の勝栗を製造するのて有ります、あの樣な無邪氣な愛らしい思想の中に作られた勝栗が新年のお祝ひに求められるのてす。

山寺

○我家の歌會　北澤 よしえ子

父は山家集、古今集を、兄はみだれ髮、戀衣を、妾は佐々木先生の思草を、と云ふ風に愛讀してをります、だから作る歌も皆、其身につれてちがふて、そるのてす、そして一週間に一回づゝ歌會を開いて批評し合ふのてす。

西行能く語り、晶子能く歌ふ

○雪虫　石狩 吉永俊子

雪が降る一ケ月ばかり前には必ず北海道へは雪虫が出ます、今年二十日早く出ました故大かた早く降るだら

うと思ひ夜もをそくまで大根や菜などを取りました、所が昨晩、丁度十九日早く降りました。

霜蟲とは何んな蟲でせう、暖國の記者は未だ知りません

○神の守り　群馬縣　峯岸いく子

妾は、毎朝村の鎭守樣へ參詣に行くのですが今度其きれいな八幡樣のお社が他村へうつるとの事です思ふと淋しい樣ですが、神樣は高いみ空に、永く妾等を守つて下さるだろうと思ひます。

眞有神

○十月十四日の日記　相模　土筆子

朝、暗い内に一と枠を急いて、六枠の糸を繰り揚げると、丁度午後の五時、兄が拔いて來た大根を、御隣の花ちやんの樣に、洗揚げて、晩の御菜に、初めは白菊、次は賽の目、半月に銀杏の葉に烏帽子形、それから色紙に短冊に刻みました。

大根も出世したものだ

○雪空　芝　吉田あい

（大綿こい〳〵、食はしよ）子供等が箒を持つて走り廻つてゐる、黝然とした大穹からは今にも白いものが降つて來さう、風もないのに寒さが犇々と肌に迫るガタンガタンと八百屋の車が通る、豆屋さんは急ぎ足アツー正ちやんがころんだ。冬の日の午後である。

天氣豫報雪模樣あり

○若水　小石川　奈美木翠

雜煮にる若水汲まんと消えやらぬ曉の星を踏んで綱を握る。鳥居に飾られし小松は薄暗に初春を壽ぐが如く囁き、仰げば入り殘る去年の月は汲み上げし釣瓶を名殘惜しげに差し覗く。桶にあければ月影サラ〳〵と飜れて消えて鷄の聲に新らしき年は明けぬ。

綿錄の文

○自然と人工　留萌村　白百合子

數町に渡る林檎園や、幾百本とも數知れぬ菊畑などを見馴れて、のんびりしてる私の目には、盆栽や溫室咲の花等何となく、せゝこましく感ぜられます。そして之を御愛しなさる方の御心も、其嗜好と一致してるのぢやないかなど、失禮乍ら時々考へますの。

大自然に接せざるは人生の不幸なるべし

○粥正月　和歌山縣　白菊女

妾の地方では一月十五日を粥正月と稱へまして、早朝から小豆のお粥を焚いて、お初穗を萱の箸で菓物の樹に供へます。其の時、鉈で少しく傷けながら大きな聲

てお父さんが「生れ〳〵柿の樹、生らねば打ち伐るぞ」と云ひますと妾達は「神樂鈴生に生りませう〳〵」

能くある風俗なれど此文の書き方おもしろし

○妾のアルバム　伊勢　森岡みどり子

古い雜記帳の中央を適當に切抜いて、これに一々繪葉書を挿みました。普通のアルバムの樣にお金がかゝるのではない、たゞほんの廢物利用に過ぎないが、畫面を見た序に裏を返して、戴いた方のお姓名や御手蹟を拜見する事が出來ます。

價値あるアルバム

○美人　熊本縣　宮野きた子

妾の妹は美人であります恰も櫻の花の樣な頰には絕えず笑みを湛へてゐる、身の丈は妾より一寸二分高く體量は十八貫三百目年は十七の花ざかり。

お口のわるい姉さんですネ

○刈揚　越後　上島和子

今日わたしの所では稻の刈揚をすつかり終ひましたが、きけば當字第一の早終ひだとか小さい胸にも何となくうれしいひゞきもする、て今宵は花やかなランプの下で私は帳を讀み上げる父は珠算をはぢくそして二度くり返へしぴッたり合つたのは二千四百五十九束半

小農か大農か

暮の買物　下谷　君子



○元日の朝　肥前　平林たつ子

元日に朝寢をすれば一本足の天狗が顏に烏の印判を押て行く、そして其人は、其年中頭が上らないと、私の故鄕では一般に信じてゐますの、ですから七つや八つの兒童でも太陽樣がお出ましになる迄には、獨でちやんと起きてゐて、皆にこにこと笑顏を造つてゐます。

三本足の鳥は早起のしるしか

○白南天の實　備前　白菊子

白南天の實は耳痛みの藥だとお祖母樣がおつしやるので去年少しばかりとつて置きましたら少とも知らぬ方までがもらひに來られますから少しづゝあげますと是

があると乾度癒ると言ふて喜んで歸られました今年は澤山とつて置いて耳痛で苦しむ方々を救ふて上ませう

草根木皮と雖も神農氏以來、人命を救ひしことそれ幾許

○感涙　京都　田島曲琴

濕つぽい木の香の高い下鴨の杜に入る。足下の草叢には紅や、白の花が咲き出てゝ意味深い匂を空中に撒いて居る。と何所とも知らず帛を裂く如き琵琶の秘曲：「閃めき渡る……白露に……尾花が袖も……」と寂寞を破つて聞える。私は故知らぬ涙が頬をつたふのを覺えた。

四絃一聲

○女の大工さん　牛込　森操子

或る日の夕方妹をつれて關口の大瀧近くまで行きましたすると向ふの方から女の勞働者が六人參りましたのを妹がみて「あら姉さん女の大工さんがあたしの年丈け來るわどこへお家を建てに行つたのでしようね」と云ひました。

幼き社會觀

○冬の夜　秋田縣　佐々木園子

お父様は大箕で一つ泥炭を燒ると、お母樣は大鍋に一杯栗を煠て皆に分て呉れます。すると今まで寒さに何の音もなかつた、姉樣や、與作や、鍋どんまで、俄に元氣になつて、歌ひながらせつせと働きます。かくて私の家では冬の夜も樂しく暮すのは常てあります。

母君、人を使ふ術を知る

○馬の産地　青森縣　三浦わか子

私の地方は馬の産地で有名此頃は馬市が有まして二才駒を市場に出して賣りますが他國の馬商人共は澤山に參りまして買つて行きますから朝早く外に出ますと幾頭とも數知れず列を正して旅立つて行くのを見ます。

北風に鬣吹かせて

○馬　相模　渡井昌子

私の家では馬が二頭居ます、一匹は赤毛で一匹は青毛です青毛の方は車をひくのですが赤毛は、かけ馬です先達も横濱根岸競馬會へ出まして英人の持てる馬と競ひまして勝ちました、馬は其翌日お父樣を乘せて馬丁にひかれて共に笑顔で歸りました

千金の馬、野に競ふ

○銀杏の葉　飛驒　あやめ子

秋のみのりを讃美する百千の天津美姫、舞ひ終りて、手にせし舞ひ扇さと下界に投げぬ。
櫻色の頬美はしき少女等は喜びてそを拾ひぬ。

○無邪氣　信濃　依田花園守

祖父様のお葬儀に参つて、今日歸て來た美いさんは、珍しくよく遊ぶ事、と思つて、そつとお庭をのぞくと、五六人の、お下げ、おかつぱ、水兵服等を相手に、土を盛つて石を立て、父様の大切な鉢植の菊を、蕾も殘さず手に〳〵持て、さあこれからお墓参りよ……。

おぢい様、地下に微笑む

○兎　佐賀市　田中要子

宅には眞白の兎の子が五匹居ります、先日親兎がなくなりましたが相かはらず皆な仲よくくらして居ますのそして私が朝夕食物を持て行と五匹の兎は窓の口にずらりとならんで待て居ます、其は〳〵可愛いのよ。

親は無くとも子は育つ

○縫もの　大分縣　やま川

霞に遠い春の山、紅流す秋の川、美しい友染や縮緬を姉様が縫ふてゐるのを見ては羨しくてたまらず、不在を覗がつては山路に四五針縫ふて逃げて叱られてゐたが、いまは妹を叱るのです。

我が肩揚もやがて取れん

南條　三重縣　加藤つたへ



○しめじ　芝　やよ子

私は毎夕後山のお社に詣ります今日も細いうねつた道を行きますと、古木の根本に、愛らしい千本しめじが一團、まあ何と可愛いてせう！私は悪戯兒等に、見付からぬ様にと、園に丈の長い草を植えて、お社の方に向つて、このしめじを守り給へと祈りました。

善哉、善哉、持つて、歸つてお汁の實にした方がよからう

○くもの巣　大阪　詩歌子

私は蜘蛛の巣で小さい人形の肩掛をしようと思つて、竹箸で籏の形を拵へそれへ蜘蛛の巣の出來たてのきれいなのを引附けましてその上〳〵と重ねてみてゐますが今年も出來ませんでした、去年も一昨年も來年は必ず仕遂げやうと決心しました。

○ゆあみ　愛知　紫雲女

浴浴の心地よさ、清き溫湯に一日の疲れ切たる體を靜に沈めて思ふがまゝ手足を伸してほろ醉ひたる快よさ、煤まみれの顔、鍬をつかみたる黑き手、浮世の塵を終日踏める汚き足を洗ひ淸めて、湯浴上りの淺薄化粧したる心地のよさよ。

○山田守　奈良縣　中富よしみ

秋の色が漸く山野に滿ちて來ると、私は毎夜獸の害を防ぐ兄のお伴に、人里遠き山田の番小屋へ泊りに行くのです。更け行く夜の秋の山奥、一發の銃聲其の寂寥を破つて再び元のしゞまにかへらんとする時こそ、げに私は詩姫の溫きみ腕に抱かれた樣な心地します。

○凍れる石狩川　北海道　篠原靜枝

冬は石狩川にも來ました。河上にはアイヌの丸木舟でさえ通はないのです。凍れる石狩川、何と壯嚴な景ではありませんか。河の上を馳せ狂ふ白い鳥。

○化粧　石狩　あき女

朝床を出るとすぐ白雲のかゝつた谷間へ下りる、そして流れの急な處で顔洗ひ口そゝいで、石ひとつ越えた流れの緩い處の水鏡を見て髮をくしけづる。玉の露を集めたような淸い〳〵谷の水、天然の化粧水はたしかに肌の色を白くすると信じてゐる。

○椿　備前　はじめ女

實もほまれも捨てはてゝ若き詩人が靜に世を去るがごと、裏の垣根の花椿日ざかりを二ひら三ひら音もなく地に落ちぬ。

○燕　天鹽　小林淸乃子

おゝ燕遠者でありしか妾は日夜白雲迷ふ南の空を望んで御身の健康を祈りつゝ居つた。おゝ燕よ早く古巣を繕ひて又愛らしい雛を育てゝ見せよ憎くい惡覧の蛇など來らば妾は防いで上げる早く樂しき團欒をつくれ我親愛なる友燕よ。

○御柱年　信濃　弄花子

信濃も此の地方のみでせうか、御柱年と云ふて婚姻を忌みます御柱と申すのは七年毎に一度づゝあるので諏訪の明神を初め二の宮三の宮との三社に立派な御柱を建る厳かな式がある事です、て來年は丁度其の年に當るので七年經て朽ちてはならぬと十七八位の方は急て今　の内に皆嫁いて仕舞ひます。

○私　豐後　菅原よし子

私が學校をやめて足掛け三年になります、卒業する時は同級生が二十四人でした其の中六人は、他家へ嫁ぎ四人は小學校の先生になつて七人は東京に遊學中私は昔のまゝで紅い鼻緒の下駄に紅いリボンもさします。

○庭の刈萱　大分縣　工藤たまき

朝風の身にしむ頃庭前さわ〳〵と音するを何かと見れば銀の白玉を飾ける刈萱に秋風のふれて知らぬ顔してすぎゆくなりけり。

○見合の記　千葉縣　喜宇知日出子

女は額越に鳥渡男を見た許りて俯向いて居る、男は平然たる態度を裝ふて居るが、落居ぬ心の中は手の置處に窮して居る樣からも察しられた、て媒介者は雙方を見くらべて莞爾、勝負あつたと言はぬ許に扇をパチリ。

○粉挽　水戸　海棠

八月の十五夜も終へて、明日は九月の十三日なので今夜は女中が粉挽をはじめたゴロ〳〵〳〵〳〵其れにつれて可笑しい歌をうたひだした明夜はお月見團子が食へる、あまり聞た事のないのを歌つたので皆一度にドッと笑つた女中は驚いた顔して止てしまつた。

○月夜　下總　平山喜美子

淸らかな月が眞向に家の中へ差して、まるで晝の樣、妾と妹のつれちやんとして今朝届いた女子文壇の口繪を月の明りて見て居ると、其の上にボーッとした黑い影が映つた、ふと空を覗ると帶のように連つて雁の一群が月を掠めて飛び行くのであつた。

○妾の性質　陸前　千葉波末子

妾は寅の年生れて實に雜な性なのでいつも母樣の仰せらるゝには波の末はおだやかな物だが御前は名に少しも似ない。

俳句

內藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は每月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る。

二等

小几帳にたゝまぬ衣や秋の暮　水戸市上市西町　小桃子

三等

小謠や梅の妻戸の足拍子　兵庫縣有馬郡道端村西本利介方　那須菅子

四等

うき酒の黴れて濡るゝ紙衣かな　大阪市　辻廣子

秀逸

都府樓の秋は荒れけり晝の月　上毛　磯貝壽惠子

酒くさき人を守る灯や嫁が君　越後　藤原黑子

小徑來て女に逢ひぬ秋の暮　下總　平川澄江子

名月や裏戸出れば和歌の浦　備前　はじめ女

松一木極めて高し初日の出　鳥取縣　內田せい子

逝く春を巫山の夢の別れ哉　麹町　正木白萩子

山痩せて空の高さよ秋の暮　栃木縣　櫻井やい子

木枯に吹かれて偃しぬ筑波山　栃木縣　櫻井壽子

明星や松黑うして詩仙堂　伊賀　伏見菊枝

流れ行く花に戯る小鮎哉　名古屋　ひさえ

黃金なす夕日うすれて時雨哉　宮城縣　菊池葉子

順禮のうちふるふ鈴や秋の聲　岩代　泉りう子

朝晴や菊の宿出る川手水　加賀　蓮州女

うつし植ゑし松の根づきて秋の雨　陸前　小野寺節子

紅梅やよしありげなるかぶき門　大阪　木村はるえ

瀧涸れて道は落葉のしめりかな　青森縣　加藤美枝

弟の出來てうれしき幟りかな　神田　渡邊きよ子

新年やわが世顏なるかどの松　筑後　深山女

夜寒さを鷄の折々羽繕ひ　長野縣　今牧伊智子

松蟲や誰が住む園の絹行燈　龜岡町　伊東菊枝

ふらりふらりさゝがに姬の落ちもせず　山城　たか子

朝風呂の窓の眺めや秋の不二　備後　竹葉子

松が枝に初霜降るや蜘蛛の網　紀伊　浦田守美子

寒空に芋賣りあるく男かな　福島　中川玉章

松かげに刺客なるべし冬の月　流星女史

いかだしの頭におつる木の實かな　下野　和田正子

髮洗ふ小春の椽や菊の花　遠江　木下ふゆ子

汛に山下町は暮早し　白菫生

吹雪して船はいづこぞ鳴く千鳥　本郷　泉千秋子

夕雁や空に三ッ四ッ星の影　肥後　戸次津和子

此處よりは徒步する峰の紅葉哉　土佐　濱子

一群れは松の嵒や朝諧て　美濃　まがき生

水欄に松洩る月の亂れけり　備中　菅森紫水

橋一つ渡るもさむし冬の月　藤子

誰が墓ぞ霜に朽葉の迹じめり　上野　桂濱濱枝子

門松に雪降る頃の小犬かな　大阪市　小川とよ子
初東風や柳のゆれる庭より　埼玉縣　關口良子
夕月の菊に甘露の雫哉　下野　牛澤花靜
女畫師の畫窓閉しぬ秋の雨　熊本市　立山てる子
菊もちて庭を過ぎ行く少女哉　佐賀　西すみ
夕月に雁のへの字や海の上　東京府　森田なか子
菜の花やテニスの鞠のころげ入る　上總　北宮かれ子
旅僧の夕日拜がむや島の秋　豐後　比賣志留女
銀燭や御殿せはしき長局　越後　河島和歌波子
枯蘆に鴨打つ人の手みぬ　美濃　高原久子
若菜野に雪ちら／＼と昔めく　群馬縣　黄菊女
打仰ぐ斷崖高し梅の花　茨城縣　小泉さか江
木枯に殘れる月の光り哉　下毛　くに子
猿曳や霜解け初めし田舎路　三河　みつ子
月今宵浮かれ出でたる尼もあり　豐後　福島靜子
金色に鳥居の松や初日影　上總　關芳枝
紅梅に湯けむり白き湯殿哉　三重縣　長井みつ子
元日や雀集まる井戸の端　靜岡縣　良水
茶の花や山畑晴れて雉鳴す　越後　早津黒子
桐一葉さびしくおつる月夜かな　大阪府　一の木葉子
大根をきざむ音する夜寒哉　上毛　關口初子
萬歳や初荷に狹き臺所　京都市　紫子
蓮池に紐を隱き居る緋鯉かな　遠江　松本綾子
水仙の株近く置く机かな　大阪市　有瀬もと子
火事消えて灰る松原月寒し　成田町　三橋花江
双六や妹と語らん伊勢泊　神田　鶴岡とく子
笛の音や梅の一村夜は朧ろ　熊本　秋月澄子
燈心のしだり尾長し灯取蟲　福井　野田ちの子
神垣に折られぬ梅の白さかな　土佐　美枝
扉開き白蛇に燈捧げけり　和泉　天堀翠子
小春野や鍬々を數ふる小供づれ　神奈川　青竹女史

森かれてあらはになりし野寺かな　四谷　入　重子
きれ凧や住生院の鐘が鳴る　常總　石井はる子
河岸や石材てらす冬の月　尾道市　安保伊子
母刀自の力うれしき粘かな　下谷　工藤[illegible]子
此の里に賢人多し梅の花　上總　花澤ゆう子
神嶋の群れとぶ冬の夕べかな　駿河　瀧園子
草庵に小波と遊ぶ鷗かな　白葵子
女郎花ゆらぐと見ればいとゞ飛ぶ　横濱　長谷川花子
石瓏の風に散りとぶ紅葉かな　岐阜　臼井清子
引く鈴の音を相圖や冬籠　大和　桑山はるの
枯菊に五つかへりし鶏の雛　近江　北川つや子
明け行くや青田の靄の二千石　大阪　鎌田春枝
神嶋の拔羽散らすや秋の雨　長崎　葉園女史
夕空に雲ちぎれとぶ我がおもひ　本郷　ちづ子
朝空に聲の冷たし渡り鳥　美濃　みち子
繪馬かけし[illegible]銀杏や凩す　駿河　孤村
捨藁の下に優しき若菜かな　靜岡縣　藤山多喜子
叩く戸のこたへも無くて梅に月　高知縣　岡田繁子
姫多き紅梅殿や春の雨　門司市　須吉はるみ
追羽子を椽に見て居る小猫かな　下野　靜江子
酒屋出る赤い顔打つ霰かな　備中　篠原しげ子
さら／＼と柿の葉散るや夕時雨　丹波　恒川良子
友禪の小袖美くし松のうち　八王子　芳村秋水子
薪とる女二人や秋寒し　遠江　絹村梅子
蘆の芽の一寸にして春さむし　土佐　大和田しづ子
菊の香や衣桁にかけし能裕　群馬縣　高山まつ子
ねむたげな地藏の顔や秋のくれ　遠江　伊藤たま子
船頭の頬冠りして月見哉　京都　山水女
名月の池をめぐりてすゝきかな　本郷　古谷花子
時雨るゝや船の焚き火の浮き沈み　越後　福井やす子
落葉はく僧もの言はず鐘の聲　備前　しづえ

實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

二等　○嫁ぐべき妹へ送る

本鄕區　朝井松子

愈々御腰入れも程近う相成嘸かし御取込の御事と御察し申上候、妾も何かと御手傳致し度とは存じ候へ共斯く山川隔て候ては何事も心に任せず只々御あたりをのみ想ひ暮し居候、扨別封小包の懷中時計とブローチは當春博覽會にて求め候ものにていと〳〵お粗末には候へ共態と御祝ひのしるし迄に御覽に入候。又八丈の重ねは妾が嫁入の節母樣の御仕立下され候もの故只今迄其の儘用ひ居候へ共最早子持ちにはちと華美に相成候まゝ御平常着にもと御前樣の寸法に夜な〳〵仕立直し候ものにて誠に〳〵不出來には候へ共聊姉が寸志を御受け下され度候、乍去て度妾が最心を込ての御贈物は以上の品にては無之候、そは只一組の烏丸帖にて候也、實にや子を想ふ親心に貴賤貧富の別は無く良きが上にもよかれと祈給ふ母樣のみ心とても烏丸殿にはをさをさ劣り給はぬなれば細々とのみ敎はよう御承知遊ばされ候半とは存じ候へ共倚ほ御暇の節は此の御消息文を繰返し〳〵御覽遊ばして母樣の御戒よとおぼし給ふやうにとて斯くは御目に掛け參らせ候、殊に筆者は名に高き小野鵞堂先生にておはしませば御姑樣御寢の後假令卅分なりとも御手習ひ遊ばさるべくペン鉛筆の走り書抔は成べく御用ひ遊ばさぬやう念じ上候、又髮飾も今迄の如く餘り派なるは他目如何は敷候まゝ矢張丸髷の方優美にてふさはしく候。殊にそもじ樣は未だに白粉は御用ひ遊ばさぬ由母樣より承り候へ共昔より化粧は女子の身嗜と申傳へ候まゝ餘り華美々々しからぬやうに御化粧成さるべく候、白粉は衛生上害有り抔申候へ共それとて良品を撰びて御使ひ遊ばせば決して差支無かるべくと存じ候。未だ申上度事共海山盡さず候へ共最早子守の背にも婆の手にも飽果てし太郎が頻と乳呼び居候まゝ、餘は又の御便にと心殘して筆止め參らせ候、かして。

（評）遠くへだてし姉が心さもと思はれて懷しく、筆のあとも誠に女らしきが上に些しも間伸びのせぬは感服の外なし。

三等　○山茶花にそえて

門司市萬町二　彌吉はるみ

只今君に參らせんとて文かき終へし時、南窓ちかき山

茶花の植込を幾歩離れて、何處より飛び來りしとも知れず薄桃色の足首に紫の紐を結びつけある白き黑き藤色なる生れて二ヶ月位にやならん未だ小き雛鳩の三羽。人には馴れてゐると見えて妾等の居るのにもおどろく氣色もなくいと優やかなる双の翼を打ち振りつつ。「ぽつぽぽつぽ」とさゝやきしつゝ庭園を廻り申候。子守りにと雇ひしお重は脊負ひ居し光男妾の弟三才なるを手離し候。光男は早くも雛鳩に目をつけて捕えんものと「とちとち足」を踏みしめながら近より申候。守のお重もぬき足さし足おかしき腰つきにて助力致し候。今二人にてその一羽をあえなく捕へんとしたる一瞬三羽とも申し合せしごとく優しき羽ばたきのもとに山茶花の幾片を散らし舞ひ上り候。光男は「ぽつぽがぽつぽが」と散りにし花を指して涙ぐみ候。雛鳩の優しき羽風にうたれし花弟の無邪氣なる心を痛めし花そのまゝ凋ませんはをしければとて庭の出來事御知らせまで花五片封じ置き申候。かしこ。

（評）さりとは可愛らしき御心づかひよ、げに無邪氣なりけん其のさま見るが如し。

【四等】

○都にある妹に

近江國犬上郡彦根芹橋十五町目　坂　重子

秋の形見の桓根の菊もうつろひ果て破れし軒端に訪づるゝ時雨のわびしさ堪へ難き折から細々との御文下されいと〳〵うれしく母と共にくりかへし〳〵拜見致し候其許には相變らず御通學の由めで度こなた皆々無事にて殊に母上は至極御壯健に在せられ候間御安心なさるべく候御申越しの品々只今御送附申上候まゝ御受取下され度候さて此頃都より歸りし人の話しによれば女學生の風儀とかく荒々しく不品行の生徒もまゝ之あり候由聞き及び候そなたに限りては斯かる事のなき事は重々承知いたし居候へども遠く離るゝ姉の身にとりてはねてもさめても此事のみ心配にたへず候誰しも求めて邪なる道にふみ入る者は之なく候へども善にはうつり難く惡には染み易きが人情のならひに候へば此邊篤と御注意の上にも御注意なさるべく又友達はよく撰みて輕々しく御交際なさるまじく候されど數多の御同窓の事なれば荒々しくして田舍者の物しらず偏屈よなどゝ惡まれぬ樣あしき友は敬して遠ざかる樣になさるべく候かく親の許を離れ他人の中の心遣ひも修業の一つにて今日の苦は必ず他日の樂となるべされば御辛抱肝要と存じ候さはさりながら身躰健康ならざればすべての事業も成就せずとか承り候へば首途の時の母上の訓へをよく守りつね〴〵心がけて勉強し試驗の前になりてあわて夜あかしなどの不覺してかひなき病身

の本となる樣の事なさるまじく尙うつり變りの時節などは御自分にてよく衣食に注意して御身を御大切になされ成就の上はあつぱれ賢母良妻の譽を得られ母上の苦心姉の希望を空しうせざる樣ひたすら念じ上候かゝる事は怜悧なるそなたにはいはずもがなとは存じ乍ら只々そなたの可愛き姉の老婆心とあしからず御察し下され度候此手紙かき終り候折しも戸の隙きより廿日ばかりの月かげもれ來り候に此月もおなじくそなたの書齋をてらし居り候はんと思ふにいとゞ身にしみ候あはれなつかしきそなたには今宵この月に對していかなるわざをなし給ふらんはたまた此文のお手に屆く時は……申し上げたき事は海山つきせず候へ共餘は後便に申上ぐべく候。

（評）綿々の情盡くるを知らず、さてもかかる姉もてる人のいかに多幸なる。



なかし　京都濱部郭公女

五等　松茸を贈られしに

相模小田原町　青柳翠子

秋もやう〳〵深くなりまさりて菊よ紅葉よとの嬉しき音づれのもれ來る此頃名にし負ふ西の都の殊に勝れし御わたりの風景の美をもてあそび給ひつゝ御勉學の由實に羨やましく存じ上候訪ふ人もなき足引の山里も何となく秋の風情を添ふる折柄此趣味を味ひつゝ暮らし居候間他事ながら御心休め給はり度候扨過日は有名なる稻荷山に茸狩催させ給ひし其折の御手づからの獲物なりとて美事なる松茸澤山御心にかけさせ給ひて遙々御送り賜はりし御事御厚意の程深く御禮申上候御存じの如く父は何よりの好物とて早速晩餐の料に供へ候ひし處舌づゝみを打ちて大悦び致し申候かゝる遠地よりの品はとて家內一同にて賞翫致申候當地にても稀には得られ候へ共大さと云ひ其香と申比へつべくもなく殊に御許樣の御深切の御心さへこめ給ひし御品とて一入めでたく存じ上候添へて賜はりし御文にて樂しき御催しの有樣さへ忍ばれて終日共に樂しく茸狩り致し候如き心地致され申候共に御地に在りし頃は屢々參りし彼の地も老いたる父母に從ひて故里に歸り來し今は唯夢路に通ふのみ、されば其名物などはと思ひもよらず候ひし折此賜物實に〳〵有難く存じ上候殊に父よりは幾重にもよろしく申聞けられ候此鹽か

らこは私の手製の品味はよしあしくとも好ませ給ふなればとて御送り申上ぐる姿が誠心くみとり賜ひて御賞翫下され度候、おゝこの鹽からこそは君と二人あまりにたはむれて果ては君がこの樽の上に尻餅つかせ給ひて大笑ひとなり未だに一つ話になり居る好紀念物に候よ君三とせ前の冬季休暇の折の此地に遊び給ひし昔を忍びたまはれかし先は御禮までに一筆。かしこ。

（評）思ふがまゝなる筆のはこび、亦才筆といふべし。

秀逸

○晩餐に招く

いちじく女

姉様今日ね江上から花子様がいらつしやいましたので「梅」を供に月山の松原にたけ狩に參りましたの、それが意外に澤山とれましたのでそれを花子様と二人で割烹のおさらへ、たけ御飯や燒たけやら出來ましたから、どうかいらつしやいな、武坊をつれてあの兄様も、兄様は花子様御存じでないでしよう、私お引合せいたしますわ、場所ははなれの二階で見はらしのよい私の部屋でございます、姉様のお好きの丸窓の所の床には白菊の花を矢張花子様と二人で活けましたの、その前が兄様のお席そのお隣が武坊、姉様よ、菊は兄様方のいらつしやるのをひたすら待つて居りますよ、姉様早くいらつしやいな、どうか、どうか、さやうなら。

（評）文に飾り氣のなきが嬉し、あはれその夜のまどゐいかに樂しかりし。

○田舍の父に

遠江　増田たけ子

鉢植の紅葉色づける今日此頃御地は嘸と思遣られ候此百字文は佳作の賞とて貰ひ候もの風寒く牡鹿なく初冬の山家御淋しき事に存じ爐邊の友にと送り申候私が俗務に齷齪しつゝ尙かゝる餘裕あるをも御喜び下され度候。かしこ。

（評）短けれど能に父の心を慰むるに足る。

○歌留多會の夜友へ

大坂市　木村はるゑ

梅子様竹子様方先刻より御出陣遊ばし既にたゝかひ居候名にし負ふ松子様の御勇氣には誰適ふ者も御座なく打續き三度まで味方の敗れと相成申候定めの時刻はとくに相すぎ候を何にすさび給ひての御遲刻ぞと折から口惜しう存じ候はやく御來陣遊ばされて御助勢の程ねがはまほしう取あえず御注しん申上候。此使ひ御またせ置被下候て御同道被下度候かしこ。

（評）かくてはなど馳せ參らでやは、實用文はかくありたし。

○友の許に

土佐　高橋白ばら

理想も抱負も年老ひし父の一言にてメチヤメチヤと相成り遂に客月新らしき此所の家庭の人と成り申し候

良人は學校を出しばかりの工學書生今にては全く體のいゝ下女にて候されど何時のあなた樣の御文「滿足すれば匹夫の妻もずゐ分樂しき者にて候」の一節を心にくり返して後の出世を樂み居り候一寸右御ふいちようのみ、かしこ。

（評）無限の樂ほのめく見ゆ。

○やめる友へ

茨城縣　みどり

日毎に破る丶錦の宮居を眺めてしは悲なき身にもあはれを覺へ候をまして病魔の宿りたまふ御身證にておはしませばさぞや淋しう御すごし遊ばさる丶事と御察申上候度々御見舞申上たきなれど當方も演習につきての準備にど忙はしく御案じ申ながら失禮いたし居候其後も引つゞき御快方とは存じ候へども御言葉なくては安じがたく候まゝ代筆なりと一筆御示し下され度候もみぢ散る秋の深山の夕ぐれも長閑けき春のはじめにしあればあまりに御なげき遊ばさぬやう不治の病などとは醫術の進まざりし昔ばなしに候をまして御許樣のはまだ／＼初期に候へば御養生次第にて日ならずして御全快遊ばさるべきをなどてかくも心弱きぞ昔の君にも似合ぬ思召よ、世には醫師の見捨てし重患も神の御力にて恢復いたせし例も度々人の語るところに候はずや熱血こもれる御良人樣の御祈り愛の泉のあふる丶双手に抱きてはみとりしたまふ母上樣の御願いかで神のしろしめさぬことの候べき、百花微笑み萬鳥うたふて世は新らしき希望のかゞやく頃と相成候はゞ菊花の頰は櫻花と變じ紅葉の御手は梅花の色そへて鶯泣かす御笑聲！さてまたるるよまだこぬ春を。呉々も御心をいためさせたまはずたゞ／＼御自愛を專一に來ん春をまたせ給ふやう君をおもふまことの友の願に候ぞかし、かしこ。

（評）力あり文ある筆つき題意に叶へり。



渡し　千葉　みな江

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の實事を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投寄に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種送号



二等

簞笥七棹長持八棹後につゞくや秋の風　信濃埴科郡寺尾村字柴　駒澤ひろな

つゞいて好し、嫁入の荷は人生の春なり、秋の風は蕭々たり、欣びの中の悲み、悲みのうちの喜び、此處に我が世の姿を現ず。

三等

舞うてみたいよ羽衣つけて雲井遙にひら〳〵と　大阪市北區西野田十六町六六七ノ一　光子

理想の境、而かも理想らしく理窟をつけずにすら〳〵とうたひ出したる處に自然の妙味存す。

四等

死んだ娘がさめ〳〵泣いて逢ひに來たよな夜の雨　近江　増田たけ子

比興詩の上乘なるもの、新歌謠にも此境地あるを思へば勤めざるべからず。

五等

和泉河內も雪降るけれど五寸位が關の山　大阪府泉南郡男里村第八七　金田芳子

昨年の本誌に「越後名物高田の雪は九尺位でまだ足らぬ」と云ふ歌出でたり、それより換骨奪胎したるものか。

秀逸

君が住居は川下一里水よ持てゆけ我が妾　千葉縣　はつ子

今日も嬉しや又日が暮れて嫁に行く日が近くなる　常陸　須崎綾子

小猿大猿梢をとんで投げて遊ぶよ木の葉鞠　牛込　秦治子

自註。猿が栗のいがを投げて遊んでゐるのは信州の山で見うけられます。

天氣豫報も何にもいらぬ富士が晴れれば日本晴れ　沼津　渡邊とよを

家で一ばんお早く起きて私しや汲みます若水を　若狭　澤田あい子

すゝも取つたしおもちもついた小袖のしつけをとるばかり　靜岡縣　青木靜女

雲は晴れたる靑山墓地の空に響くよ笙の笛　麻布　福谷いち子

何の當世にや後れて居ても奢侈するなら敗けはせぬ　滋賀縣　島田かず子

○ふりの袂で一寸うけとめた羽子はみ空の春風　土佐　高橋白ばら

○三十七里の澱川水ももとは近江の琵琶湖から　大阪　小川とよ子

○備中名物きこりの與作山の木を見て雨を知る　備中　菅森紫水子

○今年十七年には見ゆれ母と添寢はまだやめぬ　秋田縣　佐々木千代子

○山家出て來た千曲の川も後にや越後の海に入る　信濃　すみれ子

○山は切れます筏は出ます窯の烟は上ります　遠江　乘松きさ子

○雪よ降れ／＼七高山の御山廻りの出來る程　長崎　菜の花

○姉は十八御山の櫻妹十六わかやなぎ　長崎市　子鶴

○面白いとて畑を打て疲てる蛙の目を醒す　靜岡縣　貞水女

○若い／＼とそう云ふうちに今年十九の春が來た　福島市　石田芳子

○椿花咲きやあの水車水が溢れて廻ります　麹町　松岡愉花女

○伊豆の名物天城のわさび漬けて出します都まで　伊豆　上原雪子

○虫の聲にもさま／＼あるよ嬉し泣きやら悲し泣き　久留米　眞霧富士

○天の御國は小雨か今宵綿の笠めすお月樣　熊本縣　桑原香葉子

○わしの村では霧がひがさかん山路通れば桑ばかり　信濃　玉桂

○天の宮守る白髪の翁が忘れおいたかはうき星　麹町　淺井千鳥子

○土佐の名物珊瑚の船に鯨とる船松魚船　土佐　岡村春葉

○試驗終へたと安心すれば又も一つの年を増す　常陸　永井愛花

○草とる娘のお忘れものか松の木蔭の紅リボン　神田　鶴岡とく子

○天の河原に三日月冴えた今宵蒼穹は銀砂子　下野　鈴木露子

○富士は白衣の衿高くつけて春の女神を待ち顔に　香川　元江

○年の始めにや母樣までが羽子よ歌留多と浮れ出す　秩父　近藤とく子

○私しや十七田舍の生れ百姓する人みんなよい　豐後　楓の家多江子

○天の川から出づるか銀あられ落つれば花碎く　北海道　白百合子

○私しや磯邊漁師が娘朝な夕なに網を曳く　豐後　古庄啟子

○此處ら田舍も電信できて花の都へ二十分　美濃　佐野富美子

○年の初めにちらつく雪は去年の天女が化粧の雪　奈良縣　中富よしみ

滑稽談

編輯局選



▲規定　實際にありし滑稽談もよし、所謂一口噺もよし、摸倣や有りふれた作は採らず、二十一字詰五行以内、半紙又は罫紙に認め一人一章に限る、締切日は毎月十五日懸賞は乙種。

【三等】

○切符の半分　　麻布　失　笑　子

ある老婆わりびき電車に乗らうと思つたが、あまり人の多いため、つひに乗りはづして普通のに乘車した。そして五錢出したので車掌が行きだけの切符を渡した、するとお婆さん裂けないのを無理に裂て、下りる時半分を出した、すると車掌が、モー半分をと云ふとお婆さん澄して半分は今度又乘ります。

【四等】

○窓を閉め　　大阪市北區曾根崎中二丁目百九十九番地吉光孝太郎方　中　川　芙　江

裁判官（罪人に向ふて）
「お前の職業は何か？」
罪人『ハイ私は輕業職でございます』
裁判官（廷丁に向ふて）
「早く窓を閉め！」

【五等】

○花ちやん　　神田五軒町二〇松本内　藤　掛　浪　子

浪子「花ちやんあのね御姉さまの御年はおいくつなの」
花ちやん「姉さまは十八なのよそして長男なのよ」

○宿る　　京橋　今　泉　磯　千　鳥

母「かるた會に行くのも宜いが遲くならない樣に歸つてお出なさい」
娘「ハイ可成早く歸つて參りますがあまり遲くなつた時は宿つて來ますわ！」

○運動がてら　　う　ば　ら

甲「あなたどちらへ」
乙「一寸先生のお宅まで」
甲「何ご用なの」
乙「ウム――餘り發が上手にゆえましたから運動がてら……」

○思ひ違ひ　　奈良縣　森　本　あ　さ　子

敎師此梅の木に花五輪あり彼の櫻の木に花七輪あり合せて花の數幾輪なりやと問へば、生徒は聲に應じて答一錢二厘。

○煙が上る　　京　都　濱　部　風　窓　女

恥な譯はれば成りませんが私が寄宿に居つた冬の或日國元から餅を送つて來ました、食物は一際食堂で喰べる規則なのなつい面倒なので屏風の火鉢で燒いて居ると惡い事は出來ませんゝ先生が何か用事でも有つたのかヒヨツコリ見えました、サ！大變と突差の場合七人は申合せた樣に網の上へ兩手を擴げました煙が上るプンプン香はする其の時の皆の顏は甚麼に滑稽てしたか……。

○八卷　　本　郷　千　と　せ

姉樣は産婆に任せて置いて私はお湯をわかして居ると又御持病のお頭痛が始まつたのか婆さんが「旦那樣早く八卷仕て下さい」「よしきた」と勢のいゝお返事、暫時すると又婆さんが入卷を呼ぶので兄樣何な遊ばしてかと行つて見ましたらこは如何に御自分が向ふ八卷て、餘の可笑さにアツと笑つたとたんに奥てオギヤー。





新年旅行

かしまだち

女子文壇記者　愛野毛由流
女子文壇記者　種蒔權兵衛

右の兩人は女子文壇誌友諸孃にお約束した通り新年旅行に出かける事となつた、一月一日の一番汽車で新橋を發す、見送人の誌友は山の如くあつたが其中にわざ〳〵小石川から奈美木翠女史も見えた。是より先き本郷の朝井千とせさんから本郷の愛讀者を擧つて一大歌留多會を催ふすゆゑ記者にも來てくれとの事てあつたが、旅行の爲にお斷りした

よこはま

「波靜かなる品川や」と昔の東海道五十三次文字ぐさりにある品川の海も瞬間に過ぎて横濱に入る、四戸部町のくに子さんが迎ひに出て居られて、頓てお宅へ行くと家内中へ御紹介され、お茶の手前やら初春の梅と云ふ餅菓子やら御馳走して下さつて、扨て薩摩琵琶を聞かせよとの御注文、權兵衛は小督の一段を語りてそこ〳〵にお暇乞ひし、辨天通の清水千秋子さんの催ふしになる誌友會に臨み、福引に「おあし澤山」と云ふ題を得て記者は大欣び、旅費が出來たぞと内心ほく〳〵もので居ると豈計らんや草鞋が十足許り、有難く頂戴して汽車に乘る、「おほふな」の停車場で角用秀子さんに迎へられ、木村はる子さんと二人で金澤八景を案内せられる、需めに應じて羽子板の裏へ歌を書く。横須賀では波迯比佐子、杉浦登代子おふたりから歡待される、お土産に比佐子さんの書いた綺葉番を貰ふ、愛野は大切に懷中へしまつて置く

ぬまづ

飛菱久枝さんの發起て紀念愛讀會と云ふのが開かれ、記者に談話せよとのこと、種蒔は「女子とお雜煮」と云ふ題て御馳走の演說をする、甚だ要領を得ないが滿場大喝采、お土產の桃羊羹は敦野さんの厚志、第二の歡迎の本陣は八代美代子さんの別莊て、山海を前に控えた大庭園、三斗五升のお供えの由來など聞く、又汽車に乘つて今度は「原」町て下りる、小田原金子さんの案內て村長さんや校長さんに挨拶する

しづをか

興津て一寸下車、渓園女史が精神的御馳走をするとて海濱の絕景を案內された、自然を愛する記者は最も滿足した。靜岡の停車場にも澤山の歡迎者、隅の方で二人何かひそめいて居る「記者つてあんな人?」、一人はいやにハイカラて氣取つてるし、一人は百姓のやうだし、私、傍へ寄るのもいやだわ」斯んな話をして居られるのは伊久身村の樋澤よれ子さんと綱惠はな子さんて衣服も、靴も、顏も、手足も皆新しく粧飾されてある、はな子さんの宅て誌友名簿を拜見して其數五百九十五人あるに驚き、是ては迚も紀念撮影は出來ますまいと云ふと、ナニ記者さんだけ寫せば好いとの事

をかざき

岡崎には寄らないが矢作町の永田舞鶴子の招きに應じて、停車場から鐵道馬車に乘り、代金六錢を拂ふて町に着く、藤吉郎の寢て居た矢矧橋を見物すると、橋上には催樂隊が盛んに嘶して居る、何處かの開店披露かと思へば記者を歡迎してとの事、恐縮しながら案內される、三寸大のお雜煮の餅に上戸の種蒔は閉口する、其上岡崎名產八丁味噌の大樽を土產に貰ひ、始末に困つて東京の本社まで通運便に托する

なごや

名古屋に參ると竹子さんが童謠を聞かして下さる

おゝ正々御正月、松立つて、竹立つて、悅ぶ者はお子供衆、嫌がるものはお年寄、旦那の嫌ひな大晦日、一夜明ければ元日て、年始の御祝儀申します、お煙草盆、お茶持て來い、吸物なんぞは早持て來い

なか〳〵面白い、記者にも五分演說との事てあ

るが、此度は愛野毛由流が早速童謠に就て一言する

元來各地の民謠と稱するものは、之を分類すると幾十種幾百種になるか知れませんが、其間に統一したる調子、統一したる言葉があつて、大同小異のものが多い、元は一つでも地方〳〵に行つて變るのであります、此等を調べると……

なほ言葉を續けて十五分許り演述した、中村のふみ子さんが入らして豐公誕生の遺蹟を詳しく東道される

ひこね

美濃の岐阜で篠田とみ子さんに一言の挨拶をして、關本町では彷島さんの注意で裁縫舍諸孃にもお目にかゝり、次で彥根に下車、土岐尾のぶ子さんの案內で竹生島巡りをする、湖上の風光は殊に記者の眼を悅ばした、坂恵子さんは家庭談話會を開かれた、播鉢ころがしといふものゝ仲間入りもする

おほつ

次は馬場で下車、大津の西村さんのお宅へ參ると御飯の代りだと云つて氷魚を澤山出されて、それから二人で五十貫の石を擲げるか、それとも俳句三句をよむか、出來なかつたらペスにけしかけて宅を出さないと云ふ、石をあげることより犬に吠えられるのが怖いから二人は一生懸命に句を案ずる。

　紫の湖上や鳰の巢を浮ぶ　毛田流

　石よりも餅に力はありとかや　權兵衛

二句で堪忍して貰ふ、後のは句になつて居ないと云はれる、權兵衛は意味のある句だと云ふ、聞いて見ると力餅の催促だと分り名物辨慶の力餅を澤山御馳走になる。

きやうと

石藥師の早川梅花さんは女學生生活の實業な中でも手厚いもてなしをして下さる、記者も道中の失策談など語る、八幡の八幡宮に參詣すると入田文子さんが近所だと云ふので白羽の矢の響を下さる、此れは厄除になるさうだ、記者も火難盜難旅行難女難除の爲に有りがたく頂く。宇治ではミサオさんと云ふのが歡迎される、記者に詩を吟じよと云ふ、吟詩は種蒔の方がうまいので其方に讓る、茲を出て大阪に向ふ

おほさか

大阪では僅に今西こゆき孃一人が愛讀者を代表して全部隈なく案內される、天神橋の鐵造りや川蒸汽の進行や、中の島の公園や、川岸の蠣買船や、赤ケットと云ふ格で遊んで說明を承りながら見物する、扨て別れ際に例の一句と來る、好い加減にぬたくらして、お土產を催促するとねぼけのおせんぺいと大龜の粟おこしを下さる

やまと、きい

大阪から大和へ入ると吉野の中富よしみさん、紙上でお馴染だけにいろ〳〵打とけて話をする、二日も三日も滯在してくれよとの事なれど、然うはゆかぬ、南朝の古跡の物語など聞き手製の椎茸を土產に貰うて紀伊に入る、紀伊では引本町の川上保子さん、阿備の里木下操子さん、簑島町の田中文子さんなどから招請せられたが、地理不案內であるから田中さんの蜜柑山の歡迎會にだけ臨む、葉がきに繪を書けよとの注文であるから卽刻に描く。

かうべ

大阪へ引返して神戶に向ふ、途中、池田と西の宮に寄る、池田では寺部君子さんの宅で名酒伊丹灘の振舞になる、權兵衛大いに醉ふ、醉ふて西の宮の森井せい子さんの宅の前を通るとなかなか素通りは許さない、サア何うぞお上り、ようこそお越し下さいました、私こんな田舍ですから素通りされては大變だと思つてほんとに心配しましたは、あら、私不調法者ですから御挨拶はゆるして頂戴……あのう記者樣御酒を召しあがりますか「召上りまして此通りになりました「僕は聞召さない方で……「否え召し上らないでも是非差上ますのよ、此處は御酒の元祖なんですもの、日本國中何處へいらしても御酒だけ負けないつもりよ、ホ……何うぞ澤山召上つて頂戴と云ふ下から大盃になみ〳〵と黃金の雫は溢るゝ許り、權兵衛も毛由流も大醉の態、せい子さんの愛嬌に吞まれてなほ醉つて了ふ「此處は鳴尾の浦つゞきなどゝ出たらめの謠曲をうなりながら蹣跚として西に向ふ、神戶にもなかなか愛讀者は多い、御幸通の平林たつ子さんは祖父さんが二十一度首へかけて高野山へ登つたと云ふ寶物の珠數や、古鑑、銀鈴などを見せて下さるし、鐘紡病院の大谷百枝さんは懸賞品の

御誂など言はれる、扨て兩女の案内で海岸を散歩しながら折柄の出航に四國をさして船出する

しこく

讃岐三豐郡財田大野村と云ふ山間の僻地に西山かずま女を訪ふ、滊車も車も通はない山奥であるから素朴の人情なつかしく、栗飯の御馳走など頂く、爐にあたりながらかずまさんの父君母君は珍しさうに記者二人の姿を見る、珍らしがられるのも道理洋服といふもの初めて見たとの事で愛野のハイカラは此處大いに光彩を添えるかずまさんは赤くなる。次は阿波に入る徳島から南十八里、勝浦郡高鋒村と云ふ此れも山間の僻地で、堀田紫濃子さんの歡迎を受ける、此お祖父さんも今年八十一で洋服と云ふもの胃活の廣告で見たばかり、活きた洋服は初めてだと云ふので愛野の洋服は又面目を發揮する、權兵衛も負けぬ氣になりて脊廣の肩を聳かす。頓て其次は那賀郡坂野村若槻淑子さんの宅で酒宴の席に臨む、眺望佳絶なる離れ座敷で鶯の聲など聞きながら舊式の饗應あり。次に土佐の國吾南諸木の高橋白ばらさんを訪ふと、これは反對に新式の饗應西洋菓子が出る、西洋酒が出る、林檎の淡雪など洒落たものが出る、頓て女子文壇百人一首と云ふ新かるたをやる、誌友の人が澤山來る、二階は九十九里を一目に見晴らし、紅茶を啜りながら此れで四國とはお別れの名殘を惜む。

をかやま

あや子さんと云ふ岡山の方に案内されて其舊宅のある味野村に遊ぶ、座敷からは瀬戸内海を眺め、船に乘つて小島を廻りなどし、吉備郡下田口林ふみ子さんは發起して讀者大會を開く筈で其決議事項だけ聞く、大會の時には必ず出席のお約束をする。備後では海邊に近い鞆の町で小林さん、山間では帝釋村の市岡さん、保命酒の御馳走になつたり、絵葉書を土産に貰つたり、中國の風光を稱しながら長門に入る。

やまぐち

山口縣では豊浦郡勝山村の藤本いな子さん、宇部の紫雲女さん、兩人が代表して俳句會や談話會を開かれる、名所案内もされて、いろ〳〵名所の名も澤山聞くが、記者も全國を駈廻つて居るのでなか〳〵覺えられない

さが

九州へ渡る、先づ長崎方面へ向ふ、佐賀市の田中よをさんのしるべで舊城趾を見る、鐵砲の跡なども示さる、長崎では小田米さんが金比羅登山の案内、名物はカステラ是は昔から有名だから欣んで貰ふ、佐世保の停車場へ着くと紅紫一隊の娘子軍が出迎いしてゐられる、記者の顏を見るや、俄に手に持つて居る松葉を投げつける、顏や手や足や處きらはず松葉を投げかけられたからたまらない、今迄歩いて來た處は大抵歡迎の方法も極つてゐるし、別に奇抜の事もなかつたが此松葉責には少からずどぎもを抜かれて大敗亡、松葉の雨が少し止むのを待つて何うした譯かと聞いて見ると此地方では松の内に珍客が來ると門松の葉を手裡劍代りに投げかける風習があるとの事で、成程と合點が行つた、一隊の指揮者は淺田克子さんの案内で市中を見る記者は驚かされた含み針の紀念に松葉を貰つて歸る

おほいた

引返して豐後に入る、東中島安岐の近藤瑠璃子さんは瀬戸田公園を案内される、梅が盛りだ、九州は温いと思つた。それから豐後の沖の姫島に居らつしやるさち子さん、此れは豫て髯を生したり洋服を着けたりして居ると竹田津から四里の海上を法外な渡し賃を取られるから田舍訛りに鹽買の風體してゐらつしやいとの通知があつたけれど、今更髯も削られず、權兵衛の如きホクチ髯は兎に角、愛野の天神髯は朝夕愛撫するもの、兎やせん角やと案じたる結果、燈臺に用がある役人だと大威張で渡ると船頭は恐縮して渡賃は取らぬと云ふ氣の毒になつて若干かを渡し姫島に着いて案内に依り燈臺は勿論、海上の風光を翫賞する、又直ぐ元の陸へ引返し大分の町に入る、波止場には松木なみ子さんを初め誌友の人々が堀川饅頭を持つて迎ひに出て居られる、一泊をすゝめられたが然うはしてゐられないで次の臼杵に向ふ、安部富士子さんに妙な土産を貰ふ、藻の花を瓶に入れたもので餘り凝つてゐるから何かのまちないかと思つて聞いて見たが然うでもなく矢張只藻の花を差上ると云ふ事である

かごしま

陸路鹿兒島へ向ふ途中、大隅國姶良郡牧園村大飼たき子さんを訪ふ、家は高千穗の麓、海拔四千尺の高丘に在り、珍しきは猿酒の御馳走である、山の洞穴に猿が木實を以て醸した猿酒がある、それを盜んで來て御馳走された、流石は神代の名殘ある土地とて開けた地方には無いことだ。鹿兒島の市では鶴丸ちま、芳子お二人の接待で、東郷大將の出生地、西郷南洲の墓地など英雄に因みある場所を見物する、お土産もいろいろ出たが煙草と燒物が最も好いと思つた

くまもと

熊本附近では菊地村の佐藤なほ子さんは菊池神社を案内され漢學の大家や、和歌の大家にも紹介して下さる、又菊池の文士連を集めて園遊會が開かれる。鹿本郡中富村では富丸わか子さんが今夜お泊りならとろゝ汁に麥飯の御馳走をなす

ると仰つしやる、明日は田原坂の古戰場も案内するとの事、けれども記者は先を急ぐからずんずんお斷りして進んでゆく。

ふくをか

田川郡弓削田村の角鍋ゆきゑさんは二十名ばかりで談話會を組織してゐられる、それで記者の行たのを幸ひに俳句の迎座會を開かれる、記しの句は大々落第、姫御前達に壓伏されて大敗亡這々の體で逃出す。嘉穗郡穗波、細川、兩孃は中央炭坑に案内される、炭坑の見物も好からうとついてゆく、坑夫の生活のありさまや、機械の運轉するさま、安全燈の光りで石炭を掘り出して居るさまや、地下の別世界を見て大いに感動する、坑外へ出ると二人とも顏が眞黑なので笑ひ合ふ、直方の田中登代さんも厚い歡迎をして下さつて炭坑の案内も言出されたが既に前に見てあるからよろしくお斷りして九州を辭す

さんゐん

山陰道筋は處々に立寄つて行く、先づ最初は長門阿武郡小川村須子常子さんが進んで迎へられたけれど此地方は舊暦のお正月だから今は甚だ淋しい旗が立て居るのは役場か學校位なものである常子さんに次の村まで送つていたゞく。石州濱田の町に入る。愛讀者四十餘人とは失禮ながら此地方にして盛んな事だと驚いたが且ありがたかつた、大和舘と云ふ此地一等の旅舘に案内される、かはる〴〵面會を求められるのでなかなか忙しい、此邊の名所舊蹟を探るには少くも三四日は居られねばならぬ、寫眞を拜見する位に止めて置く、無名異燒と云ふ變な名の燒物や長濱人形など土産に貰ふ、皆萬歳を三唱して相別れる。次はずつと飛んで因幡の鳥取、此處も山陰ての都會だから讀者も多い、上山千頭子さんは振の袖ゆたかにお茶ゝ手前など御馳走される、引出物には鹿毛の名馬、足搔しづかに手綱かい取つていざ乘りたまへとすゝめられる、愛野も種蒔も自轉車なら人眞似ぐらゐ出來るが馬と來ては禁物、明治の小栗判官は暫く途方に暮れたが儘よ落ろ處まで乘つてゆけと、馬上ゆたかに……實は戰々兢々と鬣にしがみついてゆく、四五町來たと思ふ頃二人ともヤレ助かつたと顏見合せ、千金の名馬も我等風情に乘られては氣の毒だらう。歸れ！歸れ！と一鞭あてゝ逐ひ返す。恐らく名馬の面目は立つたであらう！それから次が丹後の舞鶴、賤ゞ子と云ふ方と、愛蓮子と云ふ方とが歡迎される、漁師町など見る、中筋村の小ゐやす子さんは三景の一なる天の橋立の案内役、又河守の鹽見千代子さんは慈善婦人會を開いて、行商少女の爲に記者にも臨場を乞はる、櫻の造花を深山送られる。次は綾部の停車場へ廻り、下車して[illegible]林ふみ子さんを訪ふと家内中大欣び、過ぎし日の大洪水に田畑の作物は皆流したけれどキビだけ澤山取れたからとてキビ團子の御馳走に勝栗をポケットに入らぬほど賜はる。

ほくりく

越前に入る、丹生郡吉野村の片山千里さんは記者の爲に新綿を紡いで新衣一領づゝを縫上たとて出される「おかひこぐるみの方にこんな綿衣は差上やうと申されませんからせめてこの越前丈けでもお召し下さい」と言はれてみると洋服男が邪寬になるとも云はれず、其志の厚きに感じて有がたく頂戴してゆく。金澤市では黑田藤枝さん、鶯張の廊下を歩かされたり、數の子のさしみを出されたり、意外の事ばかりで此上長居すると鯨の丸燒など出されては大變とそこにお暇乞する。能美郡三反田の小島蓮女さんは松任驛まで出迎して居られる、打見る年の頃二十一二、少し長手の顏立で髮は束髮、小豆色の被布に鼠縮緬のショールと云ふじみな扮粧、宅へ上るとお父樣が御酒好きで、小島さんのお酌もなか〳〵熟練して居られる、端唄など所望されたが其邊の事になると一向無風流の木强漢たる記者はよろしく辭退して罷出る。次はずつと遠く長岡市、誌友皆さんと御相談の上ださう、て手厚き西洋料理を饗應される、主人役は佐藤源子さん、扨て記者に一場の談話を請はれる。愛野毛由流は食卓を前に立上つて一場の挨拶を述べる。

皆さん、今日は新年旅行の記者兩人を歡迎の爲に手厚いおもてなしにあづかりまして有りがたう存じます、さて新橋を出發しまして、此雪深い越路のはてまで一瀉千里の勢を以て旅行して參りましたが、架空旅行とは云へ御馳走や、お土産や、お話やで隨分二人とも疲れました、少し里ごゝろが著いて東京へ歸つて見たくなりました、なほ此れから東北地方北海道まで皆さんは到る處支度して待つてゐらるゝことゝ存じますが、せめて東京へ歸る途すがら、信州各地（歡迎者も多いから）だけでも立寄りたいと思ひますけれども、時間の都合（實は紙面の都合）で據ろ無く一先づ直行で東京へ引上ます。今まで旅行して參ります内に、或は精神的に歡迎して下さる方もあり或は形式的に接待して下さる方もあり、或は舊式、或は新式、人さま〴〵でございました要するに其れが爲に各地の人情風俗を知り、名所舊蹟を見ることを得ましたのは全く諸嬢のおかげとあつくお禮を申します、なほ此旅行を歡迎された方は愛讀者の百分の一千分の一、或は萬分の一を代表されたに過ぎないことを思へば、若し凡ての愛讀者が歡迎されたら何んなであらう、想像するだに及ばない事でございます、此新年旅行を是等大多數の全愛讀者と共になし得ることを記者は光榮とするのでございます

口演　漸く北陸地方だけて關東及び東北地方に及ばなかつたのは甚だ殘念ですが更に次號に於て新春旅行を試み此等の歡迎者の意を空うしないことにいたしませう懸賞當選者も其期に發表します

學校通信

○講習會　熊本縣　高野かず夫

熊本の養蠶は中々盛んてす、此の度山鹿町の長原寺に第四會蠶業講習會を開かれました、科目は、蠶体生理、蠶病論及消毒法、養蠶法の三書てありました、講師は兒玉光雄、森正恒、荒木武雄先生の三人て教へになりました、生徒數は男生女生合せて五百人實に盛んてした。

○我が村の教育　青森縣　K　子

私の村はごく小さい村てありますが教育は大へんすゝんてゐます、故に女學校へ入つた人が三人中學校は十二人高等卒業した人は五十人もありまして朝早くから海老茶は隊をなして一里もある高等にゆきます。

○通學の樂　千葉縣　鈴木かれ子

妾の通ふ學校は妾の村から一里ばかりはなれた所にあります。生徒はみんなて五十人あります がその中て一番親しいのは梅子さん、その次花子さんてあります毎日々々この梅子さんと花子さんと妾と三人揃つて通學するのが妾は何より樂しくあります。

○雨　大分縣　平田小春子

大分高等小學校の運動會には毎年雨が降りますので、雨乞ひには、高等小學校の運動會をゝする

か、よいなんて人が惡口を、言ひます。

○女子大學運動會

み、　は

小門から入つて、運動場へ出ると、パツと明るくなる。華やかな氣に成る。刹那の惑は美しい。テントの中へ導かれて、正面に木實拾ひの競爭を見る赤が勝つた。勝つた方の小供が、嬉しさうに。ピョン／＼と跳れる。跳れた子供が歸つて了ふと、美しい色が目の前を颯と流れる。自轉車だ。走りつゝ翳す銀扇に日が照つて、燦然と輝く。次に綱飛競爭がある。矢張赤が優勢だ。フト赤といふ事が意識に上る。何だか赤が勝たした樣に思ふ。と、其處へお下髮にした十四五の女學生が後から出て來て、『母樣』といふ。母樣は私の隣の椅子に居る。『又赤が勝つてよ』と、足踏をトントンと二つ、袖を捉へて、母を仰ぐ。『ホヽ、一生懸命に成つてるよ』母樣も屹度赤が勝つたのが嬉しいに相違無い。

と嫣然する。

次にシンバーがある。表情体操の中では一番これがいゝと思つた。番組が移つて十六に成る。「菊の花」といふ兒童競爭がある。無論赤の勝だ「花の使」は面白く無い。

第十八綱引といふ札がブラ下る。

『今度も屹度赤だわ子』

と振返つて阿母樣を見る。阿母樣は御飯を食べて居るから、急に返事をしない。

『綱引なんぞ見ないでお前も食べればいゝんだのに』

と仰有る。

『無論赤が勝ちます』失敬な阿母樣だ。ト遁り兼ねて言つた。會心の友を得たりとばかり、お下髮先生は嫣然として振返つた。ヒラ／＼と動くリボンの色が赤い。

ピュ！と笛が鳴る。ドーンと爆聲を相圖に綱を握る我赤組戰士の腕に力が入つて、ガ！引け、ガ！引けといふ聲援手の活潑な聲が勇しい。『赤！赤！赤ーッ』といふ應援團？の應援の聲が、一時に起る。白い旗も動くが赤い旗は餘計に動く。

『ドーンと再び爆聲が聞えて、赤が勝つた。『赤よ、赤よ』とお下髮先生は、跳り上つて喜んて居る。私も嬉しい。白も次て勝つた。

午後には棍棒体操と木環体操とがあつて「古戰場の月」といふのが始る。『これが學校で一番評判がいゝんですよ』とお下髮先生、私に説明する。併し、月を仰いて見たり。向方を指して魂消て見たり、宛然劍舞の出來損ひを見て居る樣て、少しも感心しない。詩的な命題がお氣に入つてるのだらうが、ダンスとしても表情体操としても幼稚なものだ。長卒体操は更に下らない。『扇の的』は少し捺へ過ぎた氣味がある併し次の白と紫との組を持つての自轉車回轉は奇麗なものだ。『花實』は思つたより感心しない。コーラスも今一息だ。

第二十七第五アマゾンといふ札が下るとパチ／＼と方々で拍手が起る。一樣に白袴白襷銀色の棒を持つて、音樂に伴れつゝ動く姿は兎に角勇しい。『望の天』では綠が勝つた。徒手体操が濟んで踊らうとすると、

『まだバスケットボールがあるんですよ』

と下髮孃がいふ。

戰鬪は始つた。赤と白との旗やハンカチーフが花の吹散る樣にヒラ／＼と満場に動く。今日の勝敗はこれて決するのだ。ボールが上る。落ちて來るのを、金魚か龜が餌を爭ふ樣に。採合つて抛ろ。最初の球は立派に赤の籠に入つた。赤ーッ赤ーッ赤ーッといふ聲が、一時に響く。戰鬪二回遂に名譽の月桂冠は我赤軍の手に歸した。我雄健なる赤軍よと感謝の念が胸に湧く。嬉しくて嬉しくて堪らぬ。赤は屹度來年も赤が勝つに相違ない。と思ふ。會は果てた。赤も白も一緒に成つて君が代を歌ふ。勝負といふ汚い念が去つて、崇高な念が胸に起る。心は嬉しさに滿ちて學校を出た。

文學顧問

問 記者樣妾は日本の地圖と遠江國の地圖で最新確實なのを欲しいのですが何所で買へば宜しいでしやう（失名）

答 富山房發兌の「最新日本地圖」（定價八十錢）富山堂發刊の「最新帝國大地圖」（定價八十錢）其他博文館、春陽堂からも地圖の好いのが出版されてゐます、遠江の地圖は參謀本部の二十萬分か二萬分をお求めになつたら如何、東京なら市中にいくらも賣捌所があります。

問 兄の仇、己が罪、夏子、と云ふ書の定價と發行所を敎へて下さい又た私は筆蹟が下手で困りますので草書の手習ひ致したいと思ひますが何か良い草書手習本がありませんかあるならば發行所と定價を敎へて下さい（福島縣伊達郡福田村、八重子）

答 「己が罪」は三册綴きて一圓二十五錢、「夏子」は二册綴きて一圓四十錢、共に日本橋春陽堂發行、草書の手本は小野鵞堂の「草書千字文」は如何です、京橋吉川弘文館の發行で定價三十五錢

問 記者樣、新體詩の最新の書物を知らして下さいまし（岡山、花子）

答 新年になると蒲原氏の「有明集」岩野氏の「新體詩の作法」吉野氏の「新體詩粹」其外未だ二三種出るでせう

問 記者さん男子の幼年の時よりだん〳〵大きくなるに從て聲の變はるのは如何なる理ですか、又女子の聲はさまで變らないのは如何なる理です（東京、とき子）

答 男にせよ女にせよ、それは身體の發育に伴ふ現象でせうけれど生理學上の理論ですから文學顧問の記者には詳しい事が説明し兼ます

問 英和辭典、和英辭典は何處より出版のものよきや（札幌、菜すみれ生）

答 種類は澤山ありますが、神田裏神保町三省堂發刊のものが評判よろし、大小いろ〳〵ありますから定價等は直接にきゝなさい

問 記者樣私は何も知りませんの、それで「ゲーテの詩」及び「ハイネの詩集」とはどんなのですか又定價と發行所とを敎て下さい（波之花）

答 ゲーテの詩は未だ見かけません、ハイネの詩は定價二十五錢、神田錦町三ノ六渡邊書店發兌

問 井上通泰先生の御歌に「いにしへの三つの聖に、とひてまし、戀てふものゝ、味はいかにと」と云ふのが御座いますが、三つの聖とは誰誰の事で御座いますか、御敎示下さいませんか（備後、花つくり）

答 三聖は釋迦、基督、孔子でせう

問 （一）橫瀨夜雨、尾上柴舟兩先生の御住所、（二）新體詩の一句とは如何なることか、（麗子）

答 常陸下妻大寶、橫瀨夜雨氏、東京小石川原町百三十三、尾上柴舟氏、詩の一句とは「今日江戸川に來て見れば」とか「櫻の霜葉黃に落ちて」とか云ふのが一句です

問 現今の女醫學校はいづれが一番よろしいですか（春花女）

答 市ヶ谷河田町の女醫學校が宜しいようです

問 妾は或大家に就いて繪畫を學び度いと思ひますが日本畫でも洋畫でもよろしいのですが塾を開らいて敎へて居る先生はありませんか（信濃、伊智子）

答 いくらもありませうし、有名な和洋畫の先生達の多くは自宅で敎へて下さるでせう、玆に一々名前を舉げる迄もないことです、自ら此の先生ならと思ふ方に尋ね合せて御らんなさい

問 最愛の記者樣私非常に詩や文が好きよ、ですが思つて居る十分の一も綴れないの、どうしたら上手になるでしようか、敎へて頂戴な（臺北、峽嘉枝）

答 讀書、觀察、熱練、作爲、以上の事が皆出來て未だ上手にならないなら天性上手になれないたちなんでせう

問 內藤鳴雪先生に俳句を見て戴たいのですが御住所を御敎へ下さい（紀伊、長井漣月子）

答 本郷區眞砂町十八、內藤鳴雪氏

問 記者樣虞美人草とはどんな花で何時咲く花ですか御敎へ下さいまし（あやめ子）

答 虞美人草は一般には只の美人草と言ひますヒナゲシとも言ひます、夏に咲く美しい花です

問 懸賞御伽ばなしは英語を譯したるものではいけませぬか、又材料を英文に取つて書方をかへては如何でせう、必ず御答へ下さいましな（あかつき）

答 飜案又は飜譯は取りません、御自分でお作りなさい

問 記者樣、和歌と新派和歌との規則の區別をお敎へ下さいまし（あかつき）

答 精神的に區別はあつても、規則的にありません

問 和歌などに「まろうど」とありますが、何んなものか、何んなことですか、御敎へ下さい（下總千代子）

答 まろうどは賓客と言ふ字が當る、御客樣の事です



讀友倶樂部

眞友なき人は眞に憐むべき孤獨の境遇に在る人と謂ふべし眞友なくんば世界は恰も荒野の如し

ベーコン

讀孃と記者

○記者樣年の立つのは早いもので早今年は四十一年になりました然し年とともに我女子文壇はまことに賑しく榮えてくるのも一面に記者樣方のお骨折からだと存じます、どうぞ本年も事なうすぐして共に榮えん事を祈つて居ります。（滋賀縣滋賀郡眞野村大字普門太田靜花）（記者曰、全く年の立つのは早いもので、わが女子文壇も四年になりました、而して讀友倶樂部はます〳〵繁昌します、能く皆樣が讀友倶樂部を善用して、おたのしみなさいますと、紹介者の記者も感心してゐます、記者もます〳〵正直に懇切に、本欄を擧げて諸孃の機關たるに背かないやうにしたいと思つてゐます）○記者樣へ御尋ね申します編物や雜誌を交換しますにはどうして致したなればいゝてせう私ちよつともわかりません故ぜひ御答下されませ（土佐、若江）（記者曰、讀友倶樂部の原稿にしてお名前ゝ住處を詳しく記入して下されば、紙上へ出しますから自然交換が出來るわけです）

○御懐かしい記者樣御變りもなくつて私本誌三卷十五號て御交際を願つて置きましたら圖らずも九十七人の方と御交際が出來て嬉しいわ是れも偏へに記者樣の お蔭と厚く御禮申上てよ（臺北城内南門街二種高等官舍峽よし子）（記者曰、それは結構てした）○日に増し御寒く成てまゐりました記者樣の方は如何て御座いますか當地は二三回雪が降りましたよ時節柄記者樣の健康を祈ります（信濃更級犀波子）（記者曰、氷と霜は見ましたが雪は未だ見ません、さすがは信州です、 投書それ〳〵廻しました）○記者曰、本紙小草子と仰る方からお手紙をありがたう、選者の變つたのは何の理由もございません、お心におかけなさるやうなことは少しもありません、それから選者の一人であつた河井醉茗は矢張前々通り本誌の編輯主任として、益々此の雜誌を善くすることに努めて居ります、お尋れてすから一言申して置きます○ロール半紙の原稿紙へ書た原稿は沒書となるてしようかおうかゞひ申上げます（菜子）（記者曰、そんなことはありません）

繪葉書交換

○いやみのない趣味に富んだゑはがきの交換を願ひますツシテ如何なる方にも下すつただけは必ず御返しします（埼玉縣北足立郡大宮在東門前村長島内もみぢ）○私は繪葉書が大好きですから皆樣どんなでも宜しう御座いますから送つて下さい（下總印旛郡川上小學校内伊東壯子）○繪葉書寫眞の交換を願ひます（京都府相樂郡加茂村字錢司四拾九番地住岡香子）○情け深き讀姉上樣よ美しき御繪葉書を澤山御惠み下さいましてありがたう此後も相變らず御交換を御願ひ致します（京都市上京區新烏丸夷川登ル戸野榮方羽倉信子）○讀友の諸孃樣よ繪葉書の交換を願ひますそして先着十名に限り妾の見苦しき寫眞にて御返禮いたしまよ（靜岡縣周智郡山梨町宮本輝子）○繪葉書又は編物の交換を切に望みます（京都四條通り御旅町明田寫にて森山百合子）○何卒繪葉書交換して頂戴な返禮はすぐよ（靜岡縣駿東郡北鄕村字用澤諏訪之前梶やな子）○妾は昨年より當地に引越し叔父樣のお宅に厄介になりてゐます諸姉樣よ寫眞繪葉書の交換を願ます（韓國京城南大門外牛草方淵村よし子）○今妾の手許に名高い九十九里の繪葉書四組と妾の拙い寫眞が三組ありますから先着のお方九名には差上ます（千葉縣山武郡白里村四天木四之宮淩方四之宮あき子）○廣く繪葉書の交換を願いたいのてあります皆さんより繪葉書を御送りの時は御望みの繪葉書を書添へて下さらば私より送るには好都合てあります（北海道小樽區稻穗町畑四〇豐岡吉治郎方池田綠葉）○妾れ此冬休暇を利用して故鄉へ歸ります諸孃と交際を願ひたいですから繪はがきの御交換を願ひますどうか英語て交換して下さい御願します（大坂府北河内郡九ケ庄村高柳西野淺吉方ゑつ子）○本年も盛に御交際を願ひます可成なれば繪葉書に和歌か俳句を一首又は一句御認めを願升（京都四條寺町角赤井方上田靜波子）○私方には大阪名所又は京都名所又は八聯隊の紀念繪はがきが有ますからどうか御交換を願ひます（大阪市東區島[illegible]）○皆樣何卒

新年の御祝として美しい繪葉書の交換致しましよう私は新年を待つてゐます！御返事には妾の新年の松と共に寫したハイカラ的の寫眞を以て返禮いたします（栃木縣下都賀郡寺尾村尻出福富清子）〇私は能登の片田舍に住する者で御座います何卒繪葉書玉章の交換をねがひます（能登國輪島河井森之下武井花子）〇誌友の君よ妾は記者樣諸姉樣のおかげで交際するようになりましたから繪葉書やレッターの交換を御願ひします御返事には信州名所でも美人繪葉書でも（長野縣上水内郡三輪村上松小林久子）〇満天下の誌友諸孃樣何卒繪葉書の御交換を願ます（栃木縣烏山町山口深泉）〇誌友の皆樣私は女學校の二年生です何卒上等繪葉書の交換を願ひます（東京市本所區小梅町磯野すみれ）〇手前は名所繪葉書及び特別大演習紀念スタンプ附繪葉書澤山ありますから先着三十人限りスタンプ附のを差上げます（茨城縣眞壁郡河内村谷貝安之丞方谷貝うめ子）〇誌友の皆樣妾も仲間入りを願ひます繪葉書交換して頂戴（陸中國磐温泉場湯川野子）〇さて皆樣四十一年は終りました、例年の通り、繪葉書で年始狀の交換を花々しく始めませう、先着十名へはハクライ繪葉書差上ます（備後福山東町矢野志奈子）〇繪葉書や和歌や俳句など御作りなのを書いて御交換を願ひます（熊本縣玉名郡伊倉町前田ひろき）〇妾はこんな田舍に住んで居りますが繪葉書交換が大好なのです何卒あはれと思召し御交換を願ひ升（北海道石狩國雨龍郡北龍村字和吉植ひか子）〇新年おめでとう本年も相變らず繪葉書の交換願上升（大阪東區和泉町一丁目野々村方伊藤初榮）〇誌友の皆さまゑはがき交換を願ますなるべく和歌か俳句を書き入れて頂戴（東京府下南葛飾郡寺島村千七百三十九番地高州藤枝）〇四君和歌が出ました先づ御目出度う存じます、さて御健在て居らつしやる皆樣、何うぞ繪葉書の御交換を御願いたします（高岡市御馬出町五十九番地梶川露子）〇どうぞ繪葉書の交換して下さい、のこらず返事を差上げます、未見ぬ人と交際するのも何んだか嬉しい氣がするものです（高岡市通町三十一番地北本歌子）〇皆さん舶來繪はがき持ち合せだけ（卅八枚）御交換ねがひます（靜岡縣沼津上土町入代方數野）〇私は本年の御勅題「社頭松」の自作のものゝ繪葉書、短册色紙等にしるして交換いたし度存じますどうぞ御賛成の御方は老若男女にかゝはらず一人も多く御送り下さい（埼玉縣兒玉郡本庄町吉羽米子）〇誌上の姉樣方よ繪葉書の交換を御返しは確に致つて致しますことよ（秋北城內南門街高等官舍吹よしえ子）〇外國の古切手は明石の安井淑子樣外十二名へ五枚宛東京本郷の角田樣外數名へ二枚宛お送り致しましたのですつかり無くなりましたから其他の方へは新聞なり雜誌なり一部宛送つて戴きましたが切手は暫らくお待下さい（岐阜縣山縣郡谷合高等小學校內大野濟枝）〇誌友の諸姉樣方よ繪葉書玉章の交換を永久にして頂戴な返書は致しますから住所姓名を明瞭に願ひます（靜岡縣志太郡伊久身村伊久美堀惠はな子）〇あけましてお芽出度昨年はいろ〳〵御惠み被下難有御禮申上ます妾の元に女子文壇や繪葉書がたくさんあります御交換を願ひます（熊本市小澤町百一番地沼田鶴枝）〇諸姉樣方宜しく御願ひ申升又エハガキ交換を願ひます（新潟縣岩船郡瀨波溫泉湯山貝支店方吉田眞佐）〇文を好みたまふ誌友諸姉樣よ妾も本誌の一隅に置いて頂きます雜誌繪葉書永久交換希上升殊にスタンプ附歡迎（近江犬上郡平田村平田七岐尾信子）〇誌友諸孃樣繪葉書を澤山交換下さいまして有難く拜見致しました尚も各地名勝繪ハガキを御惠送下さい早速返禮致します又組の繪葉書も交換して頂戴（北海道石狩國雨龍郡北龍村字和妹背牛局區內吉永豐子）〇皆樣明けましてお目出度う今年もお見捨なく猶にもましてしげく繪はがきの御交換をお願いたします（熊本縣天草郡本渡町池邊しづ子）〇懷しき吾が友よ妾は山中の淋しき處に暮して居る者ですが雜誌を讀むのと繪はがきの交換が何よりの樂みです特別大演習紀念繪はがきを以て御返禮致します（栃木縣下都賀郡寺尾村字梅澤二四川田よし子）〇何卒紀念スタンプ繪葉書の交換を御願いたします（富山縣高岡市御馬出町五十九番地梶川露子）〇紀念ゑはがきの交換を願ひます妾は樺太島始政紀念繪葉書二枚一組に當日の紀念スタンプを押印したものを間違なく差上ます（北見國稚內町大字壁岡ナイホチ三和方小倉ひて子）〇諸孃樣美しい繪葉書三枚御送り下さい御禮に女學世界文藝倶樂部差上げます（佐渡國佐渡郡河崎村大字河崎淺井銀子）〇諸孃樣方よ御玉章下さいまして誠に有難御禮申上ます尚繪葉書の交換をして下さい（奈良市押上町三七中瀨光子）〇玉章の御交際や皆樣の寫眞、亦未使用の繪葉書などの御交換をお願みします（山口縣阿武郡佐々並村兼常文子）〇エハガキや寫眞玉

軍の交換をねがひ升（八王子町八木井澤菊江）

圖書換讀

○妾の許にはシユマン作リツトルローマンスの夢想の出反響の曲ラーゴー狩獵の出ゲードソング、メーリーヒーザントなど洋曲多く有ますから左の諸と御交換下さいまし四季殘夢箏曲集鶴鵠越後獅子千鳥の曲殘月江の島の曲舞踏案內（岩代信夫郡瀨上町門間きく子）○皆樣の中で小山內八千代作、新緑上下、春葉作、富と愛上下、北尾作、百合子后篇、天外作、コブシ後篇、春葉作、新夫婦後篇、嫁がぶち、春葉作、後の世上下、ざんげ、靈か肉か等御ゆづり下さいました方には御禮として己が罪上中下、無果花、鹿島なだ、奴島田、二筋道上下、女學生、ハイカラ令孃上下、人の兄上下、吉丁字上下、其面影、夫さだめ 後篇の中いづれにても御のぞみのものな差上げます（尾張國知多郡龜崎町井口なてし子）○詩集か歌集かを送つて下さいな御禮にりボン、繪葉書、ざつしを差上げます（兵庫羽改通り貳丁目佐伯松子）○女子文壇、少年世界等不用の書がありますから繪端書で御申込次第お送り致します尙渡邊辰五郎著の裁縫書御不用の方は御讓り下さい（大坂市西區空堀町濟安餘一六六藏內方鶴子）○私女子文壇の第二卷五號より三卷の五號迄不用になりましたから御望の方あらば差上ます（越後國三島郡脇野町字大野大澤れむ子）○妾の手許に不如歸、弦月、冷火熱花、土佐日記、徒然草、其他女子文壇、女學世界、婦人世界などの不用が澤山ありますから、上等繪葉書に俳句か歌書いて申込みなさい過じます又寫眞な御送り下さつたら妾からも送ります（德島縣麻植郡飯尾村二二三工藤みゆき）○私は少年一號より持つて居ります又少女世界も持つて居りますどうぞ他の雜誌と交換して下さいまし私は都合により芝區二本榎一ノ六二に轉居致しました（安富とよ子）○誌友の姉上樣よ、紅葉全集（何れか一卷）か青春三部御持てしたら私の次の書の內御望の者三冊と換へて下さい。天うつ浪、死耶活耶、闇の世の中、折たく柴の記、噫淫文學、七草集、駿臺雜話、日本女學全書、其面影、ホトヽギス、（新體詩）。又鏑木先生の描いた小說繪端書一組御持の方は右の書と交換して下さい御禮は栞て致します（埼玉縣北埼玉郡加須町久下野本龍藏方金子芳枝）○皆樣のうちで僧月照の歌、勝須の曲、越獅子をお持の方は相當の圖書差上ますから御贈り下さい妾の所持の本は綴文章軌範講義 日本歷史問答誤り易き國文法、代數問答、日本地理問答、外國地理問答、理學界、實業之日本、中學文壇等數冊ロングマン英語讀本字引普通作文 辭典外數拾部（北海道函館區若松町六十三稻延てる子）○諸姉上樣の御中で岸うつ浪の唱歌、不如歸の歌お持ちの方は私の孝女白菊の歌と交換して下さい（埼玉縣越ケ谷町一二七桃木らく子）○環さんの御手許に相思怨の綴際露子夫人御不用の御方は何卒御ゆづり下さいませんかたゞし男子の方にても宜しう御座いますもし御ゆづり下さる御方は本紙上にて一寸御知らせ下さい（白菊）○只今妾のてもとに小說「臥子」「塔中の怪」「愛の犠牲」「伏屋の曙」「新體詩作成自在」「鉛筆スケッチ」「詩想響笛」「不如歸の歌」などありますから皆さんの金色夜叉の歌、源氏物語の歌、花守、亂れ髮自然と人生、鉛筆畫法、小說金色夜叉前編、寒風、戀風、黑風、にせ紫、聖書の講義のやうな書物と交換して下さい（大坂市北區梅田郵便局內鈴木ふさ子）○花の如き諸姉樣方よ若し萬葉集、伊勢物語、源氏、平家物語、本朝廿四孝、白縫物語、八犬傳、標註東西記久綴にても御所持の方は妾の小說鶯の羽風、日出島蓬來の卷（弦齋著）萬朝報實說山賊醫者（無名氏著）上下、探偵實話三島時同會社の犯罪仰天子著、伊達若衆、女子文壇十五冊女學世界衣裳鑑、蒸しぱん製法、青年と御交換下さる諸姉樣は以上の書物を以て御指命を乞ふ（芝愛宕町一ノ十二砕田方みや子）○女子文壇愛讀者に急告致します、妾先日本箱の整頓をいたしましたら凡そ百九十餘冊の不用本が出ました、文藝俱樂部、新小說、婦人世界、ホトヽギス御持ちの御方と交換いたし度いてすいくら古くてもよろし、御送り下さいましたら直に御返送いたします、御禮として外國の切手とエハガキを進呈致します、若し男子の方なれば手製の枝折りと短冊とを進呈いたします、妾し方のおもなのは、書海、肉彈、平氏源氏物語、花守、ハイカラ令孃、青春、多情多恨、玉むし、女禮式大全等（佐世保市山縣町二十七番地淺田克子）○面白い雜誌お持なら送つて頂戴よ又面白い事などありましたら時々知らして下さいな（秋田縣雄勝郡稻庭町大町河井なみ子）○誌友の姉上樣よ御許に「上等いろは字引」と「上等玉篇」と「女子用文の手本るい」と「遊花の道具一組」と「唱げいこの「英語讀本」と小說には「伯爵夫人」と「吾輩は猫である」と「三國誌」と其他爲になる本等、御持合せの方は手許にある「ハイカラ令孃」と「草

花」と「血の涙」と「心の涙上下」と「天打涙上中」下」と「化粧かゞみ」と「上等繪はがき三拾枚」等不用になつて居ますから何卒御交換を願ます（秋田縣阿迦郡新屋町字愛宕町藤島さき子）○妾は名古屋の隅に住む一少女ですが御姉様方の中に寶風戀風、天打つ涙、母の面影、雛子、乳姉妹、夏子、花枕、心中くらべ、新小說、文藝倶樂部の中どれか在りましたなら妾の寫眞、上等繪葉書、少年世界などゝ交換して下さいませんか（名古屋市伏山町三丁目六十二番戸伊藤方ひさ江）○諸姉様特に伊豫國の方何卒伊豫國の國史か地誌かと私の阿波國史と御交換を願ます（徳島市富田定普請町二丁目河野方河野里）○小說御交換を願ます私の手許に寶風戀風、浪子、金帆、明治才媛文集、新詩韻學、艶麗文粹、鷗笑の悲劇詩ペリシナ湖畔の翠松、桃英男、歌吉心中新、小說、文藝倶樂部等四十冊ばかり不用の品ありますから皆様の内にて、良人の自白全四冊、紅葉全集、みだれ髪、海賊の子、玉虫、青春、雛子、絲不絲、天うつ浪、富美子夫人、伯爵夫人、少女の戀愛を御持の方は御送り下さいませんか（羽前國最上郡新庄町金澤丁長南白涙）○どなたかホトヽギス雜誌か早稻田文學をお持ちの方は御送り下さいますまいか代りに明星か文庫か新小說か文學世界の古いのがありますからどれてもさし上ます（土佐吾川郡弘岡上村深瀬ます子）○御情けある諸姉様へ御願ひ致します私は當地の大火にあひまして何もなくなりましたそれて姉様方の内雜誌や小說の御讀古しの物が御座いましたら何卒御惠下さいませんか伏して御願申上ます（北海道函館樂町二二六本庄谷方ふみ子）

○諸友諸姉様今妾の手許に新小說、秀才文壇、中學生二月から十一月迄全部、中學文壇、女學界、不如歸など不要なのが澤山ありますから相當の本と御交換を御願ひ致します（熊本縣鹿本郡中富村字中分田四三四宮野俊平方かず子）○[illegible]などいろんな物御送り願ひます婦人世界、女子文壇、ハガキ文學、中學生、中學文壇、秀才文壇、ムラサキ、ホノホ、新潮、北光、詩人、さほしか、卯杖、女鑑、婦人畫報など新古取りませ二百九十五冊ありますから御禮します寫眞及び寫眞掛を御送りの方には指名の物四冊以上他は二冊以上種別は妾の勝手（越後蒲原常折町吉川公認下宿方江崎雅子）○皆様の内に花守、みだれ髪、玉藻、朝晴、美文作法、法律と婦人、むぐらゐ集、近詠御詠所、明詠帖、笑、戀、星、御不用のお方は私に御讓下さいませんか私の作歌自在、美文之資料、女子速成用文、女子用文姫鏡、般若お作、黑牡丹、玉手箱、高倉長右衛門、ふた昔、横戀慕、滑稽女學生旅行、いづれも御示し下されたのか御返致ますしかし御送下さる前一寸御知らせを願ひますまだ外に女學世界第三卷貳號四號八號拾壹號拾六號第四卷壹號貳號七號八號九號拾號拾六號婦人世界第二卷壹號六號增刊化粧かゞみ文章世界一卷三號まだたくさん以て居りますが皆様美人か花の繪葉書五枚以上て申込て下さいすぐ送本致しますもし御望の本が有ません時はほかの書物て御返し致ます（對馬國嚴原久田道町倉成彌生子）○青葉の泉、青海、會玉篇大全、日本新辭典、和漢三才圖會、書翰文大觀、世界歷史辭典、幾何學辭典、代數學辭典、作文新辭典、國語辭林、新詩辭典、假名遣辭典、新和英辭典、英和双解熟語辭典、獨和新辭典不用ですから郁文舍の和漢大辭典か三省堂の辭林御送り下つた方に三冊づゝ御送りします東洋歷史辭典編纂自傳百話小萩袋冷熱旗すゝきを御送りの方に一冊づゝ御禮申します（新潟縣南蒲原郡福島村美和信子）○誌友の御姉さまの中て奈良縣源木尚武堂發行の日露戰役紀念手帳の增刊御持にして御不用の御方は御讓り下さいませぬか（若狹國遠敷郡宮川村竹長澤田あい）○誠に申兼れましたが諸嬢様のうちて源氏物語、土佐日記、つれづれ草等の不用な御持の方は御讓り下さいませな御禮には自製の深ひじつき等を差上げます（埼玉縣秩父郡三田川村近藤とく子）○寫眞畫報文章世界又は名家の詩集小說類てあつたのがありましたらどうぞ惠んて下さい四洋草花の種子て御禮致しますから（攝津國河邊郡尼ヶ崎字中在家一七八中西華子）○妾の手許には花シホリ寫眞掛その外いろ〳〵の編物がありますのよ、皆様の内に寫眞畫報、婦人畫報、少年少女畫報、美人繪葉書、名所繪葉書、美術繪葉書、女學世界、婦人世界、女子文壇其外女子の讀ます本なら宜しいのよ、どうぞ御送り遊して頂戴。それにお望みならお恥かしけど妾の御寫眞も御送り致しますわ…妾男子にてもお情け深い方なら御交際致しますわ（茨城縣眞壁郡關本町下丁三谷河岩子）○私は小羊、若き人、伯爵夫人、露子夫人、雛子、女波男波、寄美人、時雨笠、若妻、北原著百合子、其他七冊の小說あります皆様の所有新體詩集にて申込んてくださいまし新古にてもよう御座います（常陸眞壁郡五所村山崎木村宿雨子）○皆様のお内に己が罪、小櫻、寶風戀風の三種をお持

ちのお方は私の淺谷村の殺人、桃の井入郎、薩太郎其他色々の小說が澤山ありますから御交換下さいまし（石狩國雨龍郡北龍村字和十一番地脊柳くに子）○私の手許に小說魔風戀風ふた昔戀無常十六夜等の不用本があります故皆樣の內乙女の操嫁が淵雛子吉丁字やどり木等と交換を願ひます就て附袋や組紐編物を下さつた方には雜誌を送ります（長崎市館內三番戶山口蝶子）○諸姉樣私れ手元にアラビアンナイト物語英語世界少女界少年世界婦人畫報等の本合せて數十冊ありますが皆樣の本と御交換下さいませんか其れからられ造花數種（野菊、ばら、ゆり、西洋すみれ）等持つて居りますから皆樣の內に絹ハンカチーフ上等繪葉書と御交換下さいまし（新潟縣南蒲原郡三條上町外山いつ子）○私の許に、小公子、牧の方、黃菊白菊、家庭料理法、玉蟲、朝晴、懸賞文集、料理十二ケ月の上下、外、古雜誌の、本誌、婦人世界、秀才文壇、ハガキ文學、女子文藝、新古文林、文藝界、美觀畫報、文藝倶樂部、文章世界、演藝畫報、歌舞伎、其他いろいろ御座いまして少しも汚れて居りません、皆樣の中で絹架か美しい繪はがき（但し未使用封入）かをお送り下さる方に着順にすぐお送り致します（東京淺草千束町二丁目四百二十番地渡邊方富子）○諸姉樣の中明治四十年十月廿日發行の秀才文壇增刊黃菊白菊御持ちの方は何卒御送附下さいませ、手製の拙いひぢつきて御禮致しますから（東京下谷區徒士町一ノ七橋本なみ子）○手許に金色夜叉綠不綠魔風戀風不如歸破戒人之變々夫波青春日本新辭林等不用につき諸姉樣の思出の記、多情多恨、樗牛全集、紅葉全集、入野長屋、天打浪、書簡文辭書等書籍に寫眞編物「組製」等添えて御申込下さい必ず御返送申します（青森縣大鰐島田下山方中山仙子）○妾の手許に寒牡丹（尾崎紅葉著）美文作法、紀行文作法、記事論說文範、新體詩早學、子規小品文其他澤山不用になつて居りますから、皆樣の中で多情多恨、金色夜叉第六編、等ありますなら交換致しますから送つて下さい（青森縣浪岡局區內水木高木いと子）○諸孃樣、二「相夫憐」「松山鏡」「濱子」「雛子」「夏子」「白玉姬」御不用てしたら私のもつてる「美姬遺蹟」「田舍源氏十卷より二十三卷迄」「女子文壇二卷十五號より三卷十三號迄」「化粧かゞみ」「美人摘」「其の外小說と何卒御交かんをひとへに御願ひしますリボンとしをりを先着の方に差し上げます（仙臺市北六番町六三橋本紫久子）○諸孃の姉上樣よ御許に、伯爵夫人、己が罪、多情多恨、青春、雛子、乙女の操、仇浪、百合子其他高尙なる小說や、萬葉集、夢の華、など御持合せの御方は妾手許にある、夏子、雛子夫人、不如歸、心の波、戀無常、貴族の戀、外に教育學、女學生訓、美文集、等不用になつて居ますから何卒御交換を願ます（秋田縣河邊郡新屋町中裏町高橋方高橋久子）○手許に怪美人、自由結婚、新婚旅行、長語、傳說場新不如歸少女と山水不思議の娘朝はれ女子文壇數冊ありますから御望みの方は相當の品と交換致します（橫濱市辨天通四丁目七二清水房子）○誌友の皆樣の中に、晶子樣の短歌集みだれ髮、黑髮、小扇、舞姬、毒草等御持のお方あればいかに古くともかまひません、妾の不用書、空穗樣のまひる野、夏扇、一葉全集、曖有情等と交換下さいませんか、又妾の手元に精巧な寫眞器二組ありますが、皆樣に差上たうムいます故、高價な繪端書か、寫眞術讀體美、又珍らしい繪葉書て申込んで下さい、豫定以外の多數申込者がある時は必ず相當品で御返禮、御返葉致します（尾張中島郡起町畑中橋本文太郎方飯田不三子）○皆樣妾の手元に左の不用書が有ます某附突寫眞掛造花雛形類其他何でも御自製の物をお惠み下さいお望みの書を上げます美妙精神と力量理想の大臣斬奸狀滑稽妙文集高等艷麗文集人の一生活精神無能の天下奇僧の片影魔術と催眠術女子手藝要訣家政の枝折裁縫細工物全書實用編物自在習文一般模範普通文網喩少年演說會英語の數本姿の紀念女子懸賞文集忠勇唱歌全水彩畫手本其他妖怪學雜誌一ケ年分裁縫作文書類等たくさん有ます又此外書物送り下さいお望みのと交換いたします（福井縣今立郡上池田村角谷校內皇子）○諸姉上樣方妾に左の不用書がありますのゝ村井弦齋居士の書文車小栗風葉著奴島田南翠外史著隱君子金色夜叉の後編弦齋居士著釣道樂上下藤田茂吉著觀風叢話の上編山高水長紫式部等がありますから皆樣の內に青海黃菊白菊おもひ草庭の摘草玉むし嵐雪全集深山櫻魔風戀風後編多恨多情女波男波等御不用でありますれば何卒交換して下さい猪玉章の交換も御願ひ申し上ます（長崎市館內七番地北尾孝子）○諸孃の姉上樣よ御許に「造花の器具及材料」小說に青春、乙女の操、雛子、夏子、百合子其他高尙なる小說や、女子用の書き方手本類御持合の御方は送つて下さい妾の手許にある「松がうら島、沖の小島、小弓の御所、夜の風、傳書鳩、新體讀者

其の他繪はがきて御禮します（秋田縣河邊郡新屋町字愛宕町藤島佐吉方さき子）○古雜誌の交換を願ひたいのですが、贊成なして下されませんか。（橫濱市太田小學校內長谷川花子）○妾の手許に讓かり舟（紫二）朝ぱれ、風月集（乙羽）女子懸賞文集、いざゝらば（江東）、佚文章、行雲流水、及び女子文壇の不用の書物がありますから、皆樣のうちにみだれ髮、夏子、獨步集、ふるさと（花袋）平家物語、涙子、水車（水蔭）銀鈴、片戀（四迷）等の不用の書物がありますなら是非贈つて下さいませんか、妾も屹度贈りますから（下總國成田町土屋武田のぶ子）○誌友の皆樣、私はゴールドスミス寒村行、パリシナ、すみれ集、黃菊白菊、白百合、名家新體詩集、忍ぶ草集、不如歸集、女夫波の歌、などの詩集や、其他雜誌も澤山ありますが皆樣の內で藤村詩集、暮笛集、みだれ髮、天人論、銀鈴、其他繪葉書新聞雜誌と交換を願ひます（羽前東置賜郡屋代村大字相森高橋きくよ）○皆さま私は不幸なもので書物を買ふ御金もありません何卒皆樣雅古して結構ですから御送り下さいませんか御禮は出來ませんが亦する時もあらうと思ひます（兵庫縣有馬郡道塲村西本利介樣方那須貞子）○九月の新小說お送り下さい、お禮は文藝俱樂部趣味文章世界か好みなものを（岩代須賀川町服部貞子）○不束な者てすが御蘇蹟美しい御玉章にて御交際をお願ひ申上ます私は萬葉集金葉集春日局演劇脚本を持つて居ますが是れに相當の小說御惠附下されたらば右三冊御送り申上げます（靑森縣七戶町三浦愛子）○皆樣妾雜誌を三十册持つて居ますから粗末一つ御送り下さればすぐ送ります又寫眞掛下さつた方には不肖な寫眞かりボンかそへて必ず送ります但し絹糸製（本所區松井町三ノ十二井谷田多喜子）

寫眞編物交換

○諸姉樣只今私の手許にちりめんて櫻模樣縫入れの巾着持つて居ますがお望みの方は編物か繪葉書三枚以上封入して申込みなさいすぐ差上ます（大阪府東成郡榎井村字野江本西時子）○此度とこしへに紀念のため各地の風景や寫眞を集めようと思ひます徵意を賢しどうぞ御惠み下さい繪はがきの交換も願ひます寫眞のうらには明細に說明して下さい（栃木縣那須郡境村大木須小學校內池澤きよ子）○私は編物が大好てすどうぞ皆樣極美しい編もの御送り下さいひじつきや寫眞掛や其他いろ〳〵の珍らしいものをそれ〴〵に私は造花大好てす日曜等には氣にいつたものをこしらえてたのしんて居りますどうぞ御同意の御方はいろ〳〵御送り下さいそれ以上の御禮はきつといたします（茨城縣猿島郡古河杉並町小堀とし子）○面白い編物が御座いましたらお敎へを願ひます妾のと交換下さりますなら誠に結構て御座います（大阪北區源藏町七五堀川隆子）○姉さまの中に編物を澤山お持の御方は妾の編んだのと交換なして頂戴（大阪市西區阿波堀通り五ノ一四瀨岡子）○誌友の姉さん妾は繪葉書寫眞狂人てす何卒末長く交換を先着十名限り不束な妾の寫眞に繪葉書て返じ致します（後越小千谷叄町大龜方山本總今子）○妾は京都の片田舍て淋しく暮す者てすエハガキ編物の御交換を願ひます又地方新聞の御交換もこんど始めて御交際を願ふ御禮として本月皆の御方樣には笠置名所一組を添へて御返禮致します特に先着七名の御方には例のエハガキ絹糸編物を添へて差上ます（京都府相樂郡高山村森西歌子）○スミレ位の押花お持ちの方が有りしたらお惠み下さいなお返しに屹度押花とリボンの栞を差あげます（大阪西區東千島町日高盟子）○愛して下さる姉樣かありませんて淋しくてこまります御交際して下さる方はありますまいか御寫眞の交換も私必ず御返事致しますよ（茨城縣常陸國東茨城郡中妻村四十六中山道江）○御寫眞を送つて下さつた御方には面白い小說を私の寫眞をそえて差上ます（熊本縣玉名郡伊倉町前田菊枝）○新年さう〳〵からうるさいのでしようが、編物、寫眞、雜誌、繪葉書、等御交換を願ます、先着十名の方に私のみにくい寫眞と桑野入叢の繪葉書を差上げます（神奈川縣中郡東秦野村東田原下宿山田つま子）○見苦しい私の寫眞二十四枚あります故何卒姉樣方御交換を願ます先着十二人には大巾の上等リボン一筋をそえます殘りの方には佐渡名所の繪はがき一組をそえます（佐渡國新穗村字長畝土屋五作方土屋豐子）○妾に栞や毛糸製の寫眞掛を送つて下さる方には相當の物を送ります亦先着十名の方には美麗なる風景人物の繪葉書を添へて送ります（名古屋市北區宜町十番地竹內方東富美子）○繪はがき玉章の交りもして被下な着次第私しの方より返事を致します寫眞を贈られし方には私しのも上げます（高岡市二番新町針原みさ子）○私は幼少の時から繪畫が好きで七八年間、紙を汚しましたが諸姉樣交際の發端として御手作の造花編物と御交換して戴く事は叶ひ

ますまいか（山口縣玖珂郡南河内村淺船兒子）
○皆様新年御目出度！私にも此年からどし〳〵御寫眞なり繪端書なり雜誌新聞の交換して頂戴、先着二十人に別に造花を上げます（神戸市橘通二ノ五六高橋方松町）○妾にひじ付編物などをおめぐみのお方様六名に限り順々に拙きながら妾の手製の編物肉筆の繪葉書地方新聞一ヶ月及妾の見るかげもなき寫眞を御送り申します（福井縣大野町東一番飯田仙方にて小川よし子）
○記者さま始め皆さま明けまして御目出度玉章繪葉書御寫眞などお送り下さい必ず相當なので御禮致しますから空吹く風と御見捨なく清い御交際を願ひます（長野縣東筑摩郡麻績村宮澤操子）

諸嬢の交際

○私は當地高等女學校卒業生て御座い升が何卒繪葉書玉章の御交換を御願ひ申します（山形市銅町長谷川總治右衛門方大江悅子）○私は病氣のため學校を退いて今は田舍に淋しく暮して居ります繪はがき玉章寫眞の交換を願ます（福島縣伊達郡梁川石町武田公子）○妾はインクラインの畔に住む不束者てすが何卒御玉章の御交際を御願ひ申ます（京都市南禪寺町粘森和一郞方德子）○誌友の諸姉上様方私は酒て名高い灘といふ處に住まつて居るいたつて淺學な者てす然し世の淑女様たちと御交際を願ひそして私の知識を進めたいと思つてをります（兵庫縣武庫郡西宮町の內濱石才町六八番屋敷前田鄕子）○諸姉様より屢々御書面下されまして難有御座いました私は思はぬ病の爲儘ならぬ有様失禮千萬に存じます然し弟が代つて返詞致して吳れたとの事以後は又々交換を（下野國那須郡荒川村小塙佐藤かなる子）○繪葉書なり玉章の交換を願ひ樂しき日を送りたきものと思ひます（京都柳馬場四條下る前円方島谷かずゑ）○御情深き天下の諸嬢よ御交り下さいまして有難う存じます何卒以後も相變らず願ます（讃岐國高松市柏原內横井ひさ子）○妾は淋しき山里に住む賤の女てすがどうぞ繪葉書や玉章の交換を願ひます（福島縣石川郡小鹽江村大字鹽田字與合內百五十二番地橋本泣花）○クリスチャンの諸姉君よ妾は高等女學校に通つて居る淺學な者てす何卒御見捨て無く御交はりを願ひます（京都府加佐郡由良町星野喜美子）○記者様妾も以後諸姉に御交誼を御願致し度う御座います御多忙中恐れ入りますが何卒御引き合せ下さいませ（新潟鍋町大門通り八條角近藤外次郞內數島松枝子）○私等は山家に日をおくる者にて誠に交際好なる身てす樂しき文の玉章や只のはがき又繪葉書給はらば喜んで御返し必ず致します（三河寳飯郡小江花村百合子）○妾は至極さびしき山中に自然を友に日を送る者てすが何卒繪葉書の交換を願ひます又菜もれ（長野縣下高井郡日野村夏科酒井はな枝）○私は去年當地の高等女學校一學年にて腦病をわづらひ今は家にありて悲しんでゐる者でありますが御手紙や寫眞エハガキの御交際を永久に願ひます（武藏入間郡川越松江町木下澤子）○私は横須賀のほとりて淋しく暮して居ります御寫眞其外手紙も御交換下され度御願申上升（神奈川縣三浦郡横須賀佛ケ浦百二十一番地今井米次郎方進藤操）○私は片田舍で病臥をかこへて泣て居ますが何卒お玉章や繪葉書て御交換なお願申上ます（越後直江津局區下南新保上島和子）

懸賞品發送報告

第十四號及び第十五號の懸賞當選諸嬢には十二月十日附けにてそれ〴〵所定の賞品をお送りいたしました。
猶、下名の方々は至急原稿と同じ筆蹟にて住所姓名を御通知下さい。
○紀伊、春園賤女○赤坂、森英子○たけ子○備中、しすい子○四谷、小山那香子○香川縣茂留子○下總、岩井白子○群馬、森下うばら○和歌山、岡崎さき子○四谷、孤蘆女史○能登、菊地操○熊本縣、倉野きた子○尾張、長司野子○越後、武都子○南總、はる子○牛込佐野貞子○下谷、岡野さかへ。

剽窃詩文の注意

●第十六號の分　○愛知縣、永田舞蝶子。新笑話四等「毛生液」は『少年界』六卷十三號より○越後川島しか子。同五等「禁煙」同じく『少年界』より
●第十五號の分　○近江、少女子。敍事文秀逸「日ざかり」は雜誌『有聲』より　○上總、秀月女。和歌秀逸「菊咲きぬ」は『文章世界』一卷七號より○讃岐、十河花琴子。同和歌秀逸「亡き母が」は雜誌『白菊』一卷一號より
右何れも剽窃せるものと認む。
今回の注意を與へられたる諸嬢は○長崎、四ッ目女○北海道、秋鐵女史○近江、秋陽子○天眼少女○佐渡、中川野菊○横濱、英子○加賀、きよ子

海底空中 通信 （文壇餘興新課題）

▲諸孃の想像力が何の位まで進むものか、それを試す爲と、一つは架空談の興味を發揮する爲めに此度の文壇餘興は海底及び空中の通信を募ります▲假に空中旅行又は海底旅行をしたものとして、其見た處を書くのです、元より想像で書くのです▲又は旅行した事にせずとも單に海底なり空中なりにありさうな事を作つて見るのも面白いでしよう▲龍宮城の大宴會や、月宮殿の火事や、星宮の戀物語や、海底に沈める船幽靈や、天に傑く稻妻、海に燃ゆる潮の火、天界、水界の吾等が行き得ない境には却つて豐富な想像を產みます▲理學上天文學や地文學の上から說明すると却つて面白くなくなります、成るべく文學上の產物として作られたい▲海底の事と空中の事なら何んな事を作らうと諸孃の自由です、奇拔に、大膽に、意表に出たものが秀逸となるわけです、能く考へて作つて御覽なさい、むづかしいやうで其實一寸想像力のあるものなら戯れにでも書けるものです▲原稿は十六字詰十行內外▲懸賞は一等一圓、二等七十錢、三等五十錢、四等三十錢、五等二十錢以上何れも圖書切符です。

▲しめきりは本月二十日

雜報

○編輯局より。　寄稿者諸孃に一言お詫をいたしますが、本號は新年號として紙數を大いに增加したに拘はらず、記事多く、爲に折角の御作でも揭載し得なかつたのが澤山あります、是等は凡て來月の增刊に埋合せとして澤山揭載いたします、何卒惡しからずお許を願つて置きます。

○下田女史の退引。　永年華族女學校長（後の學習院女學部長）として知られたる下田歌子女史は前月其職を辭して千駄ヶ谷に退引した、教育界の爲に之を惜むものが多い。後任は松本源太郎氏である。

○新年の新聞雜誌。　新年の新聞雜誌も格別目ざましいことはない、新聞は多く綺囓の附錄をつけるやうであるし、雜誌の新年附錄には小說が多い。

○女子教員。　今の小學校女教員の數は男子の一割位に過ぎないが、其筋の方針では追々增加させて男子と同數にはする積りであるさうだ。

明治四十年十二月廿九日印刷
明治四十一年一月一日發行

定價金拾貳錢（本號限り）

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十六、十七番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

chop too deep, I am in here." No one heard this, the chopping-knife made such a noise. Now poor Thumbling was in trouble. He could not get away; there was nothing for it, and he had to let himself be put into a black-pudding with the bits of bacon. The pudding was hung up in the chimney until it was taken down in order to be set before a quest. When the housewife was cutting it in slices, Thumbling took care not to stretch out his head too far, and at last he saw his chanse and jumped out, and set out on his journey again. But he was not safe long. In the open country he met with a fox who snapped him up.

何しろ刻庖丁の音で，誰の耳にも達しません。彼の心配は非常でしたが，其場を逃げだす事も出來ず，鹽脂肉と一所に燻肉にされて仕舞いました。而して其儘で，永い間烟突の側に吊されて燻されて居ましたが，來客で主婦が下ろして，其肉を切る事になりました。指太郎は今度こそと思ひ，頭を縮め，庖丁にあたらぬ樣注意して，終に機會を見て肉の中から飛び出し，又々，旅行の途へつきましたが，安全と云ふは束間で，今度は野原で狐に出逢ひ，又丸呑にされました。

"Holloo, Mr. Fox," cried the tailor, "it is I who am sticking in your throat; set me free." "You are right," answered the Fox. "If you promise me the fowls in your father's yard I will let you go."

「もし，狐殿，貴下の咽喉に附着して居るは私で御座います」と仕立屋が云へば，

「成程然うだ．君が自分の家の雞を呉れる約束をすれば，赦してつかはさない事もないが」と狐の返事。

"With all my heart," said Thumbling. "You shall have all the cocks and hens, I give you my word." The fox let him go again and carried him home. When the father once more saw his dear son, he gladly gave the Fox all the fowls he had.

「其は悅んで致します．牝雞，雄雞一切貴下に進上致しますと誓言しましよう」と云ふものですから，狐は小僧を放免して彼の家に伴ふて行きました。父は息子を再び見るので，大喜をし，狐に雞を悉皆與へました。

maids did in secret and told his master and mistress what food they had taken off the plates, and carried away out of the cellar, for themselves.

倉から窃に取り出す品々を主人夫婦に皆告げるので,

"Wait, and we will pay you off!" the maids said. Soon when Thumbling was jumping about and creeping up and down the plants, one of them mowed him up quickly with the grass and threw them to the cow, that swallowed the little man without hurting him. After a few days, the master of the house came into the cow-yard and said— "We may have that cow killed to-morrow." The Thumbling cried out in a clear voice,—"Let me out first, for I am shut up inside her." The master heard him quite well and asked,

『今に見てゐれ,敵を打つから』と女中連は憤激し出しました。頓て,指太郎某日草木の間に匍匐したり,飛跳たりして居る處を,一人の女中が發見して,今こそと意氣込み,草と一所に刈り取り牛に食はせました。牛は直ちに此小人を一呑に丸呑をして仕舞ふたと云ふ次第。數日後宿の主人が牛小屋に來て,『明日は此牛を殺させよう』と云ふを聞いた小僧は大騒ぎ,朗らに叫ぶ事には,『先に私を出して下さい,今腹中に閉ぢ込められて居ますから』。其聲丈をきいた主人は,

"But where are you?"

『一躰何處に居るのだ?』。

"In the black cow," said Thumbling.

『黑牛の內に』。

Next morning the cow was killed. By good luck, the little man did not meet with one blow at the cutting up and chopping; he got among the sausage-meat. And when the butcher came in and began his work, he cried out with all his might,—"Don't

翌日牛は屠られたが,指太郎は幸にも庖丁の尖に當りもせず濟んだは濟んだが,臘腸の中に落されました。今度は肉屋が來て,仕事に着手せんとするから,又大變と,聲の限りに『もし,餘り深く切らないで下さい,私が這入て居ります』と叫んだが,

Friend! come thou like a friend;
And whether bright thy face,
Or dim with clouds we cannot
compreband,
We'll hold out patient hands,
each in his place,
And trust thee to the end,
Knowing thou leadest onward
to those spheres
Where there are neither days,
nor months, nor years.
(D. M. Craik)

來れ新年　友として，
汝の面容　匹えたりや
曇りたりやは　知らねども，

忍耐の手をあげ
君迎かへ
末まて君に　頼らまし，
月日の定め
無き樂園に
導く者は
君なれば。

Thumbling.

Part II.

After Thumbling made fools of the watchmen and drove them so long around the treasure-chamber that they were worn out and went away, he threw all the gold pieces out one by one, and hopped to the ground at last.

"Thou art a valiant hero," said the robbers. They now divided the gold, but the little tailor asked only for a penny because he could not carry more. The he bade the robbers good-by, and took to the road. First, he went to work with some masters, but he did not like it, so at last he became a servant of an inn. He saw all that the

指太郎

其二

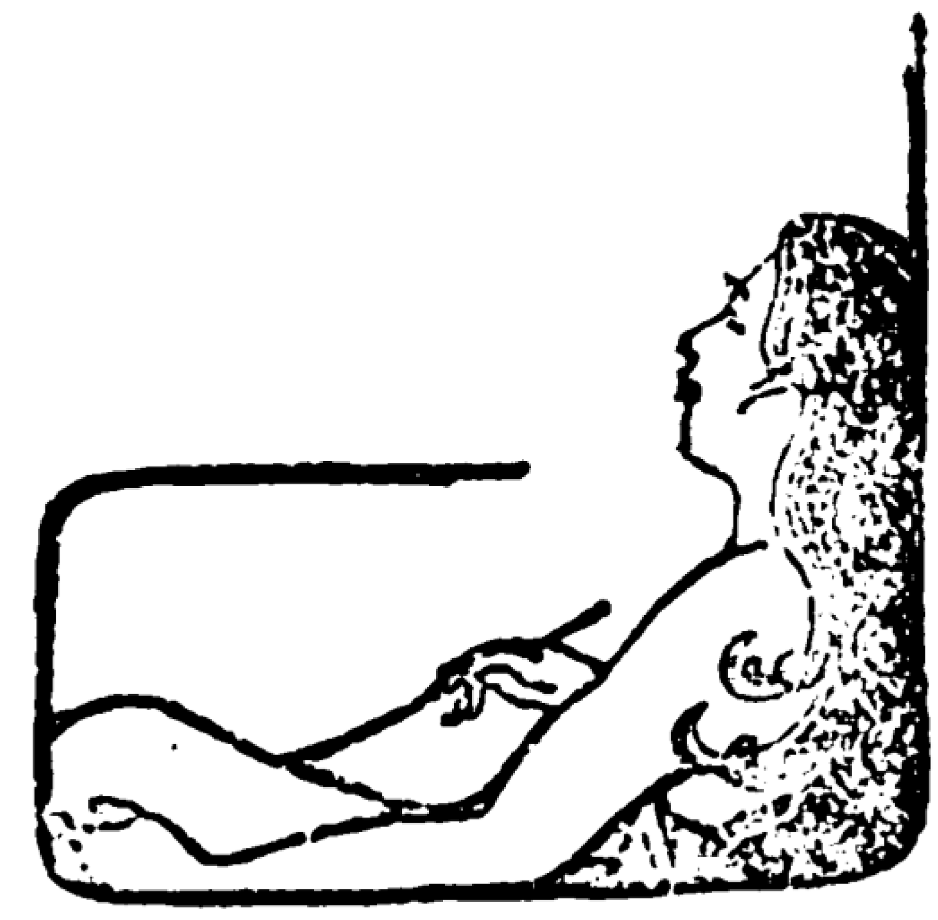
斯くて指太郎は番人を山々戯弄して，金庫内を幾度もグル々々廻らした爲に，彼等は終に疲勞して外に出て仕舞つた其後て，彼は金貨は一個宛堀投げて，自分も終に地上に飛降りました。

「君は實に勇士だ」と盜賊共は賞讃一方ならず，其より金貨を分配する事に成りましたが，仕立屋先生只壹錢丈てよいと云ふ．必竟其以上は持ち行き兼ねたからてある。彼は一同に暇乞をして又旅行をし，二三の師匠に就いてみたが，氣がむかぬ處から，某旅店の番頭に這入り込みました。彼は女中等が人目を盜んてする秘密を許き，撮食やら，穴

英　　文

（第四年第一回）

女子英學塾講師　河井道子



The New Year.

A Friend stands at the door;
In either tight-closed hand
Hiding rich gifts,
three hundred and three-score
Waiting to strew them
daily o'er the land,
Even as seed the sower,
Each drops he,
treads it in, and passes by:
It cannot be made fruitful till it die.

O New Year, teach us faith!
The road of life is hard:
When our feet bleed,
and scourging winds us scathe,
Point thou to Him
whose visage was more marred
Than any man's;
who saith,
"Make straight paths for your feet,"
and to th' opprest,
"Come ye to me, and I will give you rest."

新　　年

門邊靜に　友立てり，
固く握りし　兩手には
秘めし寶の　三百六十，
日々地に植るを　樂しみて
播きては土かけ　過ぎ行けど，
種先づ死せずば　實や結ばじ。

新年よ，我等に信を敎へてよ！
人生の行路　難くして，
荊棘烈風　身を刺す日，
示し給へ　神の子を，
彼の面容（カンバセ）の　傷ましさ
比ふべくも　無きなかに，
「汝が道を直くせよ」と　勵まして，
疲れし者には　「我に來て，
平安を得よ」と　宣ふなり。

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

どんな美しい方でも文字の拙きことはありますまい、それで悪筆の方は本會の特許速成法にて特許草紙に特許器で練習なされば、僅かの間にて誰でも驚く程上達することは調度機械的であります。



特許習字の練習程面白い事はあるまい

圖の如く初めに白抜き手本文字の上を辿りて、白色の特許器を付けて並らんで居る特許草紙に白抜き文字を見競らべて書くと直に赤色に現はれて、手本の文字と少しも違はざるは、手本と草紙とが相並びて兩者共に一視眼の中に入るが故てある、倘赤色文字は忽ちに消失して元の白紙となる、それて如何なる習字嫌ひの者でも夢中で數回の練習をするので、何時上手になつたのか自分ながらも不思議の樣である。

筆者 文部省習字檢定試驗委員 東京高等商業學校習字教授 專修學校商科習字教授 大倉商業學校習字教授 **稻川雲谿先生** 外講師大家數名

變體四十八音 **和歌、假名**交り作文、**楷行草**三體細字共 **六ヶ月**

卒業 每月貳部發行 入會金拾錢 **會費** 壹ヶ月參拾五錢 全期分金貳圓

見本 詳細會則進呈

○○**男子部 楷行草**三體書簡文細字共六ヶ月**卒業**

○月謝女子部と同じ別に小學部もあり

東京 本郷森川町壹 振替口座第六八三一

帝國習字速成會

(宮本製本)

明治四十壹年一月一日發行
（毎月一回一日發行）
女子文壇
第四年第壹號
【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



新年號に限り
定價金拾貳錢
郵税壹錢五厘

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ